

平成 25 年度

博士論文（指導教員 寺村 政男）

東アジアにおける水の呪力と水の女  
—「洗濯する女」の文学史—

大東文化大学大学院外国語学研究科  
日本語文化学専攻博士課程後期課程

1 1 2 3 3 1 0 3

金 鳳 齡

## 目 次

序章.....	1
第一章 日、中における水の呪力と水の女.....	5
第一節 水の呪力及び水の女について.....	5
一、水の呪力及び水の女についての先行研究.....	6
二、水の女とは一折口信夫の「水の女」論を中心に.....	7
第二節 中国における水の呪力と水の女.....	8
一、中国における水の呪力.....	8
二、中国における水の女.....	12
第三節 日本における水の呪力と水の女.....	22
一、日本における水の呪力.....	22
二、日本における水の女.....	26
第四節 日、中における水の呪力と水の女の比較研究.....	31
一、日、中における水の呪力と水の女の比較研究.....	31
二、日本における水の女の系譜研究.....	37
第二章 日本の御伽噺における水の呪力と水の女の伝承.....	39
第一節 日本の御伽噺における水の呪力と水の女の伝承—其の一、「瓜子姫」について—.....	39
一、「瓜子姫」の研究史.....	39
二、「瓜子姫」の版本研究と物語の流れ.....	41
三、東アジアにおける瓜の霊力.....	46
四、「瓜子姫」に見られる水の呪力と洗濯する女の伝承.....	53
第二節 日本の御伽噺における水の呪力と水の女の伝承—其の二、「桃太郎」について—.....	63
一、「桃太郎」の研究史.....	63
二、「桃太郎」の版本研究と物語の流れ.....	64
三、東アジアにおける桃の霊力.....	65
四、桃太郎に見られる水の呪力と水の女の伝承.....	72

第三節 日本のお伽噺における水の呪力と水の女の伝承——其の三、「たにし息子」について—	79
一、「たにし息子」の研究史	80
二、日本全国における「たにし息子」	80
三、「たにし息子」に見られる水の呪力と水の女の伝承	97
第三章 東アジアにおける洗濯する女の伝承	101
第一節 中国における洗濯する女	101
第二節 朝鮮半島における洗濯する女	106
第三節 日本における洗濯する女	117
第四節 東アジアにおける水の女の系譜	125
終章	128
附表一、	129
附表二、	212
謝辞	286

## 東アジアにおける水の呪力と水の女

### —「洗濯する女」の文学史—

#### 序章

##### 一、本研究の目的と意義

東アジアは古代から農耕文化が発達し、水資源に対する依存度の高さとともに、水の力についての畏敬からくる水の霊力や水の神をめぐる神話、伝説も豊富である。さらに、「禊」という行為による水の力の伝承がみられ、水のもっている神秘的な力とともにその背後には往々水の呪力とかかわる水の女があった。本研究では、日本の「桃太郎」、「瓜子姫」などを中心として、水の女の伝承を明らかにし、従来日本文学史で言われてきた水の女の系譜を「洗濯する女」という新しい視点から読み直すことを目的とし、さらに東アジア全般にわたって「洗濯する女」の伝承があることを証明し、以てこれらが示唆する文学史的意味を研究することを主眼とする。

水の呪力についての先行研究を見ると、日中両国とも水の創造力（或いは生産力）、水による禊の力などは共通的に認識されている。そして、水辺に常に水と縁のある水の女が登場するのも共通する点である。しかし、中国で水といえば、妊娠、出産の力との関係があげられ、男女の愛、性とも深くかかわっている。日本で水といえば「若水」即ち、若返り、生まれ変わる（或いは水による病の治癒及び再生）のイメージが先に浮かんでくる。そして、これら水の力の背後には、水の女が登場する。そこで第一の問題点としては、日本には果たして妊娠、出産を助ける水の呪力とかかわる水の女の伝承がないのかという疑問である。第二の問題点としては、水による禊の力とともに水の女が頻繁に現れ、且つ禊の概念の元を中国の古代におくのは日本学界での主張の一種にもなっているが、中国で妊娠、出産と深くかかわっている「禊」を行う水の女は、どうして「禊」とともに、日本に伝承されていないかどうかということである。

これら問題点を解決するためには、まず日中両国の水の呪力についての認識、ひいては禊についての認識及び水の呪力とかかわる水の女など多方面における先行研究の考察と水の女と水の呪力についての概観、即ち水の呪力とかかわる水の女の系譜研究をも必要とする。

ところで、つとに、折口信夫は「水の女」<sup>注1</sup>という論で、古代日本における「水の女」について、古代詞章の上の意味から始まり、水の女の伝承

を辿り、後日の水の女研究の根拠と基礎をつくった。水の女は水を司り、水の呪力をほどこす存在として折口信夫の論文に描かれている。それ以降、先行する研究者たちの水の女についての研究はほぼ折口信夫の「水の女」を元にして、踏襲されてきた。その系譜に属している先行研究を探ってみると、日本において水の女は、水への生け贄や蘇生、病の治癒などを助ける存在であるのに対して、中国では多く水の出産、誕生の力を負う存在として現われる場合が多く、且つその中の水の女は往々水浴びと、水辺で着物を洗濯する水辺の女として現れている。水辺での水浴び行為や、洗濯行為は、水の神と出会う水辺の女とかかわる水の呪力はしばしば水辺の禊とかかわっているが、これらの研究は中国の学会でも新しい研究テーマになっている。また日、中とも水辺の女が禊の水の呪力と深くかかわっているのはいうまでもない。しかし、日本の水の女は、水による再生治癒の呪力を施してきたのに対し、中国の水辺で禊とかかわる女は主に水の出産、誕生の力を負う存在であるということは、禊という共通のつながりがあるのにもかかわらず、両国の水の女のイメージと役割は相違をみせている。水の女という概念は今日までの研究の中で、未だ広く使われてはいるが、その伝承について詳しく論じた研究は少なく、まだ研究の余地は大きいと考える。

それらの相違を明らかにし、東アジア全般における水の女、洗濯する女の系譜を概観し、水の女の系譜を読み直す研究の一環として、本研究は東アジアにおける水の呪力と水の女の伝承を概観、比較検討し、その相違を探し、日本の御伽噺「瓜子姫」、「桃太郎」などを中心として、日本での出産、誕生の力の水とかかわる水の女の伝承を検討した。その結果、「瓜子姫」、「桃太郎」を中心とする日本御伽噺には明らかに、出産、誕生を助ける水の呪力が伝承され、水辺の洗濯する老嫗は正に水の女、水辺の洗濯する女の伝承であることが実証できた。そして、朝鮮半島、中国の神話、伝説、文学史における水辺の洗濯する女との比較神話、民俗学の比較検討を通して、日本に於ける洗濯する女の伝承を読み直し、東アジア全般における洗濯する女の文学史を比較神話、民俗学、文化人類史学の側面から始めて概観、実証した。

## 二、本研究の方法と構成

本研究は以下の三章十一節、序章及び終章からなっている。

### 第一章 日、中における水の呪力と水の女

第一章は日、中における水の呪力と水の女の伝承を概観し、比較検討を施した。

第一節は、日中両国における水の呪力、水の女についての先行研究を詳しく考察した上で、水の女概念を明らかにし、水の女についての比較検討の必要性と重要性を述べた。

第二節は、中国の古典籍や民間の神話、伝説の中の水の呪力とそれにかかわる水の女の系譜を辿り、その特徴をまとめた。

第三節は、日本における水の呪力とそれにかかわる水の女の系譜を辿り、その特徴をまとめた。

第四節は、日、中における水の呪力と水の女の比較研究を行い、従来の日本における水の女についての系譜研究を辿り、日本における水の女の系譜研究には取り扱えなかった出産、誕生を助ける水とかかわる水の女の研究を研究課題として提起した。具体的に言うと、第一章では主として、日、中の水の呪力と水の女の伝承について概観し、比較研究を通して、従来の研究で本格的に論じられなかったこと、即ち、日本にも出産、誕生を助ける水の呪力とその力を負う水辺の女が存在することを証明した。

## 第二章 日本の御伽噺における水の呪力と水の女の伝承

第二章 日本の御伽噺における水の呪力と水の女の伝承では、「瓜子姫」、「桃太郎」、「たにし息子」を中心に日本に伝承されている出産、誕生、治癒、再生の力の水と水の女の伝承を考察し、実証した。

第一節では、「瓜子姫」にみられる水の呪力と水の女の伝承を考察した。具体的には、現在までの「瓜子姫」の研究史を辿り、文献にかかれた「瓜子姫」の版本研究を行い、東アジアにおける瓜の霊力を探った。そして、口承話としての「瓜子姫」の全国における類話を調べ、誕生モチーフを中心に地域分布表を作り、統計した上で、瓜子姫における水辺の女と水の呪力の伝承を新しい視点で探求した。管見の限り、約 543 話を調べ、表にしてまとめた)。

第二節は、「桃太郎」にみられる水の呪力と水の女の伝承を考察した。先行研究を踏まえたうえで、先行研究にはあまりみえなかった水辺の女、洗濯する女の伝承を見出した。第一節と同じく、詳しい版本研究の上で、東アジアにおける桃の霊力を探り、全国の「桃太郎」の地域分布を統計し、具体的な数値と分布表で「桃太郎」にも出産、誕生の力とかかわる水辺の女、洗濯する女の伝承があるのを実証した(管見の限り、約 391 話を調べ、表にした)。

第三節は、「たにし息子」を中心に、全国的類話の分布を表にし、物語の中に出産、誕生、治癒、再生の水の力と水の女の伝承があることを探求し

た。この三節を通して、主に日本御伽噺に伝承されている洗濯する女の存在を論証し、日本においても水辺の女、洗濯する女は水の呪力による出産、誕生の伝承が見えるのを論証した。

### 第三章 東アジアにおける洗濯する女の伝承

第三章 東アジアにおける洗濯する女の伝承では、東アジア全般における洗濯する女の伝承を辿り、体系的に水の女の系譜を作った。

第一節では中国における洗濯する女、水辺の女の系譜を作り、洗濯する女の意味を明らかにし、神話、伝説、文学作品まで洗濯する女の系譜に検討を加えた。

第二節では日本御伽噺の中の「瓜子姫」、「桃太郎」と類似する朝鮮半島の洗濯する女と水辺の子授けの伝承を概観し、さらに、文学史や高麗歌謡、美術史の中で洗濯する女と水辺の子授け、縁結びを論じ、朝鮮半島における洗濯する女の系譜を作った。

第三節では、日本上代から近世までの洗濯する女の伝承を襖による子授け、縁結びの観点から読み直した。

第四節では神話、文学、文化の視点から、「洗濯する女」という詞をもう一回辿り、体系的に東アジアにおける洗濯する女、延いては水の女の系譜を改めて定義した。

附表に、「瓜子姫」と「桃太郎」の中の主人公の誕生モチーフを中心とする地域的分布を表にし、掲載しておく。

### 注

注1：折口信夫「水の女」『折口信夫全集第二巻古代研究(民俗學篇1)』中央公論社 一九七五年

## 第一章 日、中における水の呪力と水の女

序章にも言ったように、水の力についての先行研究を概観すると、両国とも水の創造力（或いは生産力）、水による禊の力などは共通的に認識している。そして、日、中とも、水辺には常に水と縁のある水の女が登場する。しかし、中国で水というと、妊娠、出産の力が浮かべ、日本で水という「若水」即ち、若返り、生まれ変わる（或いは水による治癒、再生）のイメージが先に浮かんでくる。そして、これら水の力の背後にはそれに伴い、水の女が登場する。

ここで浮かんでくる疑問としては、日本には果たして妊娠、出産を助ける水の呪力と伴う水の女がないのかという疑問である。次は、水による禊の力と水の女が頻繁に現れるが、なぜ中国で妊娠、出産と深くかかわっている禊を行う水の女は禊とともに、日本には伝わっていないかということである。

これら問題点を解決するために、本章ではまず両国の水の呪力についての認識、禊についての認識及び水の呪力とかかわる水の女など多方面における先行研究の考察と水の女と水の呪力について概観してみる。

### 第一節 水の呪力及び水の女について

周知の通り、世界中のほとんどの地域において、その創世神話は往々水（海）から開始する場合が多い。古くから人間に、水は命の源であり、生存に不可欠な要素と自然力として認識され、その力を恐れたり、憧れたりしていた。殊に、農耕の発達において、水は極めて重要な資源要素になる。日中とも古代から農耕文化が発達してきた。

四周が海に囲まれる日本は島国でもあり、国土の三分の二以上が山地に占められる山国でもある。山地が多いため、日本の河川は多くは流れが速い。総じて、日本は水資源に恵まれている地域とも言える。中国は広い大陸の周りに海があり、内陸には河川と湖が多く、且つ長江、黄河などの大きい川があり、古代から水害が頻繁に発生してきた。日、中両国とも、水は生活に利用できる資源にもなり、水害をもたらす存在にもなっていた。その威力についての憧れと恐怖感とから、両国では、水の霊力に関する多くの神話、伝説ができたのである。



ただし、各自の自然条件と文化のため、水の役割と呪力について日本と中国は共通しつつ、異なる認識と理解をもっているらしい。例えば、両国とも古代から禊の儀式があったが、中国で禊は穢れと罪を流す役割がないが、日本では古くから禊による清めと癒しの力が伝承されてきた。そして、中国には女人国や水神との交合を通して女が孕んだりする神話や伝説が多いが、日本にはそういう神話や伝説はあまり見えない。

本章では出産、誕生を助ける中国の水の霊力の伝承を比較対象として、果たして日本の水には出産、誕生の霊力が無いのかを考察する。日本における出産、誕生とかかわる水の霊力の用例を探し、その具体的な伝承の流れと特徴についても究明する。

## 一、水の呪力及び水の女についての先行研究

水の力や役割に関する研究は両国とも数多いが、本論と緊密にかかわる代表的ないくつかを見てみよう。

日中とも、水から世界の誕生がはじまると主張する論説は多い。例えば、中国の斬怀堵は、中国を含め、古代のギリシア、エジプト、バビロンの神話はみな、水（或いは海）から万物が生まれ、古代インドの神話でも、水は胚胎を孕み、その中には宇宙のすべての天神が集まっていたと述べている<sup>注1</sup>。

日本の吉田敦彦は、世界中のいたるところで共通している発想のひとつに、太古には世界は一面の海原であった、という神話のあることを指摘している<sup>注2</sup>。

しかし、水から万物が誕生するという共通な認識のもとで、他の具体的な水の霊力に関する研究をみると、両国の神話や伝説の中で水の力或いは役割は共通しながらまた、異なるところも多い。

例えば、両国とも水を通しての禊に関しての研究<sup>注3</sup>があるが、その禊の機能と文化的意味はまただいぶ異なる。日本の禊は清め、再生、癒しなどの役割があるが、その中でも特に清め、浄化の役割が強調されるが<sup>注4</sup>。中国では禊を通しての癒しもあるが、多数の例は水を浴びたり、水との接触を通して女が孕む、即ち水の生殖力を現している<sup>注5</sup>。

まとめてみると、先行研究から見られるように、日本における水の呪力は主に禊を通しての清め、再生であり、中国における水の呪力は水による妊娠、出産である。両国の水の霊力には、水による癒し、若返りなどもあ

るが、今回は、中国の出産誕生の水との比較を通して、日本にも、水による妊娠、出産の伝承があるということを証明、考察し、その特徴と流れを辿ってみたい。

中国の水や水神の妊娠、出産を助ける用例を見ると、女性が虹の神、雷神、龍の神、雨の神、風の神などと接し、感応し、子供を孕む例は少なくない<sup>注6</sup>。中国の研究者たちは、これら雷神、風神などを全部水神にもみることができると指摘している。向柏松もその研究者たちの一人であり、彼はまた、水神による女の妊娠は、女人国までその淵源をたどることができるのである<sup>注7</sup>。

向柏松を含め、学者たちにすでに紹介されてもあるが、中国では水を浴びたり、飲んだりして孕む用例や、水と関連のあるもの（或いは水の中のものなど）と接したり、食べたり、水神（雷神、雨の神、河の神、虹の神など）と接して、孕んだりする用例が多い。次の節で詳しくたどってみる。

## 二、水の女とは一折口信夫の「水の女」論を中心に

序章にも言ったように、早く折口信夫は「水の女」<sup>注8</sup>という論で、古代日本における「水の女」について、古代詞章の上の意味から始まり、水の女の伝承を辿り、後日の水の女研究の根拠と基礎をつくった。それ以降、この「水の女」を元にして、学者たちの水の女についての研究が行われてきた。そして、それらの研究は角度は多少ずれはあるが、みな折口信夫「水の女」の中の伝承の範疇から離れることはなかった。ただ、現在ここでいろいろ言及するが、実はさきに解決すべきなのが、水の女の定義と伝承を明らかにすることである。水の女という概念は今日までの研究の中で、未だ広く使われてはいるが、詳しくその伝承について論じた研究は少なく、まだ研究の余地は大きいと考える。

ところで、今までの日本の「水の女」についての研究を簡単にみてみると、折口信夫の「水の女」から始まる水の女の関連研究からみられる従来の研究から見れば、日本神話の中で水の女とかかわるの水の霊力は主として禊祓えとかかわる再生、治癒である。そして、その伝承についての研究は、「小栗判官」の中の照手姫、『高野聖』の中の女までその系譜が続くが<sup>注9</sup>、その中で水の女は、主として水への生け贄や蘇生、治癒などを助ける存在であるのに対して、中国では多く妊娠、出産の水の呪力と水の女が出会う場合が多く、且つその中の水の女は往々洗濯する水辺の女として現れ

ている。

総じていうと、本研究で扱う「水の女」は水の女神、水の神の女、水辺の女であり、水を司って何らかの霊力を施したり、水の霊力とかかわっている水辺の女である。

## 注

注 1 靳怀培『中華文化と水』長江出版社 2005 年

注 2 吉田敦彦著「神話における水」『水の原風景—自然と心をつなぐもの』TOTOT出版 1996 年

注 3 廣部 重紀の「日本の霊水信仰に対する一考察 (I) : 禊の信仰」福井工業大学研究紀要. 第一部 20、福井工業大学 123-130、1990 年 7 月や西角井 正慶の「禊祓」國學院雑誌 69(11)、國學院大學綜合企画部 118-128、1968 年 11 月 など多数の研究がある。

注 4 鈴木正崇は「祭りとお水」『水の原風景—自然と心をつなぐもの』TOTOT出版 1996 で、日本のお祭りと風習からみると、水には清め、変身、再生、供養などの役割があるとまとめた。

注 5 張丑平「上巳节祓禊习俗与水的文化内涵」上饶师范学院学报第 28 卷第 4 期 2008 年 8 月

注 6 向柏松は（「水神感生神話の原型と生成背景」第 27 卷第 2 期中南民族大学学报(人文社会科学版) 2007 年 3 月）水神感生神話の発生は水の生命信仰とかかわっているのもので、女子の水神感生の淵源はすべて水によって創造される水生型創世神話であると論じている。

注 7 注 6 に同じ。

注 8 折口信夫「水の女」『折口信夫全集第二卷古代研究(民俗學篇 1)』中央公論社 1975 年

注 9 永田 靖「熊野信仰と物語の祖型——再生の水の女神たち——」明治大学人文科学研究所紀要 文学 p1-11、1981 年 明治大学人文科学研究所、東郷克美『高野聖』の水中夢「国文学ノート 13」1975 年 3 月

## 第二節 中国における水の呪力と水の女

### 一、中国における水の呪力

前文で少し触れたが、中国における水のもっているイメージと力は極めて多い。水は万物を誕生させる存在でもあり、豊饒をもたらす存在でもあり、また、生殖、男女の愛ともかかわっている。

《管子・水地篇》では、“水者何也？万物之本原也，諸生之宗室也，”とある。その訳をみると、「故に曰く、水は材を具ふるなり。萬物の本原なり。諸生の宗室なり。」<sup>注1</sup>となる。即ち、中国では、古代から、水を万物の起源だとみていたことが窺える。この外にも、彝族典籍『六朝史詩』では、「人祖来自水，我祖水中生」（劉堯漢『中国文明源頭初探』云南人民出版社1985年による。）とあるが、これは彝族の祖先が水から生まれたことを説明している。また、中国の各地、各民族に見えるさまざまな水から世界が作られ、人間が起源する神話はいろいろある。中国の神話で盤古は天地の創造者だと知られているが、盤古の誕生はまた水から生まれたという伝説がある。湖北神農架地区で伝わっている『根古歌』『黒暗伝』では、盤古が水から生まれた神話が伝わっている。

その原文をみると、

一片黑暗与混沌，天地茫茫无一人。乾坤暗暗如鸡蛋，迷迷昏昏几千层，盘古生在混沌里，无父无母自长成。那时有座昆仑山，天心地胆在中心，一山长成五龙形，五个嘴唇往下伸，五个嘴唇流血水，一齐流到海洋内，聚会天地精与天地灵，结个胞胎水上存，长成盘古一个人。とある。

（元出は、劉守華「鄂西古神話的新發見—神農架歷史叙事歌『黒暗伝』初評」『中国少数民族学会 神話新探』貴州人民出版社一九八六年であるが、本論では、向柏松の下注論文の中から転引した。）

この詩について、向柏松は次のように解釈している。これは盤古が崑崙山五龍の血水と東海の水からできたといっている。盤古を誕生させたのは、陸地の水と海の水が集まった「天精と地靈」の聖水である。ここで、崑崙山五龍の血水は崑崙山から溶かれた雪水を指し、雪水を血水だというのは、崑崙山が龍に化した結果である。崑崙山の雪水が集まって河流になり東海に流れ行くのはこういう古代から伝わってきた盤古誕生説話の現実的な基礎だと述べている。<sup>注2</sup>

この外にも、向柏松は中国の各民族の祖先が水から、海から生まれた伝説を多数紹介しているが、ここで一つ引用する。

黔東南苗族神話の中の美女神娘阿莎は世間で最も美しい女性である。神話の中で彼女は水井から生まれたと言われているが、これは実際彼女が水井の中の水から生まれたことになり、水から万物及び人間ができたという原始的な信仰を表している。<sup>注3</sup>

水は豊饒をもたらす存在でもある。

『左伝』では、「如百谷之仰膏雨焉」とあり、唐の杜甫も「春夜喜雨」の中で「随風潜入夜，潤物細無声。」と歌っている。また、『詩経』小雅・谷風

之什・信南山をみると、

信彼南山 維禹甸之  
昫昫原隰 曾孫田之  
我疆我理 南東其畝  
上天同雲 雨雪雰雰  
益之以霡霂 既優既渥

既霑既足 生我百穀 (石川忠久『新釈漢文大系第111巻 詩經 中』  
明治書院 平成十年十二月 411頁)

水は天地を潤い、多くの穀物は水からでると述べているこの詩からも、  
古代の人は既に水（ことに雨水）と穀物の豊穰との関係を深く認識し、水  
の豊饒をもたらす力を認識していた。

水は不老、長寿の力ももっている。

晋・張華の『博物志』卷八には、「有員丘山，上有不死樹，食之乃寿；亦  
有赤泉，飲之不老。」という飲めば不老できる赤泉がある。

水は病を癒す力がある。

『風俗通義・祀典』には、

禊者，洁也。春者，蠢也，蠢蠢揺动也。……疗生疾时，故于水上畔洁  
之也。

『晋書・樂志』にも、「三月之管名为姑洗，姑洗者：姑，枯也；洗，濯也，  
谓物生新洁，洗除其枯，改柯易叶也。」とある。また、『本草綱目』水部卷  
五水之二をみても、

水部第五卷 水之二 流水

集解时珍曰：流水者，……千里水 东流水 甘澜水(一名劳水)气味甘，  
平，无毒。主治病后虚弱……

发明藏器曰：千里水、东流水二水，皆堪荡涤邪秽，煎煮汤药，噤咒神  
鬼。

水部第五卷 水之二 井泉水

时珍曰：井字象井形，泉字象水流穴中之形。

集解颖曰：井水新汲，疗病利人。

(李時珍『本草綱目』人民衛生出版社一九八七年)

とある。即ち、水は病を治し、穢れを祓う役割があると古代の人は信じて  
いた。

また、水は癒しとともに厄払い、災いをなくす力もある。(水の呪力の分  
類については、張丑平「上巳節祓禊習俗与水的文化内涵」上堯師範学院学  
報題 28 卷第四期 2008 年 8 月を一部参考にした。)

『歳時広記』卷十八上巳に引く『後漢書注』には、「歴法三月建辰巳既是除可以祓除災也」とある。

また、生殖或いは出産、誕生を助ける呪力がある。女性が水を浴びたり、飲んだり或いは水の神によって妊娠する神話と伝説は極めて多い。これらはことに女人国の話によくみられる。

女人国の話は水の出産、誕生を助ける呪力をよく説明している。

『山海經』第七・海外西經

女子國在巫咸北，兩女子居，水周之。一曰居一門中。郭璞云：有黃池，婦人入浴，出即懷妊矣。若生男子，三歲輒死。（袁珂校注『山海經校注』上海古籍出版社一九八〇年七月 二二〇頁）訳してみると、女子国は巫咸の北にあり、二人の女が住み、水が二人をめぐる。郭璞注では、黄池があり、婦人が入浴すると、出たらすぐ孕む。もし、男の子を生んだら三歳になると死ぬということになる。この外にも女人国に関する神話、伝説は多くみられる。

『通典』卷第一百九十三 邊防九

又聞西有女國、感水而生。（唐杜佑撰『通典』校點本五 中華書局 一九八八年十二月）

又西に女国あるそうである。水に感じて生む。

『通典』卷第一百八十六邊防二 東夷下 東沃沮

又言有一國亦在海中，純女無男人。或傳其國有神井，闕之輒生子。（唐杜佑撰『通典』校點本五 中華書局 一九八八年十二月）

海中に女人国あって、男はいない。あるいは伝える話によると、その国に神井あって、これを闕うになれば子をうむと云う。

『梁書』卷五十四 列傳第四十八 東夷

扶桑東千餘里有女國，容貌端正，色甚潔白，身體有毛，長髮委地，髮長委地，至二、三月，競入水則妊娠，六七月產子。女人胸前無乳，項後生毛，根白，毛中有汁，以乳子，一百日能行，三四年則成人矣”（唐姚思廉撰『梁書』 北京：中華書局一九七三年五月）

扶桑東の方、千余里に女国ある。容貌は端正にして、色は甚だ潔白である。身体に毛ある。長髪地に至り、二三月になると、競いで水に入り、即ち妊娠する。六、七月に子を生む。女人は胸前に乳なく、項の後毛があり、根は白く、毛中に汁ある。もって子に乳する。一百日経つと、よく歩き、三、四年経つと即ち成人になる。

外、『魏志』、『淮南子』などにも女人国の話があるが、ここでは詳しく挙

げない。また、珞巴族神話では、天女麦冬海依が沐浴するとき、天河の水を飲み、一人の男の子を生んだという。(王宪昭「中国少数民族感生神话探析」『理論学刊』二〇〇八年六月)

## 二、中国における水の女

上記にも少し触れたが、中国において、水の呪力は往々それと伴って登場する水の女とかかわっている。

ここで水の呪力とかかわる水の女をみてみよう。ことに『山海経』には水辺に登場する水の女の用例が多く書かれている。

『山海経』第十四 大荒東経

海内有兩人，名曰女丑。女丑有大蟹。

『山海経』第十六 大荒西経

有人衣青，以袂蔽面，名曰女丑之尸。

『山海経』第七 海外西経

女祭女戚在其北，居兩水間。戚操魚鱗（角角旦），祭操俎。

女祭と女戚一この二人は彼（刑天）の北にあり、両水の間にいる。女祭は手に四昇水が入れる一つの酒杯をもち、女戚は両手に神を祭る肉案を捧げ、神をたてまつる。

『山海経』第十四大荒東経には、

東海之外，甘水之間，有義和之國。有女子名曰義和，方浴日于甘淵。義和者，帝俊之妻，是生十日。とある。

また、『山海経』第十六大荒西経をみると、

有女子方浴月。帝俊妻常義，生月十二，此始浴之。とある。

(袁珂校譯『山海経校譯』上海古籍出版社一九八五年九月)

東海之海外、甘水が流れ通る地域に義和國がある。ある義和という女があり、甘淵の水で彼女の子（太陽の息子）たちを浴びさせている。この義和は帝俊の妻で、十個の太陽を生み、また、常義という女があり、水で月を浴びさせ、この常義は帝俊の妻で十二個の月を生んだという話である。

以上の例からも分かるように、古代の神話の中で既に水辺の女は神秘的なイメージと力をもっていることが分かる。水の呪力はまさに水の女を通して発揮するのである。

以下、中国の神話、伝説にみられる水辺の女、水の女の系譜を概観してみよう。

中国でもっとも代表的な水の女、水の女神というと、まず挙げられるのが、漢水、巫山、洛水、湘水の女神である。

漢水女神は中国で最古の江川女神として、既に『詩経』に出ている。

『詩経』漢廣をみると、

南有喬木 不可休息  
漢有游女 不可求思  
漢之廣矣 不可泳思  
江之永矣 不可方思

翹翹錯薪 言刈其楚  
之子于歸 言秣其馬  
漢之廣矣 不可泳思  
江之永矣 不可方思

とある。(石川忠久『新釈漢文大系 110 詩経上』明治書院 平成九年九月三十日 32頁)

ここで、漢水女神は樵夫の意中の人として現れるが、彼女は漢水の上に現れる、追っても近づけない女神である。漢水女神は『詩経』の外に、いろんな古典籍にその伝承が見られる。

『韓詩外傳』卷一をみると、

孔子南遊適楚至於阿谷之隧有處子佩瑱而浣者孔子曰彼婦人其可與言矣乎抽觴以授子貢曰善為之辭以觀其語子貢曰吾北鄙之人也將南之楚逢天之暑思心潭潭願乞一飲以表我心婦人對曰阿谷之隧隱曲之汜其水載清載濁流而趨海欲飲則飲何問婦人乎受子貢觴迎流而挹之粲然而棄之促流而挹之粲然而溢之坐置之沙上曰禮固不親授。子貢以告孔子曰丘知之矣抽琴去其軫以授子貢曰善為之辭以觀其語子貢曰響子之言穆如清風不悖我語和暢我心於此有琴而無軫願借子以調其音婦人對曰吾野鄙之人也僻陋而無心五音不知安能調琴子貢以告孔子曰丘知之矣抽絺紵五兩以授子貢曰善為之辭以觀其語子貢曰吾北鄙之人也將南之楚於此有絺紵五兩吾不敢以當子身敢置之水浦婦人對曰客之行差遲乘人分其資財棄之野鄙吾年甚少何敢受子子不早去今竊姐狂夫守之者矣詩曰南有喬木不可休思漢有游女不可求思此之謂也

(景印文淵閣四庫全書第八九冊：『韓詩外傳』台北：臺灣商務印書館)

孔子が楚國へ旅する時、阿谷之隧という山谷を経て、漢江の邊に着いたが、河辺で服を洗っている二人の少女に引かれ、自分の弟子に二つのお土産を渡させたが、この二人の洗濯する少女に断れたのである。文末にみると、「詩経」の文句をを引用して、「詩曰南有喬木不可休思漢有游女不可求思此之謂也」と漢江邊の洗濯する女を歌っている。同じ記録は『古列



女傳』にもみられるが、以下の原文をみると、大体同じ内容になっていることが分かる。

『古列女傳』卷六 阿谷處女

阿谷處女者阿谷之隧浣者也孔子南遊過阿谷之隧見處子佩瑱而浣孔子謂子貢曰彼浣者其可與言乎抽觴以授子貢曰善為之辭以觀其志子貢曰我北鄙之人也自北徂南將欲之楚逢天之暑我思闕願乞一飲以伏我心處子曰阿谷之陽隱曲之隱曲之地其水一清一濁流入於海欲飲則飲何問乎婢子授子貢觴迎流而挹之投而棄之從流而挹之滿而溢之跪置沙上曰禮不親授子貢還報其辭孔子曰丘已知之矣抽琴去其軫以授子貢曰為之辭子貢往曰嚮者聞子之言穆如清風不拂不寤私復我心有琴無軫願借子調其音處子曰我鄙野之人也陋固無心五音不知安能調琴子貢以報孔子孔子曰丘已知之矣過賢則賓抽絺綌五兩以授子貢曰為之辭子貢往曰吾北鄙之人也自北徂南將欲之楚有絺綌五兩非敢以當子之身也願注之水旁處子曰行客之人流連永久分其資財棄於野鄙妾年甚少何敢受子子不早命竊有狂夫名之者矣子貢以告孔子孔子曰丘已知之矣斯婦人達於人情而知禮詩云南有喬木不可休息漢有游女不可求思此之謂也

頌曰孔子出遊阿谷之南異其處子欲觀其志子貢三反女辭辨深子曰達情知禮不淫

(景印文淵閣四庫全書第四四八冊：『列女傳』台北：臺灣商務印書館 五十六～五十七頁)

また、漢水女神は劉向の『列仙傳』にもその伝承がみられる。

『列仙傳』江妃二女をみると、

江妃二女者不知何所人也出遊於江漢之湄逢鄭交甫見而悅之不知其神人也謂其僕曰我欲下請其佩僕曰此間之人皆習於辭不得恐懼悔焉交甫不聽遂下與之言曰二女勞矣二女曰客子有勞妾何勞之有交甫曰橘是柚也我盛之以筥令附漢水將流而下我遵其旁彩其芝而茹之以知吾為不遜願請子之佩二女曰橘是柚也我盛之以令附漢水將流而下我遵其旁彩其芝而茹之遂手解佩與交甫交甫悅受而懷之中當心趨去數十步視佩空懷無佩顧二女忽然不見

靈妃豔逸 時見江湄 麗服微步 流盼生姿

交甫遇之 憑情言私 鳴佩虛擲 絕影焉追

(景印文淵閣四庫全書第一〇五八冊：『列仙傳』台北：臺灣商務印書館 四百九十四頁)

抄訳してみると、

漢江邊で人々はよく二人のきれいな女を見るが、ある日、この二人の女が河辺で服を洗っている時、あいにく北方から来る鄭交甫に出会うことになった。漢水女神の名は世によく知られているので、鄭交甫はすぐ一目ぼ

れになり、仆役の忠告も聞かず二人の女神にからかうが、結局女神は幻術を使い、去って行ったのである。

また、『拾遺記』巻二にみると、

二十四年塗修國獻青鳳丹鵲各一雌一雄孟夏之時鳳鵲皆脫易毛羽聚鵲翅以為扇緝鳳羽以飾車盖也扇一名遊飄二名條翮三名虧光四名仄影時東甄獻二女一名延娟二名延娛使二人更搖此扇侍於王側輕風四散冷然自涼此二人辯口麗辭巧善歌笑步塵上無跡行日中無影及昭王淪於漢水二女舉王乘舟夾擁王身同溺於水故江漢之人到今思之立祀於江湄數十年間人於江漢之上猶見王與二女乘舟戲於水際至暮春上巳之日禊集祠間或以時鮮甘果採籩杜包裹以沉於水或結五色紗囊盛食或用金鐵之器並沉水中以驚蛟龍水蟲使畏之不侵此食也其水傍號日招祇之祠綴青鳳之毛為二裘一名煩質二名暄肌服之可以卻寒至厲王流於淝淝人得而竒之分裂此裘遍於淝土罪入大辟者抽裘一毫以贖其死則價值萬金

成康以降世禊陵衰昭王不能弘遠業垂聲教南遊荆楚義乖巡狩溺精靈於江漢且極於幸田水濱所以招問春秋以為深貶嗟二姬之殉死三良之貞節精誠一至視殞若生格之正道不如強諫楚人憐之失其死矣

(景印文淵閣四庫全書第一〇四二冊：『拾遺記』台北：臺灣商務印書館 三百二十三～三百二十四頁)

とある。

延娟延娛二人の美女は昭王の南征する時、王と一緒に入水死し、漢江邊の人々は三人を川辺に祭ったが、何十年間も人たちは昭王と延娟延娛の舟に乗って漢江を遊ぶ姿を見ることができた。また、春の上巳之日は、禊もしくは果物らを水に投入して三人を祭った。延娟延娛は入水したが、その魂霊は無くならず、漢水の女神として人々に祭られたのである。

洛水水神も中国の神話、伝説に出る代表的な水の女神である。宓妃とも呼ばれるが、伏羲氏の娘であるが、洛河に落ちて死ぬが、天帝によって洛河の水神だと封ぜられたと伝わっている。

『文選』『洛神賦』に引く『漢書音義』の記録をみると「漢書音義如淳曰宓妃伏羲氏之女溺死洛水為神」とあり、中の洛神のイメージは極めて清新、優美且つ華美である。

『楚辭』天問 卷三をみると、

帝降夷羿. 革孽夏民. 胡射夫河伯而妻彼雒嫫. (王逸注胡. 何也. 雒嫫. 水神. 謂宓妃也. 傳曰. 河伯化為龍. 游于水旁. 羿見射之. 眇其左目. 河伯上訴天帝曰. 為我殺羿. 天帝曰. 爾何故得見射. 河伯曰. 我時化為白龍出遊. 天帝曰. 使汝深守神靈. 羿何从得犯汝. 今為虫兽. 當為人所射. 固其宜也. 羿何罪歟. 深

一作保羿又夢與雒水神宓妃交接也。(中華書局編『四部備要 第91冊 楚辭』一九八九年三月 中華書局 四四頁)とある。

『竹書紀年』卷上 黃帝軒轅氏のところをみると、  
五十年秋七月庚申鳳鳥至帝祭于洛水  
とある。

また、『太平広記』卷三百十一蕭曠の篇にも、洛神の物語が出るが、洛水で蕭曠と女神の出会いが書かれている。

総じてみると、洛神は伏羲氏の娘であり、洛河に落ちて死んだあと、天帝に洛水の女神に封ぜられた水の女神である。

続けて湘水水神を見てみよう。湘水の水神である娥皇と女英は堯帝の娘であり、舜帝の妃になったが、二人は舜の弟の象からの迫害のから舜を助け、王位に就くように力を尽くした。舜は晩年に南巡する時、蒼梧で死んだ。二人の妃も舜のために、湘水で死んだのである。以下、漢の劉向の『列女傳』をみると、詳しい記録がある。

『古列女傳』卷一 母儀傳

有虞二妃

有虞二妃者帝堯之二女也長娥皇次女英舜父頑母嚳父號瞽瞍弟曰象敖游於嬖舜能諧柔之承事瞽瞍以孝母憎舜而愛象舜猶內治廩有奸意四岳薦之於堯堯乃妻以二女以觀厥内二女承事舜於畎畝之中不以天子之女故而驕盈怠嫚猶謙謙恭儉思盡婦道瞽瞍與象謀殺舜使涂廩舜歸告二女曰父母使我涂廩我其往二女曰往哉舜既治廩乃捐階瞽瞍焚廩舜往飛出象復與父母謀使舜浚井舜乃告二女二女曰俞往哉舜往浚井格其出入從掩舜潛出時既不能殺舜瞽瞍又使舜飲酒醉將殺之舜告二女二女乃與舜藥浴汪遂往舜終日飲酒不醉舜之女弟慙之與二嫂諧父母欲殺舜怒之不已舜猶不怨舜往于田號泣日呼旻天呼父母惟害若茲思慕不已不怨其弟篤厚不怠既納于百揆賓于四門選于林木入于大麓堯試之百方每事常謀于二女舜既嗣位升為天子娥皇為後女英為妃封象于有庠事瞽瞍猶若焉天下稱二妃聰明貞仁舜陟方死於蒼梧號曰重華二妃死於江湘之間俗謂之湘君君子曰二妃德純而行篤詩云不顯惟德百辟其型之此之謂也

頌曰元始二妃帝堯之女嬪列有虞承舜於下以尊事卑終能勞苦瞽瞍和寧卒享福祐

(景印文淵閣四庫全書第四四八冊：『列女傳』台北：臺灣商務印書館 八～九頁)

また、

『後漢書』卷五十九をみると、  
張衡列傳第四十九

指長沙以邪徑兮，存重華乎南鄰。哀二妃之未從兮，翩儻處彼湘瀕。李賢の注をみると、「長沙，今潭州也。從稽山西南向長沙，故云邪徑。存猶問也。重華，舜名。葬於蒼梧，在長沙南，故云「南鄰」也。二妃，舜妻堯女娥皇、女英。翩，連翩也。儻，弃也。瀕，水涯也。劉向列女傳曰：「舜陟方，死於蒼梧，二妃死於江、湘之間，俗謂之湘君、湘夫人也。」禮記云「舜葬蒼梧，二妃不從」也。」とある。

(宋 范曄撰 唐 李賢等注『後漢書』全十二冊 中華書局 一九六五年五月)

上記のように、『後漢書』に引く、『列女傳』に関する李賢の注をみると、また、蒼梧で舜が死に、二妃は湘江で死に、二人は湘君、湘夫人と呼ばれたという。

『水經注』卷三十八・湘水にも湘水水神が出てくる。

『水經注』卷三十八・湘水

其水上承大湖湖水西流逕二妃廟南世謂之黃陵廟也言大舜之陟方也二妃從征溺于湘江神遊洞庭之淵出入瀟湘之浦瀟者水清深也湘中記曰湘川清照五六丈下見底石如擣矢五色鮮明白沙如霜雪赤崖若朝霞是納瀟湘之名矣故民為立祠于水側焉

(景印文淵閣四庫全書第五七三冊：『水經注』台北：臺灣商務印書館)

また、『山海經』第五 中山経をみると、

又東南一百二十里，曰洞庭之山，其上多黄金，其下多銀鐵，其木多柎梨櫟，其草多蓂、蕙、芍藥、芎藭。帝之二女居之，是常遊于江淵。澧沅之風，交瀟湘之淵，是在九江之間，出入必以飄風暴雨。是多怪神，状如人而載蛇，左右手操蛇。還多出現怪鳥。(袁珂校譯『山海經校譯』上海古籍出版社一九八五年九月)とある。

天帝の二人の娘は洞庭山に住んでいる。常に江淵で遊んでいる。澧水と沅水からの風は瀟湘の淵に交わる。そのところは九の河が集まる中にあり、二人が毎回出入りするとき、かならず大風と暴雨がある。よって、多くの怪神が現れ、形は人間に似ているが、頭上には蛇があり、両手にも蛇を握っている。また、多くの怪鳥が現れる。二人は死んだ後水神になり、出入りする時、必ず大風と暴雨が伴うのは、二人の水神の特性をよく見せている。

もう一人の代表的な水の女神は巫山神女である。

『文選 卷十九』宋玉 高唐賦

昔者楚襄王與宋玉游於雲夢之臺。(史記曰.楚懷王薨太子橫立爲頃襄王漢書音義.張揖曰.雲夢.楚藪也.在南郡華容縣.其中有臺館.)望高唐之觀.其上獨有雲氣.崑

兮直上. 忽兮改容. 須臾之間. 變化無窮. 王問玉曰. 此何氣也. 玉對曰. 所謂朝雲者也. 王曰. 何謂朝雲. 玉曰. 昔者先王嘗遊高唐. 怠而晝寢. 夢見一婦人. 曰. 妾巫山之女也. (襄陽耆舊傳曰. 赤帝女曰姚姬. 未行而卒. 葬於巫山之陽. 故曰巫山之女. 楚懷王遊於高唐. 晝寢夢見與神遇. 自稱是巫山之女. 王因幸之. 遂爲置觀於巫山之南. 號爲朝雲. 後至襄王時. 復遊高唐.) 爲高唐之客. 聞君游高唐. 願薦枕席. 王因幸之. 去而辭曰. 妾在巫山之陽. 高丘之阻. 旦爲朝雲. 暮爲行雨. (朝雲行雨神女之美也.) 朝朝暮暮. 陽臺之下. 旦朝視之. 如言. 故爲立廟. 號曰朝雲. 王曰. 朝雲始生. 狀若何也. 玉對曰. 其始出也. 兮若松櫛. 其少進也. 暫兮若姣姬. 揚袂鄣日而望所思. 忽兮改容. 偁兮若駕駟馬. 建羽旗. 湫兮如風. 淒兮如雨. 風止雨霽. 雲無處所. (中華書局編『四部備要 第91冊 文選』一九八九年三月 中華書局) とある。

『文選』神女賦にも巫山神女が歌われているが、『文選』に引く『襄陽耆舊傳』にみると、神女は赤帝の娘姚姬で、未婚のまま死んで巫山に葬られ、巫山之女と呼ばれることになったという。

外に、同じく帝の娘、姚姬の妹である女娃も水に縁のある水の女である。

『山海経』第三 北山経をみると、

又北兩百里，曰發鳩之山，其上多柘木。有鳥焉，其狀如鳥，文首，白喙，赤足，名曰精衛，其鳴自絞。是炎帝之少女名曰女娃，女娃游于東海，溺而不返，故為精衛，常銜西山之木石，以堙于東海。とあるが、精衛と呼ばれる女娃も東海で遊ぶところ、海の中に落ちてしまい、死んだ後鳥になって、西山の木石をくわえ、海を埋めようとするという。

以上の水の女神をみると、ほとんどが入水死して、その霊は無くならず水の女神として永生することが分かる。また、水辺の水の女神、水の女はよく水辺で男と出会ったりする様相がみられる。これのみではなく、以下の水の女を見ると、水の出産、誕生を助ける霊力と深くかかわり、水の神の嫁として、水神と交合する神話、伝説も多くある。即ち、中国の神話、伝説で水の女はよく、水もしくは水神の影響で水神の子を孕むのである。こういう水の女が男子との交合を経たないで、水の神、水に関連するもの、水と感応、接触して孕む例をみてみよう。

第一類は水神と接したり或いは交合はないが、水神の影響で子を授ける例である。こういう例で水神は河の神は無論、雷神、虹の神などいろんな形で表す。<sup>注4</sup>

虹の神から子を授かる。

『太平廣記』卷三百九十六雨 風虹附 陳濟妻

廬陵巴丘人陳濟。為州吏。其婦秦在家。一丈夫長大端正。著絳碧袍。衫色炫耀。來從之。後常相期於一山澗。至於寢處。不覺有人道相感接。如是積年。村人觀其所至。輒有虹見。秦至水側。丈夫有金瓶。引水共飲。後遂有身。生兒兒原作而。據明鈔本改。如人。多肉。濟假還。秦懼見之。內于盆中。丈夫云。兒小。未可得我去。自衣。即以絳囊盛。時出與乳之時。輒風雨。隣人見虹下其庭。丈夫復少時來。將兒去。人見二虹出其家。數年而來省母。後秦適田。見二虹於澗。畏之。須臾。見丈夫云。是我。無所畏。從此乃絕。出神異錄（『太平廣記』第八冊 卷第三五一至四〇〇 中華書局 1961年9月 p 3 1 7 2 によって引用した。）（陳濟は廬陵巴丘人で、州吏である。妻の秦氏が家にいる時、背が大きくきちんとしていた男が、彼女に求愛した。男は華麗な赤緑色の服をきていた。後には、常にある山澗で会ったが、一緒に寝る時には、交合の感じはなかった。このように、一年経った。村の人は彼らが至るところにいつも虹が現れるのをみた。秦氏が水辺に立ったら、男に金の瓶があるので、それで水をとって一緒に飲んだら、それ以降秦氏は孕む。生まれた子は人間みたいで、ちょっと太っていた。後に陳濟が家に帰ったら。秦氏は彼に見られるのを恐れ、部屋の中の盆の中に隠した。あの男はこの子小さすぎて、どうやって私と一緒に行くか？と言って、自ら子供に服を着させ、赤い色の袋の中に入れた。秦氏が子供に哺乳する時はいつも風雨が起り、隣の人は虹がその庭に下っているのをみた。男が子供を連れて去る時にも、村の人々は二条の虹がその家から出るのをみた。暫くしてから、あの男は又来て、子供を連れて行った。二条の虹が秦氏の家から出るのをみた人がいた。数年後、秦氏を見にきた。秦氏は田に行つて、二条の虹がいるのを見て、怖がったが、あの男は「我だ、怖がる必要ない。」といった。それからは往来がなかった<sup>注5</sup>。

ここで秦氏は水神（虹の神）と直接的な交合はないが、水辺で男と一緒に瓶で水を取って飲んで水神の子を孕むことになったのである。水神から子を授かったことと水辺で孕ませたのは注意すべきことである。

雷神から子を授かる。

『太平廣記』卷第三百九十四 雷二 陳義

義即雷之諸孫。昔陳氏因雷雨晝冥。庭中得大卵。覆之數月。卵破。有嬰兒出焉。目後日有雷扣擊戶庭。入其室中。就於兒所。似若乳哺者。歲餘。兒能食。乃不復至。遂以爲己子。義即卵中兒也。出投荒雜錄

（『太平廣記』第八冊 卷第三五一至四〇〇 中華書局 1961年9月 p 3 1 5 0 によって引用した。）

陳義は雷の子孫である。昔陳義の母親が雷雨激しく暗くなった日中に庭

で大きい卵を一個得た。それを何ヶ月覆ったら、卵の殻が裂け、赤ちゃんが出てきた。それから、毎日雷神が門戸を叩き、彼の部屋に入って母乳するようである。一年後、赤ちゃんが食べ物を食べられるようになったら、雷神も再びこなかった。母はこの子供を自分の息子にした。陳義は正に卵から生まれた赤ちゃんなのである<sup>注6</sup>。

ここで陳義の母は雲雨の激しい日に雷神から授かった卵から雷神の息子の陳義を得たのである。直接孕むことはないが、子授けのイメージははっきりである。

この他にも『冊府元龜』を見ると、卷二帝王部・誕聖に、  
伏羲氏母曰華胥燧人之世有大人之迹出雷澤華胥履之生帝於成紀  
がある。

華胥氏は、雷澤で大変大きな足跡を見つかり、自分の足で大きな足跡を計ってみた。すると、妊娠して、伏羲を生んだ。

また、  
神農氏母曰女登為少典妃遊華陽有神人身龍首感女登於嘗陽而生帝  
がある。

女登は華陽を遊ぶ時、龍の首の神に感じて帝を生んだ。

また、  
黄帝母曰附寶見大電光統北斗樞星炤郊野感附寶而孕二十月而生帝於壽丘  
とある。

附宝は大きな電光が北斗樞を囲み、星が都野を照るのを見て感じて、妊娠する。二十ヶ月して寿丘で黄帝を生む。

少昊母曰女節黄帝時有大星如虹下流華渚女節夢接感而生帝

女節は夢の中で星が虹のように自分の身の上に落ちるのを見て、感じて少昊を生む。(景印文淵閣四庫全書第 902 冊：『冊府元龜』台北：臺灣商務印書館)

これらの例は『冊府元龜』を含め、いろんな古典書籍に出る例である。雷神、虹神などと感じて非凡な人物、例えば帝や水神などを孕む。中国の水神の子授けの能力を現すのは言うまでもない。

第二類は、水の中のものと接したり、食べたりして妊娠する女の例である。これらが水神、水の力とかかわるのは言うまでも無い。

土家族の神話では、「卵玉娘娘」は河辺で八個の桃と桃花を一個の桃花を飲み込み、三年六ヶ月孕み、八人の息子と一人の娘を産んだ。それからこそこの世には人間ができたという。

また、白族神話では、ある女が川辺で夫を捜すとき、江の中に木が水流

を遡るのを見た。夢の中で黄龍から化した美男子が夜部屋の中にくる。妊娠して九人の子を生む。

傣族神話では、ある女子が河の中で金龍が化した木に感じて、十人の子を生み、この十人の子からはじめて、大地には龍の子孫がいるようになったという。

高山族の神話では、一人の少女が河の中で木棒を得て孕み一人の男の子を生むことになったという。

珞巴族神話では、天女麦冬海依が沐浴するとき、天河の水を飲み、一人の男の子を生む。

第三類は、水の女が直接水を浴びたり、接したりする用例である。

壮族神話では、姆六甲が海水に感じて人間を産んだという。<sup>注7</sup>

また、前文にも紹介したように、『山海経』などにでる女人国の話からもみられるように、水の女は水に感じて身ごもる例も多くあるのである。

総じていうと、中国における水の呪力は、長寿、病を癒し、厄払い、災いをなくす、子授け、生殖などの役割があり、これらの根底には水から万物が誕生し、豊饒をもたらす水の力についての人々の認識があることが分かる。また、これら、水の呪力はよく水の女を通してその呪力が発現するのである。そして、どうも子授け、癒しなどの水の呪力は多く禊とかかわることが窺える。第三章で詳しく論じるが、周知の通り、水の女の水辺での活動は常に、洗濯、水浴びなど水辺の禊とかかわるのである。

例えば、宋の樂史撰の『太平寰宇記』にみると、四川横県玉華池について次のような記録がある。

『太平寰宇記』卷七十六・三

石乳城水在縣二十一里玉女靈山東北有泉西北兩岸各有懸崖腹名乳房一十七眼狀如人乳流下土人呼為玉華池每三月上巳日有乞子者澆得石即是男瓦是女自古有驗

(景印文淵閣四庫全書第 469 冊：『太平寰宇記』台北：臺灣商務印書館)

三月三日の上巳節に人々は川で沐浴するが、ここで女性たちは水の中の生殖力と関係のあるものを触ったりして子を祈る。玉華池でも毎年の上巳に沐浴しながら石を触ると男の子、瓦を触ると女の子を得るという習俗があることが分かる。

女性の水辺の子授けは、禊と深くかかわっているのである。

## 注

注 1：遠藤哲夫訳『新釈漢文大系第 43 巻 管子（中）』明治書院 1991 年



による。

注 2：向柏松「水神感生神話の原型と生成背景」第 27 卷第 2 期 中南民族大学学报(人文社会科学版) 2007 年 3 月

注 3：注 2 に同じ。

注 4：女性の水神感生神話の分類は、向柏松の前掲論文「水神感生神話の原型と生成背景」を一部参考した。

注 5：原文によって、筆者が訳した。

注 6：原文によって、筆者が訳した。

注 7：以上の例は、王憲昭「中国少数民族感生神話探析」《理论学刊》2008 年第 6 期による。

### 第三節 日本における水の呪力と水の女

#### 一、日本における水の呪力

古代の日本人にとって、最高の褒め詞は、「みず（みづ）」であり、日本国の愛称は「瑞穂の国」と言われるほど、水は日本人にとって神聖で貴重な存在であった。また、「みなもと（源）」という詞を水源として、解釈し、水を万物の源として、取り扱ってきた。これについて、中西進も、「「みなもと」ということばは、「み（水）」＋「な（の）」＋「もと（元）」で、「みずのもと」、水源を意味します。そのことばを「万物の源」などにつかうことから、古代人が水源というものに対し、どれほど神秘を感じていたかということがわかります。」と述べている<sup>注1</sup>。水から万物が生まれるという認識は中国のみでなく、日本にもあったのである。

ところで、日本における水の呪力という点、先に浮かんでくるのが「若水」、「みそぎ」ということばである。それほど、日本には昔から穢れを祓い、若返り、蘇生の呪力と水は緊密にかかわっており、それはまた「みそぎ」という行為を通して常に信仰されてきたといえよう。

最初、『古事記』にでる禊の行為は水の穢れを祓う呪力をよく見せている。『古事記』の「禊祓と神々の化生」の段をみてみよう。

是を以ちて伊邪那伎の大神詔りたまひしく、「吾は伊那志許米上志許米岐穢き國に到りて在り禊理。故、吾は御身の禊爲む。」とのりたまひて、竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原に到り坐して、禊ぎ祓ひたまひき。

故、投げ棄つる御杖に成れる神の名は、衝立船戸神。次に投げ棄つる御帯に成れる神の名は、道之長乳齒神。次に投げ棄つる御囊に成れる神の名は、時量師神神。次に投げ棄つる御衣に成れる神の名は、和豆良比能宇斯能神。次に投げ棄つる御禪に成れる神の名は、道俣神。次に投げ棄つる御冠に成れる神の名は、飽咋之宇斯能神。次に投げ棄つる左の御手の手纏に成れる神の名は、奥疎神。次に奥津那藝佐毘古神。次に奥津甲斐辨羅神。次に投げ棄つる右の御手の手纏になれる神の名は、邊疎神。次に邊津那藝佐毘古神。次に邊津甲斐辨羅神。

右の件の船戸神以下、邊津甲斐辨羅神以前の十二神は、身に著ける物を脱くに因りて所生れる神なり。

是に詔りたまひしく、「上つ瀬は瀬速し。下つ瀬は瀬弱し。」とのりたまひて、初めて中つ瀬に墮り迦豆伎て滌ぎたまふ時、成り坐せる神の名は、八十禍津日神。次に大禍津日神。此の二神は、其の穢繁國に到りし時の污垢に因りて成れる神なり。次に其禍を直さむと爲て、成れる神の名は、神直毘神。次に大直毘神。次に伊豆能賣神。次に水の底に滌ぐ時に、成れる神の名は、底津綿上津見神。次に底筒之男命。中に滌ぐ時に、成れる神の名は、中津綿上津見神。次に中筒之男命。水の上に滌ぐ時に、成れる神の名は、上津綿上津見神。次に上筒之男命。此の三柱の綿津見神は、阿曇連等の祖神と以ち伊都久神なり。故、阿曇連等は、其の綿津見神の子、宇都志日金拆命の子孫なり。其の底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命の三柱の神は、墨江の三前の大神なり。是に左の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、月讀命。次に御鼻を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、建速須佐之男命。

右の件の八十禍津日神以下、速須佐之男命以前の十四柱の神は、御身を滌ぐに因りて生れるかみなり。(倉野憲司校注『日本古典文学大系 1 古事記』 岩波書店 昭和 33 年 によって引用した。)

体を水に洗い清める意味から、禊は体のそそぎや、水のそそぎとも、いろいろ解釈されている。『古事記』に出るこの話は禊の始まりと言われるが、亡くなった妻、妹伊邪那美命を黄泉の国まで探しに行った伊邪那伎命がこの世に帰る時に、穢れを祓うために、禊をする場面である。すなわち、伊邪那伎命は禊を通して、黄泉の国から、現世界に戻ったのである。これは、なんか死の世界から生の世界までの再びの戻りが禊を通してできたようにみられる。すなわち、穢れを祓うと同時に、水の禊は、再生、復活を実現させたのである。こういう古代からの水についての認識はまた、日本人の

水による再生、復活、若返り、すなわち「若水」の信仰を誕生させたかも知れない。

『万葉集』にみると、若水の歌は実に多く歌われている。

娘子の、佐伯宿祢赤麻呂に報贈せし歌一首

我が手元まかむと思はむますらをはをち水求め白髪生ひにたり（巻四・六二七）

（佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集』新日本古典文学大系1 岩波書店一九九九年五月二十日）

娘子が佐伯宿祢赤麻呂に答えて贈った歌で、「私の手枕をしようと思うますらおなら、若返りの水を求めて来てください。ますらおたる者に白髪が生えていますよ。」という内容である。<sup>注2</sup> その答歌として、

佐伯宿祢赤麻呂の和せし歌一首

白髪生ふることは思はずをち水はかにもかくにも求めて行かむ（巻四・六二八）

と書き、白い髪のごとは気にしないけれども、若返りの水は必ず求めて差し上げるといふ。

外にも、

天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月読の 持てるをち水 い取り来て 君に奉りて をち得てしかも（巻第十三・三二四五）

反歌

天なるや日月のごとく我が思へる君が日に異に老ゆらく惜しも（巻第十三・三二四六）

美濃国の多芸の行宮にして、大伴宿祢東人の作りし歌一首

古ゆ人の言ひ来る老人のをつといふ水そ名に負ふ滝の瀬（巻六・一〇三四）

大伴宿祢三依の、離れてまた相歎びし歌一首

我妹子は常世の国に住みけらし昔見しよりをちましにけり（巻四・六五〇）

この歌は、我妻は、常世の国に住んでいたように、以前より若返ったというふうにもよく解釈されるが、この歌からも見られるように、常世の国は、日本人にとってずっと昔から、海の彼方にある不老不死の世界として認識され、常世の変若水は、蘇生や若返りの力のある水として認識されたことと言えるのではないか。

病を癒し、若返らせる若水の話は、『続日本紀』にも見られる。

『続日本紀』 元正天皇 養老元年 八月

甲戌（七日）、従五位下多治比真人広足を美濃國に遣して、行宮を造らし

む。

養老元年 九月

丁未（十一日）、天皇、美濃国に行幸したまふ。

丙辰（二十日）、當耆郡に幸し、多度山の美泉<sup>注3</sup>

養老元年 十一月

癸丑（十七日）、天皇、軒に臨みて、詔して曰はく、「朕今年九月を以て、美濃國不破行宮に到る。留連すること數日なり。因て當耆郡多度山の美泉を覽て、自ら手面を盥ひしに、皮膚滑らかなるが如し。亦、痛き処を洗ひしに、除き愈えずといふこと無し。朕が躬に在りては、甚だその驗有りき。また、就きて飲み浴る者、或は白髮黒に反り、或は頰髮更に生ひ、或は闇き目明らかなるが如し。自餘の痼疾、咸く皆平愈せり。昔聞かく、「後漢の光武の時に、醴泉出でたり。これを飲みし者は、痼疾皆愈へたり」ときく。符瑞書に曰はく、「醴泉は美泉なり。以て老いを養ふべし。蓋し水の精なり」といふ。寔に惟みるに、美泉は即ち大瑞に合へり。朕。庸虚なりと雖も、何ぞ天の呪に違はむ。天下に大赦して、靈龜三年を改めて、養老元年とすべし」とのたまふ。天下の老人八十已上に、位一階を授く。孝子・順孫・義夫・節婦は、その門閭に表して、身を終ふるまで事勿からしむ。（青木和夫・稲岡耕二・笹山春夫・白藤禮幸校注『新日本古典文学大系 13 続日本紀』二 岩波書店 一九九〇年九月二十七日）

元正天皇は、翌年にも美濃國の泉に行幸し、天平十二年（740）十一、聖武天皇も美濃國當伎郡に行幸していると書いている。

元正天皇が美濃国へ行幸したころ、耆郡多度山の美泉を見て、その水は、飲むと、病を直し、若返る力があると言っている。元正天皇はこれを「大瑞」と考え、年号をも「養老」と改めたという話である。ここで養老の泉は肌を滑らかにし、痛いところを洗い直す、若返らせる力があると書いてある。

前文に既に書いたが、この養老の滝についての歌はまた「古ゆ人の言ひ来る老人のをつといふ水そ名に負ふ滝の瀬（卷六・一〇三四）」と、『万葉集』にも既に出ている。上記からも見られるように、日本で水の呪力といえは、それは、穢れを祓い、若返り（蘇生）、癒しなどが挙げられ、またこれらは水による禊の行為が伴うのである。これについて、折口信夫は極めて的確にまとめてある。

常世の若水について折口信夫は次のように解釈している。

禊祓の話は、此処にはあづかる事として、貴人誕生の産湯は、誰も考へるやうに禊ぎに過ぎないが併し、その水は単なる禊ぎの為の水ではなく、

或時期を限り、ある土地から、此土により来るものと看做された。即、其水の来る本の国は、常世国であり、時は初春、及び臨時の慶事の直前であつた。海岸・川・井、しかも特定された井に湧くのである。其水を用ゐて沐浴すると、人はすべて始めに戻るのである。此を古語で變若（ヲツ）と云ふ。其水を又變若水（ヲチミヅ）と称する。貴人誕生に壬生の汲んでとりあげる水は、即、常世の又變若水（ヲチミヅ）であつたのだ。中世以後、由来不明ながら、年中行事に若水の式が知られてゐる。此は古代には、特定の井に常世の水が湧き、其を汲んで飲み、禊ぐと若返るものと考へてゐた為の名である。<sup>注4</sup>

## 二、日本における水の女

日本の水の女神をいうと、まず泣澤女神が挙げられる。

中西進は美濃国の泉の記録よりもっと古い神話の世界にも生命の泉の話が登場すると述べている。それは泣沢女の誕生にみられると言っている。

<sup>注5</sup>

『古事記』神々の生成のところをみると、

故爾に伊邪那岐命詔りたまひしく、「愛しき我が那邇妹の命を、子の一つ木に易へつるかも。」と謂りたまひて、乃ち御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて哭きし時、御涙に成れる神は、香山の畝の木の本に坐して、泣澤女神と名づく。故、其の神避りし伊邪那美神は、出雲國と伯伎國との堺の比婆の山に葬りき。(倉野憲司校注『日本古典文学大系1古事記』岩波書店 昭和33年)

泣沢神社はイザナギがイザナミの死を悲しんで流した涙から生まれた女神泣沢女（ナキサワメ）を祀る。埴安の池のほとりの泉を女神と考え、生命復活の神とされると言われている。これについて、中西進は「実はナキサワ女の神は、大和の香具山のふもとに祭られている。その神殿は泉をおおって建てられている。つまり泉を神体とする女神なのだ。場所も、昔、埴安の池があつたそば、ナキサワというから、昔は水が音を立てて溢れ出る泉だったのであろう。こうならばナキサワの泉こそ、古代日本人の生命の泉だったと考えるしかない。」と述べている。<sup>注6</sup>

泣沢女は香具山から流れ出す水の聖水信仰を背負った女神であつた。聖水には「月夜見の持てる変若水」(『万葉集』卷第十三・三二四五)とあるように、再生復活の呪力が存在すると考えられたのだ(居駒永幸「ディアナの鏡—東西の水の女神をめぐる」『人文科学論集』2000、3)。ここからも、この泣沢女神は、水の神であると同時に、再生、復活を司る神であることが分かる。

日本神話の中の代表的な水の女神として、また、彌都波能賣神（みつはのめのかみ）が挙げられる。

『古事記』では彌都波能賣神（みつはのめのかみ）、『日本書紀』では閻罔象（くらみつは）、或いは水神罔象女（みづのかみみつはのめ）とある。

『古事記』の神産みの段をみると、速秋津日子神と妹速秋津比賣神は、山の神、大山上津見神、野の神、鹿屋野比賣神を生み、大山津見の神と野椎の二柱の神は、山野のことを扱いながら、生んだ神の中に、尿からできた神が、彌都波能賣の神なのである。

原文を見ると、

此の速秋津日子、速秋津比賣の二はしらの神、河海に因りて持ち別けて、生める神の名は、（中略）

次に山の神、名は大山津見神を生み、次の野の神、鹿屋野比賣神を生みき。亦の名は野椎神と謂ふ。

此の大山津見神、野椎神の二はしらの神、山野に因りて持ち別けて、生める神の名は、（中略）次に尿に成れる神の名は、彌都波能賣神、次に和久産巢日神。とある。（『古事記』日本文学大系1 岩波書店 昭和三十三年六月五日 五十九～六十一頁）

注のところをおみると、水つ走（ハ）、又は水つ早（ハ）の意か。灌漑用の水を走らせる女神の意であろう。書紀には「水神罔象女」とある。罔象は水の精。とある。<sup>注7</sup>

即ち、水神罔象女は神名の「ミヅハ」を「水走」と解して灌漑のための引き水を司ることになり、水の女神であり、ことに、灌漑の水を管理する水の女神なのである。

水の女神また、水を司り、禊祓えを助ける。それは、祓戸四神の中の、瀬織津比咩（セオリツヒメ）、速開都比咩（ハヤアキツヒメ）、速佐須良比咩（ハヤサスラヒメ）が挙げられる。これらの神は葦原中国のすべての罪、穢れを祓い去り、「大祓詞」をみると、神の神名と役割が記録されている。

原文をみると、

延喜式卷八 神祇八 祝詞 六月晦大祓 十二月准レ之

ノコルツミ ハ アラ ジ ト ハラヒ タマ ヒ キヨノ タマフ コト ヲ タカ  
遺 罪 波 不 在 止。 祓 給 比 清 給 事 乎。 高

ヤマノ スエ ミジカ ヤマ ノ スエ ヨ リ サ ク ナ ダ リ ニ オチ  
山 末 短 山 之 末 與 理。 佐 久 那 太 理 爾。 落

タ ギ ツ ハヤ カハ ノ セニ マ ス セ オリ ツ ヒ メ ト  
 多 支 都 速 川 能 瀬 坐 須。 瀬 織 津 比 咩 止  
 イフ カミ オホ ウミノ ハラ ニ モチ イデ ナ ム カ ク モチ イデ  
 云 神。 大 海 原 爾 持 出 奈 武。 如 此 持 出  
 イナ バ アラ シホ ノ シホ ノ ハ ホ ギ ノ ヤ シホ ギ ノ シホ  
 往 波。 荒 鹽 之 鹽 乃 八 百 道 乃。 八 鹽 道 之 鹽  
 ノ ヤ ホ アヒ ニマ ス ハヤ アキ ツ ヒ メ ト イフ カミ モチ  
 乃 八 百 會 爾座 須。 速 開 都 比 咩 止 云 神。 持  
 カ カ カ ノミ テ ム カ し ク カ カ ノミ テ バ イ ブキ  
 可 可 否 吞 氏 武。 如 此 久 可 可 吞 氏 波。 氣 吹  
 ドニ マ ス イ ブキ ド ヌシ ト イフ カミ ネノ クニ ソコ ノ クニ  
 戸 坐 須。 氣 吹 戸 主 止 云 神。 根 國 底 之 國  
 ニ イ ブキ ハナチ テ ム カ し ク イ ブキ ハナチ テ バ ネノ  
 爾。 氣 吹 放 氏 牟。 如 此 久 氣 吹 放 氏 波。 根  
 クニ ソコ ノ クニ ニ マス ハヤ サ ス ラ ヒ メ ト イフ カミ  
 國 底 之 國 爾 坐。 速 佐 須 良 比 咩 登 云 神。  
 モチ サ ス ラ ヒ ウシナヒ テ ム カ し ク ウシナヒ テ バ  
 持 佐 須 良 比 失 氏 牟。 如 此 久 失 氏 波。  
 スメ ラ ガ ミカ ド ニ ツカサ マツ ル ツカサ ズカサ ノヒト ドモ ツ  
 天 皇 我 朝 廷 爾 仕 奉 留。 官 官 人 等 乎  
 ハジメ テ てん シタ ヨ モ ニ ハ ケ フ ヨリ ハジメ テ ツミ ト  
 始 氏。 天 下 四 方 爾 波。 自 今 日 始 氏 罪 止  
 イ フ ツミ ハ アラ ジ ト タカ マノ ハラ ニ ミミ フリ タチ キク  
 云 布 罪 波 不 在 止。 高 天 原 爾 耳 振 立 聞

モノ ト ウマ ヒキ タチ テ  
 物 止。 馬 牽 立 氏。(『大祓詞後釋』本居宣長全集第七卷 筑摩  
 書房 昭和四十六年四月三十日) とある。

原文から分かるように、瀬織津比咩は、いろいろな禍事、罪、穢れを河から海へ流し、速開都比咩は、海の底で待ち構えていていろいろな禍事、罪、穢れを飲み込む。また、速佐須良比咩は大海原の底に居て持ち込まれたいろいろの禍事、罪、穢れを消し去る。即ち、水の女神は禊祓えを助ける存在で、禍事、罪、穢れを流す存在であった。

また、神神の娘、龍宮の女である豊玉毘賣（とよたまびめ）も水の女であった。豊玉毘賣は海神の綿津見神の娘である。火遠理命と結婚し、鵜茅不合葺命を生む。『古事記』をみると、火遠理命は兄の鉤りをなくし、鹽椎

神の教えに従って綿津見神の宮殿に行く。豊玉毘賣と出会い、結婚することにまでいくが、原文をみてみよう。

故、教の随に少し行きまししに、備さにその言の如くなりしかば、即ちその香木に登りて坐しき。爾に海神の女、豊玉毘賣の従婢、玉器を持ちて水を酌まむとする時に、井に光有りき。仰ぎ見れば、麗しき壮夫有りき。甚異奇しと以為ひき。

爾に火遠理命、その婢を見て、水を得まく欲しと乞ひたまひき。婢乃ち水を酌みて、玉器に入れて貢進りき。爾に水を飲まさずて、御頸の璵を解きて口に含みて、其の玉器に唾き入れたまひき。ここにその璵、器に著きて、婢璵を得離たず。故、璵著ける任に豊玉毘賣命に進りき。爾に其の璵を見て、婢に問ひて曰ひしく、「若し人、門の外に有りや。」といへば、答へて曰ひしく、「人有りて、我が井の上の香木の上に坐す。甚麗しき壮夫ぞ。我が王に益して甚貴し。故、其の人水を乞はす故に、水を奉れば、水を飲まさずて、此の璵を唾き入れたまひき。これ得離たず。故、入れし任に將ち来て獻りぬ。」といひき。爾に豊玉毘賣命、奇しと思ひて、出で見て、乃ち見感でて、目合して、その父に白ししく、「吾が門に麗しき人有り。」とまをしき。爾に海神、自ら出で見て、「此の人は、天津日高の御子、虚空津日高ぞ。」と云ひて、即ち内に率て入りて、美智の皮の疊八重を敷き、亦繩疊八重を其の上に敷き、其の上に坐せて、百取の机代の物を具へ、御饗為て、即ちその女豊玉毘賣を婚せしめき。故、三年に至るまでその國に住みたまひき。(『古事記』日本文学大系1 岩波書店)

豊玉毘賣は龍宮の女として、火遠理命を他界に受け入れ、また、火遠理命の難を解決してくれたのである。

また、日本の水の女は入水する女として、水、水神への生け贄になった。その代表的な人物が弟橘比賣命(おとたちばなひめのみこと)である。

弟橘媛(おとたちばなひめ)は、日本武尊の後である。『古事記』では弟橘比賣命(おとたちばなひめのみこと)、『日本書紀』では弟橘媛(おとたちばなひめ)、穗積氏忍山宿禰の女(ほづみのうちのおしやまのすくね)などと呼ばれている。『古事記』と『日本書紀』に弟橘媛の入水のこと書かれている。

『日本書紀』卷第七 尊の東征に同行し、走水の海に至った時の段をみてみよう。

海を望りて高言して曰はく、「是小き海のみ。立跳にも渡りつべし」との



たまふ。乃ち海中に至りて、暴風忽に起こりて、王船漂蕩ひて、え渡らず。時に王に従ひまつる妾有り。弟橘媛と曰ふ。穂積氏忍山宿禰の女なり。王に啓して曰さく、「今風起き浪溢くして、王船没まむとす。是必に海神の心なり。願はくは賤しき妾が身を、王の命に贖くて海に入らむ」とまうす。言訖りて、乃ち瀾を披けて入りぬ。暴風即ち止みぬ。船、岸に著くこと得たり。故、時人、其の海を號けて、馳水と曰ふ。(中略)時に日本武尊、毎に弟橘媛を顧びたまふ情有します。故、碓

日嶺に登りて、東南を望りて三たび歎きて曰はく、「吾孀はや」とのたまふ。孀、此をば菟摩(つま)と云ふ。故因りて山の東の諸國を號けて、吾孀國と曰ふ。(『日本書紀』岩波書店 三〇四～三〇五頁)

『古事記』にみると、

其れより入り幸でまして、走水の海を渡りたまひし時、その渡の神浪を興して、船を廻らして得進み渡りたまはざりき。爾に其の後、名は弟橘比賣命白したまひしく、「妾、御子に易りて海の中に入らむ。御子は遣さえし政を遂げて覆奏したまふべし。」とまをして、海に入りたまはむとする時に、菅疊八重、皮疊八重、繩疊八重を波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。是に其の暴浪自ら伏ぎて、御船得進みき。爾に其の後歌ひたまひしく、

さねさし 相武の小野に 焼ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君は  
もとうたひたまひき。故、七日の後、その後の御櫛海邊に依りき。乃ち其の櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。

(倉野憲司・武田雄吉校注『古事記』日本古典文学大系1 岩波書店 昭和三十三年六月五日 二一五頁)

倭建命が走水の海を渡ろうとした時、渡りの神が波を起こし、船が進めないで、倭建命の後一弟橘比賣命白が代わりに海へ入って、水神を祭ることである。弟橘比賣の入水で、海神への人身供犠が完成でき、弟橘比賣命は海上の平安を守ってくれる神になったのである。これは、また、入水する日本の水の女の始まりであるとも言われている。

## 注

注1：中西進著『中西進著作集 15 ひらがなでよめばわかる日本語』四季

社 平成二十三年 326 頁

注 2：佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集』新日本古典文学大系 1 岩波書店一九九九年五月二十日三百七十九～三百八十頁。

注 3：青木和夫・稲岡耕二・笹山春夫・白藤禮幸校注『新日本古典文学大系 13 続日本紀』二 岩波書店 一九九〇年九月二十七日の注によると、當耆（たぎ）は滝の古語。現在の岐阜県養老郡・海津郡の諸町と大垣市の一部。多度山の美泉は：現在の岐阜県養老郡老町にある「養老ノ滝」と推定される。とある。

注 4：折口信夫「貴種誕生と産湯の信仰と」『折口信夫全集』第二巻 古代研究中央文庫 昭和五十年十月 一四三頁

注 5：中西進著『中西進著作集 4 キリストと大国主；「謎に迫る」古代史講座；現代文明と古代 四季社 二〇〇七年七月 p109

注 6：中西進前掲書 p109~110

注 7：倉野憲司校注『日本古典文学大系 1 古事記』 岩波書店 昭和 33 年

#### 第四節 日、中における水の呪力と水の女の比較研究

##### 一、日、中における水の呪力と水の女の比較研究

日、中両国とも水から万物が誕生し、水を豊饒をもたらす存在として認識してきた。既に述べたが、中国では、雨水から百谷が生いであり、日本でも、水は豊饒をもたらす存在であった。

また、両国とも水は不老、長寿もしくは若返りの呪力を持っている。そして、病を癒し、穢れを祓う力があつた。無論、これらの水の呪力は、たいてい禊（祓え）を通して、表現されたのである。

しかし、水の呪力は両国において、類似性を見せつつ、また、相違性を見せている。中国の水が生殖、男女の愛とかかわり、出産、誕生を助ける呪力を持っているのに対して、日本に於ける水の呪力には、出産、誕生と直接かかわる水（もしくは水神）の用例があまり見えない。中国に数多くの女人国の話があるのに対して、日本には女人国の話は全然見えないのである。

また、両国の水の呪力とかかわる水の女を比較してみよう。

共通なところとして、日、中とも入水する水の女があつた。中国では、漢水女神の延娟延娛二人は昭王の南征する時、王と一緒に入水死し、水の神

になり、舜の妃である湘君と湘夫人は、蒼梧で舜が死んだ後、二妃は湘江で死に、死後二人は水神として復活したのである。また、伏羲氏の娘である洛神は、洛河に落ちて死んだあと、天帝に洛水の女神に封じられた水の女神になった。入水することで、女は死ぬことになるのではなく、再び水神として復活したが、これは実際水の生命力をもらい、新しく蘇った結果である。そして、日本の入水する最初の水の女と言われる弟橘比賣命は水神への生け贄として、入水し、海上の平安を守った。無論、中国にも水神供犠として、入水、或いは投水する例もあるが、本研究の中心課題になれないので、ここでは詳しく扱わない。また、日本においても、弟橘比賣をはじめ、平家滅亡の日の二位の尼の入水もあり、二人の男に求愛され、入水する多くの入水譚の中の乙女たちもある。入水する乙女について、岩下均は、「入水するオトメたちは、共通して、俗界の男（人間）との結婚を拒否するが、それは「神の嫁」として聖水をもって「禊」をし、また、神に「禊」をすすめる巫女、折口信夫の言う「水の女」であったからである。」と述べている<sup>注1</sup>。しかし、入水する女の中には、水神の嫁、生け贄として入水するのもあり、神に禊をすすめる巫女として入水するのもあり、また、水の生命力、或いは水の彼方にある他界の存在を信じ、水への入水が死ぬことではなく、新しく蘇るということで入水するのもあると考える。

また、日本において、水の女は禍事、罪、穢れを流す、即ち禊祓えを助ける呪力があり、また、蘇生、復活を助ける力がある。これに対して、中国では水の女は水による子授けや水（或いは水神）から子を授かったり、水での禊で子を授かる神話、伝説が圧倒的に多い。

水の禊の力も無論、水の生命力、豊饒をもたらし力があるからであるが、水の呪力にほぼ同じ信仰を持っているのに対して、日本の水の女は直接水、水神から子を授かったり、出産、誕生とかかわる水の呪力はないように見える。果たして、日本には出産、誕生を助ける水の呪力がないのか。答えは無論否定である。しかし、たしか、日本の神話、伝説の中で水神、或いは水から直接子を授かる水の女の例はみえなかった。しかし、既に『古事記』の禊祓えの部分には水が生命を誕生させる力があるのを暗示している。

『日本書紀』にも出るこの話では、妹伊邪那美命を追いかけて黄泉の国まで行った伊邪那伎命が穢れを洗い清めるために禊をし、そこから神々が誕生する話である。一々羅列はしないが、述べてみると、身に着ける物を脱ぐことに従って、衝立船戸神を含め十二柱の神が誕生し、中流で身を清める時、禍を直そうとする時、水の底や水の中、表面、身を清める時、左右

の目、鼻を洗うと神々が誕生したのである。

水での禊を通して、穢れのみでなく、神々の誕生もあったという記述は、男女交合ではなく、水と接して（或いは浴びたりして）、（神の）誕生ができたということを証明しているのである。中西進も水には生命を誕生させる、神秘的な呪性・呪力を持っていると述べている。「亡くなった伊邪那美命の後を追いかけていった伊邪那岐命が、黄泉国から帰ってきた。そこで穢れを洗おうとして、橘の小門の阿波岐原で禊祓をした。そこで生まれたのが、三貴子、すなわち天照大御神・月読命・建速須佐之男命だった。

しかし、それに先立って、海の神である住吉の三神をはじめ、たくさんの神々が生まれている。ここで禊祓をしたことを、従来は水による浄化だと考えてきた。しかし禊というの「水注ぎ」で、水を注ぐことによって清らかになっただけではないだろう。その結果、神々が生まれているのだから、単に黄泉の国の穢が落ちただけではない。その次に神が生まれているということは、水が穢を祓って、さらに、そこで次の神を生む力を持っているのだと考えないと理解できないはずである。

ここで述べた住吉の三神、すなわち上筒之男神、中筒之男命、底筒之男命は水の神だから、穢が水を注ぐことによって、水の神になったわけである。水が水の神を生んでいる。

以上の例から明らかなように、水は生命を誕生させる、神秘的な呪性・呪力を持っているのであった。」<sup>注2</sup>

禊から神々が誕生するのみではなく、日本各地で、彌都波能賣神や水分神などが神社で治水に関する神徳だけでなく、安産・子授けで祭られている。これは、上代の神話には、水神と人間の女性の直接的な交合を通して子が生まれる例はないのであるが、古くから、民間では、水神を出産、誕生を助ける或いは直接関与する存在として認識してきたといえる。水を通して、出産、誕生ができるという認識の淵源は、既に記紀の禊祓えを通して、神々が誕生することから窺えると考ええる。

ところで、一例ではあるが、『日本霊異記』をみると、水神と女性との直接的な交合はないが、雷神から子を授かる水の女の話が出てくる。

『日本霊異記』上巻第三話

雷の憲を得て子を生ましめる強き力在る縁第三

昔敏達天皇（是れ磐余訳語田宮に国食しし淳名倉太玉敷命なり）の御世に、尾張国阿育知那郡片菴里に、一の農夫有り。田を作り水を引く時に少細に雨降る。故に木の本に隠れ、金杖をつきて立つ。時に雷

鳴る。すなはち恐れ驚き、金杖を撃げて立つ。すなはち雷彼の人の前に墮つ。雷小子に成りて随ひ伏す。其の金杖を持ちて撞むとする時に、雷言はく「我れを害すことなかれ。我れ汝の恩を報いむ」といふ。其の人問ひて言はく「汝何に報いむ」といふ。雷答へて言はく「汝に寄りて子を胎ましめて報いむ。故に我が為に楠の船を作りて水を入れ、竹の葉を浮べて賜へ」といふ。すなはち雷の言の如く作り備へて与ふ。時に雷言はく「近く依ることなかれ」といひて遠く避けしむ。すなはち靨り霧ひて天に登る。然うして後に産るる児の頭に蛇を纏ふこと二遍、首と尾とを後に垂れて生る。(後略)(出雲路修校注、『新日本古典文学大系 30 日本霊異記』(岩波書店、1996年)による。本論の引用は同書。)

これは、昔尾張国の農夫が小雨が降っている日に、雷が落ちてきたのをみて、金杖で突こうとするが、雷小子が殺さないと子供を授けるといふ。その雷神の話のとおり、楠木の水槽を作り、水と竹の葉を入れると、霧を起し、周囲を曇らせて天に登っていき、後に子供が生まれた。子供の頭には蛇が二巻まきついているし、首・尾が後頭部まで垂れ下がっていたという内容である。

ここで、注目すべきところは以下の各点である。一つはこれは雨降る日に雷神が落ちてきて水を利用して、子を授ける条件である。そして、生まれた子は蛇の特徴をも持ち、特別な様子をもっていて普通の子供ではないということが分かる。ことに、「児の頭に蛇を纏ふこと二遍」ということは、蛇が古くから水神、中でも細長い形から雷神に考えられてきた点もあり、この授かった子は、雷神の子と考えるのもできると思う。

そして、後略したが、この授かった子は、十歳ごろ、もう力持ちの王に勝てる力持ちになり、後に元興寺の童子となり、鬼をつかまり、鋭い方法で田に水を引き入れたりする。後また、出家し、道場法師になるがこれらはみな、水神から授かった子が非凡であり、中国の水神から授かった子も後に特異な力をもったり、王になったりする場合と共通する。

『今昔物語集』の巻第十二「越後国神融成人、縛雷起塔語第一」の話では、神融成人に縛られた雷童がお寺に水を与えると約束して、水を得て天に昇ることが載っている。そして、その時「彼ノ巖ノ穴ヨリ清キ水湧キ出ヅ」とあるが、これも雷神の水神的性格を示し、昔神功皇后摂政前紀に、雷神が岩を裂いて水を通した例が見えると言っている<sup>注3</sup>。この越後神融合

の話からも、雷神は従来水神の性格をもち、日本人たちに水神の性格を持っていると認識されたということが分かる。濃い水神の性格をもっている雷神の子を授かる事例は、実は、水神の出産、誕生を助ける霊力の現われを説明している。

風神から子を授かる例もある。

風の神の出産、誕生を助ける霊力は、沖縄地方の昔話の伝承からも窺える。

風の子 風の（原題・箕島（むいんずま）の話、梗概）

箕島は女だけが生まれる島で、子供を生むときには、北風が吹くとき屋根の上に登って尻を高く上げて四つん這にしていると、風の子をはらむ。（後略）（稲田浩二・小澤俊夫編集 『日本昔話通観 第26巻 沖縄』1983年7月 株式会社同朋舎出版による。）

この昔話のモチーフは、『日本昔話通観』で「T524 風による妊娠」と分類されているが、正に、風神による女の妊娠の話なのである。話のパターンも、中国の女のみの女人国の女たちが、風や水を浴びて、孕む用例とまったく同じである。男なしに風に接し、子が授かることになるのである。

また、出産、誕生を助ける水の呪力とかかわる水の女の例は昔話でよく見られる。寅千代丸の話のみてみよう。

昔話を研究する際、正統な日本神話には、出産、誕生の力を持っている水の霊力（そして、水神と人間の女性との交合を通して孕ませるなど）について、直接的な記述はあまりみえないが、意外に民間伝承の中には、水神と女の交合や水神直接子を授かる例が多いということを見つけた。無論昔話の一つの話でも往々各地に其の類話があるので、いろんな話型の比較、分析が必要であるが、ここで簡単に例をあげてみると、「たにし息子」、「蛇婿入り」などいろいろある。今後研究したいと考えるが、ここで、まず、類話の少ない「寅千代丸」の話のみてみよう。

この昔話の梗概をみると、

夫婦に子供ができないので神社で三年三月の願かけをする。打ちとめの

夜に神様が「何しに来たか」と聞くので、「子供の顔を見たい」と答える。お告げのとおり井戸水をくんで、塩を入れて夫婦で浴びると、妻は妊娠する。三年三月腹の中にいて子供が生まれると母親は神社へ行き、「寅千代丸」という名をもらう。十七、八になって寅千代丸は修業に出、溜め池の辺りで、乞食から殿様の一人娘の結婚条件を聞き、神様の助けで初めの求婚者テストにうまく通過し、その後、また殿様のほかの様々なテストもうまく通過して、最終には殿様の美しい一人娘から家屋敷、財産、兵隊までみな自分のものにすることができた。

(稲田浩二・小沢俊夫編集『寅千代丸－妻求め型 大島郡喜界町の男の語り手の語り 日本昔話通観 第25巻 鹿児島』株式会社朋舎出版 1980年417-418ページによって、引用し、まとめた。)

ここで、詳しい結婚テストの過程は省略するが、もっとも注目すべき点はまず寅千代丸の誕生の過程なのである。神に祈ったら、井戸水を汲んで浴びたら、子を孕む。これは、正に出産、誕生の霊力のある水－井戸水を浴びて、水の霊力で孕ませた例なのである。そして、生まれた子が池の辺りで人間の助けをもらい、非凡な知恵で殿様の娘を嫁にしたのは、授かった子が水と縁があり、非凡な力をもっていたということがみられる。これは、水神から授かった子が、ほぼ非凡な力を持ったり、一句国の王になったりする中国の用例のパターンと同じである。

寅千代丸の話は、他にも誕生の過程が水と縁のある類話がある。例えば、「寅千代丸－後生行き型」に分類される<sup>注4</sup>大島知名町の話でも、国一番の分限者が子を授かろうとお寺の坊主の言うとおりに、「三股さいた黄金を与え、たらいの水の中に入れて屋根にすえておくと」、夜に黄金が音をたて、妻が懐妊し、男子が生まれるという話もあるが、もっとも典型的な例として、「寅千代丸－妻求め型 大島郡喜界町」の話をあげたのである<sup>注5</sup>。

上記挙げた昔話のほかにも、いろいろ出産、誕生とかかわる水や水神の伝承があるが、それらは今後の研究で続けて論じたい。

日本での出産、誕生と水をめぐる伝承は、上代の禊からはじまり、水、水神、雷神、風神まで、伝承がみえ、其の流れは中国と共通するところがありながらも、独自の特徴がみられる。例えば、日本の神話では直接女と交合し、子を授ける水神や水の話はなく、それらは民間の伝承でむしろよくみえる。この背景には、「みずほのくに」という言葉ができるほど、水に対する日本人独特の畏敬のこともあると考える。

他にも、日本の神社をみると、水神は昔から既に、豊饒、安産の神徳で

祭られてきた。例として、まず、子守神社に祭られている水分神をみたら、雨乞い、田の神と同時に、子供の神、安産・子授けの神としても祭られている。また、『古事記』では彌都波能賣神、『日本書紀』では、水神罔象女とも言われ、水の女神であり、灌漑（かんがい）を司る神でもある。この神は、農業に関する神社の摂社・末社に祀られていることが多いが、祈雨・止雨・治水・子宝・安産等で祭られている。

農業と関連のある神社に祭られると同時に、子宝・安産等でも祭られていることは、水神は治水の存在のみではなく、出産、誕生を守ってくれる認識が既に存在したということが分かる。そして、その出産、誕生を助ける力は、豊饒をもってくれる水神の役割から発生したとも考えられよう。日本での出産、誕生とかかわる水の霊力の伝承を本節で簡単に述べたが、第二章で引き続き、「瓜子姫」や「桃太郎」を中心に、出産、誕生とかかわる水の呪力、水の女の伝承を探る。

## 二、日本における水の女の系譜研究

前にも少し触れたが、折口信夫は「水の女」<sup>注6</sup>という論で、古代日本における「水の女」について、古代詞章の上の意味から始まり、水の女の伝承を辿り、後日の水の女研究の根拠と基礎をつくった。水の女は水を司り、水の呪力をほどこす存在として折口信夫の論文に描かれている。それ以降、先行する研究者たちの水の女についての研究はほぼ折口信夫の「水の女」を元にして、踏襲されてきた。その系譜に属し注している先行研究を探ってみると、次のような研究論文がある。

東郷克美『高野聖』の水中夢（国文学ノート 1975）

永藤靖「熊野信仰と物語の祖型——再生の水の女神たち」1-10 明治大学人文科学研究所紀要 / 明治大学人文科学研究所 [編]一九八一年

中田武司「物語文学の系譜——水の女」『新国学の視点』桜楓社一九九三年三月二十五日

松田修「水の女の系譜——天皇家の水の呪法の女たち」『異形者の力』青玄社一九九四年二月

石上 七鞆「よみもの みぬま・みつは——折口学「水の女」論」季刊河川レビュー 32(1), 46-53 (2003) 新公論社、「よみもの みぬま・みつは——折口学「水の女」論（承前）（沈滞から浮揚げへ…北海道）」季刊河川レビュー 32(2), 70-73 (2003) 新公論社

岩下均「聖なる水の力」「河川レビュー」33(3), 108-113 (2004) 新公論



社

西村享「「水の女」を読む」国文学：解釈と鑑賞 72(12), 10-17 (2007-12)  
至文堂

これらの水の女に関する系譜研究はみな禊を助け、穢れを祓い、再生、癒しの呪力を施す水の女を扱っている。しかし、前にも言ったように、日本にも、出産、誕生をめぐる水の呪力とかかわる水の女は存在し、それはまた、水による禊の行為と深くかかわっているのも中国の用例からも窺える。これらの問題は第二章、第三章で引き続き述べる。

## 注

注1:岩下均「聖なる水の力」「河川レビュー」33(3)、新公論社108-113 (2004)

注2：中西進著『中西進著作集3 神話力—日本神話を創造するもの』  
四季社 平成十九年五月三十日 213 ページ

注3：池上洵一校注『新日本古典文学大系 35 今昔物語集三』102 ページ  
岩波書店 1993 年

注4：稲田浩二・小沢俊夫編集『寅千代丸—後生行き型 大島知名町の男の語り手の語り 日本昔話通観 第25巻 鹿児島』415-416 ページ株式会社朋舎出版 1980 年

注5：稲田浩二・小沢俊夫編集『寅千代丸—妻求め型 大島郡喜界町の男の語り手の語り 日本昔話通観 第25巻 鹿児島』株式会社朋舎出版 1980 年による話型分類に依った。

注6：折口信夫「水の女」『折口信夫全集第二巻古代研究(民俗学篇1)』中央公論社 1975 年

## 参考文献

柳田国男『雷神信仰の變遷—母の神と子の神 柳田国男全集十八』63-67 ページ

宮里 立士『龍田大社--五穀豊穰と天下泰平を願い神告に基づいて造営 (歴史読本特集 王権の神社--古代 22 社の神々)-- (検証 二十二社のすべて)』48(10), 102-105 (2003-10) 新人物往来社

川口謙二編著『日本の神様読み解き事典』 柏書房株式会社 1999 年

## 第二章 日本の御伽噺における水の呪力と水の女の伝承

本章では日本御伽噺「瓜子姫」、「桃太郎」、「たにし息子」を研究対象として、日本の御伽噺における水の呪力と水の女の伝承を探る。これらを以て、日本における水の女は再生、治癒の水の力のみではなく、出産、誕生を助ける水の呪力ともかかわっていることを証明し、水の女、洗濯する女の伝承を探った。

### 第一節 日本の御伽噺における水の呪力と水の女の伝承—其の一、「瓜子姫」について—

昔話「瓜子姫」は瓜姫、瓜子織姫、瓜子姫子、瓜姫子と天の邪鬼などいろいろな題で日本各地にその類話が分布しており、主人公の誕生や生死などにおいて、いろんなバリエーションをもって分けられている。「瓜子姫」についての研究は、瓜子姫と天の邪鬼の地域分布や姫の死に関して集中し、水の女、洗濯の伝承とかかわる研究はあまり行われていなかった。しかし、物語の中の瓜を採る場所や洗濯する老嫗のイメージは、東アジアにおける水の女の伝承、出産、誕生の水の霊力と深くかかわっていると筆者は考える。

本論では、「瓜子姫」を手掛かりに、東アジアにおける水の女の伝承、殊に洗濯する水辺の女の意味とその淵源について辿りたい。具体的には、「瓜子姫」の分布と発端を検討しつつ、その中の水辺の女、洗濯する水の女の伝承を把握し、中国や朝鮮半島の水辺の女のイメージとの比較対照を通して、その淵源には、豊饒をもたらす水の力があることを究明したい。

#### 一、「瓜子姫」の研究史

さて、本論に入る前に、瓜子姫についての先行研究を辿ってみると、概ね以下の三つに分類することができる。

一つ目は、瓜子姫と海内海外の神話や民話との比較研究である。

瓜子姫が「姉と妹」タイプの変形であると分析した稲田浩二の研究があり<sup>注1</sup>、

瓜子姫説話とハイヌウェレ型農耕起源神話とのかかわりで分析した吉田敦彦、猪野史子らの研究もある。<sup>注2</sup>

剣特弘子や関敬吾は、瓜子姫とイタリアの『三つのオレンジ』が同系である述べている。剣特は瓜子姫が殺される話と殺されない話各自の分布図をつくり、殺され方に地域的特徴が見られると述べている。西南地方に多い幸福な結婚にいたる「瓜子姫」はヨーロッパ型の幸福を指向する「三つのオレンジ」に近い構造をもっていると言っている。<sup>注3</sup> 関敬吾は、瓜子姫は派生昔話であって、＜三つのシトロン＞の亜型であり、＜白い嫁黒い嫁＞との複合形であると分析している。<sup>注4</sup>

二つ目は、瓜子姫と天邪鬼の関係についての研究である。

五来重は「天邪鬼と瓜子姫」では、山神（鬼）を奉ずる山民と水神（瓜または瓜子姫）を奉ずる農耕民または水辺民の葛藤が背景にあると述べている。<sup>注5</sup> 荒川理恵は、瓜子姫と天邪鬼とを二人の機織女であると指摘し、<sup>注6</sup> 機織り、ススキなどをめぐって、瓜子姫説話には焼畑文化複合を見せていると分析した。<sup>注7</sup>

三つ目は、主に分布図を作成して、話型の地域的分布に論じたものである。

福田晃は、瓜子姫の生死をめぐって、瓜子姫が天邪鬼に殺される東北型と天邪鬼が退治された後、瓜子姫は救われる西南型に分けられると述べ、これによって昔話瓜子姫の分布図を作成した。<sup>注8</sup> 大島建彦は、物語の発端と結末（即ち瓜子姫が死ぬか死なないか）により分布図を作り<sup>注9</sup>、剣特弘子は、瓜子姫の殺される場合と殺されない場合の分布図を作った上で、またそれぞれの具体的なモチーフの分析をした。<sup>注10</sup> 丸谷仁美は、大島・福田・剣特の従来の「瓜子姫」の分布図を挙げ、それぞれの特徴について検討し、主に天邪鬼に視点をおき、瓜子姫と天邪鬼の死、植物が赤くなるなどの項目で分布図を作りながら、瓜子姫と天邪鬼の地域差について考察した。<sup>注11</sup>

三浦佑之は、図表で殺される瓜子姫と殺されない瓜子姫の分布を示し、「瓜子姫の死」において、東北型が西南型より古い形を残していると言っている。<sup>注12</sup>

この他に、瓜子姫の一部の地域的研究を行った野村敬子<sup>注13</sup>、藤井倫明の研究<sup>注14</sup>と「瓜子姫」には成女式の通過儀礼が反映されていると論じた関敬吾の分析<sup>注15</sup>があった。

ところで、周知の通り、昔話「瓜子姫」は、発端が大きく二つに分かれ、

爺が畑からとった瓜から生まれるものと、婆が川へ洗濯に行き、流れてきた瓜から生まれるものがあるが、これまでの研究では一貫して本格的に扱った論考はなかった。

しかし、上記にも言ったように、つとに柳田國男は、日本には、人間の少女を母にする霊力が、川上の高いところにあるものと信じる痕跡があり、桃太郎の桃も瓜子姫の瓜も、川上から流れてくるのが本来の要件であると述べている。<sup>注16</sup>

大島建彦も柳田と同じく、やはり川から流れ下るものが、全国に普及して、本来の要件であったと言っている。<sup>注17</sup> 大島建彦は、話の発端を①川から瓜が流れ下るもの。②畑から瓜をとってくるもの。③そのどちらとも決めかねるものの三種に分け、結末を①瓜姫がしあわせに生きながらえるもの②瓜姫がむごたらしく死んでしまうもの③そのどちらとも決めかねるものに分け、全277話の類話を取り上げ、分布図を作成した。

また、昔話「瓜子姫」の類話の発端には、常に、婆が川へ「洗濯」に行って、瓜を入手するバリエーションが見える。山崎祐子は、従来、日本で洗濯ということは、衣服を洗う意味のみでなく、本来信仰的性格が強く、水辺で沐浴し、衣服を清浄にして宗教行事に参加するというのが本義であったと言っている。<sup>注18</sup>

鎌田久子も、洗濯について、「洗濯の対象となるものは衣服・寝具・家具などがあり、その価値を知ることによって頻々に行われるようになったのであろうが、本来は信仰的色彩が強い。すなわち、神を祀るための潔斎がそれである」と述べている。<sup>注19</sup>

総じて言うと、山崎祐子と鎌田久子の研究では、洗濯には衣服を洗うのみではなく、水辺で沐浴することをも含み、神を祀るための清潔活動にもなると言っている。「瓜子姫」にも、洗濯する伝承がみえるが、洗濯が「瓜子姫」では、どんな意味で伝承されたか、日本における、延いては、東アジアにおける洗濯する女はどんな意味をもっているのか、探求してみたい。

## 二、「瓜子姫」の版本研究と物語の流れ

瓜から生まれた瓜子姫の昔話は、ほぼ日本全国にわたって分布しており、また、それは、絵巻物としてお伽草子にも入っている。「瓜子姫」を研究する際、絵巻物としての物語の流れと伝承についての考察と口頭伝承としての昔話の分布についての考察を結合させるのは欠かせない研究の一環であ

ると考える。

文献に記載された瓜子姫としては、初期の研究によると、最も古いものとして、江戸初期書写の完本の絵巻（大友圭堂氏蔵）が挙げたが<sup>注 20</sup>、その後、梅津次郎の研究によって、室町中末期の瓜子姫絵巻の断簡が紹介、分析された。<sup>注 21</sup> 梅津によると、この断簡も近ごろまでは屏風に貼られていた形跡が認められるのであるが、もとは絵巻物であって、制作年代も室町中末期のものであると指摘した。そして、この絵巻の断簡は、大友圭堂氏蔵本と同系の伝本であると言っている。

古典文庫『未刊中世小説』三、『室町物語大成』第二、古典文庫『神道物語集』、日本古典文学全集『御伽草子集』などに、大友圭堂氏蔵本の翻刻があり、梅津次郎「瓜子姫絵巻」『絵巻物残欠の譜』（角川書店 昭和四十五年一月二十日）に瓜子姫絵巻断簡の絵の影印版と翻刻がある。益田勝美はこの絵巻について、戦後書肆一声堂が入手し、藤沢家の蔵するところとなったと述べた。<sup>注 22</sup> 益田は大友圭堂蔵本を「大友本」、絵巻の断簡を「藤沢本」と称したので、以下で区別をするために、氏に従い、大友本と藤沢本を付けることにする。

絵巻物として、大友圭堂氏蔵本と梅津次郎氏の紹介した断簡しか存在していなかったとみられたが、最近、石川透によって、瓜子姫奈良絵の断簡が紹介された。（石川透「『瓜子姫』奈良絵解題・影印」「三田國文」(52)、慶應義塾大学国文学研究室(2010-12-00) 49-51)

この他にも、柳亭種彦の『昔話きちちゃんとなん』、『嬉遊笑覧』巻九などにも、瓜子姫が言及されているが、古いものとして、現在では、以上の三件が挙げられる。

以下、三件の具体的な状況をみると、もっとも早い時期に成立したと推定される「瓜子姫絵巻の断簡」（藤沢本）からみる。

成立時期：室町中末期<sup>注 23</sup>

縦十八・四センチ

詞書三段、絵五段で八枚の断片

詞一、の大意は、昔、神代から人の世になったばかりの頃、一人の子も無かった爺と婆は子のないことを悲しんでいた。瓜を栽培していたが、ある日、翁は瓜畑に行き、世に（以下欠）。

絵一、瓜畑から翁が、瓜一つを右手に捧げ、川向こうの婆に見せるところ（「いつくしきうりのあるをうばにミせん」と「なむあみたふつへ」書

入がある。

詞二、爺と婆は、このことはとにかく嬉しいことであり、天から承った子であると。昔から（以下欠）。

絵二、左には婆と姫が並んで坐り、姫は文を読んでいる。「あらうれしや文よませたまへ」と「ひめきミ」と書入。（ほかにも書入があるが、あらすじをまとめるのに、影響ないと思い、省略した。）

絵三、屋内にいる姫に花の枝をもったあまのさぐめが話しかけるところ。

絵四、あまのさぐめが姫をかついで木の方へ行く。姫になり替わったあまのさぐめが屋内に坐っている。

絵五、あまのさぐめをのせた手輿の行列がゆく、騎馬の男一人が大きい炬火をふりかざし、花の木の上に姫君を発見し、姫君をおろすために男一人が木に登るところ。

詞三、あまのさぐめは殺され、その血で薄、刈萱のもと赤くなり、花の出はじめも色づくことになった。

次に、「瓜子姫」大友圭堂氏蔵本をみてみよう。

詞書七段、絵五段の完本

絵巻、一軸。土佐絵風なり。近世初期（寛永ゴロ）のものらし。<sup>注 24</sup>

装幀、やゝ薄手の鳥の子紙で、下絵に、金泥にて、霞、草木などを描く。

竪二九糎。本文用紙の長さは、八米半ある。

表紙、茶と薄緑色の縞模様のある絹地。

本文、竪二五・五糎。字数、一行十五六字位。

画図、五。横山重は、「現在は、五図であるが、元来は六図あつたものらしい。元来の第二図が落ちた。」と指摘した。<sup>注 25</sup>

初めは絵巻の断簡とほぼ同じ内容である。

詞書一、

大和国の石上のあたりに、翁と媪が住んでいた。二人は、長い間、子がなかったことを大変悲しんでいた。ある日、翁は作っていた瓜畑から、世にも美しい瓜を取り、媪に拾い子としようと言い、媪は桶の中に入れて置く。その後、二人は子授けの夢を見、置いておいた瓜を取りだしたところ、美しい姫君になっている。嬉しく思い、大切に育てる。

絵一、老夫婦が塗桶から姫を取り出す場面。

詞書二、この姫君は顔だち、知恵、人柄などこの世に無いほど優れて、評判を聞いた守護代から翁のもとに求婚まできた。何回もきたので、仕方

なく手紙を受け入れた。

絵二、欠

詞書三、昔からすべてのことに妨げや苦しみをもたらす、あまのさぐめが自分が姫君をだまして誘い出し、代わりに守護代の奥方になりたいと思う。姫君は約束の時が近くなり、媼と嫁入りの道具など探したいと思っていたところに、国司から着物を十分入れた長持ちを、たくさん送られた。

絵三、国司から姫のもとに道具を送ってくる場面。

詞書四、翁と媼は出かける時、媼は誰にも戸を開けてはいけないと言う。しかし、あまのさぐめは、美しい花の枝で戸を開けさせ、姫君を遠くの木の上にゆわえつけ、自分は姫君の着物を身に着けて、ものに寄りかかって臥せていた。

絵四、あまのさぐめが姫のもとに訪れる場面。

詞書五、お迎えする日になり、お迎えの人々はあまのさぐめを御輿に乗せて、木の下を通ったところが、手車にあまのさぐめが乗っているという声を聞き、木の上の姫君を見つける。

絵五、嫁迎えの行列が来かかると、木の上に姫がゆわえつけられている場面。

詞書六、あまのさぐめを引き出し、姫君を急いでお乗せし、行ってしまった。

あまのさぐめは殺され、このあまのさぐめの血で薄の根もとは赤く、花の出はじめも赤く、色づくことになったという。姫は末長く栄えた。

絵六、国司夫妻が楽しみ栄える場面。

詞書七、そのうち、若君も生まれた。翁と媼とも栄えた。二人は、若い時から、神に仕えて、神の不思議な力を深く信じていたので、姫君を授かることになったという。<sup>注 26</sup>

次に、瓜子姫奈良絵 石川透本をみてみよう。

時代、[江戸前中期]写

所蔵、石川家所蔵

形態、奈良絵本、断簡三枚

寸法、縦一三・九糎、横二〇・四糎

料紙、斐紙

本文、なし

奥書、なし

絵一、部屋の前に瓜畑があり、翁が両手に瓜を捧げて、婆に渡そうとし

ている。

絵二、天邪鬼が戸の前に立ち、叩いている。

絵三、瓜子姫は木の上に縛られ、恐らく天邪鬼をのせた行列が木の前を通り、騎馬の五人の内、三人の男が花の木の上の瓜子姫を発見し、振り向いてみるところ。<sup>注 27</sup>

以上の三つより少し遅れたが、喜多村筠庭随筆集『嬉遊笑覧』巻九の中にも瓜子姫の物語が載っている。「瓜姫の咄」という項目でのっているが、大意をまとめると、爺は柴刈りに山へ行き、婆は洗濯に河へ行くが、瓜が流れてきたので、拾い、爺に食べさせようと割ったら、姫が出てくる。姫は生まれてから機織りができる。ある日、鳥が機織りをしているのはあまのじやくだと言い、夫婦がみたら、姫はあまのじやくによって縛られている。爺と婆は姫を助け、あまのじやくを薄の葉のところで殺し、薄のものは赤くなったという。<sup>注 28</sup> また、上野泰子の研究によると、柳亭種彦の『きちちゃんとなんたん』にも、紹介はあるが、内容が少し変わっているので、紹介はしないが、その中でも、物語の発端は、洗濯に行った婆が拾った香箱から姫が出たという。<sup>注 29</sup>

文献に記載された「瓜子姫」の流れを理解するため、以上辿ってみたが、総じてみると、もっとも古いものとして、梅津次郎翻刻の絵巻物断簡が挙げられ、その次完本として大友圭堂氏蔵本が挙げられるが、梅津次郎氏の分析通り、絵巻断簡と大友圭堂蔵本は同系であり、物語の粗筋も恐らく同じである。そして、石川透氏の瓜子姫絵巻も三枚だけであるが、その三枚でも内容の大意は前の二件とほぼ類似していることが考えられる。

それは、基本的に次のような形態を示している。

(一) 子の無い爺婆がいる。爺は瓜畑から瓜を取り、その中から瓜姫が生まれる。

(二) 姫は美しく成長し、良縁があった。

(三) 爺と婆のいない時、あまのじやくがやってくる。姫を誘いだまし、木の上に縛りつける。自分が姫の代わりに嫁に行くが見つかる。

ここまでは、三つの絵巻の内容の中で共通し、明確にある内容である。しかし、既に気づいたように、これは『嬉遊笑覧』や昔話の中での「瓜子姫」と比べると、ことにその発端がずいぶん異なっていることが分かる。婆が洗濯に川へ行き、流れて来る瓜から生まれるものと、爺が瓜畑からとった瓜から生まれるものは、その差異点の原因を探ってみると極めて興味



深い研究になる。ただし、口頭伝承の昔話から絵巻物に伝承されたのは、否定できないことであるので<sup>注 30</sup>、昔話「瓜子姫」についての分析を主として、昔話の伝承より着目して、研究を進めるべきであるとする。

### 三、東アジアにおける瓜の霊力

日本の昔話「瓜子姫」は文献的には室町中期頃まで推定され、昔話としてその口頭伝承はすでにその前からはじまったのである。日本全国各地にその類話が分布されており、そのほとんどは畑から取った瓜から瓜子姫が生まれるのと、川へ洗濯に行った婆が拾った瓜から瓜子姫が生まれることになっている。「瓜子姫」の中で瓜はどういう役割をしているのか。

本稿は日本、中国、朝鮮半島に於ける瓜、ことに瓜の生殖力を中心にして、古代からの瓜の伝承を辿り、具体的に瓜のイメージを取り出し、「瓜子姫」の中の瓜は、東アジア全体に共通している瓜の力についての伝承の結果だということを述べたい。

#### ① 先行研究と問題提起

前述したように、日本の昔話「瓜子姫」はもっとも早い文献的記録として室町期まで遡れ、全国各地にその類話が分布されている。その中で瓜から生まれる瓜子姫というのは類話の中で一つの基本的なモチーフとなっている。ここでの瓜の子授け、生殖力がみられるのは言うまでもない。すると、こういう瓜の霊力の伝承はいつから、どこからはじまったのであろうか。東茂美は万葉集の中の「瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして 偲はゆ」について、作者の山上憶良の度唐した経歴と中国で瓜は婚儀と子孕みに大きく関わり、この歌は山上憶良が中国基礎文化と接触し、受容した表現であると述べている<sup>注 31</sup>。

また、中国の羅宏杰は瓜ことに瓢箪の生殖的意味について考察した<sup>注 32</sup>。そして、熊谷治は朝鮮半島における匏瓜即ちパカチの祈禱・祓禳とかかわる霊力の、信仰の由来などを紹介している<sup>注 33</sup>。そして、筆者の考察によると、朝鮮半島の洗濯する女の伝承には、「瓜子姫」と同様に、瓜がよく登場している<sup>注 34</sup>。したがって、「瓜子姫」の中の瓜の正体を究明するためには、中国や朝鮮半島に於ける瓜の伝承を具体的に辿ってみる必要があると考える。東アジア全般における瓜の力の伝承を明らかにしたい。

#### ② 中国における瓜の話

古代から瓜は生殖力、多産などと係わっていた。中国での瓜に関する詞

をみると、

《詩經・大雅・緜》では、「緜緜瓜瓞，民之初生，自土沮漆。」と書いてあるが、ここで「瓜瓞」は子孫が繁栄、広がることを指すのである。また、「瓜熟蒂落」は普通、瓜は熟れれば蒂から落ちるということで、その比喻として、条件が熟せば自然に成功すると理解されているが、もとは胎児が成熟したら、自然に出産するというふうに通じたこともあった。

「瓜期」は、女子の嫁入りする時を言う。(罗竹风主编，汉语大词典编辑委员会，汉语大词典编纂处编纂『漢語大詞典第八卷』，汉语大词典出版社2001年9月により、訳した。)

「瓜之初分」は、昔文人たちが「瓜」という字を二つの八になり、十六になると思い、特に女性の十六を指した。

また、中国語の中で「破瓜」は、処女が性交を経て婦人になることを意味するのである。

詞のみでなく、中国の古い儀式の中でも、瓢箪に対する生殖達成の願望が見られる。彝族には古い「破瓠成親」(瓢箪を破って結婚)の儀式がある。それは、結婚の日、新郎が花嫁をめとり、家に入る時、屋上で待っている成人の男或いは婦人が灶の灰が一杯入っている瓢箪を捨てると、灰が一杯になり、新人は灰霧の中で瓢箪を破片を踏みつつ、家に入る<sup>注35</sup>。

前述したように、「破瓜」について、羅宏杰も指摘したが、ここで「瓜」は明らかに女性の生殖器をさすのである。また、「合巹之親」をみても、詳しく《礼記・昏義》にあるが、夫婦二人は各自半分の瓢箪で酒を飲むが、これは夫婦が性交することを意味するのである。これについて羅宏杰は、瓢箪の男根を象徴する意義から解釈すべきだと述べている。瓢箪は女性生殖器の象徴であると同時に男根を象徴すると指摘した<sup>注36</sup>。羅はその理由を以下の三点から述べた。一つは、瓢箪の一部の種類はその形が男根に形的に似ている。二つは、人間が男根の生殖的役割を認識した時、瓢箪のようにその「種」が多く且つ生命力に富むことを願った。三つは、父系氏族社会が成立し、男性の社会地位が高くなり、生殖の中でも、男性の主導的な地位が確立でき、もとの母系氏族中女性の生殖器を象徴する瓢箪に男根を象徴する意義を付けたという。

多産や男根などの意味が付けられた瓜は、中国の民間で子授けを願う習俗とかかわっている。

『中華全国風俗志』をみると、

贵州之中秋节，有一种特别之风俗，为各省所无者，则偷瓜送子是也。

偷瓜以晚上行之，偷之时，故意使被偷之人知道，以讨其怒骂，而且愈骂之利（厉）害愈妙。将瓜偷来之后，穿之以衣服，绘以眉目，装成小儿之状，乘以竹舆，用锣鼓送至于无子之妇人家。受瓜之人，须请送瓜之人食一顿月饼，然后将瓜放在床上，伴睡一夜。次日清晨，将瓜煮而食之，以谓自此可以怀孕也。とある。

貴州の中秋祭りでは、瓜を盗んで子を送るという習慣がある。瓜は夜中に盗むが、瓜盗みをする時、わざと盗まれる人に知られるようにし、ののしられることをもとめる。罵りが酷ければ酷いほどいいと思われる。瓜を盗んだ後、衣服を着させ、眉毛と目を描き、子供の様子を付けさせて、竹橋に乗せて、銅鑼と太鼓を鳴りながら、子のない婦人の家にする。もらった婦人は瓜を送った人に月餅を食べさせた後、瓜をベッドに置き、瓜と一緒に一晩寝る。翌朝、瓜を煮てから食べると、孕むことができるそうである。（胡朴安 編著『挿図本中華全国風俗志』上海科学技術文献出版社 2008年 8月 p658 により、訳した。）このような習慣は中国の南地方によく見られる。

この他にも、安徽省の蕪湖では、めったにない「真清明」（清明の日がちょうど旧暦の三月三日にかさなる）の日に、子供のない夫婦が煮えたかぼちゃを同時に箸を上げて食べる習俗があり、なるべく全部食べてしまう。これは靈験あらたかな方法だと言われる。

江西省では、中秋の日に瓜を食べて子授けを願う。

江蘇省北部の淮安などの地方の瓜を送る日は旧暦正月十五日の元宵節以後、二月二日の竜抬頭以前と定められている。送る対象は子供のない年配の人、或いは結婚してから長くたっても子供のない者である<sup>注37</sup>。

上記の例から分かるように、瓜は、その形即ち、外観が長い蔓が繋がりに、その上のたくさんの瓜が実り、多産の意味が付けられ、婚儀、子授けとかかわっており、女性の象徴から男根の象徴になったということが分かる。外に、『大漢和辞典』をみると、「瓜蔓水」は、陰暦五月の黄河の水を指すが、ここから瓜と水との関連も見られる。

### ③ 朝鮮半島における瓜の話

中国と同じく朝鮮半島の神話、伝説の中でも、瓜は生殖、子授けなどと関連している。また、「과년 瓜年」は女性の結婚適齢期（青山秀夫・熊木勉編著『朝鮮語漢字語辞典』平成十一年十月二〇日 大学書材 九十八頁）と思われ、此れも瓜という字を二つの八に考え、女性の十六歳になるということの意味している。

子供を生むことができた大人になった意味になったのであろう。したがって、「瓜」には、熟する、成熟する意味も含まれている。そして、神話、伝説の中では古代から瓜の生殖力に関する例話があった。

例えば、新羅末期の有名な僧侶であり、風水師でもある道詵の誕生説話に、瓜が登場する。

『世宗實録地理志』の例をみてみよう。

靈異郡人諺傳高麗時人崔氏園中有一瓜長尺餘一家頗異之崔氏女潛摘食之歆然有娠彌月生子其父母責以無人道而生兒置之竹林居數七日女往視之鳩來覆翼之告于父母往見異之撫養及長髮為僧名道詵入唐傳一行全禪師地理之法而還九踏山觀水多有神驗後名其地曰鳩林又曰飛鷲按崔惟清撰光陽玉龍寺碑以詵母為姜氏此則稱崔氏未知孰是（『世宗實録地理志』四八七頁 韓國學文獻研究所『全國地理志』韓國地理誌叢書 亞細亞文化社 一九八三年二月一〇日 四八七頁 全羅道）

大意は、高麗の時、崔氏の園中に一尺も越える大きな瓜がなったが、これを珍しいと思った崔氏の娘が瓜を食べ、子を孕む。竹林の中に捨てても、鳩たちが覆うので、また、育てるが、子は大きくなり、有名な僧侶道詵になるという話である。同じ記録は、『世宗實録地理志』を参考に編纂した『新增東國輿地勝覽』にも出てくる。

『新增東國輿地勝覽』卷三十五 靈 古跡 崔氏園

在郡西十五里諺傳新羅人崔氏園中有瓜長尺餘一家頗異之崔氏女潛摘食之歆然有娠彌月生子其父母惡其無人道而生置之竹林居數七日女往視之鳩鷲來覆翼之還告于父母父母往見異之取而養之及長髮為僧名道詵入唐傳一行全禪師地理之法而還九踏山觀水多有神驗後名其地曰鳩林又曰飛鷲按崔惟清撰光陽玉龍寺碑以詵母為姜氏此則稱崔氏未知孰是（『新增東國輿地勝覽』신중동국여지승람:국역古典國譯叢書민족문화추진위원회一九六九年）とある。内容は同じなので、翻訳はしない。

道詵國師の誕生譚は『旬五志』にもある。

『旬五志』に、

道詵國師

道詵國師靈巖人母未嫁時冬月浣濯於山下川流忽有青瓜一枚從流而下女喜之即喫之因有娠而生其家以為不祥棄之於林下羣鳩來覆翼之其家異之而遂収之是為道詵其後人名其里曰鳩林也世傳道詵入唐傳得一行術學見淨林記

とある。

(『旬五志』原本影印 韓國古典叢書(復元版)Ⅳ. 散文類古代評論・隨筆選 三七九頁大提閣 一九七五年五月三十日)

『世宗實實地理志』が初出であるこの話は、道誥の母が、まだ嫁にも行っていない頃、冬のある日、川へ洗濯にいったところ、流れてくる瓜を食べ、孕んだ。家族は不吉なことだと思い、林の中に捨てたが、鳩たちが翼で覆うのを見て、不思議だと思い、育てる。後日、道誥は唐まで行き、術学を伝えたということになるが、ここでも、瓜を食べて孕むが、それは冬、洗濯に行ったころ、発生したことである。

この道誥國師の誕生譚はもっとも代表的であり、「瓜子姫」の類話のように、各地に分布している。

また、無学大師の誕生譚も洗濯する女、瓜と直接かかわっている。例を挙げると、

忠清南道 保寧郡 대천읍 설화 35

오이 먹고 잉태된 무학대사

우리나라에 전설 루시누구던 지다아이에 오르는 무학대사 얘기. 무학대사에 어머니는 본래 양반 집 딸 루서시녀 들허구 빨래를 허러 내 갈루가 다 가시녀 들은 다 아도 망하구 혼자만 익게 되는데. 오이 하나가 떠내러와. 물외 하나가 떠내러와서 그 물외를 집어서 먹었더니 결국 이그 것이 얘기가 됐어. 잉태했는데. 시집을 간 첫 날 밤에 얘기를 낳더라 이게여.

후략(後略)

(韓國精神文化研究室語文研究室編纂『韓國口碑文學大系』4-4<忠清南道保寧郡篇>高麗苑 一九八三年九月三十日)

大意をみると、無学大師の母は、両班の家の娘であったが、ある日、侍女たちと川へ洗濯に行くことになったが、侍女たちがみんな逃げ去り、一人になった時、胡瓜が流れてきたので、拾い、食べたらずむことになったという話である。

次は、黎勇士の母が洗濯に行った時、瓜のような大きい卵が流れてきて、置いておいたら、中から男の子が生まれた説話である。

黎勇士

世傳穢國一村嫗澣衣於溪水有一卵浮來其大如  
瓠村嫗異之取置其室俄而一男子破殼而出形貌  
非常村嫗因養之年 六七身長八尺顔面黎異仍  
以黎為姓是時國中有一惡白虎白晝橫行傷人甚多

一國憂之莫有制者勇士忿然曰吾必殺此獸以除生靈之害也聞者不信俄有一 如雷陰風颯至一大斑虎自山而下咆哮磨牙跳躍而進勇士奮躍高出虎上張拳一打虎即碎頭而斃後國君鑄萬鈞鐘置之前欲徙之壯士數千人引之不動勇士一舉而負國君壯而奇之常留之在側以為上客後莫知其所終(『旬五志』原本影印 韓國古典叢書(復元版)Ⅳ. 散文類古代評論·隨筆選 大提閣一九七五年五月三十日 三七二頁)

また、眞覺國師の誕生譚にも瓜を食べて、孕んだ例である。『韓國民間傳説集』の原文は次のようである。

一〇九 車泉의 오이

지금으로부터 8 백년전, 전라남도(全羅南道) 화순(和順) 고을에 배(裴) 씨라고 하는 한이방(吏房)이 살고 있었다고 한다. 그에게는 자식이라고는 딸하나가 있었을 뿐이어서 그들내외는 아들하나가지지 못하는 쓸쓸함을 다만 딸에게서부터 마음의 위로를 받으면서 날이 갈수록 어여빠지는 딸을 보는 것이 그들내외에게는 단하나의 즐거움이 있었다. 그 딸의 나이스무살이 되던 해 겨울, 아침 일찌기 그 처녀는 물동이를 이고 지금의 화순읍 남산(南山) 기슭에 있는 “차천(車泉)”이라는 우물에 물을 길으러 갔었다. 물을 길으려고 보니까 그 우물 위에는 뜻밖에 오이 한 개가 떠 있었다. 몹시 추운 겨울에 때아닌 오이가 있는 것을 이상히 생각하였으나 문득 그 오이가 먹고 싶어서 건져서 먹고 말았다. 그 후 몇 달 되지 않아서 자기 몸이 이상해지는 것을 깨달았다. 처녀의 몸으로서 그러한 일이 있는 것은 기막힌 일이었으나 부끄러워서 누구에게 다 말한 마디 못하고 혼자서 가슴만 태워오던 중, 어느 날 배씨 처녀의 어머니는 자기 딸의 몸이 이상한 것을 보고 깜짝 놀랐다. 이리하여 배이방 내외는 딸과 좋아하는 남자가 있는 줄만 생각하고 문초도 하고 달래기도 하면서 사실을 물어보았으나, 딸은 ‘차천’으로 물을 길으러 갔을 때 오이 한 개가 있기에 집어먹었더니 그 후부터 이상하게도 잉태하였다는 사실을 말하면서 자기 몸의 깨끗함을 맹세하였다.

배씨 처녀는 열달만에 옥동자를 낳았으나 배씨 내외는 딸이 처녀의 몸으로서 아이를 낳았다는 것은 죄악이라고 생각하여 사람들이 볼까 두려워서 판집을 하나 장만해서 거기서 아이를 기르도록 하였다. 그리하여 한보름쯤 지났을 때, 배씨 내외는 그래도 안심할 수가 없어서 밤중에 어린 아이를 읊내서 남쪽으로 약 2 리가량 떨어진 수풀속 큰 정자나무 밑에 갖다 버리고 왔었다.

(후략)

檀紀 4267 年 1 月 和順郡邑內 朴道順氏 談(崔常壽

著『韓國民間傳説集』通文館檀紀四二九一年三月十五日一六五～一六九頁  
誕生の部分だけ抄訳する。

今から八百年前に、全羅南道和順地方には、裴氏の吏房が住んでいた。女の子だけ一人子供がいたが、娘が二十歳の年の冬、朝早く和順南山にある「車泉」という井戸に水汲みに行ったら、その井戸には胡瓜が一つ浮かんでいる。寒い冬に胡瓜があるのをおかしいと思ったが、食べたくて、胡瓜を食べてしまう。何ヵ月後、自分が子を孕んだことに気づいたが誰にも言えない。(後略)

#### ④ 日本における瓜の話

考古学の研究によると、日本国土には縄文時代前期 BC 四千年頃にすでに瓢箪が存在していたようで、古墳時代前期（三～四世紀）にはマクワウリも伝来し、日本への瓜類の伝来、栽培は弥生時代にまで遡れるようである<sup>注38</sup>。

奈良時代には、青瓜、真桑瓜は園地で耕種して進上され、熟瓜、黄瓜などは、当時生菜類ではなく菓類として扱われ、価格も高く使用も上層者の節料理として給されていた<sup>注39</sup>。

考古学によると、井戸祭祀遺物の中に、瓜の種子、桃の核、瓢箪の存在が見つかり、瓜と桃は井神祭祀の折水神に投供されたと紹介している<sup>注40</sup>。

日本における瓜の子授け譚は有名な「瓜子姫」があるほかに、あまり見えないが、『萬葉集』を見ると、

子等を思ひし歌一首

802 瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ いづくより

来たりしものそ まなかひに もとなかかりて 安眠しなさぬ

803 銀も金も玉も何せむに優れる宝子にしかめやも (『萬葉集』一新日本古典文学大系一九九九年五月二十日)

とある。

これについて、東茂美は、山上憶良の渡唐を根拠に、中国の瓜の婚儀、生殖、子授けの基礎文化を受容した歌だと解釈している<sup>注41</sup>。

そして、山形県鶴岡市の性神博物館には、男根を現す瓢箪の彫刻がある。日本には子授けの瓜の例が多くはないが、従来瓜は神秘的な力をもっている存在であった。『今昔物語集』には、幻術の瓜があり、七夕伝説の中では、瓜が天の川になるなど、水とのかかわりもみられる。

#### ⑤ むすび

中国、朝鮮半島、日本の瓜の力の伝承を辿ってみると、瓜の多産、子授

け、水或いは水神とのかかわりは共通していることが分かる。

ところで、朝鮮半島の瓜の子授け譚を見ると、次のような特徴が見られる。一つは、日本の「瓜子姫」のように、類話が各地に分布している。そして、それは多く自然に瓜を畑（庭園）などの自然な成長環境から得るのではなく、多く河へ洗濯に行った処女が流れてきた瓜を得るのである。しかし、これはまた、異なるところもある。授かった子は、瓜子姫のように瓜から生まれるのではなく、処女が食べて、妊娠して子を生むのである。日本の瓜子姫の例話には 543 の内、一例しかなかった。そして、誕生人物は姫ではなく、皆男である。その中には僧侶の人が多し。また、瓜を得た時期は不思議なことに、多く冬である。異同点がいろいろあるが、瓜の生殖力、そして、子授けの能力は明らかである。そして、「瓜子姫」子授け譚の中で、瓜は母体ではなく、子を授かる役割、延いては、女性を孕ませるイメージが強いことが感じられる。「瓜子姫」は口頭伝承として、子供向けの童話の役割もあったので、直接婆を孕ませる代わり、婉曲的に瓜から生まれることになった可能性もあるのである。しかし、中国、朝鮮半島、日本の瓜の呪力を考察して見ると、瓜と水とのかかわり、瓜の水神の性格も否定できない。水神としての瓜と、洗濯する、禊している処女、或いは生産機能を失っている水辺の老嫗が常に、川で洗濯する時、寄りかかってくる瓜によって子を授かるのは、洗濯する、禊することによる水、水神の力が瓜を通して、水辺の洗濯女に投影したのではないか。

#### 四、「瓜子姫」に見られる水の呪力と洗濯する女の伝承

口承話として、「瓜子姫」は沖縄と北海道を除くほぼ日本全国に分布している。

『日本昔話通観』の典型話を例にすると  
例話①

爺は山へ木樵りに行き、婆は川へ洗濯に行った。川で着物を濯いでいる時流れて来た瓜を拾って食べると美味しいので、もう一つ流れてこいと言って大きな瓜を拾って帰り、ひつの中に入れておく。山から爺の帰るのを待って瓜を割ろうとすると、瓜はひとりでに割れ、かわいい姫が生まれ、瓜姫と名づける。姫は大きくなって、機を織るようになる。ある日爺と婆はあまんじゃくが来ても戸を開けてはいけないと言いおいて出かける。すると、あまんじゃくが来て、戸を少しずつ開けさせ、姫を柿もぎに誘い、



自分は木の上で柿を食べ、姫には渋柿をやる。姫がはらをたてると、姫と着物をとりかえ、姫を木に縛り付ける。あまんじゃくが姫の家に戻って機を織っていると、爺と婆が帰ってきてあまんじゃくとは気付かず、姫を嫁にやることになる。柿の木の下を通ると、木の上から姫が、「わしが乗っているかごへ乗ってあまんじゃくが嫁入りするかい」と泣く。姫は救われ、嫁入りし、あまんじゃくは三つに切られて、くまごの根、麦の根、そばの根に埋められたので、それらの根はあまんじゃくの血で今でも赤いのである。(島根県邑智郡大和村宮内 稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第十八巻島根 同朋舎 一九七八年五月一日 一二三～一二五頁を参照し、まとめた。)

#### 例話②

昔爺と婆がいた。或る時、爺が裏の畑へ行ってみると大きい瓜がなっていた。とって帰った爺は、庖丁で切ろうとすると瓜の中から声が出る。その後瓜は割れ、中から姫が生まれた。神様が授けたと思い、「瓜姫子」と名づけ育てると、美しい娘になり、殿様に嫁にほしいと言われた。爺婆は姫の着物を買うために出かける前に、天邪鬼がくるかもしれないので、戸を開けてはいけないと言っておいて出かけた。天邪鬼が来て、姫を脅かし戸を開けさせ、姫を押入れの中へ入れ、自分は姫に化けていた。爺と婆が帰ってくると、着物を着てお嫁に行った。籠にのって行くところ、松の木の上で、鳥が「瓜姫子ア乗る籠さ天邪鬼アのてら、がおら、がおら」と鳴いたので、爺と婆は籠を開けてみたら、天邪鬼がねむっていた。人々は大変に怒り、酷い目に合わせ、帰って捜したら、瓜姫子は押入れの中にいた。それから瓜姫子は殿様の嫁になった。(青森県南津軽郡藤崎町 稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第二巻 青森 同朋舎 一九八二年二月十五日 一一七～一一八頁を参照し、まとめた。)

上の例話をみると、やはり話の発端が違うのが分かる。同じく瓜から生まれるが、一つは婆が川へ洗濯に行き、流れて来た瓜から、もう一つは爺が畑から採った瓜から生まれるのである。瓜と生殖力が深くかかわっているので、話の中に出たのは言うまでも無いが、どうして瓜の入手場所と人物は違うのか。また、柳田國男も大島建彦も川から瓜が流れてくるのが本来の要件であると述べたが、それらを証明するためには、まず全国の採集例をすべて取り上げ、統計してみる必要があると考える。

以下、まず全国の分布状況を一望して「瓜子姫」という話型群の全体的分布を概観し、分類の項目は誕生モチーフを中心にした。即ち、瓜の採つ

た場所を根拠に、統計、分類した。

図表の中で、

合：合計

畑：畑からとったものと植物（瓜、胡瓜、桃、栗、柿など）から直接うまれたもの

洗濯：川で洗濯する時得た瓜から或いは、瓜を食べて妊娠したもの

川：川から流れて来た瓜から生まれたもの

外：外の形の誕生のモチーフ

無：誕生のモチーフ無しというふうに表記した（瓜のとり場がなく、誕生だけある話もここに入れて数えた）。

北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	栃木	群馬	茨城
0	合 17 畑 5 洗濯 5 川 1 外 1 無 7	53 畑 6 洗濯 21 川 10 外 1 無 15	7 畑 4 洗濯 3 川 1 外 1 無	48 畑 3 洗濯 17 川 5 外 3 無 20	50 畑 17 洗濯 9 川 5 外 1 無 18	22 畑 7 洗濯 6 川 2 外 1 無 6	5 畑 1 洗濯 1 川 1 外 1 無 4	21 畑 1 洗濯 13 川 3 外 1 無 4	0
埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野
3	1 畑 1 洗濯 1 川 1 外 1 無 1	0	0	27 畑 4 洗濯 16 川 2 外 1 無 5	3 畑 1 洗濯 1 川 1 外 1 無 2	2 畑 1 洗濯 2 川 1 外 1 無	4 畑 1 洗濯 3 川 1 外 1 無	1 畑 1 洗濯 1 川 1 外 1 無	18 畑 2 洗濯 12 川 2 外 1 無 2
岐阜	静岡	愛知	京都	三重	滋賀	大阪	奈良	和歌山	兵庫

8	0	0	1	0	1	1	0	0	11
畑 洗濯 5 川 1 外 1 無 1			畑 洗濯 1 川 外 無		畑 洗濯 1 川 外 無	畑 洗濯 1 川 外 無			畑 1 洗濯 8 川 外 無 2
鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡
18	64	44	76	3	3	2	4	2	1
畑 洗濯 13 川 2 外 無 3	畑 洗濯 38 川 2 外 1 無 23	畑 洗濯 33 川 1 外 無 10	畑 洗濯 41 川 6 外 4 無 25	畑 洗濯 3 川 外 無	畑 洗濯 2 川 外 無 1	畑 洗濯 1 川 外 無 1	畑 洗濯 1 川 外 無 3	畑 洗濯 2 川 外 無 2	畑 洗濯 1 川 外 無
佐賀	大分	長崎	熊本	宮崎	鹿児島	沖縄	全国 合計		
0	6	6	2	0	8	0	543 話 畑 51 洗濯 277 川 43 外 13 無 159		
	畑 洗濯 5 川 1 外 無	畑 洗濯 4 川 1 外 無 1	畑 洗濯 1 川 外 無 1		畑 洗濯 7 川 外 無 1				

（本研究では、類話を統計、分類するに当たり、以下の資料を参照、使用した。同朋舎刊『日本昔話通観』を中心に、日本放送出版協会刊『日本の昔話』、などの昔話資料集を参考にした。『日本昔話通観』を中心にし、全

国で 543 話の瓜子姫の資料を調べた。)

分布表から見られるように、昔話「瓜姫」は、北海道、茨城、東京、神奈川、静岡、愛知、三重、奈良、和歌山、佐賀、宮崎、沖縄を除いて、全国にわたって分布している。

統計してみると、

合計：543 話

畑からとった植物（瓜、胡瓜、桃、栗、柿など）から直接うまれたもの：51 話

婆が川で洗濯する時得た瓜から或いは、瓜を食べて妊娠したもの：277 話

婆が川から流れて来たもの瓜から生まれたもの：43 話

外の形の誕生のモチーフ：13 話

誕生のモチーフ無し：159 話になっている。

川から流れてくるのが、絶対的に多いことが見られる。婆が川で洗濯する場合と、洗濯の言葉なしにただ河から拾った場合を合わせると、全部で 320 話になり、川から始まるモチーフは絶対的に大部分である。洗濯という言葉が明白にあるのが、277 話で、洗濯する女の伝承が類話の分布で重要な位置にある。そして、畑からとるモチーフの中では、爺と婆、二人とも取りにいったが、誕生のモチーフが川から始まる場合、瓜を拾ったのは、一例除いて全部婆（水辺の女）であり、しかも鹿児島県薩摩郡下甕村手打の話では、婆が洗濯する時、瓜を食べ、妊娠して瓜子姫を生むという。

総じて、「瓜子姫」の誕生モチーフの統計と分析を通して、川から流れてくるのが絶対的な優勢にあり、川で洗濯する女が瓜を得て、子を授かるのは、ただ瓜の生殖力のみではなく、洗濯ということもきわめて重要な要素となり、それは水辺にいる水の女と緊密にかかわっていると見えよう。また、川から来たものが多数ではなくても、これほど誕生のモチーフに川や洗濯が入っているのは、意味のあることである。前にも言ったが、柳田国男は瓜子姫の誕生は異常なものであり、川上から流れてきた瓜（もしくは桃）が川辺の老女の手に渡ることは天から直接高い嶺に降りた精霊が谷水に沿って人界に近寄ろうとしたことを信じた信仰のものであると言っている（「桃太郎の誕生」『定本柳田国男集第八巻』筑摩書房 1962）。確かに、日本の従来神話、伝説を辿ってみると、川は他界への通路として、川上の別世界から訪れる神の信仰についての解釈も通じることである。しかし、柳田国男は、水辺の婆が瓜を拾い、子を授かるのを異界からの神の訪れであると言いつつ、また、是を日本人は川上の高いところに人間の少女を母

にする力があると言っている。一体、この力は何であろう。人間の少女を母にするこの力は水とかかわるのは明らかである。子の無い爺と婆で、婆は既に生産の力がなくなったとも言えるが、突然に水辺で洗濯する時、川上から流れてきた瓜から（あるいは一例ではあるが、食べて、妊娠し、瓜子姫を産む）姫が生まれることは、まさに異常な誕生である。第一章を見ると、中国と日本、ことに中国の神話、伝説をみると、水辺の女が水を浴びたり、水から流れてくるもの（或いは水の中のものと接したり）を食べたり、水辺で水神と出会ったりして、子を授かる例は多くあり、また、日本にも、妊娠、出産を助ける水の呪力があることも証明した。それから、前節の「東アジアにおける瓜の霊力」からも見られるように、瓜は無論生殖力があり、瓜から姫が生まれるのも自然であるが、ことに朝鮮半島の瓜に関する伝説を見ると、常に、結婚してない処女が川辺で洗濯する時、流れてきた瓜を食べ、身ごもり、非凡な人物を産む用例が多いことが分かる。瓜の特性から見ると、畑から採り、食べるのがより自然であるが、何故か朝鮮半島の神話、伝説では、洗濯する水辺の女が瓜によって身ごもるのである。生殖力と深くかかわっている瓜が川を流れ、川辺の処女を孕ませるのは、「瓜子姫」の誕生も実は水の出産、誕生を助ける呪力が水辺の老婆に子を授かった結果物であるとも言えないであろうか。また、洗濯という行為を神を神を祀るための儀式であるとも言われているが、水辺の女が水神、水の呪力を負う存在として、「洗濯」という行為により、水から子を授かったのではないか。朝鮮半島は無論、中国の神話、伝説においても、水辺の洗濯する女はよく水神や水によって身ごもる例が極めて多い。一つ例を挙げてみよう。

『太平廣記』卷第六十一 女仙六 褒女にみると、

褒女者、漢中人也。褒君之後。因以為姓。居漢沔二水之間。幼而好道。冲靜無營。既笄。浣紗于浸水上。雲雨晦冥。若有所感而孕。父母責之。憂患而疾。臨終謂其母曰。死後見葬。願以牛車載送西山之上。言訖而終。父母置之車中。未及駕牛。其車自行。踰沔漢二水。橫流而渡。直上浸口平原山頂。平原即浸口化也。家人追之。但見五雲如蓋。天樂駭空。幢節導從。見女昇天而去。及視車中。空棺而已。邑人立祠祭之。水旱祈禱俱驗。今浸口山頂有雙轍跡猶存。其後陳世安亦於此山得道。白日昇天。出集仙錄

（『太平廣記』第二冊 李昉等編 中華書局 一九六一年九月 三八一頁、本論の『太平廣記』の例は、すべて 李昉等編『太平廣記』中華書局一九六一年九月より引用した。）

大意は、褒女という女が、漢水と沔水の間に住んでいた。十五歳で嫁ぐ時になり、常に浸水において洗濯をしていた。ある日、雲が集まり、雨が降ってきた。彼女は感応し、孕んだ。親は彼女をとがめ、彼女は苦しくて、病気になった。臨終になった時、彼女は「私が死んだ後、埋葬する時、牛車で西山の頂上に送ってください。」と言い、死んだ。村の人は寺社を建てて彼女を祭った。水害や旱があった時、彼女に祈ると効能があった。この外にも、例は多くあるが、洗濯する女については第三章で詳しく扱う。

注意すべきなのは、「瓜子姫」の中で、姫の誕生は主に婆の川辺での洗濯の時、流れてきた瓜から子を授かるのが、極めて大きな比重を占めているのと、水辺、洗濯、水辺の女、子授けの間にどんな関連があるかという点である。これらを究明するために、東アジア全般における洗濯する女、水辺の女の伝承を辿ってみる必要がある。

## 注

注1：稲田浩二「「瓜姫」系譜考」『昔話の源流』一九九七年

注2：吉田敦彦『小き子とハイヌウェレ』みすず書房 1977年、吉田敦彦「瓜子織姫」と芋起源神話の痕跡『縄文土偶の神話学』名著刊行会昭和六十一年四月十一日、猪野史子「瓜子姫の民話と焼畑農耕文化」『現代のエスプリ臨時増刊号・日本人の原点』昭和53・1

注3：剣特弘子「瓜子姫—話型分析及び『三つのオレンジ』との関係」『口承文芸研究』11・昭63 四十五～五十七頁

注4：関敬吾「ヨーロッパ昔話の受容——〈白い嫁黒い嫁〉を例として——」『日本の説話』六 東京美術一九七四年

注5：五来重『鬼むかし——昔話の世界——』角川選書——209 角川書店 平成三年一月二十五日

注6：荒川理恵「二人の機織女：瓜子姫とあまのじゃく」『学習院大学上代文学研究』二九 学習院大学二〇〇三年

注7：荒川理恵「瓜子姫の諸相」吉田敦彦監修『比較神話学の鳥瞰図』大和書房 二〇〇五年十二月

注8：稲田浩二・福田 晃編著『蒜山盆地の昔話』昔話研究資料叢書I 三 弥井書店昭和四十三年四月二〇日 福田 晃は138話の瓜子姫類話により分布図を作成した。

注9：大島建彦「昔話『瓜姫』伝承分布図」『御伽草子集』小学館 昭和四十九年九月三十日 大島建彦は277話を取り上げ、分布図を作成した。

注 10: 剣特弘子前掲書。剣特弘子は 478 話を取り上げ、分布図を作成した。

注 11: 丸谷仁美「昔話「瓜子姫と天邪鬼」の地域比較」常民文化 (17)、成城文学 (1994-03) 115~140 頁 丸谷仁美は、363 話の類話を使い、分布図を作成した。

注 12: 三浦佑之「瓜子姫の死」『東北学』第 1 号、東北芸術工科大学東北文化研究センター一九九九年十月二十日) 統計 429 の採集例で分布表を作った。219-229 頁

注 13: 野村敬子「昔話の伝承と深化—山形県北の瓜姫譚・「胡瓜姫ご」をめぐる」野洲国文学 (73)、国学院大学栃木短期大学国文学会 (2004-03) 25~56 頁

注 14: 藤井倫明は、東北の「瓜子姫」「奥州街道型」について考察した。「東北における瓜子姫」立正大学国語国文 (50)、立正大学国語国文学会 (2011-00-00) 45-55 頁

注 15: 関敬吾『民話』岩波新書 (青版) 202 岩波書店 昭和三十年五月二十日

注 16: 柳田國男「桃太郎の誕生」『定本柳田國男集第八卷』筑摩書房昭和三十七年 二十頁と七十八頁によると、次のような論述がある。

#### 桃と瓜

それから今一つは水上に浮かんで来て、岸に臨む老女の手に達したといふこと、是が又大切な点では無かつたかと思ふ。海から次第に遠ざかつて、山々の間に入って住んだ日本人は、天から直接に高い嶺の上へ、それから更に麓に降りたまふ神々を迎え祭る習はしになつて居た。だから、又谷水の流れに沿うて、人界に近よらうとする精霊を信じたのであつた。

#### 瓜と桃

瓜子姫の昔話は、他の何れのものよりも桃太郎に近く、またその形成も桃太郎より早く且つ、より豊富な異例の分布がある。全部数えて、十一の類の中で、婆が洗濯に行かぬ野は二つしかなく、水の流れを下つて来たといふことが、元は欠くべからざる要件であつたことは、大よそ推定して差支が無からうと思ふ。即ち此緑児は授かつた児であつたのである。

即ち我日本に於ては、人間の少女を母にする異常の力が、特に川上の清く高き処に在るものと、信じられて居たらしき痕跡である。

注 17: 大島前掲書。

注 18: 山崎祐子『日本民俗大辞典 上』福田アジオ 新谷尚紀 湯川洋司 神田より子 中込睦子 渡邊欣雄編集 吉川弘文館一九九九年九月一日

九百五十九頁

注 19：鎌田久子『日本民俗事典』 大塚民俗学会編 弘文堂 昭和四十七年二月十五日 三百九十頁

注 20：市谷貞次 校『未刊中世小説』三「瓜姫物語」の解説には、「本書はさういふ昔話を文献化したものとして極めてめづらしく、かつ恐らく最古の文献に属するであろう。」と、大友圭堂氏蔵の絵巻物を恐らく最古の文献であると述べた。

注 21：梅津次郎 瓜子姫絵巻の断簡「ミュージアム」昭和三十六年八月号

注 22：益田勝美「昔話における近世」益田勝美・松田修編『日本の説話』第五巻 近世 東京美術 昭和五十年六月二十五日

注 23：梅津次郎著「瓜子姫絵巻」『絵巻残欠の譜』角川書店 昭和四十五年一月一〇日の中の翻刻と絵の紹介のところを参照し、引用、まとめた。

注 24：横山重「瓜子姫物語」『神道物語集』古典文庫 昭和五十年六月十日再刊を参照した。

注 25：横山重 前掲書 五五一頁

注 26：内容と絵の紹介において、横山重「瓜子姫物語」『神道物語集』古典文庫 昭和五十年六月十日再刊のほかに、大島建彦「瓜姫物語」『御伽草子集』日本古典文学全集 36 小学館 昭和六十年三月三十日 第十三版をも参照、引用、まとめた。

注 27：石川透の書誌情報と絵の影印についての紹介に従った。詞書などなかったもので、まとめは筆者が絵の影印刷を見、まとめたのである。

注 28：喜多村筠庭「瓜姫の咄」『嬉遊笑覧』三（巻六～巻九）『日本随筆大成』別巻九 吉川弘文館 昭和五十四年四月五日 四五六～四五七頁

注 29：上野泰子「昔話への招待(1)：『瓜姫』の昔話をめぐって」幼児の教育 83(4), 日本幼稚園協会(1984-04-01) 46-52 頁

注 30：『中世王朝物語・御伽草子事典』神田龍身、西沢正史 編 勉誠出版 平成十四年五月一日 七百二十四頁にも、現存本では室町末頃のもの古い、物語の内容自体はそれ以前から口頭で伝承されていた可能性が高い。と言っている。

注 31：東茂美「子等を思ふ歌」と宜子祥」『山上憶良の研究』二〇〇六年十月十日 翰林書房

注 32：羅宏杰「葫芦生殖象徴意義的符号生成」『湖北民族学院学报（哲学社会科学版）』第十九卷第二期 2001 年

注 33：熊谷治「朝鮮半島における匏瓜」『朝鮮学报』 p29-38 (1981-10-00)



朝鮮学会

注 34：拙論「東アジアにおける洗濯する女―「瓜子姫」を手係りに」『水門』25号勉誠出版2013年。

注 35：普珍『中華創世胡芦：彝族破壺成親、魂歸壺天』雲南人民出版社一九九三年八月

注 36：羅宏杰前掲論文。

注 37：以上の例は夏宇繼「中国子授け考」「国際経営論集」10、一九九六年2月神奈川大学 p291～310 頁から引用した。

注 38：元出：安達巖『日本食物文化の起源』自由国民社，1982.2 木村千恵子<研究レポート>「憶良の瓜と栗」「成城国文学」(1)，61-69 成城大学(1985-03-00)より転引した。

注 39：元出：関根真隆『奈良朝食生活の研究』昭和四十四年 吉川弘文館 木村千恵子<研究レポート>「憶良の瓜と栗」「成城国文学」(1)，61-69 成城大学(1985-03-00)より転引した。

注 40：元出：日色四郎『日本上代井の研究』昭和42年 榎原考古研究所、山本博『井戸の研究』綜芸舎昭和四十五年。本論では、木村千恵子<研究レポート>「憶良の瓜と栗」「成城国文学」(1)，61-69 (1985-03-00) 成城大学より、転引した。

注 41：東茂美前掲載書。

注 42：後ろに、「瓜子姫」の地域分布表を附表としてつけておいたが、『日本昔話通観』にごく簡単に紹介され、且つほかの本で原文資料を確認できなかったのは、『日本昔話通観』の中の典型話を参考にして、誕生モチーフなどの項目を作成し、統計に入れたため、多少数値に不確かなところがある。また、地域分布表の中の出典は、原文確認済みの本はもとの出典を表記したが、原文資料を確認できなかったのは、元の出典ではなく、『日本昔話通観』（同朋舎刊）の中の巻数とページ数を表記した。

#### 参考文献：

木村千恵子<研究レポート>「憶良の瓜と栗」「成城国文学」(1)，61-69 (1985-03-00) 成城大学

網野 善彦『瓜と龍蛇―いまは昔 むかしは今 (第1巻)』福音館一九八九年六月三十日

山本博『井戸の研究』綜芸舎昭和四十五年

## 第二節 日本の御伽噺における水の呪力と水の女の伝承—其の二、「桃太郎」について—

昔話「桃太郎」は日本の代表的な昔話であり、その類話はほぼ全国各地に分布しており、主人公の誕生や鬼が島征伐などをめぐっているいろんなバリエーションをもっている。そして、「桃太郎」は文学、神話、民俗、教育などの方面でさまざまな研究が行われたが、「桃太郎」の中でよく登場する洗濯する老嫗についての研究はあまり見えない。主人公の誕生するモチーフによく出てくる洗濯する婆や桃が流れてくる川（水）の力は東アジアにおける洗濯する女、出産、誕生の水の霊力の伝承と深く係わっていると筆者は考える。

本節では、「桃太郎」の中に登場する洗濯する老嫗や桃太郎の誕生モチーフを中心に分析し、洗濯する老嫗の伝承をも探求したい。具体的には、「桃太郎」の分布と発端を検討しつつ、その中の水辺の女、洗濯する水の女の伝承を把握し、中国や朝鮮半島の水辺の女のイメージとの比較対照を通して、その淵源には、豊饒をもたらす水の力があることを究明したい。

### 一、「桃太郎」の研究史

「桃太郎」についての研究はさまざまな方面で行われ、研究著作と論文は五、六百を上回る。文学、神話、民俗、教育などの方面で行われてきたが、上記にも言ったように、洗濯する婆の伝承についての研究はあまり見えない。

石田英一郎は、桃太郎や一寸法師などは、人類太古の大地母神の信仰とかわるものがあると述べている。

日本の小さが、その母神とともに、とくに水辺に出現することの多いのを、世界の大母神が、原始の大女神が母なる大地として、月や死界や龍蛇の類とともに水に結びつき、その豊饒力を水に負うので、太古の大地母神はまた水の神であり、桃太郎のは大地母神である。即ち、地母神と「桃太郎の母」とを同一化している。<sup>注1</sup>

しかし、大地母神として「桃太郎」の中に出る洗濯する婆を定義するの

は、すこし解釈しにくいところがある。また、山崎祐子は、従来、日本で洗濯ということは、衣服を洗う意味のみでなく、本来信仰的性格が強く、水辺で沐浴し、衣服を清浄にして宗教行事に参加するというのが本義であったと言っている。<sup>注2</sup>

鎌田久子も、洗濯について、「洗濯の対象となるものは衣服・寝具・家具などがあり、その価値を知ることによって頻々に行われるようになったのであろうが、本来は信仰的色彩が強い。すなわち、神を祀るための潔斎がそれである」と述べている。<sup>注3</sup>

総じて言うと、山崎祐子と鎌田久子の研究では、洗濯には衣服を洗うのみではなく、水辺で沐浴することをも含み、神を祀るための清潔活動にもなると言っている。「桃太郎」にも、洗濯する伝承がみえるが、洗濯が「桃太郎」では、どんな意味で伝承されたか、日本における、延いては、東アジアにおける洗濯する女はどんな意味をもっているのか、探求してみたい。

## 二、「桃太郎」の版本研究と物語の流れ

「桃太郎」の版本について体系的に紹介したのは、金田芳水<sup>注4</sup>、小久保桃江<sup>注5</sup>、山崎麓<sup>注6</sup>、滑川道夫<sup>注7</sup>らの著書がある。中でも、滑川道夫は金田芳水、小久保桃江、山崎麓らの紹介した「桃太郎」版本に自身の調査を兼ねて、江戸期における「桃太郎」の赤本、黄表紙などの草双紙は八十二点を越えるという。桃太郎の最初の版本は享保八年の豆本だと言われたが<sup>注8</sup>、小久保桃江は「桃太郎の誕生は、せいぜい今から三百年前の延宝のころから元禄をへて享保のころまでの五十年間の間に完成したのではないかということが著書などから考えられる。」と述べている。金田芳水が享保八年刊の豆本『もゝ太郎』を最初の版本、藤田秀素筆『桃太郎』を二番目の版本として紹介しているのに対して、小久保桃江は『桃太郎』（年代は延宝年間か、赤本で著者は未詳）を最初の版本として言い、『桃太郎話』（元禄前か、著者未詳）を二番目に、『桃太郎昔語り』（元禄のころか、赤本で著者未詳）を三番目の版本として、四番目に豆本『もゝ太郎』をおいたのである<sup>注9</sup>。

ところで、調べたところ目前『桃太郎』（延宝年間刊）と『桃太郎話』（元禄前？）は見つからなかったもので、現在はすでに無くなった可能性もあると考える。現在手に入れられた代表的であり、時期的にも管見の限り、もっとも早いものとして、『桃太郎昔語り』と『桃太郎』の内容を概観してみ

よう。

『桃太郎昔語り』<sup>注10</sup>

二冊。十丁。赤本。西村重信画。刊年について、小久保桃江は元禄ころ、滑川道夫は享保のころ、近世文学研究「叢」の会は刊年不明と言っている<sup>注11</sup>。鱗形屋板。安永六年再板。

男の子五人が火鉢を囲んで、その中の一人が語りである。爺は山へ柴刈に行き、婆は川へ洗濯に行く。婆は爺に食べようともう一つ流れてこいと桃を呼ぶ。爺と婆は桃を食べ、若返り、婆は子を孕み生むことになる。爺は桃が子になったといい、桃太郎に名づけた。犬、猿、雉と鬼が島へ行き、鬼を征伐し、宝物を得る。最後の場面では、桃太郎が爺婆の前で打出の小槌で金銀を出している。

『桃太郎』<sup>注12</sup>

赤本。享保ころ刊。藤田秀素筆。稀書複製会から復刻版が出された。代表的な桃太郎話である。爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃を拾い、帰って、爺と食べると、二人は若返り、婆は妊娠して、桃太郎を生む。桃太郎は力持ちになる。爺婆にきび団子を作ってもらい、団子を与え、犬、猿、雉と供になって鬼が島へ行く。鬼を征伐し、たくさんの宝物を得る。

この二つとも、「回春型」に属するが、江戸時代において、こういう「回春型」が文献的に先行し多く行われてきた<sup>注13</sup>。

### 三、東アジアにおける桃の霊力

昔話「桃太郎」は文献的には江戸初期頃まで見つかり、昔話としてその口頭伝承はすでにその前からはじまったと言われている。日本全国各地にその類話が分布されており、そのほとんどは川へ洗濯に行った婆が川上から流れてくる桃を食べ、妊娠し、桃太郎を生むパターンと拾った桃から直接生まれるパターンである。無論、川での洗濯でなく、外のところから桃を得る類話もあるが、話の中で、桃の役割は極めて重要であることは言うまでもない。いったい、「桃太郎」の中で桃はどういう役割をし、こういう桃の力の淵源には何があるのか。

ここでは日本、中国、朝鮮半島に於ける桃、ことに桃の生殖力を中心にして、古代からの桃の伝承を辿り、具体的に桃のイメージを取り出し、「桃太郎」の中の桃は、東アジア全体に共通している桃の力の伝承の結果だということを述べたい。

#### ① 先行研究と問題提起

前述したように、日本の昔話「桃太郎」はもっとも早い文献的記録とし

て江戸初期まで遡れ、全国各地にその類話が分布されている。その中で桃から生まれる桃太郎、或いは桃を食べ、若返った婆と爺が交わり、桃太郎を生むというのは類話の中で一つの基本的なモチーフとなっている。ここで桃の子授け、生殖力がみられるのは言うまでもない。すると、こういう桃の霊力の伝承はいつから、どこからはじまったのであろうか。中国側の桃に関する研究をみると、さまざまあるが、それは桃の栽培史、桃の薬用価値及び桃に関する民間信仰などに分かれている。代表的なものを挙げてみると、羅漫の「桃、桃花与中国文化」<sup>注14</sup>、藩莉の「古籍中的桃意象」<sup>注15</sup>、黄鵬、趙家瑜の「論桃的祈育功能」<sup>注16</sup>、徐暁光の「瓜、桃、竹与人的出生——中国西南少数民族与日本植物崇拜神話比較」<sup>注17</sup>などあるが、これらの研究は桃の歴史、また、桃の魔よけ信仰、生殖力などについて述べた研究である。また、方志娟によると、日本に於ける桃木の信仰は中国文化の影響を深く受け、桃の原産地も中国であり、縄文ごろ桃は中国から日本へ伝わり、弥生時代から日本で広範囲で栽培されたという<sup>注18</sup>。そして、筆者の考察によると、朝鮮半島の子授け譚、洗濯する女の伝承には、「桃太郎」と同様に、桃がよく登場している。これら研究の外に、王秀文は『桃の民俗誌』<sup>注19</sup>の中で、桃の植物文化史、呪力などについて詳しく考察し、中には朝鮮における桃の伝承についても触れているが、桃の生殖力については漏れているので、「桃太郎」の中の桃の正体を究明するためには、中国や朝鮮半島に於ける桃の伝承を具体的に辿ってみる必要があると考える。東アジア全般における桃の霊力を探求してみたい。

## ② 中国における桃の話

従来、中国で桃は霊力のある神秘的な力を持つものであった。『列仙傳』にみると、蜀中の王侯貴族たちは、羊に乗る葛由を追い、緱山に着いたが、山の桃をたくさん食べ、仙人になった話もある。また、『太平御覽』卷九百六十七に引く『神農經』にも、「玉桃服之長生不死」とある。

また、方志娟によると、春秋から魏晋にかけて、「桃」で魔よけをするのは、だんだん民間の習俗になった<sup>注20</sup>という。『史記』五帝本紀註集解海外経には、「東海中有山焉，名曰度索。上有大桃樹，屈蟠三千里。東北有門，名曰鬼門，萬鬼所聚也。天帝使神人守之，一名神荼，一名鬱壘，主閱領萬鬼。若害人之鬼，以葦索縛之，射以桃弧，投虎食也。」とあり、『風俗通義』にも似たような記録がある。「上古之時，有神荼與鬱壘坤弟二人，性能執鬼，度朔山上有桃樹，二人于樹下，簡閱百鬼，無道理，妄為人禍害，神荼與鬱

壘縛以葦索，執以食虎。」とある。また、『荊楚歲時記』には、「正月，貼画鸡戸上，悬苇索于其上，插桃符其傍，百鬼畏之。」とあり、『晋書・礼志・上』には、「岁旦，常设苇艾，桃梗，磔鸡于宫及百寺之门，以镶除恶气。」とある。

藩れいによると、中国で桃は常に男女のことを指している。男性の女運を「桃花運」と言ったり、多情で人の心を引く目つきを「桃花眼」と言ったりするという。これらの淵源には古代からの文化的背景があった。

『詩経』周南 桃夭に見ると、

桃之夭夭 灼灼其華 之子于歸 宜其室家

桃之夭夭 有蕢其实 之子于歸 宜其家室

桃之夭夭 其葉蓁蓁 之子于歸 宜其家人とあるが、これは嫁に行く娘に送る祝福の詩である。第一句では、若い嫁の容貌と美しさを桃の花に比喻し、第二句では、桃の花が咲き、大きい果実が実ることを借りて、結婚後の子孫繁栄を祈っている。（注 16 の論文を参照した）桃の大きい実で、子孫繁栄を祈る子の歌は、桃の生殖力、或いは子授けの力を見せている。

中国の少数民族の民間文化の中でも、桃は子授けの霊力を持っているものであると信仰されてきた。

土家族は、新婚の時、嫁の掛け布団に卵或いは桃を隠し、子を祈る習俗がある<sup>注 21</sup>。また、土家族の「摆手歌」にも、「桃子生人」即ち、桃の子授けの伝説が歌われている。その内容をみると、

讲的是世界上有了奇形怪状的人类以后，接着出现了一无儿女的孤寡老婆婆，她因为没有子女而整天哭泣，女娲神同情她，叫她顺着黄河上行，如果见到黄河流下的八颗仙桃，就捡起来吞入口中。

老婆婆顺着黄河走了 49 天，果然黄河中流下八颗仙桃和一朵仙花，她把仙桃和仙花都吞了，就怀孕了，生下八个儿子（仙桃所化）和一个女儿（仙花），于是世界上才出现了正常的人类。

这八颗桃子所化生的八个兄弟，是喝老虎奶、龙血，吃铁沙长大的。一个个都是“老虎捉来坐到，恶蛇捉来困到，长龙捉来骑到”无人敢抵抗的恶汉。老母亲眼见儿子们好事坏事都做，无人可以降服，于是装病，说要吃虎肺龙肝才能治好。儿子们就上山大虎，入水捉龙，一一办到。老母亲心里就更难过了，最后想到也许只有雷公可以降服他们，于是对儿子们说要吃雷公的心才能把病治好。

兄弟们并没有在意，一起商量捉雷公。玉皇大帝发了怒，命雷公下去劈了

他们。

后略（王孝廉『水与水神』学苑出版社一九九四年 百十二頁によって、引用まとめた。）

最初のところを言ってみると、

世界にいろいろな奇怪な人類たちが出てきた後、子のない一人の婆が子供が居ないので、終日泣いていた。女媧神は老婆を気の毒に思い、黄河に沿って上がり、黄河から流れてくる八つの仙桃が見えたら、拾って飲むように教えた。婆は黄河に沿って四十九日間を歩き、流れてきた八つの仙桃と一朵の仙花を呑み、八人の息子と一人の娘を産んだ。（後略）

徐嘉瑞は一九四四年に「龍母神話」を記録したが、内容は以下のようである。

说一女子吃了一顆桃子而致孕，生一子。丢至山中。此子盜穿龙王衣袍而成龍，与盤踞下关的黑龍鏖戰，打瞎了黑龍的一只眼睛，扭断了一只角，因而改变了洱海水的流向。苍山的兰峰和三阳峰下的白族村寨绿桃村，过去有洱海神祠，人民常禱之。绿桃村神祠中的小龍王，也是治服为害百姓的黑龍而成为本主-水神的。

（元出典は、『白族神話集成』、本論では、王孝廉『水与水神』学苑出版社一九九四年百三十頁より引用した。）

白族の神話では、こういう桃に関する話が伝わっている。

ある女は一個の桃を食べ、孕むことになり、一人の男の子を生んだ。この子は、龍王の長衣を盗み、それを着て黒龍と戦い、黒龍の目を打ち、黒龍の目は一つ見えなくなり、また、一つの角を断ち切り、洱海の流向も変えることになった。白族山村緑桃村は過去に洱海神祠があったが、人々はよく祀った。中の小龍王は、黒龍を打ち勝って、祠の主—水神になったのである。

中国で桃は、古来から長生不老、魔よけ、子授けの靈力を持った果物であったのである。

### ③ 朝鮮半島における桃の話

中国と同じく朝鮮半島の神話、伝説の中でも、桃は長寿、子授けなどと関連している。

朝鮮半島の巫俗信仰では、桃は無限の生命力を持ち、不老長生をもたらすものとして崇拜の対象とされている。その巫俗信仰は、不老長生・健康・幸福の追求を基本的な特性とする巫教からきたもので、天神日月精と靈星、

山河や海、木々や鳥獣など、自然物の崇拝を中心的な内容とする。そのうち、とくに日月・雲・山水・岩・松竹・不老草・鶴・亀・鹿・天桃が長生不死の靈物として仰がれ、神話・詩歌・文学・芸術などの題材となり、伝統的な水墨山水画では「十長生図」として取り上げられる。<sup>注 22</sup>

また、伝説によれば、はるかな昔、朝鮮半島を遠く離れた北の地を治める王に、娑蘇（さそ）という名の一人の娘がいた。天帝の命を受けてこの世に生まれ、靈妙な能力を持っている父の意思によって修練に努めた娑蘇女王は、ある日、ただならぬ靈氣が己の内に入り込んでくるのを感じると同時に身ごもった。その瞬間、彼女は祭壇の上から鳴り響く天の声を聞いた。

「聞け、娘よ。汝が身ごもれる子は貴い聖王である。汝は、はるか離れた東の果てにある国へ行って、産むようにせよ。」

娑蘇女王は、輔佐する忠実な臣下を連れて、日の出る東へ東へと、海を渡り、陸を横切って歩き、また歩いた。穏やかな気候、みずみずしい肥えた土地、さまざまな花が咲き乱れ美しい鳥が歌う山野、魚が泳ぎまわっている海や小川に恵まれた樂園のようなところにたどりついた。ここぞと思い、一行はそこで足を止めて暮らそうと決めたが、娑蘇の住む宮殿をどこに建てるかは、なかなか決められなかった。みんなが迷っていると、一羽の鳶が飛んできて、盆地の西側をせき止めるように高くそびえ立つ山の頂きに案内してくれた。そこは仙桃山であった。

神聖なる仙桃山はふだん、人足を踏み入れることを禁じられていた。つねに霧が薄く立ちこめている山頂に、一口食べれば千年を生き長らえると伝えられる仙桃が多くの実をつけていても、だれ一人として山に入ろうとする者はいなかった。ただ、この山には「神聖なる聖母」が現れたとき、初めて胸を開いて迎えるであろうという言い伝えがあった。その人物が来るまで仙桃山は堅く閉ざされたままになっていたのである。

鳶の導きで、女王がその山裾にたどりつくのと、頂を覆っていた霧があとかたもなく消え失せた。そして、金色に輝く仙桃が陽に映えて、きらきらと輝くようすは、まさに神仙の国を思わせた。仙桃が豊かに実る頂上近くの丘の中央には、こじんまりとした宮城がすでに営まれていた。女王は宮中に産屋を設けて、双子を産んだ。

この双子が、のちに新羅初代の王になった朴赫居世とその后になる閼英であった。人びとは、朴赫居世と閼英を産んだ娑蘇女王を「仙桃聖母」、あるいは鳶（スリ）のかかわりから「西述（ソスル）聖母」と呼び、きわめ



て高い神格に比して崇め、春秋に祭祀を捧げたという。(王秀文『桃の民俗誌』二二〇～二二二頁より引用した。)

王秀文は、「仙桃山」は、慶州の西岳洞に実在する標高三九〇メートルの山で、仙桃聖母娑蘇が鎮座するといわれている。そこから娑蘇女王が来たという、はるか遠くの北の地が、朝鮮半島より北部にある中国大陸らしいので、この伝説は中国の伝承を受け継いでいると考えられる。また、娑蘇が「仙桃聖母」として桃と強く結びつけられ、仙桃山が天界の聖域である仙桃園のように伝えられているの、朴赫居世と閼英を産んだ娑蘇女王は、明らかに西王母のイメージの反映であり、一行を仙桃山へ導く鳶も、まちがいなく西王母の使者青鳥のそれであろうと言っている。<sup>注 23</sup>

この伝説で、天界の桃の生命力と長寿の力をよく見せている。このほかに、朝鮮半島の伝説をみると、桃は生殖力、子授けの呪力をももっている。

新羅末期の有名な僧侶であり、風水師である道誥の母が処女の頃、川辺で服を洗っているとき、桃が流れてきた。洗濯棒で掛けたら寄ってくるので、桃を食べたら、身ごもることになり、子を生んだ。処女であるのに、子を生んだので、橋の下に子を捨てたが、翌朝に行ってみると、鳩が数百集まって、赤ちゃんを守っていたという。(後略)

(『韓国口碑文学大系』6-2 <全羅南道咸平郡> 韓国精神文化研究院一九八一年十一月 七三五～七三七頁より抄訳した。)川から流れてくる桃を食べ、身ごもり、非凡な人物を産むのは、日本の桃太郎ともよく似ているが、ここで、身ごもることは桃を食べたのと直接的な関係があるのは明らかである。

また、京畿道甕津郡永宗面雲南里には、こういう伝説がある。

「아기장사의 죽음 (力士坊ちゃんの死)」という伝説があるが、内容が長すぎ、力士坊ちゃんの誕生の部分だけを抄訳してみる。

村に秋氏夫婦が住んでいる。二人は金持ちではないが、仲良く暮らしているが、子供がなく、それに主人は三代独子であったので、奥さんはいいお医者さんに全部見てもらい、薬も飲んだが効かなかった。それで、毎日城隍様に井一水 (정한수) を奉り、百日間息子を授かるように祈った。ある日、奥さんが夢で、大きな龍が天上の世界にしか見られないきれいで大きな天桃を口にくわえ、家の周りをまわった後、桃を庭に落とし、去っていった。奥さんはこういう夢を何日間も続けてみた。ある日、庭に大きな桃の木ができ、たくさんの天桃が実っていた。その味も人間世界にはありえないいい味であった。

村の人たちが桃を見て、みんな食べたがっていたので、分けてあげたら、

彼たちは感謝もせず食べて帰った。翌日、桃の木の実全部なくなり、木も枯れて死んでいた。奥さんは、其の木を生かせるために、百日間祈り、ついに九十九日になる日、天から桃の木に光が当たり、木はもう一回みずみずしくなった。奥さんは、前よりももっと工夫をかけて木を見守り、桃の木が蘇り始めた頃、奥さんも身ごもることになり、桃の実が実ったころ、奥さんは玉童子を産んだ。その子は普通の子よりずっと聡明で、すぐ歩けることもでき、力持ちでもあった。その子は、桃の木に上がり遊ぶのが好き、成長も早かった。(後略)

(文化公報擔當官室『傳説誌』京畿出版社 一九八八年八月五日 四九〇～四九三頁)

総じて言うと、朝鮮半島において、桃は中国と同じく長寿不老、子授けなどの靈力があるのである。

#### ④ 日本における桃の話

「桃・栗三年、柿八年、柚は九年の花盛り」といふ諺唄がある。実りものゝ樹として、桃は果実を結ぶのは早い方だとされている。日本で桃の呪力といえば、まず、魔除け・悪気ばらいの力が挙げられる。

『古事記』には、既に桃の神秘的な力が描かれている。その原文をみると、

且後には、其の八はしらの雷神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。爾に御佩せる十拳劔を抜きて、後手に布伎都都逃げ来るを、猶追ひて、黄泉比良坂の坂本に到りし時、其の坂本に在る桃子三箇を取りて、待ち撃てば、悉に逃げ返りき。爾に伊邪那岐命、其の桃子に告りたまひしく、「汝、吾を助けしが如く、葦原中國に有らゆる宇都志伎青人草の、苦しき瀬に落ちて患ひ惚む時、助くべし。」と告りて、名を賜ひて意富加牟豆美命と號ひき。

(『古事記』日本文学大系1 岩波書店 昭和三十三年六月五日)

伊邪那岐命が黄泉国から逃げ帰る時、伊邪那美命がさしむけた黄泉醜女を祓うために、桃の実を三つ採り、次々と投げつけ、悪霊から逃げる事ができたので、桃に向かい、「今、我を助けたように、これからも、我が国の人々が苦しむ時には助けてやってくれ」と言い、桃に富加牟豆美命という名をつけたのである。ここで、桃の魔よけの力が十分窺える。

魔よけの靈力の外に、「桃太郎」を見ると、桃は回春即ち不老長寿の力もあり、また、回春とともに、子授けの力もある。しかし、これらの外に、

桃はまた、水神として信仰されてきたのである。考古学によると、井戸祭祀遺物の中に、瓜の種子、桃の核、瓢箪の存在が見つかり、瓜と桃は井神祭祀の折水神に投供されたと紹介している。<sup>注 24</sup> 即ち、桃は回春、生殖力のほかに、古くから水神への祭祀物にもなり、水とのかかわりとも見られる。

## ② むすび

中国、朝鮮半島、日本の桃の力の伝承を辿ってみると、桃は不老長寿或いは回春、子授けなどと深くかかっていることが分かる。「桃太郎」もいろんなパターンがあるが、桃を食べ回春した爺婆が桃太郎を生んだり、或いは婆が川を流れてきた桃を拾い、桃太郎が桃から生まれるのは、みな、桃の生命力、生殖力などとかかわるのは言うまでもない。ことに、中国と朝鮮半島の神話、伝説を見ると、桃或いは桃の花を食べた女が身ごもる例は注目すべきところである。しかし、其の中で、桃は常に河から流れてきたり、或いは授かった子が水神の性格をもったり（前期の中国の「龍母神話」をご参照。）するのも、注目すべきことであるが、次の文でまた詳しく述べる。

## 四、桃太郎に見られる水の呪力と水の女の伝承

口承話として、「桃太郎」を見てみよう。

「桃太郎」の類話を見ると、ほとんど婆が洗濯に行き、川上から流れてくる桃を得て、桃から子供が生まれる「果生型」と一部の「回春型」<sup>注 25</sup>と外の形の誕生モチーフが見られる。

『日本昔話通観』の典型話を例にすると

### 例話①

爺は山へ柴かりに行き、婆は川へ洗濯に行った。洗濯するところ、大きな桃が流れてきた。持ち帰って、爺が帰ってくると爺に桃のことを言う。二人で割って食べようとする。そしたら、桃はひとりでに割れ、太い大きな男の子が生まれてくる。その子は力の強い子で、鬼が島へ鬼退治に行くと言い、吉備団子を作ってもらって出かける。途中、犬、猿、雉に団子を与えて、鬼が島へ連れて行く。鬼が島で鬼を征伐し、金銀などを車に積んでかえる。（徳島県美馬郡一宇村奥大野 稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第二十一巻巻徳島香川 同朋舎 一九七八年十一月十五日 一五二～一五三頁を参照し、まとめた。）

### 例話②

爺は山へ木を取りに、婆は川へ洗濯に行く。川から桃が二つ流れてくる。婆は桃を拾って持ち帰り、爺と食べたなら若返り、子ができる。桃から生まれたので、桃太郎と名づける。桃太郎は七つの年に爺と山へ行き、大石を動かしたりするほどの力持ちになる。後、鬼退治に行くことになり、爺婆にときび団子を作ってもらって出かける。雉、犬などにときび団子を与えて、供にする。山の奥の鬼の所に行き、供たちと力を合わせて鬼退治をして帰ってくる。(香川県仲多度郡多度津町佐柳島長崎 稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』第二十一巻巻徳島香川 同朋舎 一九七八年十一月十五日 一五五頁を参照し、まとめた。)

上の例話を見ると、同じく洗濯に行き、桃を得るが、桃から生まれるものと桃を食べて若返って子を孕むものに分けられている。無論、洗濯のモチーフが無いものもある。

以下、まず全国の分布状況を一望して「桃太郎」という話型群の全体的分布を概観し、分類の項目は誕生モチーフを中心にした。

図表の中で、

合：合計

洗濯一：川で洗濯する時得た桃から生まれたもの

洗濯二：川で洗濯する時得た桃を食べて生まれたもの

川：洗濯の言葉なしに、川で桃を得て、桃から、あるいは桃を食べて生まれたもの

外：外の形の誕生のモチーフ

無：誕生のモチーフ無しというふうに表記した。(桃のとり場がなく、生まれる部分だけあるのもここに入れた。)

北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	栃木	群馬	茨城
0	合 6	10	3	9	20	19	6	15	12
	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一
	6	7	2	7	19	19	6	15	12
	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二
	川	川	川	川	川	川	川	川	川
		2							

	外 無	外 1 無	外 無 1	外 無 2	外 1 無	外 無	外 無	外 無	外 無
埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野
22	24	11	1	10	5	5	3	14	7
洗濯 一	洗濯 一	洗濯 一	洗濯 一	洗濯 一	洗濯 一	洗濯 一	洗濯 一	洗濯 一	洗濯 一
18	24	11	1	10	5	4	3	14	7
洗濯 二	洗濯 二	洗濯 二	洗濯 二	洗濯 二	洗濯 二	洗濯 二	洗濯 二	洗濯 二	洗濯 二
1 川	川	川	川	川	川	川	川	川	川
2 外 無 1	外 無	外 無	外 無	外 無	外 無	1 外 無	外 無	外 無	外 無
岐阜	静岡	愛知	京都	三重	滋賀	大阪	奈良	和歌山	兵庫
17	5	8	3	1	0	0	0	0	21
洗濯 一	洗濯 一	洗濯 一	洗濯 一	洗濯 一					洗濯 一
16	4	7	2	1					20
洗濯 二	洗濯 二	洗濯 二	洗濯 二	洗濯 二					洗濯 二
川	川	川	川	川					川
外 無 1	外 無	外 無	外 無	外 無					外 無 1
鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡

7	49	20	18	4	4	5	4	3	1
洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一	洗濯一
7	49	13	16	4	2	2	3	2	
洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二	洗濯二
川	川	川	川	川	川	川	川	川	川
外無	外無	外1 無5	外無2	外無	外無1	外無1	外無	外無1	外無
佐賀	大分	長崎	熊本	宮崎	鹿児島	沖縄	全国 合計		
6	2	10	0	0	1	0	391		
洗濯一	洗濯一	洗濯一			洗濯一		話 洗濯一		
4	2	8			1		353		
洗濯二	洗濯二	洗濯二			洗濯二		洗濯二3		
川	川	川			川		川		
2		2					16		
外無	外無	外無			外無		外3 無16		

(本研究では、類話を統計、分類するに当たり、同朋舎刊『日本昔話通観』を中心に、全国で391話の「桃太郎」の資料を調べた。<sup>注26)</sup>

分布表から見られるように、昔話「桃太郎」は、北海道、滋賀、大阪、奈良、和歌山、熊本、宮崎、沖縄を除いて、全国にわたって分布している。

統計してみると、

合計：391話

洗濯一即ち、川で洗濯する時得た桃から生まれたものが353話、

洗濯二：川で洗濯する時得た桃を食べて生まれたものが3話、  
川：洗濯の言葉なしに、川で桃を得て、桃から（桃を食べて若返り）生まれたものが16話、  
外の形の誕生のモチーフが3話、  
誕生のモチーフ無いのが、16話になっている。

同じ異常誕生譚、子授け話として、「瓜子姫」より少し遅れて発生したと考えられる「桃太郎」は、主人公の誕生のモチーフにおいて、391話の内、洗濯のモチーフが入っているのが、356話になり、中の一部は婆が桃を食べ、回春し、子を孕む例も見られる。同じ子授け話として、「瓜子姫」が婆が洗濯から拾った瓜から生まれるのと爺が畑からとった瓜から生まれるものに分かれているのに対して、「桃太郎」ほぼ全部の類話に婆の洗濯というモチーフが入っていて、それが「果生型」と「回春型」とに分けられている。洗濯というモチーフのある類話の比重は「瓜子姫」よりもずっと高い。

「果生型」と「回春型」とに分けられているのは、さておき、まず子授け話として、「桃太郎」は、無論外の誕生モチーフもあるが、大多数の類話が婆が川辺で洗濯する時、桃が川を流れてきたことになっている。前節の「東アジアにおける桃の霊力」に見られるように、中国や朝鮮半島の桃から子を授かる神話、伝説を見ると、桃の採り場は常に川辺になっている。中国側の例を見ると、子の無い婆が女媧の教えにより、黄河から流れてくる仙桃と仙花を食べ、身ごもり、また、白族の『龍母神話』では、川から取った桃ではないが、桃を食べ、身ごもり、産んだ子は龍の神、水の神であった。即ち、水辺の女が授かった子は水神から水から授かった子である。

また、朝鮮半島における桃の子授け譚を見ても、新羅末期の僧侶道詵の母は処女の時、川辺で洗濯に行き、流れてきた桃を食べ、身ごもることになったのである。前にも言ったように、ことに中国の神話、伝説を見ると、水辺の女が、水を浴びたり、洗濯したり、流れてくる果物などを食べたりして、水、水神から子を授かる例は極めて多い。また、日本にも、上代の神話にはあまり見えないが、昔話の中には、井戸水を浴びて、妊娠する（第一章の中の寅千代丸の話をご参照。）例もあるのである。ここでは詳しく扱わないが、中国や朝鮮半島の神話、伝説を見ると、水辺の女、ことに、洗濯する女はよく子を授かったり、縁が結ばれたりする例が極めて多い。「瓜子姫」や「桃太郎」に出てくる洗濯する婆も、東アジア全般における洗濯する女、水辺の女の伝承であると考え、これを究明するためには、第三章で詳しく洗濯する女の系譜を論じる。ただ、口承話にしる、文献記録

にしる、洗濯する女のモチーフが圧倒的に数が多いことは、注目すべきところである。

## 注

注1：「このように考えてくると、これまでの歴史家の捨ててかえりみななかった極東の島国の小サ子説話、したがって我が桃太郎のごときも、その背後にひそむ母性の姿を、消えゆく過去の記憶から呼び戻すことによって、はじめてこれを人類文化の悠遠の流れの中に位置づけることができるであろう。日本の小サ子はその母神とともに、とくに水辺に出現することの多いのも、原始の大女神が母なる大地として、月や冥界や龍蛇の類とともに水に結びついていたことを思えば不思議はない。その豊饒力を水に負う大地の女神は、同時に水の神、農の神であった。」『石田英一郎全集』第六巻 筑摩書房一九七八年 二百五十七頁

注2：山崎祐子『日本民俗大辞典 上』福田アジオ 新谷尚紀 湯川洋司 神田より子 中込睦子 渡邊欣雄編集 吉川弘文館一九九九年九月一日 九百五十九頁

注3：鎌田久子『日本民俗事典』大塚民俗学会編 弘文堂 昭和四十七年二月十五日 三百九十頁

注4：金田芳水『桃太郎の研究』公立社 昭和二年十一月二十七日

注5：小久保桃江『福祉の原点と桃太郎の研究』講談社 昭和五十二年

注6：山崎麓 編集, 書誌研究会 改訂『改訂日本小説書目年表』ゆまに書房 1977 (書誌書目シリーズ ; 6)

注7：滑川道夫『桃太郎像の変容』東京書籍 昭和六十二年三月三十一日

注8：金田芳水は「桃太郎の話が始めて版本として板行されたのは、享保年間刊行の豆籬本や、藤田秀素筆の古版『桃太郎』あたりであろうか」と言った。金田芳水『桃太郎の研究』公立社昭和二年十一月二十七日十五頁

注9：小久保桃江『福祉の原点と桃太郎の研究』講談社 昭和五十二年九月十二日 五十五頁

注10：滑川道夫前掲書と翻刻版『桃太郎昔語り』『初期草双紙集』近世文学研究「叢」の会和泉書院一九九三年五月三十日を参照引用、まとめた。

注11：『桃太郎昔語り』『初期草双紙集』近世文学研究「叢」の会 和泉書院 一九九三年五月三十日

注12：『桃太郎』『新編稀書複製会叢書』第五巻中村幸彦、日野龍夫編臨川書店刊、平成元年と滑川道夫前掲書により参照、引用、まとめた。



- 注13：滑川道夫前掲書 五頁。
- 注14：羅漫「桃、桃花与中国文化」「中国社会科学」一九八九年第四期 一四五～一五六頁
- 注15：藩莉「古籍中的桃意象」「貴州民族学学報（哲学社会科学版）」二〇〇〇年増刊 三十六～三十七頁
- 注16：黄鵬、趙家瑜の「論桃的祈育功能」「百色学院学報」二〇〇八年四月 二十一～二十四頁
- 注17：徐曉光「瓜、桃、竹与人的出生——中国西南少数民族与日本植物崇拜神話比較」「日本学研究」二〇〇四年第三期 三十七～四十三頁
- 注18：方志娟「淺議日本的桃信仰」「學術探討」二〇一一年六月
- 注19：王秀文『桃の民俗誌』朋友書店二〇〇三年六月三十日
- 注20：方志娟前掲書
- 注21：朱世学「土家族蛋俗探析」「湖北民院学報」一九九九年第一期
- 注22：王秀文前掲書 p219～220 元出：金万熙『韓国斗十長生図』尚美社 九十八～一〇四頁
- 注23：王秀文前掲書二二二頁
- 注24：木村千恵子<研究レポート>「憶良の瓜と栗」「成城国文学」(1), 61-69 (1985-03-00) 成城大学
- 注25：島津久基は「果生型」と「若返り型」の二類を命名している。「日本国民童話講座」「少国民文化」、昭和十八年。その後、名村道子は「江戸時代の桃太郎」「国文」十九号、昭和三八年、お茶の水女子大学国語国文学会で、「果生型」と「回春型」と呼んだ。
- 注26：『日本昔話通観』にごく簡単に紹介され、且つほかの本で原文資料を確認できなかったのは、『日本昔話通観』の中の典型話を参考にして、誕生モチーフなどの項目を作成し、統計に入れた。原文を一一確認できなかったため、多少数値に不確かなところがある。また、後ろに「桃太郎」の地域分布表の中の出典は、原文確認済みの本はもとの出典を表記したが、原文資料を確認できなかったのは、元の出典ではなく、『日本昔話通観』（同朋舎刊）の中の巻数とページ数を表記した。

#### 参考文献：

- 柳田國男『桃太郎の誕生』『定本柳田國男集』第八卷 筑摩書房 昭和三十七年
- 滑川道夫『桃太郎像の変容』東京書籍 昭和六十二年三月三十一日

折口信夫「桃の伝説」『折口信夫全集3』中央公論社一九九五年四月十日  
『昔話研究資料叢書』三弥井書店刊 一九六八～一九九二年  
稲田浩二監修、福田晃編『日本の昔話』日本放送出版協会 一九七二～一九八〇年  
『全国昔話資料集成』岩崎美術社 一九七四～一九七五年  
稲田浩二、小澤俊夫編『日本昔話通観』同朋舎 一九七七～一九九八年  
小池藤五郎「記録されたる桃太郎古説話の研究上、下」「國語と國文学」第十一卷第二～三号 昭和九年

### 第三節 日本の御伽噺における水の呪力と水の女の伝承——其の三、「たにし息子」について

昔話「たにし息子」はよく「田螺長者」とも呼ばれるが、日本各地凡そ十七の県に分布している。大体子供のいない夫婦が神に祈願して、田螺の姿をしている子ができ、この申し子は大きい力を持ち、美しい嫁をもらい、立派な若者になる話である。田螺は水との淵源の深い動物であり、類話の中で水神からの授かりの例も少なくないので、水神から授けられた申し子の話として、話型の分布を把握し、分析したら、日本昔話における出産、誕生伝承の研究の一環となり、且つ「瓜子姫」や「桃太郎」など、川上から流れてくる植物から生まれる誕生譚を研究する際、貴重な比較研究になりうると考えられる。

そのうえ、今まで、本格的に「田螺息子」の話の全国的な分布を扱い、全般的に調べ、分布図を作ったり、統計したりして、日本全国における分布の特徴を扱った研究もなかった。

そして、拙論<sup>註1</sup>で既に述べたように、中国の神話の中で、水や水神は常に人間の女性と結合したり、接したりして、子を授かる。その上、授かった子は非凡な力をもったり、帝王になったり、神の能力（例えば水神の水を司る力）を持ったりし、その成長も異常なところが多い。

しかし、日本の神話をみると、水神と女性の直接的な交合は見えず、水を浴びたり、水と関連したものと接して、女性が子を授かる例は神話書籍ではあまり見えない。ただ、『日本霊異記』雷神が子を授かった話が一例としてあるのみで、どうも正統的な大和神話の中には、そういう例はないようである。水による清めや出産、誕生の比較研究にしる、延いては東アジアにおける「水の女」の系譜研究にしる、日本昔話即ち民間で伝承

されている水の霊力の研究を通して、日本における出産、誕生とかかわる水についての研究を進めるのは研究の意味があると考えられる。

本節では異常誕生譚の中で、もっとも水と深くかかわっている昔話「たにし息子」を研究対象とし、日本全国での「たにし息子」の分布を考察しつつ、田螺息子の誕生と変身における水の役割を考察したい。

## 一、「たにし息子」の研究史

柳田氏は一寸法師を例として、小僧さまの形が小さく、家の神棚のわきにおくなどの点から、「小さ子譚」の定義をした<sup>注2</sup>。柳田の研究によると、田螺息子も小さ子なのである。そして、「たにし息子」は稲田浩二によって、「むかし語り」の中の「誕生」の〈異常誕生〉として分類されている<sup>注3</sup>。

横山登美子は田螺息子を異類婚姻譚の面から研究した<sup>注4</sup>。

千野美和子は類似のグリムの話と検討しながら、「たにし息子」の話の底には、神への祈りと信仰が中心のテーマになっていると言っている。また、中には更に、日々の日常を感謝すべきものと考え、大切に思う気持ちが背後にあると述べている<sup>注5</sup>。

また、関敬吾は『日本昔話大成3』<sup>注6</sup>で、田螺息子の話の資料を収集し、稲田浩二・小澤俊夫編集の『日本昔話通観』<sup>注7</sup>など、話の資料集がある。

総じてみると、意外に「たにし息子」についての先行研究は少なく、水神からの申し子であると言っても、具体的な分布を通しての研究もないし、水の霊力の伝承の研究もない。

本研究では、従来の研究を踏まえ、「たにし息子」の分布を全般的に把握し、話における出産、誕生と清めの水の伝承を具体的に探求したい。

## 二、日本全国における「たにし息子」

関敬吾は田螺息子の構成を次のように、まとめてある<sup>注8</sup>。

- ① 子のない夫婦が神（氏神・観音・薬師）に祈願して、(a) 田螺（蛙・蛇）を拾って子供にする。(b) 妻（夫）の脛（すね）・親指から小さな子が生まれる。
- ② 求婚。(a) 少童または田螺は粉（米・粢）を持って嫁探しに行く。(b) 長者の下男になる。または (c) 小作米を持って行く。
- ③ 結婚。(a) 粉を食った者は嫁にすると約束して、三人（二人）娘の末

子の唇にぬる。(b) 小作米を持って行って、長者の嫁と婚約する。

④ 田螺は娘と結婚し (a) 打ち出の小槌を拾う。(b) 鬼が島から小槌をとってくる。または (c) 動物を助け小槌を得る。

⑤ 人間になる。(a) 娘がきらって田螺をたたいたために、(b) 小槌でたたかれ、(c) 風呂に入っているのを嫁がかきまわし、または (d) 娘が神に祈願したため。

⑥ 結末。打ち出の小槌で家をつくって幸福生活をする。

本研究は、田螺息子の誕生の過程と変身に注目して、次のような分布表をつくった<sup>注9</sup>。紙数の関係で、求婚と結婚などの項目は取り除いた。

分布地域	子授けを祈願	たにし息子の誕生	変身	注	出典
青森県 2話 三戸郡		爺の脛がはれ 茨で通すと子 供が生まれる。	小槌で叩いて大き くなり、立派な長者 になってかえる。		関圭吾『日 本昔話大成 3』角川書店 昭和五十三年 p22
三戸郡 五戸町		爺と婆が田で 草を取っていると、声をかけて、たにしが爺 の膝に上がっ てきた。	嫁に石湯へ持って 行きつぶさせると、 美しい男となる。	原 題： 田螺 長者	稲田浩二、 小澤俊夫編 集『日本昔 話通観』第 二巻同朋舎 一九八二年 P364
岩手県 12話 九戸郡 種市町 (旧種 市村)	神様にわらし を祈願する。	婆のひざのは れから、たつぶ ガ生まれる。	嫁がたつぶの姿を 納得していると言 うと、鷹が飛んでき て、殻をむくと、た つぶはいい男とな る。	原 題： たつ ぶの 息子	『日本昔話 通観』第三 巻 岩手 同朋舎 一九八五年 p213～214
北上市 立花	子供がほしい と思っている。 る。	子(卵)を授か り、育てると蛙 になる。	嫁の八幡様参りで の願で、蛙は侍にな る。	子供 をう けて 安楽	同上 p214～215

				に暮らす。	
九戸郡 大野村		百姓の子供にたにしが生まれる。			同上 p215
遠野市 (旧上 閉伊郡 土淵村)	小作人夫婦に子がなく、水神様に「びっきでもつぶでもいいから」と祈願する。	田螺が生まれる。	薬師様の祭礼で嫁が夫を人間にしてくれと祈願する。たにしは若者になって現れる。		同上 p215
遠野市	水神の申し子	つぶで生まれた	嫁が薬師様に参って、人間になった。		同上 p215
水沢市	遠野市(旧上閉伊郡土淵村)の類話とほぼ同じ。				同上 p215
北上市 (旧和 賀郡更 木村大 竹屋敷)	子供のない爺と婆が、田の水神様に「びっきでもつぶでもよいから子供を一人授けてくれ」と願う。	田螺をさずかる。	鳥(水神の使い)がたにしをつつき落とす。たにしは人間になって現れる。	原 題： 田螺 童 (つ ぶぼ っ こ)	同上 p 216 ~217
遠野市	子のない爺と婆が水神に祈願する	田螺を授かる。	嫁が田に田螺をすべり落としたが、水神のおかげで美しい男になった。		同上 p 217
遠野市 青笹町 糠前		田からつぶが上がって昼飯を食うので、子	つぶのお願いで、嫁が藁打ち槌でつぶしたら、立派な侍に		同上 p 217

		供にする。	なった。		
花巻市 東十二 丁目	子供のない夫婦が、水神様に田螺のような小さい童子でもほしいと願う。	田螺が生まれる。	水神様の祭りに、嫁が参ると、たにしは立派な若者になって現れる。	原 題： ツブ 息子	同上 p 218
遠野市 新町	子供のない夫婦が、川のそばの水神になんでもよいかから子供を授けてくれと願う。	十月十日目に女房がつぶを生む。	二人は村の神参りにいく。たにしは立派な若者に生まれかわる。		同上 p 218
和賀郡 湯田町	子のない爺と婆が、観音様に子を祈願する。	つぶの子を授かる。	つぶが、嫁に体を踏ませると立派な若者が現れる。	原 題： つぶ むこ	同上 p 219
秋田県 9話 仙北郡 西木村 (旧上 檜木内 村)	子のない爺と婆。	孫を見つけたい爺が堰の所で螺を拾ってくる。	嫁は田螺を嫌がったが、杵で打ち潰させたら、心がひけて断るが、あまり言われて、潰したら、立派な男になる。	原 題： 田螺 男	『日本昔話 通観』第5 巻 秋田 同朋舎 一 九八二年 p236～237
雄勝郡 稲川町 小沢	子供のない爺婆が、五十日の願かけする。	最後の晩のお告げのところにいったらつぶがいる。	嫁がつぶのかますを踏みつけたら、殻が破れて		同上 p237 ～238
北秋田 郡阿仁 町笑内	子供のない爺婆。	爺が、田で大きなつぶを拾う。	嫁に踏みつけさせるといい男になる。		同上 p238
仙北郡 角館地		婆がつぶを拾いにいき、田で	嫁はつぶを横槌で打つ。つぶはつぶれ		同上 p238

方		大きなつぶを持ち帰る。	若者になる。		
仙北郡 南村外	子供のない爺婆が、神様に子供を願う。	大きなつぶを授かり、つぶ太郎と名づける。	嫁は、つぶ太郎を嫌い、杵でつぶ太郎の殻を叩くと立派な男になる。		同上 p238 ~239
北秋田 郡森吉 町		爺が家の軒に堰を掘ると、つぶがいたので、拾って金だらいに入れる。	爺ははつぶの頼みで槌で叩くと、立派な若者になる。	原 題： 火玉 針玉 水を 飲んで、 はり ぎに いれ ると はぎ りの 大き さにな る。	同上 p239 ~240
由利郡 由利町 滝沢	爺婆が、子供がほしくて神様に願をかけた帰りに、	小川のタニシを子供として授かる。		原 題： つぶ 太郎	同上 p240
仙北郡 中仙町				原 題： つぶ の嫁 っこ	同上 p241
北秋田			つぶがころんで歩	原	同上 p241

郡 阿 仁 町 銀 山			くので、嫁は後から歩きながら、殺そう と思い、石でつぶを 叩くと、つぶは立派 な男に変身する。	題： ツブ さ嫁	
山形県 2話 東田川 郡朝日 村大綱	子供のない爺 と婆。	爺が田で大き な田螺を拾っ て帰る。	長者の使用人が田 螺を風呂へ突き落 として煮る。風呂の 中から音がして、立 派な若者が現れる。	原 題： つぶ	『日本昔話 通観』第六 巻 山形 一九八六年 P407
最上郡 最上町 富沢下 小路。	婆が「つぶコ でもいいか ら、子宝がほ しい」と水神 様に願う。	夢枕に神が立 ち、「子を授け るから大切に しろよ」と告げ る、妊娠してつ ぶの子を生む。	嫁は薬師の祭りに 参詣し戻る。つぶが いないので、捜しあ ぐねて深田に身を 投げて死のうとす ると、美男が現れ、 薬師に参ってくれ たおかげで、一人前 になったと告げる。	二十 年立 って もつ ぶは 成長 しな い	同上 p407 ～408
福島県 3話 大沼郡 昭和村	爺と婆。年と ってきたら子 供がほしくて 「まあ何でか んで子供一人 授けてもらい たい」と権現 様に二十一の 願をかける。	満願の朝、拝殿 の前に大きな つぶがいた。	権現様に行く娘が 家の前を通りかか り、たち寄り、縁側 で待つ。飛んできた 鳥がつぶを沸いて いる風呂の中に落 とす。湯気の中から 立派な若い男が現 れる。	原 題： 田螺 (つ ぶ) むか し	『日本昔話 通観』第七 巻 福島 同朋舎 一 九八五年 p396～398
福島市 二人は たいし た長者 になっ	子供のない夫 婦。子供を授 けてもらおう と氏神の水神 様に願かけに	やがて妻が妊 娠し、つぶが生 まれる。	つぶのお願いで嫁 は氏神様に参り、鳥 の鳴き声が聞こえ、 鳥に「つつくならお れをつつけ、つぶは		同上 p 398～399



て暮らした。	行く。途中で「蛙でもつぶでもよいから子がほしい」と相談しながら、氏神に子供を頼む。		つつくな」といいながら、つぶを捜す。立派な男になって現れる。		
郡山市 湖南町 三代	子供を持たない夫婦が、「子供がほしい」と願かけをすると、後ろの河原で赤子の泣き声がする。	見たら、たにしなので、連れてきて大切にする。	番頭がたにしを殺して自分が娘をもうおうと煮たった湯に入れると、たにしは立派な男になる。	原 題： 田螺 長者	同上 p400
群馬県 3話 沼田市 (旧利根郡沼田町西倉内、材木町)	爺と婆。	爺が草刈にいき、でえろん(かたつむり)が声をかける。	嫁が、牛にでえろんを踏みつぶさせたら、美しい若者になる。	原 題： でえ ろん 息子	『日本昔話通観』第八卷 栃木・群馬 一九八六年 p257～258
沼田市 (旧利根郡沼田町材木町)	子供のない爺婆。	爺が山へ薪を拾いに行くと、でえろん(かたつむり)に呼ばれる。	嫁が、牛に踏みつぶさせたら、美男になる。		同上 p258
沼田市 (旧利根郡沼田町西倉内)		爺が山ででえろんを拾う。	嫁が牛につぶさせると、美しい若者が現れる。		同上 p258
栃木県	子供のない夫	妻が妊娠し、た	女の家の方がたに		同上 p259

1 話 芳賀郡 茂木町 山内	婦が子育て地蔵に願うと、	にしを生む。	しをかまゆでにする。立派な男が出てくる。		
<b>新潟県</b> 30 話 小千谷市小栗田	子供のない爺と婆が、地蔵様に子を授けてくれと願う。	婆の親指の頭が大きくなり、つぶが生まれる。	嫁は、つぶが風呂に入った時、火を焚き、後で蓋を取ると、けっこうなお湯でござんす、と言っていい男になって現れる。	原題： ツブつぶは、夜になると殻を脱いでいい男になる。	『日本昔話通観』第十卷 新潟 一九八四年 p198～199
小千谷市真人町三木明	鎮守への満願の日のお告げで、	鎮守の大門にいた大きいかたつむりを連れ帰る。	娘がかたつむりの体を洗っていて落とすと、殻が割れて、若い男が現れる。		同上 p199～200
北蒲原郡豊浦町切梅	鎮守に子を願う。	満願の前の晩の「明朝、東の縁側から外を見る」お告げ、池にいたたにしを連れ帰る。	母親と娘がたしを風呂に入れる。		同上 p200
古志郡山古志村竹沢	観音に子を願う。	正月の元日に、天竺からのかたつむりをさずかる。	湯に入ったかたつむりを、殺そうと娘が頭を棒で叩く。殻が割れて若い男になる。		同上 p200

古志郡 山古志 村虫亀	神様に子を願う。	爺が山で大きなかたつむりを見つける。	途中の川でかたつむりは、娘に「小槌で『いい男になれ』と言って叩いてくれ」と頼む。かたつむりはいい男になる。娘は風呂に入ると顔がきれいになる。		同上 p200
佐渡郡 畑野町	観音に子を願う。	つぶろ(ひょうたん)の子供が生まれる。	娘がつぶろに石を投げつけると立派な男になる。		同上 p200
新発田市(旧南浦)大成	浅草の観音に子を願う。	婆がたにしの子を生む。	次男がたにしをつぶして殺そうとすると、美しい娘になる。		同上 p200
十日町市十日町		爺が蓑の上にいたたにしを持って帰る。	家に帰る途中、川端で嫁がたにしを踏みつぶすと、中から若者が生まれる。		同上 p200
栃尾市西中野俣	鎮守に祈願する。	鳥居でかたつむりを拾って帰る。	娘がかたつむりを踏みつぶすと、いい男になる。		同上 p200
中魚沼郡中里村東田尻		爺が山でかたつむりを取ってくる。	婆に風呂を沸かさせ、かたつむりは一番風呂に入り、娘に槌で叩きつぶせると、かたつむりは割れ、若い男が出てくる。		同上 p200 ~201
長岡市	村のお宮に祈願する。	たにしを授かる。			同上 p201
長岡市麻生田	神に祈願する。」	鳥居でかたつむりを見つけ、	お宮参りに行くと、娘に自分を踏んづ		同上 p201

町		連れ帰る。	けさせ、皮が割れる。若い男が出る。		
長岡市 上前島町		爺が山仕事に行き、河を流れてきたたにしを拾う。	たにしが湯に入ると、殻が割れ、いい男が出てくる。		同上 p201
長岡市 李崎町	八幡に子を願う。	「畑の栗の葉のかたつむりを子供にして育てろ」とお告げがある。	かたつむりは娘に、腰が痛いので箒で叩いてくれと頼み、娘が叩くと、体が割れ、若い男が出てくる。		同上 p201
長岡市 高見町	鎮守に子を願う。	お宮の縁側にいたかたつむりを連れ帰る。	家に帰り、嫁が湯に入ってから、かたつむりが風呂の周りを這っていると、中に落ちて若者になる。		同上 p201
長岡市 滝谷町	鎮守に子を願う。	かたつむりを授かる。	嫁が入浴中に、かたつむりは風呂を三周して湯に落ち、美しい若者になる。		同上 p201
長岡市 深沢町	神様に子を願う。 満願の日に神社の清水を飲もうとして	大きいたにしを見つけ、連れ帰る。	神様に参りにいき、嫁がたにしを踏みつけると、割れて、若様が現れる。		同上 p201~202
長岡市 六日市町	鎮守に子を願う。	かたつむりを生む。	娘と一緒に入ろうと、かたつむりが風呂の縁を三回回って湯に入ると、いい男になる。		同上 p 202
長岡市 村松町	村の鎮守に子を願う。	女房がかたつむりを生む。	嫁を風呂に入れ、かたつむりが風呂の		同上 p 202

			縁を三回回って湯の中へ落ちると、若い男になる。		
東 頸 城 郡 松 代 町	神様に願する。	たにしの子をさずかる。	庄屋がたにしを風呂に入れて煮殺そうとすると、殻が割れて若者になる。		同上 p 202
東 頸 城 郡 松 代 町 福 島	神様に子を願う。	かたつむりを授かる。	旦那の家の者がたにしを煮殺そうと、蓋に重石を置いて火をやくが、たにしは蓋にひっついて、助かる。翌朝、たにしが起きた拍子に戸溝に体をぶつくと、殻が破れて若者が現れる。		同上 p202
見 附 市 ( 旧 南 蒲 原 郡 見 附 市 町 )	浅草の観音に祈願する。 満願になってもないので、つぶでもいいと言う。	婆が妊娠し、たにしを生む。	旦那の家に水仕女にやとわれ、怒った次男が小便をするフリをしてたにしをおしつぶすと、たにしは美しい女になる。		同上 p202
南 魚 沼 郡 六 日 町 小 川			たにしは長者の家に泊めてもらい、娘の口ばたへのりをつける。「ひっくりすというもので打てば人間になる」と言い、自分でクリコンクリコンとして美男子になる。		同 上 p202 ~ 203
南 蒲 原	鎮守に子を願	たにしの子を	娘が眠っているた		同上 p203

郡下田 村遅場 (旧森 町村)	う。	生む。	にしに槌を振り下 ると、りっぱな男 になる。		
長岡市 西蔵王 町	村の鎮守に子 を願う。 二十一日間願 する。	たにしが子供 にしてくれと 声かける。	嫁と参りにいくが、 いつの間にか若い 男になって現れる。	原 題： タニ シむ すこ	同上 p204
柏崎市 折居拝 庭			娘の親は、たにしの 婿を風呂に入れて 煮殺そうとする。風 呂が沸き、たにしの 殻が割れ、立派な男 が現れる。		同上 p204
佐渡郡 相川町 石花	夫と妻が、子 供がほしいと 願をかける。	二十一日目に、 親指からかた つむりが落ち る。	夫婦が、かたつむり に風呂をつかわせ ると、かたつむりが 中から上がってこ ないので、「姉さん に入ってもらか ら、早く上がれ」と 言うと、風呂の中 でかたつむりはいい 男になっている。		相川町史編 纂委員会 『佐渡相川 の歴史 資 料集九相川 の民俗Ⅱ』 1981年3月 25日 相 川町 p 237
長岡市 麻生町		石段でみつけ たたにしを連 れ帰る。			同上 p204
東蒲原 郡上川 村夷棚	子供のない爺 と婆が田を打 ちに行く。	爺が大きなタ ニシを見つけ、 持ちかえる。	女は風呂をやいて、 太郎を入れ、蓋をす る。蓋を取ると、き れいな若い男が立 っている。		同上 p204 ~205
東頸城	爺と婆が神に	つぶの子を授	ある日、つぶは嫁の		同上 p205

郡松代 町蓬平	願をかける。	かる。	袖に入って祭りに いき、橋の下に落と してもらおうと、立派 な若者になる。		
京都 1話 宮津市 上世屋			たにしは庄屋の娘 と結婚する。風呂に 入り、立派な男にな り、婿入りする。	原 題： たに しの 婿入 り	『日本昔話 通観』第十 四巻 京都 一九七七年 P249
鳥取県 4話 日野郡 日南町 矢戸	子供のない爺 と婆が、神様 に子供を願 う。	田の水を見に 行った時、たに しが子を負っ ているのを見 て、子をくれと いうとくれる。	女房がたにしを抱 いてお宮参りに行 くと、女房に自分 を堤の中に沈めさせ、 槌を背負って出て、 自分を叩きつぶさ せ、いい男になる。	原 題： たに し長 者	『日本昔話 通観』第17 巻 鳥取 一九七八年 p312～314
東伯郡 東伯町 古長	子なしの爺婆 が、子がほし くて、川でみ ていたら、	にゆうな(たに し)の子が いた。	相撲をして、天狗 たちに勝つ。嫁に、 天狗たちが捨てた 小槌で、自分を叩か せると、美男となる。		同上 p314 ～315
東伯郡 東伯町 山田	子供のない衆 がある。氏神 に参る。	夢のお告げ通 り、宮巡りし て、回ったら、 手水鉢にさざ えがいた。	参りに行くとき、 夫が、手水鉢に自分 をぶつけろと言う ので、嫁はその通 りにし、宮参りを してくる。さざえ はいい男になっ ている。	原 題： さざ えの 婿入	同上 p315 ～317
西伯郡 中山町 栄田	子供のない夫 婦が天神さん に参る。	さざえの子 供が生まれる。	天神さんに参る ときに、もとに入 れて行き、石にぶ つけてほしいとい うので、嫁はたに しをみか		同上 p317

			げ石にぶつける。いい男になっている。		
島根 4話 大田市 山口町 山口	子供のない爺と婆。氏神さんに子授けを願う。	田の中からたにしが爺を呼び、子にしてくれと言うので、連れて帰る。	爺婆に背負われて氏神に参り、石段から落ちてたにしの殻がとれ、中からいい男が生まれる。		『日本昔話通観』第十八巻 島根一九七八年 P384～386
那賀郡 弥栄村 (旧安城村)	爺と婆。	爺が薪売りに町に行くと、途中で子になろうと声をかけた田螺を持って帰る。	たにしは、池の土手で娘に「美人男ほしや」と言って叩きつぶし、池に投げつけてくれと言う。やると、池の中から立派な男が現れる。		同上 p386
邑智郡 石見町 (旧日貫村青笹)	子供の爺と婆。神様に願をかける。	小さなたにしの子が生まれる。	なし		同上 p386
美濃郡 匹見町 (旧匹見上村)	子供のない爺と婆。	なめぐしを子供としてかわいがっている。			同上 p386～387
岡山県 9話 阿哲郡 神郷町 三室	爺と婆。	婆が草刈にいき、田の中に田螺(たぬし)がある。	娘に自分を小槌で叩かせるといい男になる。	原題：田螺聳入り	『日本昔話通観』第19巻 岡山一九七九年 p223～225
真庭郡 落合町 栗原	子のない爺と婆が、神様に祈願する。	満願の日、婆に田で田螺が呼びかける。	嫁に小槌で叩かせる。立派な若者になる。		同上 p225
阿哲郡 神郷町			娘に自分を石の上に乗せ、小槌で叩かせると、立派な男の		同上 p225



			子になる。		
真庭郡 中和村 津黒	子なしの爺と 婆。	爺に、田の中で 田螺が子にな ってあげると 言う。	嫁に自分を池につ け、梗概を刺せとい う。いい男になる。		同上 p225
真庭郡 八束村 花園	子のない爺と 婆が、神様に 子を頼む。	まめくじ(なめ くじ)の子がで きる。	嫁が小槌で婿をた たくと、美男子にな る。		同上 p226
岡山市 (旧御 津郡今 村)	爺と婆。毎日 神に子供を願 う。	爺に川の中か ら呼ぶ田螺が いた。	結婚式の前日、きれ いな若者になる。	原 題： 田螺 の婿 殿	同上 p226 ～227
岡山市 (旧御 津郡今 村)	子なしの爺と 婆が子をほし がっている。	田からたにし を拾ってくる。	地主のところへ米 を持って行くとき、 たにしは馬の上か ら落ちて、二つに割 れ、きれいな子供に なる。		同上 p227
阿哲郡 哲西町 川南	子のない夫婦 が、田の神に たにしぐらい でもいいから 子をさずけて ほしいと願 う。	女房の腹が痛 み、たにしを生 んだ。	たにし夫婦は薬師 へまいる。夫が居な くなって、絶望して 飛び込もうとする と、美しい男になっ て現れる。	原 題： 田螺 長者 父母 は変 身は 水神 様 のお かげ だ とい う。	同上 p227 ～228
真庭郡 中和村	子のない爺と 婆。子供をほ	爺が池へ割木 を売りに行き、	嫁に自分を池につ け、甲羅を持って、	原 題：	同上 p228

津黒	しがっていた。	帰りに、田んぼの中から声かける田螺がいた。	「日本一のいい男で上がってくれい」と言うように頼む。いい男になる。	田螺婿入り	
広島県 2話 山県郡 大朝町 大朝	爺婆が子供がほしいので、	田んぼで子がほしいと言うと、たにしが子になってくれるという。			『日本昔話通観』第二十卷 広島・山口 一九八八年 P398
高田郡 美土里 町北(旧 北村)	若夫婦が、子がほしいので神様に頼む。	まいまい(かたつむり)が生まれる。	橋の上に蛇が鉄棒をくわえているので、女房にそれで自分を叩かせると、美しい男になる。		同上 p398 ~399
徳島県2 話 海部郡 穴喰町 穴喰西 町	子のない夫婦。権現様に子を願う。	子がうまれたが、ニシ貝が授かる。	神参りに行くとき、嫁が貝をとり落とすと、砕けて青年になる。		『日本昔話通観』第21卷 徳島・香川 一九七八年 p 303~304
海部郡 穴喰町 久保	子供のない爺婆が、氏神に、子供ができるよう願う。	お宮に行くと、お宮の前に田螺がころがっている。	お宮から帰る道に、嫁の懐からたにしが田んぼにころがる。		同上 p304
愛媛県 1話 北宇和 郡三間 町戸雁	子供のない爺と婆が、神様にたにしのよな子供でもほしいと願う。	たにしの子供ができた。	嫁が仏に折ってお百度を踏むと、満願の日に若者になる。		『日本昔話通観』第22卷 愛媛・高知 p313~314
大分県 1話 東国郡		爺が町に割り木売りに行っていると、毎日	ある日、たにしが氏神様お参りしたいと言うので、行く	爺は氏神様の	『日本昔話通観』第23卷 福岡・

安岐町 下油留 木		声かけてくる ものがある。見 ると、たにしで ある。	と、石段の所で、踏 みつぶしてくれと 言う。爺が踏みつぶ すと、見るまに大き な息子になる。	お授 かり の子 だろ うと 喜ん だ。	佐賀・大分 一九八〇年 P342
長崎県 2話 諫早市 (旧北 高来郡 江の浦 村)	一人の爺。	田んぼから爺 に呼びかける 田螺がいた。	爺に小槌でたたか せると、よい若衆に なる。	原 題： 田螺	『日本昔話 通観』第24 巻長崎・熊 本・宮崎 一九八〇年 p169～170
南高来 郡小浜 町富津	子供のない爺 婆が、神様に 子を願う。	田の帰りに、田 螺が声かけて くる。	小槌で打つと、顔も 背も立派になる。	原 題： 田螺 の聲	同上 p175 ～176
熊本県 3話 阿蘇郡 阿蘇町 (旧黒 川村)		爺が田に水掛 けに行くと、呼 ぶので、水口を 掘ると田螺が 出る。	嫁に打出の小槌で 叩かせると、立派な 男になる。		『日本昔話 通観』第24 巻長崎・熊 本・宮崎 一九八〇年 p170～171
天草郡		爺婆の帰りに、 田螺が声かけ てくる。	爺が小槌で叩くと、 立派な男になる。		同上 p171
阿蘇郡 阿蘇町			池のそばでたにし が娘に自分をつぶ して、池の中に投げ 込んでくれと頼む。 立派な男になる。		同上 p174
宮崎県 1話	子なしの爺と 婆。	ミナ(たにし) が田の畔のわ	たにしは爺に浜へ 連れて行ってもら		『日本昔話 通観』第24

宮崎郡 佐土原 町広瀬 平小牧		きから爺に声をかける。	い、海へ投げ込ませ、いい男となる。		巻長崎・熊本・宮崎 一九八〇年 p 171~174
鹿児島県 1話 川辺郡 川辺町 永田	爺と婆。	爺が山に行くと、たみな(たにし)が声をかける。	たにしは嫁のたもとに入って散歩に行き、池に入ってよい男になる。	原題： たみな息子	『日本昔話通観』第25巻 鹿児島 一九八〇年 P592

分布表から分かれるように、全般的にたどってみると、「たにし息子」の話は主に東北地方、中でも秋田県、岩手県、新潟県などに集中している。

### 三、「たにし息子」に見られる水の呪力と水の女の伝承

まず、誕生の過程からみると、93話のうち、多くが田の神様、水神様、地蔵様、観音様、氏神様などの神に子（或いは田螺）を願うことが分かる。観音、地蔵菩薩は従来子授けの神のイメージがあるが、此処に水神も祈願神になったのは、まず一次的に水神の子授けの徳を確認することができる。しかし、水神のみではなく、詳しく見ると、水は田螺の誕生で直接的な役割をしていた。

例えば、福島県郡山市湖南町三代の例をみると、「子供がほしい」と願かけをすると、後ろの河原で赤子の泣き声がしたり、鳥取県東伯郡東伯町古長の例では、子がほしくて、川でみていたら田螺があったと言っている。また、新潟県長岡市上前島町では、神に祈願したあと、爺が山仕事に行き、河を流れてきたたにしを拾うという例もある。どうも、川から直接申し子が授かるイメージである。それから、子授けの方式からみると、婆の妊娠の過程が興味深い。神に祈ると、関敬吾氏の言うように、「(a) 田螺（蛙・蛇）を拾って子供にする。(b) 妻（夫）の脛（すね）・親指から小さな子が生まれる。」より、後の女房が妊娠したり、直接生んだりする例が圧倒的に多い。水神によって妊娠するという認識はすでに定着したと言えよう。

つぎに注目すべきところは田螺息子の変身の項である。人間になる過程を関敬吾は、「(a) 娘がきらって田螺をたたいたために、(b) 小槌でたたか

れ、(c) 風呂に入っているのを嫁がかきまわし、または (d) 娘が神に祈願したため。」とまとめてある。ここで、興味深いのは、最後の項である。風呂に入ってから、或いは煮立ての湯から、出たら立派な男になる例は、十三例もある。一見みたら、煮立てた水の力かと思うが、実はそうではない。『古事記』から、もしかして其の前から、既に日本には水の禊による清めや治癒、再生などの認識があったのである。折口信夫の「水の女」<sup>注10</sup>や「若水の話」<sup>注11</sup>では、水の女（水の女神）とかかわる清め、若返りの水の力が述べられてあり、明確に指してある。煮立ての水ではなくても、水の清め、再生の効用はある。

例えば、鹿児島県川辺郡川辺町永田の例では、たにしは池に入っただけで、よい男に生まれ変わる。また、新潟県小千谷市真人町三木明の話では、娘がかたつむりの体を洗っていて落とすと、殻が割れ、人間になる。まさに、水の女による水を通しての禊の場面が浮かぶのである。

そして、鳥が水神として田螺の生まれ変わりを助けるのも、間接的に水の再生、治癒の呪力を表していると考えられる。

他に、同じ新潟県の古志郡山古志村虫亀の例では、爺が山で大きなかたつむりを見つけ、連れ帰って、釜の蓋ぐらいになる。餅米を噛んで娘の顔に塗りつける。娘は「顔にできものができた」と寝こんでしまい、やとい人たちは「金をやるから嫁にもらってくれ」と言われてもことわる。かたつむりは、金の代わりに小槌をもらって娘を連れて帰り、娘に、途中の川で「小槌で『いい男になれ』と言って叩いてくれ」と頼む。かたつむりはいい男になり、娘は風呂に入ると顔がきれいになる。

無論、小槌の役割も無視できないが、川で叩いてくれたり、娘が風呂に入ると顔がきれいになったりするのには、一方、水の治癒、清めの役割が窺えると考える。

上記にもあるように、日本の上代神話には、水神による女性の妊娠は完全に例がないが、民間の昔話においては、そういう例が多く出てくる。「たにし息子」の話からもあるように、山形県の最上郡最上町富沢下小路の例をみると、婆が「つぶこでもいいから、子宝がほしい」と水神様に願うと、夢枕に神が立ち、「子を授けるから大切にしろよ」と告げる、妊娠してつぶの子を生むということになり、もっと直接的なのは、恐らく昔話における婿入り譚であると考えられる。他にも、日本昔話では、「桃太郎」や「瓜子姫」など、川上から流れてくる植物からの誕生譚と水辺にある水の女のイメージが加えて、昔話における庶民の中での水の出産、誕生、清めの霊力の考

えが窺えると思われる。

同時に、子供のない夫婦が、神への申し子を水神から水から授かるのは、婆こそ「水の女」の原型ではないかと考えられる。

日本における水の霊力の伝承として、昔話の研究は極めて重要な研究の一環となりうる。

## 注

注1：拙論「日本における出産、誕生と水をめぐる伝承の研究―日中比較を視点として―」『外国語学会誌第四十二号』大東文化大学外国語学会 平成二十四年三月

注2：柳田国男「桃太郎の誕生」『定本柳田国男集第八巻』筑摩書房 昭和三十七年

注3：稲田浩二『演習版・日本昔話タイプ・インデックス』同朋舎出版 一九八八年

注4：横山登美子「異類求婚譚における田螺」『日本民俗学 4(2)』、日本民俗学会 一九五七年 42-49

注5：千野美和子「日本昔話にみる精神性」『仁愛大学研究紀要 6』仁愛大学二〇〇七年 1-11

注6：関敬吾著『日本昔話大成』三 角川書店 昭和五十三年

注7：稲田浩二・小澤俊夫編集『日本昔話通観』同朋舎 全三十一冊 一九七七～一九九八年

注8：『日本昔話大成 1 1 資料編』関敬吾・野村純一・大島廣志 編 角川書店 昭和五十五年九月五日

注9：表を作成するに当たり、主に稲田浩二・小澤俊夫編集『日本昔話通観』（同朋社）の中の類話資料を使った。本文資料を一一確認しなかったため、出典は『日本昔話通観』に載っている巻数とページを表記しているものである。元の出典は、原文資料を確認しなかったため、表記しなかった。元の出典は『日本昔話通観』を参照してほしい。また、関敬吾著『日本昔話大成』三にも一部資料があるが、時間の関係で本論では扱えなかった。

注10：折口信夫「水の女」『折口信夫全集第二巻 古代研究（民俗学篇 1）』中央公論社 一九五五年

注11：折口信夫「若水の話」『折口信夫全集第二巻 古代研究（民俗学篇 1）』中央公論社一九五五年

## 参考文献

柳田国男 監修 日本放送協会 編『日本昔話名彙』日本放送出版協会 昭

和二十三年三月一日

柳田国男 著「桃太郎の誕生」『定本柳田国男集第八卷』筑摩書房 昭和三十  
十七年

関敬吾著『日本の昔話 比較研究序説』日本放送出版協会 昭和五十二年

稲田浩二、小澤俊夫編『日本昔話通観』同朋舎 一九七七～一九九八年

### 第三章 東アジアにおける洗濯する女の伝承

本章では、中国、朝鮮半島、日本における洗濯する女の伝承を概観したものである。

#### 第一節 中国における洗濯する女

『後漢書』禮儀志 上にみると、是月上巳、官民皆潔於東流水上、曰洗濯祓除。とある。また、『説文解字』示部にみると、「祓、除惡祭也。」とある。また、『周禮』春官宗伯第三にみると、「女巫掌歲時祓除衅浴」となり、鄭玄注によると、「歲時祓除、如今三月上巳如水上之類」とある。<sup>注1</sup>このように、「洗濯」という詞は、古来から水辺の禊を指し、また、水辺での沐浴は上巳のみの習俗でなく、中国古代においてももっとも普遍的な禊祓えの形式であった。しかし、劉航は、水辺の沐浴はだんだんより簡単な方式に変わっていたと指摘している<sup>注2</sup>。『玉燭宝典』にみると、こういう変遷についての記載がある。「元日至月晦民并為酺食、渡水、士女悉湔裳酌酒于水湄以為度厄。今世人唯晦日臨河解除、婦人或湔裙。」とある。(杜台卿『玉燭宝典』長沙：商務印書館一九三九年) 劉航はこれについて、元月の禊祓えの方式は、「水濱沐浴」より簡便な方法、「湔裳酌酒于水湄」と変わったと指摘している。また、後の習俗の簡化とともに、元の男女一緒にする「湔裳」、「湔裙」は、隋になってから、女子のみが元月晦日に湔裙するようになった。したがって、「湔裳」、「湔裙」などの禊祓えの方式は女性とより深くかかわっているともいえよう。それとともに、「湔裳」、「湔裙」と意味の近い「浣紗」が同様の民俗的意味を持ち、且つ女性と深くかかわるのも自然なことである。と述べている。即ち、彼は、「浣紗」は禊祓の習俗と深くかかわり、且つことに女性と深い関連があると述べている。実に、「湔裳」、「湔裙」、「浣紗」は女性と緊密にかかわっている。

『北齊書・竇泰傳』にみると、

泰母有娠，期而不产，大惧。有巫曰：“渡河湔裙，产子必易。”泰母从之，俄而生泰。后以“湔裙”、“澣裙”谓妇女有孕至水边洗裙，分娩必易。とある。

また、向柏松は、三月上巳女性の水を浴び、沐浴或いは象徴的な沐浴活動の中で子を祈る行為は、中国の「浴女」母題の伝承であり、これらはみな水に対する生殖崇拝からくるものであると述べている<sup>注3</sup>。



総じて言うと、女性の沐浴、或いは象徴的な沐浴活動（水の中のものと接したり、水の中のものを食べたりするのも含まれる）、洗濯活動（ここでは、衣服を洗うのをさす、例えば、「浣紗」）などは、みな水による禊とかかわり、それはまた、生殖力を負う子授け活動ともかかわると言えよう。本章では、これら水辺の女性の禊祓えの活動を「洗濯」と称し、水辺で子を授かる水の女を「洗濯する女」と称して、中国の神話、伝説における洗濯する女の伝承をたどってみる。

中国の神話、伝説における洗濯する女の例は、その量が大きく且つ出典が明確である。主に、『太平廣記』、『史記』などの古典籍に載せるが、民間の伝説にも多く出ている。量的に多いのみならず、種類のもいろいろに分けられる。

『後漢書・南蠻西南夷列傳第七十六』の夜郎の項に「夜郎者，初有女子浣於遯水，有三節大竹流入足間，聞其中有號聲，剖竹視之，得一男兒，歸而養之。及長，有才武，自立爲夜郎侯，以竹爲姓。」とある。（宋范曄撰、唐李賢等注『後漢書』（全十二冊）第十冊 一九六五年五月 中華書局 卷八十六 南蛮西南夷列傳第七十六 二八四四頁）

女が遯水で水浴びする時、三つの大きな竹が三つ足の間に流れてきたが、中から音が出たので、割ってみると、男の子が生まれた。大きくなると、文武に優れ、自ら夜郎侯となって、竹という字を姓にした。

川辺で洗濯している女が孕む例は特に『太平廣記』に多くみられる。

前章にもあるが、『太平廣記』卷第六十一 女仙六 褒女にみると、

褒女者，漢中人也。褒君之後。因以為姓。居漢沔二水之間。幼而好道。冲靜無營。既笄。浣紗于浸水上。雲雨晦冥。若有所感而孕。父母責之。憂患而疾。臨終謂其母曰。死後見葬。願以牛車載送西山之上。言訖而終。父母置之車中。未及駕牛。其車自行。踰沔漢二水。橫流而渡。直上浸口平元山頂。平元即浸口化也。家人追之。但見五雲如蓋。天樂駭空。幢節導從。見女昇天而去。及視車中。空棺而已。邑人立祠祭之。水旱祈禱俱驗。今浸口山頂有雙轍跡猶存。其後陳世安亦於此山得道。白日昇天。出集仙錄

（『太平廣記』第二冊 李昉等編 中華書局 一九六一年九月 三八一頁、本論の『太平廣記』の例は、すべて 李昉等編『太平廣記』中華書局一九六一年九月より引用した。）

大意は、褒女という女が、漢水と沔水の間に住んでいた。十五歳で嫁ぐ時になり、常に浸水において洗濯をしていた。ある日、雲が集まり、雨が降ってきた。彼女は感応し、孕んだ。親は彼女をとがめ、彼女は苦しくて、

病気になった。臨終になった時、彼女は「私が死んだ後、埋葬する時、牛車で西山の頂上に送ってください。」と言い、死んだ。村の人は寺社を建てて彼女を祭った。水害や旱があった時、彼女に祈ると効能があった。褒女の例は、第二章でもすでに一回引用はしてあるが、これは洗濯する女の典型的な例なので、ここでもう一回あげるのである。

此処で、「雲雨晦冥」という詞である。「雲雨」は古代から男女の情、交わりを意味するが、此処では、また、水神をも意味するのではないか。水辺で洗濯する女が雲と雨に感じたのは、実際水、水神との接触を意味すると考える。

『太平廣記』卷第八十一 異人一 梁四公

勃律山之西。有女國。方百里。山出台隤之水。女子浴之而有孕。其女舉國無夫。出梁四公記（『太平廣記』第二冊 五二〇～五二一頁）

勃律山の西には女人國があり、周囲は百里になる。山より石隤之水という川が流れ出る。女は河水の中に入り浴びたら、妊娠する。全国には男がいない。

『太平廣記』卷第四百一十八 龍一 張魯女

張魯之女。曾浣衣于山下。有白霧濛身。因而孕焉。恥之自裁。將死。謂其婢曰。我死後。可破腹視之。婢如其言。得龍子一雙。遂送於漢水。既而女殯於山。後數有龍至。其墓前成蹊。出道家雜記（『太平廣記』第九冊 三四〇一～三四〇二頁）

張魯の娘が嘗て山の下で衣服を洗っていたが、白霧が身の周りを覆い、孕んだが、其の後、恥じて自殺しようとした。死ぬ前に、侍女に「私が死んだら、お腹を開けてみよ」と言った。侍女が言われたとおり、開けると、中から二匹の龍の子が出たので、漢水に放し、娘は山の中に埋葬した。後に、多くの龍たちが集まり、その墓の前は溪流になった。

『太平廣記』卷第四百二十四 龍七

温媪

温媪者。即康州悅城縣孀婦也。績布爲業。嘗於野岸拾菜。見沙草中有五卵。遂收歸。置績筐中。不數日。忽見五小蛇。殼一斑四青。遂送於江次。固無意望報也。媪常濯浣於江邊。忽一日。見魚在水跳躍。戲於媪前。自爾爲常。漸有知者。鄉里咸爲龍之母。敬而事之。或詢以災福。亦言多微應。自是媪亦漸豐足。朝廷知之。遣使徵入京師。至全義嶺。有疾。却返悅城而卒。鄉里共塋之江東岸。忽一夕。天地晦暝。風雨隨作。及明。移其冢於西。而草木悉於西岸。出嶺表錄異

『太平廣記』卷第四百二十五 龍八

長沙女

長沙有人忘姓名。家江邊。有女下渚澣衣。覺身中有異。後不以為患。遂妊身。生三物。皆如鰕魚。女以己所生。甚憐之。著澡盤水中養。經三月。此物遂大。乃是蛟子。各有字。大者爲當洪。次者名破阻。小者曰撲岸。天暴雨。三蛟一時俱去。遂失所在。後天欲雨。此物輒來。女亦知其當來。便出經日乃去。聞其哭聲。狀如狗嗥。出續搜神記

長沙に名は忘れたが、ある人がいた。家は川辺にあった。娘の一人が川辺で洗濯する時、感じて孕み、生まれたものは蝦か魚のようなものであった。が、自分が生んだので、とてもかわいがった。樽に入れて育てるが、大きくなったら、蛟だということが分かった。(後略)

『太平廣記』卷第四百五十 狐四

斬守貞

霍邑古呂州也。城池甚固。縣令宅東北有城。面各百步。其高三丈。厚七八尺。名曰囚周厲王城。則左傳所稱萬人不忍。流王于彘城。即霍邑也。王崩。因葬城之北。城既久遠。則有魅狐居子。或官吏家。或百姓子女姿色者。夜中狐斷其髮。有如刀截。所遇無知。往往而有。唐時。邑人斬守貞者。素善符呪。爲縣送徒至趙城。還歸至金狗鼻。傍汾河山名。去縣五里。見汾河西岸水濱。有女紅裳。浣衣水次。守貞目之。女子忽爾乘空過河。遂綠嶺躡虛。至守貞所。手攀其笠。足踏其帶。將取其髮焉。守貞送徒。手猶持斧。因擊女子墜。從而斫之。女子死則爲雌狐。守貞以狐至縣。具列其由。縣令不之信。守貞歸。遂每夜有老父及媪。繞其居哭。從索其女。守貞不懼。月餘。老夫及媪罵而去。曰。無狀殺我女。吾猶有三女。終當困汝。於是遂絕。而截髮亦亡。出紀聞。(『太平廣記』第十冊)

『太平廣記』卷第四百七十 水族七

薛二娘

唐楚州白田。有巫曰薛二娘者。自言事金天大王。能驅除邪厲。邑人崇之。村民有沈某者。其女患魅發狂。或毀壞形體。蹈火赴水。而腹漸大。若人之妊者。父母患之。迎薛巫以辨之。既至。說壇於室。臥患者於壇內。旁置大火坑。燒鐵釜赫然。巫遂盛服奏樂。鼓舞請神。須臾神下。觀者再拜。巫奠酒祝曰。速召魅來。言畢。巫入火坑中坐。顏色自若。良久。振衣而起。以所燒釜覆頭鼓舞。曲終去之。遂據胡牀。叱患者令自縛。患者反手如縛。敕令自陳。初泣而不言。巫大怒。操刀斬之。砉然刀過而體如故。患者乃曰。伏矣。自陳云。淮中老獺。因女浣紗悅之。不意遭逢聖師。乞自此屏迹。但

痛腹中子未育。若生而不殺。以還某。是望外也。言畢嗚咽。人皆憫之。遂秉筆作別詩曰。潮來逐筆。詞翰俱麗。須臾。患者昏睡。翌日乃釋然。方說。初浣紗時。有美少年相誘。因而來往。亦不自知也。後旬月。產獺子三頭。欲殺之。或曰。彼魅也而信。我人也而妄。不如釋之。其人送於湖中。有巨獺迎躍。負而沒子。出通幽記（『太平廣記』第十冊）

また、第一章でも少し触れた例ではあるが、

珞巴族神話では、天女麥冬海依が沐浴するとき、天河の水を飲み、一人の男の子を生んだという。また、土家族の神話では、「卵玉娘娘」は河辺で八個の桃と一朵の桃花を飲み込み、三年六ヶ月孕み、八人の息子と一人の娘を産んだ。それからこの世には人間ができたという。（王憲昭「中国少数民族感生神话探析」『理論學刊』二〇〇八年六月）

『山海經』第七・海外西經

女子國在巫咸北，兩女子居，水周之。一日居一門中。郭璞云：有黃池，婦人入浴，出即懷妊矣。若生男子，三歲輒死。（袁珂校注『山海經校注』上海古籍出版社一九八〇年七月 二二〇頁）

女子國は巫咸の北にあり、二人の女が住み、水が二人をめぐっている。郭璞注では、黃池があり、婦人が入浴すると、出たらすぐ孕む。もし、男の子を生んだら三歳になると死ぬ。

『通典』卷第一百九十三 邊防九

又聞西有女國、感水而生。（唐杜佑撰『通典』校點本五 中華書局 一九八八年十二月五二六六頁）

又西に女國あるそうである。水に感じて生む。

『通典』卷第一百八十六邊防二 東夷下 東沃沮

又言有一國亦在海中，純女無男人。或傳其國有神井，闕之輒生子。（唐杜佑撰『通典』校點本五 中華書局 一九八八年十二月 五〇二一頁）

海中に女人國あって、男はいない。あるいは伝える話によると、その國に神井あって、これを闕うになれば子を生むと云う。

『梁書』卷五十四 列傳第四十八 東夷

扶桑東千餘里有女國，容貌端正，色甚潔白，身體有毛，長髮委地，髮長委地，至二、三月，競入水則妊娠，六七月產子。女人胸前無乳，項後生毛，根白，毛中有汁，以乳子，一百日能行，三四年則成人矣”（唐姚思廉 撰『梁書』 北京：中華書局一九七三年五月 八〇九頁）

扶桑東の方、千余里に女國ある。容貌端正にして、色甚だ潔白である。身体に毛ある。長髮地に至り、二三月になると、競いで水に入ると、即ち

妊娠する。六、七月に子を産む。女人胸前に乳なく、項の後毛があり、根は白く、毛中に汁ある。もって子に乳する。一百日経つと、よく歩き、三、四年なると即ち成人になる。

外、『魏志』、『淮南子』などにも女人国の話があるが、ここで詳しくは挙げない。

そして、水辺で「浣紗（浣衣）」する女が男性と出会い、縁が結ばれる例も実に多い。第一章の中国における水の女の伝承をみると、漢水女神の伝承のところで、阿谷處女と孔子の弟子子貢の出会い、『列仙傳』の中の江妃二女と鄭交甫との出会いなどはみな川辺の洗濯する女と男の出会いである。ここで詳しく扱わないが『浣紗記』の中の西施と范蠡の出会いも西施の洗濯するところであった。苧蘿山中の谷川で、紗を洗っていた西施に、范蠡が偶然出会い、お互いに一目惚れし、西施は婚約の証として、紗を范蠡に捧げる。無論、後に、二人は結ばれなかったが、洗濯場で二人の縁がはじまったのは否定できない。

洗濯する女は、洗濯する際、果物などを食べたり、服を洗ったり、入浴したり、水と感応したり、延いては、水を窺ったり、水辺にいただけでも、子を授かったり、縁が結ばれたりすることが分かる。それは、みな洗濯する女と深くかかわっており、其の淵源には、出産、誕生を助ける水、豊饒をもたらす水の力が窺える。

## 注

注1：鄭玄注、賈公彦疏『周禮注疏』（『十三經注疏』）中華書局一九八〇年

注2：劉航「西子經典形象与祓禊之俗及魏晋隋唐的女性觀」『四川大学学報』二〇一一年第四期

注3：向柏松「浴女母題的伝承与文化内涵的演變」『中南民族大学学報』二〇〇三年第六期

## 参考文献

李昉等編『太平廣記』中華書局 1961 年

## 第二節 朝鮮半島における洗濯する女

朝鮮半島の洗濯する女の神話、伝説は日本の洗濯する女の伝承と共通するところが多いが、その上にまた、朝鮮特有の特徴が見られる。次のように四種類分けてまとめてみる。

### ① 僧侶誕生譚の中の洗濯する女

洗濯する女と子授かりの中でもっと目立つのが僧侶たちの誕生譚である。まず、新羅末期の有名な僧侶であり、風水師でもある道詵の誕生説話をみてみよう。初出である『世宗実實地理志』では、

#### 全羅道

靈異郡人諺傳高麗時人崔氏園中有一瓜長尺餘一家頗異之崔氏女潛摘食之歆然有娠彌月生子其父母責以無人道而生兒置之竹林居數七日女往視之鳩來覆翼之告于父母往見異之撫養及長 髮為僧名道詵入唐傳一行全禪師地理之法而還九踏山觀水多有神驗後名其地曰鳩林又曰飛鷲按崔惟清 撰光陽玉龍寺碑以詵母為姜氏此則稱崔氏未知孰是(『世宗實錄地理志』四八七頁 韓國學文獻研究所『全國地理志』韓國地理誌叢書 亞細亞文化社 一九八三年二月一〇日 四八七頁)とあり、洗濯のモチーフはみられないが、書籍と説話の中ではほとんど洗濯のモチーフがある。

例えば、『旬五志』に、

#### 道詵國師

道詵國師靈巖人母未嫁時冬月浣濯於山下川流忽有青瓜一枚從流而下女喜之即喫之因有娠而生其家以為不祥棄之於林下羣鳩來覆翼之其家異之而遂収之是為道詵其後人名其里曰鳩林也世傳道詵入唐傳得一行術學 見淨林記

とある。(『旬五志』原本影印 韓國古典叢書(復元版)IV. 散文類古代評論・隨筆選 三七九頁大提閣 一九七五年年五月三十日)

道詵の母が、まだ嫁にも行ってない頃、冬のある日、川へ洗濯にいったところ、流れてくる瓜を食べ、孕んだ。家族は不吉なことだと思い、林の中に捨てたが、鳩たちが翼で覆いのを見て、不思議だと思い、育てる。後日、道詵は唐まで行き、術学を伝えたということになるが、ここでも、瓜を食べて孕むが、それは冬、洗濯に行ったころ、発生したことである。

また、京畿道甕津郡德積島にも伝承がみられる。

『傳説誌』をみると、

#### 346. 퇴고씨네에사연

덕적도(德積島)에는뜰에나가서밥먹기전에밥을떠서버리는풍습이있는데이풍습에전해내려오는전설이있다.

옛날덕적도에한여인이살고있었는데마음씨도착하고일도열심히하여동네

사람들은 그 여인을 입이 닳도록 칭찬하곤 하였다.

그러던 어느 날, 그 여인이 빨랫터에서 빨래를 하고 있는데 위쪽에서 오이가 떨어지고 있는 것이 보였다. 그 여인은 마침 배가고팠으므로 얼른 그 오이를 건져 먹었다.

그후로 그녀는 임신을 하게 되었다. 그 여인은 매우 당황하고 이상하게 생각했으나, 달이지날수록 그 여인의 배는 불러만 갔다. 마을 사람들은 기이한 일이라고 말하면서 한편으로는 그녀가 다른 남자와 정을 통한 것이 아닌가 하고 그녀를 의심하게 되었다. 어느덧 만삭(滿朔)이 되어 아이를 낳게 되었다.

그리하여 그 여인이 관가에 가서 신고를 하니 아비없는 자식인지라, 오이를 먹고 아들을 낳았으니 오이(瓜)자를 써서(瓜道仙)이라 하게 되었다.

도선(道仙)이나 이가 들어 점점 자라니 늘 상아비없는 자식이라 놀림을 받고 괴로워하여 어머니는 도선을 먼 중국(中國) 땅으로 보낼 결심을 했다.

후략

(文化公報擔當官室『傳説誌』京畿出版社 一九八八年八月五日  
五一三～五一五頁)

大意は、徳積島のある女が洗濯場で洗濯をしていたら、川上から胡瓜が流れてくるのを食べたらず、孕むことになり、生んだが、役府に申告するとき、父なしの子なので、胡瓜を食べて生んだ子だと思い、「瓜道仙」と呼ぶことになったという話である。

この道説國師の誕生譚は僧侶誕生譚の中で、もっとも代表的であり、瓜子姫、桃太郎の類話のように、各地に分布している。そして、食べるのも、瓜、胡瓜、マクワウリ、桃などいろいろある。全羅南道・高興郡・占岩面一話、全羅南道咸平郡新光面一話、全羅南道・和順郡・道岩面一話、清豊面二話、道谷面一話、京畿道・甕津郡一話、春陽面一話など多数ある。(『韓國口碑文学大系』6-3<全羅南道 高興郡篇>韓國精神文化研究室語文研究室編纂、高麗苑一九八四年十二月三〇日、『韓國口碑文学大系』6-2<全羅南道咸平郡篇>語文研究室編 正和印刷文化社 一九八一年十一月三十日、『韓國口碑文学大系』6-10<人文研究室語文分野>高麗苑一九八七年十月三〇日などにより、まとめた。)

上記から分かるように、道説の誕生譚は隨筆集のみでなく、全羅南道など各地に分布している。

無學大師は高句麗末、朝鮮初期の僧侶であり、李太祖の王師でもある。無學大師の誕生譚も洗濯する女、瓜と直接かかわっている。例を挙げると

忠淸南道 保寧郡 대천읍 설화 35

오이먹고 잉태된 무학대사

우리나라에 전설루시누구던지다아입에오르는무학대사얘기.

무학대사에 어머니는 본래 양반 집 딸 루서시녀들 허구 빨래를 허러 내 갈루가다가 시녀들은 다아도 망하구 혼자만 익게 되는다. 오이 하나가 떠 내려와.

물외 하나가 떠 내려와서 그 물외를 집어서 먹었더니 결국 이것이 애기가 됐어.

잉태했는데. 시집을 간 첫날 밤에 애기를 낳더라이게여.

후략 (後略)

(韓國精神文化研究室語文研究室編纂『韓國口碑文學大系』4-4<忠淸南道保寧郡篇>高麗苑 一九八三年九月三十日)

大意をみると、無學大師の母は、兩班の家の娘であったが、ある日、侍女たちと川へ洗濯に行くことになったが、侍女たちがみんな逃げ去り、一人になった時、胡瓜が流れてきたので、拾い、食べたらずむことになったという話である。

また、高句麗末期仏教の高僧であり、恭愍王の王師である懶翁禪師の出生譚も洗濯する女、瓜とかかわっている。懶翁禪師は前述の無學大師の先生でもある。その出生譚もいろんなバージョンがあるが、その一つは、阿氏の夫人鄭氏は十一月のある日、河に行き、洗濯をしていたところ、偶然瓜一つが水に流れてくるのを、可笑しいと思い、拾って食べた。その日から、ずむ気がし、懶翁を生んだという。

(영덕군지편찬위원회編集『盈徳郡誌』下 영덕군 2002 年 3 月 三百九十三頁より、訳した。)

また、高句麗中期の眞覺國師の誕生譚もある。

一〇九 車泉의 오이

지금으로부터 팔백년전, 전라남도(全羅南道) 화순(和順) 고을에 배(裴) 씨라고 하는 한이방(吏房)이 살고 있었다고 한다.

그에게는 자식이라고는 딸 하나가 있었을 뿐이어서 그들 내외는 아들 하나가지 지 못하는 쓸쓸함을 다만 딸에게서부터 마음의 위로를 받으면서 날이 갈수록 어여 빠지는 딸을 보는 것이 그들 내외에게는 단 하나의 즐거움이 있었다.

그 딸의 나이스 무살이 되던 해 겨울, 아침 일찌기 그 처녀는 물동이를 이고 지금의 화순읍 남산(南山) 기슭에 있는 “차천(車泉)”이라는 우물에 물을 길으러 갔었다. 물을 길으려고 보니까 그 우물 위에는 뜻밖에 오이 한 개가 떠 있었다.



몹시 추운 겨울에 때아닌 오이가 있는 것을 이상히 생각하였으나 문득 그 오이가 먹고 싶어서 건져서 먹고 말았다.

그 후 몇 달 되지 않아서 자기 몸이 이상해지는 것을 깨달았다. 처녀의 몸으로서 그러한 일이 있는 것은 기막힌 일이었으나 부끄러워서 누구에게 다 말한 마디 못하고 혼자서 가슴만 태워오던 중, 어느 날 배씨 처녀의 어머니는 자기 딸의 몸이 이상한 것을 보고 깜짝 놀랐다. 이리하여 배이방 내외는 딸과 좋아하는 남자가 있는 줄만 생각하고 문초도 하고 달래기도 하면서 사실을 물어보았으나, 딸은 ‘차천’으로 물을 길으러 갔을 때 오이 한 개가 있기에 집어먹었더니 그 후부터 이상하게도 잉태하였다는 사실을 말하면서 자기 몸의 깨끗함을 맹세하였다.

배씨 처녀는 열 달 만에 옥동자를 낳았으나 배씨 내외는 딸이 처녀의 몸으로서 아이를 낳았다는 것은 죄악이라고 생각하여 사람들이 볼까 두려워서 탄 집을 하나 장만해서 거기서 아이를 기르도록 하였다. 그리하여 한 보름쯤 지났을 때, 배씨 내외는 그래도 안심할 수가 없어서 밤중에 어린 아이를 읍내서 남쪽으로 약 2 리가량 떨어진 수풀 속 큰 정자나무 밑에 갖다 버리고 왔었다.

(後略)

檀紀 4267年 1月 和順郡邑內 朴道順氏 談

(崔常壽 著『韓國民間傳説集』通文館檀紀四二九一年三月十五日一六五～一六九頁)

大意は、全羅南道和順に裴氏の吏房がいたが、そのうちには、娘一人がいた。娘が二十歳の年、「車泉」という井戸に水汲みに行ったが、井戸の水に胡瓜が浮かんでいるのを見て、それを食べ、孕むことになり、生んだ子は、後日、眞覺國師となったという話である。

井戸は河辺と同じく、古代から女性の洗濯場としても使われていたので、ここで、洗濯の行為がなくても、実は同じ脈略に属するのである。

上記のほかに、僧侶ではないが、黎勇士という人の英雄誕生譚も『旬五志』にみえる。

黎勇士の母が洗濯に行った時、瓜のような大きい卵が流れてきて、置いておいたら、中から男の子が生まれた説話である。

黎勇士

世傳穢國一村嫗澣衣於溪水有一卵浮來其大如  
瓠村嫗異之取置其室俄而一男子破殼而出形貌  
非常村嫗因養之年 六七身長八尺顔面黎異仍  
以黎為姓是時國中有一惡白虎白晝橫行傷人甚多

一國憂之莫有制者勇士忿然曰吾必殺此獸以除生靈之害也聞者不信俄有一 如雷陰風颯至一大斑虎自山而下咆哮磨牙跳躍而進勇士奮躍高出虎上張拳一打虎即碎頭而斃後國君鑄萬鈞鐘置之前欲徙之壯士數千人引之不動勇士一舉而負國君壯而奇之常留之在側以為上客後莫知其所終(『旬五志』原本影印 韓國古典叢書(復元版) IV. 散文類古代評論・隨筆選 大提閣一九七五年五月三十日 三七二頁)

② 氏祖誕生譚の中の洗濯する女

次は、魚氏始祖誕生の説話である。

魚氏の始祖

옛날, 어느곳에 한아낙네가 어느날강가에 나가 빨래를 하고 있었는데 물속에 서 큰잉어(鯉)가 꼬리를 살랑살랑 치면서 떠오르더니 빨래하는 아낙네 곁으로 가까히 오자마자 버란간 물위로 펴쩍 뛰어 올라 꼬리로 그 아낙네 허리를 힘껏 쳤다. 뜻밖에 놀란 아낙네는 “아이고 머니 아이고 머니!” 하며 어리둥절하고 있을 동안에 그 잉어는 또 다시 물속으로 들어가 버리고 말았다.

그 아낙네는 그 이튿날부터 몸에 태기가 있어 달이 차 아기를 낳으니 귀여운 옥동자였다. 아낙네는 대단히 기뻐하였다.

이리하여 아낙네는 물속의 고기가 허리를 친 뒤로부터 태기가 있어 어린애를 낳았으므로 그 아이의 성(姓)을 어(魚) 씨라고 하였다. 이리하여 어씨의 시조가 되었다고 한다.

檀紀四二七五年八月 忠州郡 忠州邑 魚(失名)氏 談

(崔常壽著『韓國民間傳説集』通文館 檀紀四二九年三月十五日八九~九十頁)

大意は、女が川辺で洗濯している時、大鯉がやってきて、腰を強く打ち、また、水の中に入っていった。次の日から、女は妊娠し、その後、きれいな男の子を生むということである。(後略)

また、尹氏始祖尹辛達についての誕生説話であるが、次のような例がある。

坡平 尹氏 龍淵

지금으로부터 구백이십년전, 어느날 여름이른 아침이었다. 한노파가 파주군(坡州郡) 파평면(坡平面) 놀로리(訥老里)에 있는 못가에서 빨래를 하

고있을즈음, 동쪽에서 솟아오르는 아침 햇빛 같이 찬란한 빛이 못가운데서 비치고 갑자기 안개가 못을 덮어지척을 분간하기 어렵더니, 이상하게도 고운 상자 하나가 물위에 떠있는 것을 보았다. 노파는 곧 그 못속에 들어가서 그 상자를 건져가지고 나와서 열어보니까 예쁜 옥동자 하나가 들어있었다.

그리하여 노파는 하던 빨래를 그만두고 집으로 데리고 가서 고이 길렀더니, 잘 자라 장성한 후 고려조(高麗朝)에 등관하여 대사가 되었다. 그 성이 윤(尹)이 됨은 빨래를 하다가 못에서 건진 노파의 성이 윤(尹)씨였으므로 윤이라고 부르게 되었고, 본관(本貫)을 과평(坡平)이라 과한 것은 그곳이 과평현(坡平縣)이었던 까닭이라고 한다. 이 못에는 그 자손들이 “과평윤씨 용연(坡平尹氏 龍淵)”이라고 하는 비석과 제단을 세우고 해마다 봄, 가을에 이 못에서 제사를 지낸다고 하다.

檀紀四二六七年八月 坡平郡 坡平面 尹主事談(崔常壽 著『韓國民間傳説集』通文館 檀紀四二九一年三月十五日 九~十頁)

大意を言うと、老嫗が坡州郡坡平面訥老里にある池へ行き、洗濯していると、燦爛と輝く光が池の中から光り、大霧が池面を覆う。その後、金色の箱が水面に浮かんできたので、とってみると、中には玉のようなかわいい男の子が入っていた。(後略)

### ③ 洗濯する女と君王との水辺の縁結び

洗濯する女は君王たちと縁が結ばれたり、結婚して王后になったりする。この点は、『古事記』の中の雄略天皇と赤猪子との出会いと極めて似ている。まず、朝鮮の開国王である李成桂と洗濯する女との伝説である。

王妃 康氏

함남(咸南) 함주(咸州) “호연천好缘泉”에 대하여서도 이러한 전설이 있으니, 그 다른 점은, 청주(淸州) 한씨(韓氏) 한경(韓卿)의 둘째 딸이, 자기 언니가 호연천 냇가의 버들그늘에서 청룡(靑龍)을 품에 안은 꿈을 꾸었다는 꿈이야기를 듣고서 그는 팔승포(八升布) 치마 한감을 자기 언니에게 주고 그 꿈을 샀다.

그리하여 그날 호연천-당시는 호련천(湖蓮川)--냇가에 나가 빨래를 하다가 이태조께 물을 떠서 물을 떠서는 버들잎을 띄워주었다고 하며, 뒷날 그가 신의왕후(神懿王后)인 한씨라고 하는데, 이태조께서 등극하신 뒤, 그내에서 좋은 인연이 되었다 하여 호련천(湖蓮川)을 호연천(好缘川)이라고 쳐 부르게 하였다고 한다.

(崔常壽著『韓國民間傳説集』通文館檀紀四二九一年三月十五日 315~317)

頁)

咸南咸州好缘泉にはこういう伝説がある。清州韓氏韓卿の二番目の娘が姉が好缘泉の川辺で青龍を抱く夢をみたという話を聞き、八升布一匹で夢を買った。そして、其の日、好缘泉即ち当時の湖蓮川の川辺で洗濯をしているとき、李太祖に水を汲んで飲ませたということである。それが縁になり、後日、彼女は神懿王后になった。

また、高麗太祖の伝説もある。

佛宇 興龍寺

在錦江津北高麗太祖莊和王后吳氏祖富佗父多憐君世家州之木浦多憐君娶沙干連位女德交生后后嘗夢浦龍來入腹中驚覺以語父母共異之未幾太祖以水軍將軍出鎮羅州泊舟木浦望見洲上有五色雲氣至則后浣布太祖召幸之以側微不欲有娠宣于寢席后即吸之遂有娠生子是為惠宗面有席紋世謂之禰主於其地建大寺曰興龍寺前有泉名浣絲泉諺云即吳氏浣布之泉（『新增東國輿地勝覽』 신중동국여지승람:국역古典國譯叢書卷三十五민족문화추진위원회一九六九年 一六四頁）

この例も、莊和王后が洗濯する時、高麗太祖に出会い、縁結びになり、惠宗を生むことになったということである。

また、『伝説誌』をみると、

京畿道果川市

六七、관악산 (冠岳山) 의 왕후묘 (王后墓)

관악산 (冠岳山) 은 조선시대 과천군 (果川郡) 의 진산 (鎭山) 이었다.

이 이곳 관악산 (冠岳山) 의 산중턱에 바위가 하나 있는데, 모두들이 것을 ‘왕후묘 (王后墓)’ 라 부르고 있다.

이에 대해서는 다음과 같은 전설이 전해져 온다.

조선시대의 열번째 임금인 연산군은 숲이 울창하고, 경치가 아름다운 관악산 (冠岳山) 으로 사냥을 즐겨 다녔다.

하루는 임금이 내시 몇 사람을 데리고 사냥을 나섰는데 막산기슭을 올라 내물을 건너려 할 때였다. 연산군은 어찌 된 일인지 내를 건널 생각은 않고 저쪽편에 있는 빨래터만을 바라보고 있으므로 기다리다 가지 친내시가 마침내 말문을 열었다.

“전하, 어인 일로 내를 건너지 않으시옵니까?”

“갑자기 사냥을 하고 싶은 생각이 가셨도다.”

“일기가 화창하여 사냥하기가 더없이 좋은 날씨인데 어인 일로 사냥을 하고 싶지 않으시옵니까?”

내시는상감의마음을도무지알수가없었다.

그때연산군은저쪽빨래터를가리키며말했다.

“그대들의눈에는저기서빨래하는처녀가어떻게보이느냐?

미인으로보이느냐? 아니면박색으로보이느냐? 어서말해보렴다.”

“전하, 비록촌락의처녀이오나천하의절색인줄아뢰오.”

“역시과인(寡人)의눈이틀림없구나.”

연산군의입가에는만족스러운웃음이돌았다. 한편빨래하던처녀는웬사냥군대여섯명이자기를힐끗힐끗쳐다보는것이무엇인가심상치가않아, 두려운생각이들어서하던빨래를주섬주섬챙겨가지고급히집으로걸음을재촉하였다.

마침멀리서그것을본연산군은

“여봐라, 저처녀의뒤를따아가집을알아보고오렴다. 과인(寡人)이오늘밤은호젓한촌락에서아리따운처녀와더불어회포를풀어보아야겠다.” 하고, 처녀를유심히눈여겨보는것이였다.

후략

(이용완과천동 4943)

(京畿道 加平郡 文化公報擔當官室『傳説誌』九十一~九十四頁  
一九八八年八月五日 京畿出版社)

朝鮮の第十番目の君王である燕山君も川辺で洗濯している少女に出会い、結ばれることになったという。

#### ④ 高麗歌謡の中の洗濯する女

また、君王ではないが、普通の男女の洗濯場での縁結びの話もある。それは、高麗歌謡の中にも出ている。

『高麗史』卷七十一、樂志俗樂條に、次のような濟危寶歌についての記録がある。

婦人以罪徒役濟危寶 恨其手爲人所執 無以雪之 作是歌以自怨

李齊賢作詩解之曰浣紗溪上傍垂楊 執手論心白馬郎 縱有連愁三月雨 指頭何忍洗餘香

大意をいうと、ある婦人が罪を犯し、濟危寶で徒役をやっている女がある人に手を攫まれ、その恥辱を洗えないことに悩み、この歌を作り、自分自身を恨んだ。李齊賢は詩をつくり、この歌を外の意味に解釈した。「柳落ちる河で布を洗っていたら、白馬に乗ってきた若君と心を交わしながら攫まれた腕、屋根に流れ落ちる百天の雨でも、この指先の余香を洗うことはできない」というように、元の意味とちょっとずれて解釈しているが、河

で洗濯していた女と男の縁に関する話には違いない。高麗時代に作られたこの歌はもう一回洗濯する女の水辺での男との出会いを見せている。(『高麗史』ソウル：亜西亜文化社一九七二年より、訳した。)

樂章歌詞にみると、雙花店の第三段落は、  
드레우므레므를길라가고신딘  
우뭇용(龍)이내손모글주여이다  
이말스미이우물밭기나명들명  
다로러거디러췌고맛간드레바가네마리라호리라  
더러똥성다리러디러다리러디러다로러거디러다로러  
기자리에나도자라가리라  
위위다로러거디러다로러  
기잔디기터똥거츠니업다

(『原本國語國文學叢林 樂章歌詞』大提閣一九八八年 四十八頁)とある。井戸に水汲みに行った女が井戸の龍に手を攫まれた話であるが、無論比喩的意味も有りそうだが、男女の出会いを洗濯、水と深くかかわっている水辺に設定しているのは、当時、既に、洗濯場として河辺、井辺は男女の出会いの場所となっていたのが窺える。こういう風景は、神話、伝説、歌謡、また、次の古絵の中でも見られる。

⑤ 古絵の中の洗濯する女

朝鮮後期の有名な画家である金弘道と申潤福の絵を見てみよう。

絵一、金弘道「洗濯場」(所蔵：국립중앙박물관)



김홍도 '빨래터'. 여자들이 빨래를 하는 개울에서 한 선비가 부채로 얼굴을 가린 채 엿보고 있다. 국립중앙박물관 소장

昔から洗濯は主に女性の仕事になっている。金弘道の絵「洗濯場」をみると、女性たちが話し合ったりしながら洗濯するのを、男が盗み見ている。

絵二、申潤福「洗濯場の男」（所蔵：간송미술관）



신윤복 '빨래터의 사내', 목욕을 하고 난 뒤 머리를 매만지는 여성의 가슴을 젊은 무반이 뚫어지게 바라보고 있다. 간송미술관 소장

申潤福の「洗濯場の男」は、寄って行く若い武班が沐浴した女の裸の上半身を見ている。

洗濯場は神話的にも、風景的にも性的な風景が演出しているのは、否定できないのである。

朝鮮半島に於ける洗濯する女に関する古代の伝説、説話、歌謡、美術作品はかなり多いことが分かる。上記の他にも、文献や口頭伝承の中では、『春香傳』の根源説話になっている「박색터설화」や朝鮮の有名な詩人、妓女である黄眞伊の出生譚には、みなその母が洗濯する時、男に出会い、縁が結ばれ、妊娠したことが伝わっている。洗濯する女は神話、伝説から実生活の中まで、その子授け、縁結びの場になっている。それに、洗濯する女は水、水神の豊饒をもたらす霊力を受け、妊娠するイメージもあり、それらの物語はまた、実生活の洗濯場の風景と重なり、洗濯する女のイメージを豊富にさせた。

#### 参考文献：

文化公報擔當官室『傳説誌』京畿出版社一九八八年八月五日

崔常壽 著『韓國民間傳説集』通文館 檀紀四二九一年三月十五日

### 第三節 日本における洗濯する女

日本において洗濯の歴史や洗濯と女性の関係について論じた研究は一部あるが、洗濯する女と水辺で禊を通しての子授けや縁結びなどを直接論じた研究は未だ見つかっていない。

洗濯の歴史については、例えば、落合茂の『“洗う”文化史話：入浴と洗濯のあゆみ』<sup>注1</sup>などがその代表的な研究である。また、洗う行為と女性の関係についての先行研究をいくつかみても、

本田和子は、洗う女は、古代の産婆が、「洗う女」として、生まれた赤児をこの世のものとする力を持っているのにみられるように、重要な機能を持っている<sup>注2</sup>と述べている。すなわち、折口信夫の「水の女」<sup>注3</sup>研究の系譜を続け、水の女を禊を通して貴種誕生を助ける存在として見ているのである。また、勝浦令子は、古代では洗濯は日常的に汚れた衣服を清潔にする為というよりも、むしろ汚れをはらう為の呪術的行為という方に力点がおかれて捉えられ、「血の染みを洗いおとす力は女性だからこそ持つことができる力とされていたから、洗濯が乙女の仕事となっていたのではないだろうか」と述べている。<sup>注4</sup>

日本での洗濯する女の伝承を探ってみると、中国や朝鮮半島ほど用例は多くなかったが、それは上代の神話から既に始まり、近世まで絶えず伝承されてきたのである。

次に用例をみてみよう。

まず、『古事記』における洗濯する女の例を挙げると、

引田部の赤猪子

亦一時、天皇遊び行でまして、美和河に到りましし時、河の邊に衣洗へる童女有りき。其の容姿甚麗しかりき。天皇其の童女に問ひたまひしく、「汝は誰が子ぞ。」ととひたまへば、答へて白ししく、「己が名は引田部の赤猪子と謂ふぞ。」とまをしき。爾に詔らしめたまひしく、「汝は夫を嫁はざれ。今喚してむ。」とのらしめたまひて、宮に還り坐しき。故、其の赤猪子、天皇の命を仰ぎ待ちて、既に八十歳を経き。是に赤猪子以爲ひけらく、命を望ぎし間に、已に多き年を経て、姿體瘦せ萎みて、更に恃む所無し。然れども待ちし情を顯さずては、悞きに忍びず、とおもひて、百取の机代物を持たしめて、參出て貢獻りき。然るに天皇、既に先に命りたまひし事



を忘れて、其の赤猪子に問ひて曰りたまひしく、「汝は誰しの老女ぞ。何由以參来」（『古事記』下巻 日本古典文学大系1 倉野憲司校注 岩波書店 昭和三十三年六月五日 雄略天皇 引多部の赤猪子 三百十一頁）

雄略天皇の求婚譚の一つで、天皇は美和河のほとりで衣服を洗っている引田部赤猪子を見かけ、近く宮廷に召し出すことを約束するが、天皇はその約束を忘れてしまい、八十年過ぎてしまう。赤猪子は、その気持ちを訴えようと、天皇のもとに参ずる。天皇はかつての約束を思い出し、歌をもって慰めようとする。これに対して、赤猪子は同じく歌をもって天皇を祝福し、贈り物を下賜されて帰って行く。二人は最終的に結ばれなかったが、因縁のある話である。

また、吉野の例をみてみよう。

天皇、吉野の宮に幸行でましし時、吉野川の濱に童女有りき。其の形姿美麗しかりき。故、是の童女と婚ひして、宮に還り坐しき。後更に亦吉野に幸行でましし時、其の童女の遇ひし所に留まりまして、其處に大御呉床を立てて、其の御呉床に坐して、御琴を弾きて、其の嬢子に（まひ）為しめたまひき。爾に其の嬢子の好くまひへるに因りて、御歌を作みたまひき。其の歌に曰ひしく、後略（『古事記』下巻 日本古典文学大系1 倉野憲司校注 岩波書店 昭和三十三年六月五日 雄略天皇 吉野 三百四十五頁）

また、衣服を洗濯するのではないが、雄略天皇は吉野川にいる童女に出会い、縁になった例もある。即ち、尊い人と娘が水辺で結ばれた縁なのである。

また、『風土記』にも洗濯する女の伝承がみられる。

山城國 賀茂社

賀茂建角身命、丹波の國の神野の神伊可古夜日女にみ娶ひて生みませるみ子、名を玉依日子と曰ひ、次を玉依比賣と曰ふ。玉依比賣、石川の瀬見の小川に川遊びせし時、丹塗矢、川上より流れ下りき。乃ち取りて、床の邊に挿し置き、遂に孕みて男子を生みき。人と成る時に至りて、外祖父、建角身命、八尋屋を造り、八戸の扉を豎て、八腹の酒を醸みて、神集へ集へて、七日七夜樂遊したまひて、然して子と語らひて言りたまひしく、「汝の父と思はむ人に此の酒を飲ましめよ」とのりたまへば、即て酒杯を擧げて、天に向きて祭らむと爲ひ、屋の薨を分け穿ちて天に升起き。乃ち、外祖父のみ名に因りて、可茂別雷命と號く。謂はゆる丹塗矢は、乙訓の郡の社に坐せる火雷神なり。可茂建角身命、丹波の伊可古夜日賣、玉依日賣、三柱の神は、蓼倉の里の三井の社に坐す。（『風土記』日本古典文学大系2

秋本吉郎校注 昭和三三年四月五日四一四頁)

玉依比賣が石川の瀬見の川で遊ぶ時、川上から流れてきた丹塗矢に感じて孕むことになったということであるが、同じ物語は『秦氏本系帳』にも出ている。興味深いのは、『秦氏本系帳』では、川で遊ぶということが、川で衣裳を洗濯することとなっている。

『本朝月令』「四月中酉賀茂祭事」に引く『秦氏本系帳』には、次のように書いている。

(秦氏本系帳に云く、)正一位勲二等賀茂大神の御社。賀茂は、日向の曾の峰に天降り坐しし神、賀茂建角身命なり。神倭石寸比古の御前に立ちて上り坐して、大倭の葛木山の峰に宿り坐しき。彼より漸く遷りまして、山城国岡田の賀茂に至り、山代河の随に下り坐して、葛野河と賀茂河との会ふ所に立ち坐して、賀茂河を見廻らして言りたまはく、「狭小くあれども、石川の清き川に在り」とのりたまふ。仍りて、号けたまひて石川の瀬見小川と曰ふ。彼の川より上りまして、久我国の北山の基に定め坐しき。爾時より、名づけて賀茂曰ふ。石川の瀬見の小川に遊する時に、丹塗矢、川上より流れ下りき。乃ち、取りて床边に挿し置くに、遂に感けて孕み、男子を生めり。人と成るに至りし時に、外祖父建角身命、八尋屋を造り、八戸扉を堅め、八腹酒を醸みて、神集へ集へて、七日七夜楽遊びたまふ。然して、子と語らひて言りたまはく、「汝が父と思はむ人に、此の酒を飲ましめよ」とのりたまふ。即ち、酒杯を挙げて、天に向かひて祭らむとし、屋の薨を分け穿ちて天に升りましき。乃ち、外祖父の名に因りて、賀茂別雷命と号く。今謂はゆる丹塗矢は、乙訓郡の社に坐す火雷命に在り。賀茂建角身命、丹波神伊賀古夜日売、玉依日売の三柱神は、蓼倉里の三井社に坐す。妹玉依日子は、今賀茂県主等が遠祖なり。其の祭祀の日に、馬坐す。

志貴島宮御宇天皇の御世に、天下国を挙りて風吹き雨零りき。爾の時に、卜部伊吉若日子に刺して、卜なはしむ。乃ち、賀茂神の崇なり。四月の吉日を撰ひて、馬に鈴を繫け、人猪の影を蒙りて駆馳す。以ちて祭祀を為し、能く禱祀らしむ。因りて、五穀成就りて、天下豊年なり。馬に乗るは、此に生まれり。又云はく、初め秦氏女子、葛野河に出でて、衣裳を澣濯きし時に、一の矢有りて上流より下りき。女子取りて還り来、戸の上に刺し置く。是に、女子、夫無くして妊む。既にして男子を生む。父母恠しみて、責め問ふ。爰に、女子答へて曰はく、「知らず」といふ。再三詰め問ひ、日月を経ると雖も、遂に「知らず」と云ふ。父母以謂へらく、「然あれども、

夫無くして子を生む理無し。我家に往来せる近親眷属、隣里の郷党の中に、其の夫在るべし」とおもふ。茲に因りて、大饗を弁備へて、諸人を招き集め、彼の児をして盃を執らしむ。祖父母命云ひたまはく、「父と思はむ人に献るべし」といひたまふ。時に、此の児、衆人を指さずして、仰ぎ観、行きて戸の上の矢を指す。即便ち、雷公と為りて、屋の棟を折り破りて、天に升りて去にたまふ。故、鴨上社を別雷神と号け、鴨下社を御祖神と号く。戸の上の矢は松尾大明神、是なり。是を以ちて、秦氏、三所の大明神を奉祭る。

而あるに、鴨氏の人、秦氏の聳を愛びむとして、鴨祭を以ちて譲与ふ。故、今に鴨氏、禰宜として奉祭る。此れ、其の縁なり。鴨祭の日に、楓山の葵を頭に挿し、当日の早朝、松尾社司等、頭に挿す料を齎たしめて、参りて内蔵寮に候ふ。祭の使、既に來りて、楓山の葵を庭の中に置く。詔戸申使等、各頭に挿して出立つ。禰宜・祝等、禄・物を賜る。又、馬を走せて、近衛二り、謝幣を捧げ、禰宜・祝と俱に松尾神社に参る。是れ乃ち、父母子の愛の義、芬芳しく永く存る心なり。(沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著 『古代氏文集 住吉大社神代記・古語拾遺・新撰龜相記・高橋氏文・秦氏本系帳』 山川出版社 2012年四月二十五日 三〇二～三〇四頁)

#### 『今昔物語集』における洗濯する女

##### 今昔物語集卷第十一 久米仙人、始造久米寺語第二十四

今昔、大和国、吉野ノ郡、龍門寺ト云寺有リ。寺ニ二ノ人籠リ居テ仙ノ法ヲ行ヒケリ。其仙人ノ名ヲバ、一人ヲアヅミト云フ、一人ヲバ久米ト云フ。然ルニ、アヅミハ前ニ行ヒ得テ、既ニ仙ニ成テ、飛テ空ニ昇ニケリ。

後ニ、久米モ既ニ仙ニ成テ、空ニ昇テ飛テ渡ル間、吉野河ノ辺ニ、若キ女、衣ヲ洗テ立テリ。衣ヲ洗フトテ、女ノハギマデ衣ヲ搔上タルニ、マギノ白カリケルヲ見テ、久米、心穢レテ其女ノ前ニ落ヌ。其後、其女ヲ妻トシテ有リ。其仙ノ行ヒタル形、于今、竜門寺ニ其形ヲ扉ニ、北野ノ御文ニ作テ、出シ給ヘリ。其レ、不消シテ、于今有リ。其久米ノ仙、只人ニ成ニケルニ、馬ヲ責ケル渡シ文ニ「前(サキ)ノ仙、久米」トゾ書テ渡シケル。

然ル間、久米ノ仙、其(ソノ)女ト夫婦(メヲト)トシテ有ル間、、、後略(池上洵一校注『今昔物語集』三 新古典文学大系 35、岩波書店一九九三年)

久米仙人は、大和の竜門寺で飛行の仙術を修業中に、吉野川の川辺で洗濯している女の雪のような白い脛に見ほれて墜落する。その女を妻として

俗界に暮らす、のちに高市郡に都造營のとき、材木を運ぶのに空を飛ばせた功によって免田三十町を与えられ、久米寺を建立したという話である。

『伊勢物語』における洗濯する女

四十一段

昔、女はらから二人ありけり。一人はいやしきおとこの貧しき、一人はあてなるおともたりけり。いやしきおともたる、十二月のつごもりに、袍を洗ひて、手づから張りけり。心ざしはいたしけれど、さるいやしきわざもならはざりければ、袍の肩を張り破りてけり。せむ方もなくて、たゞ泣きけり。これを、かのあてなるおとこ聞きて、いと心苦しかりければ、いときよらなる緑衫の袍を見出でてやるとて、

78 紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける武蔵野の心なるべし。(堀内秀晃・秋山虔校注『竹取物語・伊勢物語』新日本古典文学大系十七 岩波書店 一九九七年一月二十八日 一一九～一二〇頁)

洗濯している女をかわいそうだと思い、美しい袍を贈り、歌を詠んでやる男と洗濯する女の話である。

奄美本島の日光感精説話をみてみよう。

資料⑦ 奄美本島

思松金という美しい女がいた。川で洗濯していたら、ティダガナシ(太陽の尊称)に手をさされて失心してしまった。占いをさせてみると、十ヶ月でうまれれば下司の子、十二ヶ月で生まれれば神の子、男が生まれればキンノマタラベ、女が生まれるとキンノウナカと命名せよとのことであった。十二ヶ月たつて男の子が生まれる。七歳にならぬうちに門口で遊び始め、七歳の時、友人から弓競べをいどまれた。母が布を織るスシで弓をつくり、メクサで矢をつくって持たしてやると天の雲のかくれるところまで飛んだ。舟競べをいどまれる。イナのあとさきに釘打って真中に柱を立ててやった。これも海の果てまで走って勝った。最後に父親競べをいどまれた。天スジアヤテダ(太陽の美称)の子だから父はいないと母親は答える。日の神に伺うと下司の子を生んだことはないと言われ、鬼の牧へ押しこめた。まばゆくて鬼は食うことができない。七日絶食させて、ご馳走を出したが食べない。下司の子であれば天に引取ることはできない。(山下欣一『奄美説話の研究』法政大学出版局一九七九年十一月一日 p 194 頁による。)

山下欣一は、奄美諸島北部に分布する日感精説話についてその資料を九例紹介したが、中で三例は女が洗濯する時、日光に感じて身ごもることに

なっている。ほかの二例をみてみよう。

資料⑥ 奄美本島

あんなに美しい神の生まれの思松金がヒゴの川のそばで日の光を浴びて洗濯をしていると、足がだるくなった。トキ取りをたのんで占ってもらいと、上手に占ってくれて、十ヶ月で生まれると人間の子、十二ヶ月で生まれると神の子であるという。十二ヶ月に月日をあわして生まれた神の子は男の子でキンノマタラベという名をつけた。七日祝をする。母親の思松金が桧の高膳を供えて大和から下ってきた刀を供えておく。キンノマタラベのすることが、刀をふりあげて、高膳で箸をつくった。神と人間との間がきちんと分けられた。七日にはキンのマタラベは門口で遊ぶ。長者の子がいうのには、舟競べしよう。キンのマタラベが生みの母に話すことが、人間の子が舟競べしようという。思松金のすることが地機をこわして織物をまくイバナをとりはずして、その上にメクサの帆柱を立て、機をときはなし帆を立て、芭蕉の錨綱をつけて、フセヌ浜におりて、コセの浜におりて、海の神にむけて、風に合して、沖に向った長者の子の舟と神の子の舟。キンのマタラベの小舟は、フセヌ港、コセヌ港を走り廻り、長者の子の舟は一の波、七の波をかぶって、人間と神の間が分けられた。今度は長者の子がいうのに、弓競べをしよう。キンのマタラベが話すことには、思松金よ、真弓を下さい。思松金のすることには、地機のスシをとり放し、芭蕉綱を三尺ぬって、マスシを折りまげ、弓綱をかけ、メクサの矢柱で矢を七本つくって、キンのマタラベに真弓を与えた。弓競べをしてみると、矢を天高く飛ばしてみると下司の矢はさかさになって落ちてくる。キンのマタラベの矢は鶴の脇羽を射り落とし、ほうの鳥の脇羽を射り落として天に取りあげられ、神と人間の間が分けられた。物を知らない長者の子の持ち出す話は親競べだった。親のいないキンのマタラベは思松金に親を出してくれとたのむ。思松金は、その腕をあげて、天のご頭、天のお日様を呼んだ。天の日の神様のおっしゃるには、キンマタラベは、太陽の子、月の子であった。天にあげることはできない。天の下で高膳を供えて、花を供えて下司の守り、神の守りをしなさい。あんなに美しい思松金、アガレマテダ（のぼる太陽の美称）を拝みます。（山下欣一『奄美説話の研究』法政大学出版局一九七九年十一月一日 p 192～194 頁による。）

資料⑧ 奄美本島

バサンナガレ（芭蕉ナガレ）をひと下り読み下しましょう。あのように長い山の尾筋に美しい芭蕉山がある。あのように美しい思松金が見立てた

きれいな芭蕉。芭蕉を取って、切りととのえたきれいな芭蕉。はいだきれいな芭蕉、はいできれいにととのえた芭蕉。あのように美しい思松金がこさえた見事な灰汁。百ひろ千ひろのを滝から吹き出た雪シドロ水をもらってきて、灰汁をこしらえた見事さ。かまどをこしらえた見事さ。黄金の鍋を敷きととのえて、灰汁を入れてあんなに美しい思松金が黄金の美しい芭蕉を煮りととのえた美しさ。イビカゴをこしらえてとった美しさ。こしらえととのえたるイビカゴをあんなに美しい思松金がすき取った美しさ。あんなに美しい思松金がイビカゴをささげて、アーフンヤアーフンヤと面白く糸掛けた美しい芭蕉、ひきととのえた美しさ。雪シドロ水にさらして取った美しさ。七尋竿の調子取りの美しさ。七尋竿に黄金の芭蕉を干しととのえた美しさ。あんなに美しい思松金が、あんなに美しい苧織み玉龍を傍に取り寄せた美しさ。黄金の手ばさみを取り寄せた美しさ。あんなに美しい思松金が黄金の芭蕉をうみととのえた美しさ。つないだ節の美しさ。つないだ節のつなぎ目の長口を黄金の手ばさみで切りととのえた美しさ。うみととのえるとチゴロ巻きにした美しさ。チゴロ巻きにして、あんなに美しい思松金があんなに手機を傍に取り寄せた美しさ、つむぎとった美しさ、十二のカセクダ（糸巻）につむぎととのえた美しさ。あんなに美しい思松金が黄金のカセを取り寄せた美しさ。十二のカセタグ（管）をたてた美しさ。黄金の手ガセにウチ掛けた美しさ。アゼ（綾）取った美しさ。六巻きの七尋カセを張りととのえた美しさ。黄金の地機を取り寄せた美しさ。黄金地機に巻いた美しさ。フヤ（校）を通した美しさ。オサ（箴）を通した美しさ。フスマキ（糸を束ねくくること）の美しさ。フスマキととのえると織りととのえた美しさ。七尋布を織りととのえると七尋布を灰汁に煮りととのえる。煮りととのえた七尋布を雪シドロミズにさらし、洗う。何故か！美しい乙女が東の川に向かって洗っていると、声一声かけられる。あんなに美しい思松金が七尋の美しい芭蕉布を干す。美しくたたむ。美しく裁断する。縫いととのえた美しさ。打ち掛けを着た美しさ。打ち掛けを着るとお日様に飛び上る。一ヶ月二ヶ月と月がたつにつれて、次第に身持ちになった。親からは、何故身持ちになったのか、相手は人か、神かとせっかんされる。人も神も相手ではない。何故身持ちになったかとせっかんされる。下司が相手であれば十ヶ月で生まれるはず、神が相手であれば十二ヶ月で生まれるはずです。どうか月日を待って下さいとあんなに美しい思松金が親に相談する。十二ヶ月たって男の子が生まれイシクンだ丸と名づける。四歳まで自分のそばで育てさせて下さいと親に相談する。四歳五歳

になると下司の子が父無し子と笑う。下司の子が弓競べをしようといどむ。下司の子は、きれいな弓を親がつくってくれるが、父無し子は弓を造ってくれる親はいない。(後略)(山下欣一『奄美説話の研究』法政大学出版局一九七九年十一月一日 p 194~197 頁による。)

これら日光感精誕生譚について、山下欣一は次のように論じている。「日光に感精するのは美女であるのは共通している。そしてこれらの美女は、その特色として、物を知らぬ、家に閉じこもってばかりいる女性である、機織りをしている女性なのである。そして日光の愛を受けるのは、川で洗濯している場合が多い。その川も東の川である。このように水と関係している点は注目していい。水辺においてみごもることは、海神少童や母子の神を想起させずにはおかない。そしてまた神のよります女と巫女の地位と機能、神と人の結婚と神の子をやどす思想などがアジア大陸のシャーマニズムに内蔵されているものとして、この解明がわが国の八幡信仰の原初形態、母子信仰などの思想の謎を解くことになるのだとされた石田英一郎氏の見解を、ここでは注目しておきたい。」<sup>注5</sup> 日光に感精して神の子を生む女、その女はちょうど洗濯している時に感じて孕むのは、この女の洗濯という行為と子授けの関連をもう一回考える必要がある。しかも、日光感精説話の九例のうち、三例も女の洗濯という行為がでてきて、一層水辺の子授け、女の洗濯との深いかわりを見せている。

外に、『御伽草子集』(新潮刊御伽草子集)にある「天稚彦草子」にも洗濯する女が登場する。長者の家の家の前で女が洗濯をしていると、大きな蛇が現れ、女に長者の家の娘に求婚する手紙を渡す。嫁に来ないと、両親は殺すと脅迫された。三人娘のうち、末っ子が両親のために、蛇と暮らすようになる。異類婚話の一つであり、これは洗濯していた女とは直接関係はないが、洗濯する女が婚姻の橋渡しをする話である。

日本においても、洗濯する女、水辺の女の伝承は古事記から始まり、御伽草子まで繋がっている。本稿では、言及しなかったが、昔話「天人女房」の話にも洗濯する女の伝承は明確にみられるのである。

## 注

注1：落合茂 著『“洗う”文化史話：入浴と洗濯のあゆみ』花王石鹸 一九七三年

注2：本田和子「『洗う女』考」『現代思想』11-10 青土社 一九八三年

注3：折口信夫「水の女」『折口信夫全集第二巻古代研究(民俗学篇1)』中

央公論 一九七五年

注4：勝浦令子「洗濯と女ノート」『月刊百科』二六一号 平凡社 一九八四年

注5：山下欣一『奄美説話の研究』法政大学出版局 一九七九年十一月一日 p 212 頁による。山下欣一は石田英一郎の説を取っているが、これは『桃太郎の母 比較民族学的論集』法政大学出版局 一九五六年 を参考したのであろう。

#### 第四節 東アジアにおける水の女の系譜

上記の三節から分かるように、東アジアにおける洗濯する女の伝承は、日本、中国、朝鮮半島にわたって、東アジア全般に広がっていることが分かる。そして、中国、朝鮮半島、日本における洗濯する女に関する神話、伝説の例はごく共通する様相を見せている。

例えば、中国の「浣紗女」たちと男の出会いは、朝鮮半島の君王と妃の出会いや高麗歌謡の「濟危寶歌」とごく似ている。そして、朝鮮半島の君王と妃の洗濯場での出会いは、また、日本の『古事記』の中の雄略天応と洗濯女の出会いと同一様相を見せている。そして、朝鮮半島の僧侶誕生譚と日本の「瓜子姫」、「桃太郎」の類話も極めて似通っている。これら、洗濯する女の伝承を見ると、中国から、半島を経て、日本まで伝わったように、共通なところが多い。

また、中国や朝鮮半島の伝承をみると、洗濯する女は神話、伝説から始まり、出産、誕生の呪力の水とかかわっているが、それらはまた、洗濯場という特殊な場所と、水辺の女のイメージで日常生活にも伝承され、正に縁結びの場として、河辺、井戸辺などで登場する女のイメージで続けている。中国古代の数多くの男女の愛を歌っている「浣紗曲」は、正にその証拠である。また、朝鮮半島にも、「浣紗曲」と似ている「빨래하는 노래(洗濯歌)」が口承文学として古くから伝わっている。それは、女性たちが服を洗う時、即ち川辺で洗濯する時、歌う歌として定義付けられている。<sup>注</sup>

<sup>1</sup> 「빨래하는 노래(洗濯歌)」は、女性の労働歌として、全国に広がっていたと推定されるが、ほぼなくなり、今残ったのはわずかである。洗濯の長い歴史とともに、歌の歴史も長いと推定される。その原文をみると、

울도 담도 없는 집에 시집가던 삼년만에  
시어마님 하시는 말씀 아가 아가 며늘 아가



진주 낭군을 보실라거든 진주 남강에 빨래를 가게  
 진주 남강에 빨래를 가여 터그덕 터그덕 도구더니  
 하늘 같은 서방님이 구름같은 갓을 쓰고  
 태산같은 말을 타고 본체만체 지내가네  
 검둥빨래랑 검게 다하고 흰 빨래랑 희게 해야  
 집에라고 돌아오니 시어머님 하시는 말씀  
 아가 아가 며늘 아가 진주 낭군을 불러거든  
 사랑방으로 들어봐라 사랑방에 들어가니  
 반달같은 첩을 놓고 오색가지 술상을 놓고  
 권주가를 부르는데 하고 답답꼬 어니 무너져  
 내자는 방을 들어와 오동장농 벽계수에  
 명지 석자 수건 찾아 목을 매서 자는듯이 죽었드니  
 시어머님이 들어와서 보고 도려 나가서  
 어느자석 아들놈아 진주강에 빨래 갖다와여  
 니소는 소베를 보고 목을매서 죽었고나  
 후략

(영덕군지편집위원회 『盈徳郡誌下』 二〇〇二年三月 457頁)

歌の内容は女性が、旦那と川辺で会い、と甘美な愛を交わすことを願う歌である。洗濯が終わり、うちに帰り、夫が外の女と付き合っているのを見て、自殺する内容である。

中国の「浣紗曲」、朝鮮半島の「빨래하는 노래(洗濯歌)」からも窺えるように、洗濯場としての川辺、水辺は、男女の出会いの場として、ごく自然な場所になりうる。

日本にも、神話、伝説ではなく、日常生活における洗濯する女と縁結び、男女の愛の場としての伝承がみられる。

『万葉集』に、

那賀郡の曝井の歌一首

1745 三栗の那賀に向へる曝井の絶えず通はむそこに妻もが(『萬葉集』二新日本古典文学大系2 岩波書店 二〇〇〇年十一月二十日による。)

という歌があるが、新日本古典文学大系『萬葉集』によると、那賀郡のこの泉は、昔、村落の婦女が集まり、洗濯する洗濯場である。<sup>注2</sup>即ち、これは男が洗濯する女たちの風景をみながら、その中に恋人がいたらいいのにといい気持ちを歌っているのである。この他にも、『万葉集』や『新古今和歌集』などに、水辺の女と恋の歌も多い。それらは、日本にも洗濯場とし

て水辺は子授け、縁結びの場として、それとかかわる洗濯する女、水の女の伝承があることを示している。また、日本の江戸時代になると、「洗濯女」が船乗りの衣類を洗濯して生計をたてていたことから、船中や宿駅での売春行為も生まれ、「売春婦」を意味するようにもなったが注3、本稿では詳しく扱わない。しかし、洗濯場としての水辺という特定な場所は、若干のセクシュアルな感じがするのは必然だと考える。その淵源には、禊とかかわる洗濯する女の子授け、縁結びの神話、伝説が潜み、それは、また、水の豊饒をもたらす力、生殖力とかかわるのである。

水の女は洗濯する女という特別なイメージの伝承で東アジア全般に伝承され、水の女は禊を助け、再生、癒しの呪力を施すのみではなく、水の出産、誕生を助ける生殖力或いは豊饒をもたらす力を負う水辺の女、洗濯する女も水の女の系譜に属しているのである。

#### 注

注 1 :

[http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Contents?contents\\_id=E0025320](http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Contents?contents_id=E0025320)

『한국민족문화대백과사전』빨래하는노래검색(2011年ネット辞書サービス)、『한국민요집(韓國民謠集)』I(임동권, 집문당, 一九八〇年)による。

注2: 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『萬葉集』二新日本古典文学大系 2 岩波書店 二〇〇〇年十一月二十日三百六十四頁の注釈による。

注3: 平野桂子「古辞書に探る洗濯1～7」「洗濯の科学」

#### 参考文献

花王石鹼株式会社資料室編『日本清浄文化史』東京: 花王石鹼, 1971.1  
折口信夫 [著]; 折口博士記念古代研究所編纂『折口信夫全集』第1巻 - 第18巻. - 新訂版. - 東京: 中央公論社, 1965-1967

## 終章

本研究は三章にわたり、日本における水の女の系譜には、出産、誕生の呪力をもっている水とかかわる水の女の伝承があり、日本における水の女の系譜を読み直した。また、東アジア全般にわたって水の女である洗濯する女の伝承をたどり、東アジアにおける水の女の系譜には、古代から水辺における子授け、縁結びとかかわる洗濯する女の伝承があることを証明した。そして、これら洗濯する女の伝承は、古く、古代の中国の水辺の禊ともかかわっていることを論証した。また、女の「洗濯」ということは、水神或いは水の呪力をうける行為となり、洗濯には単なる衣服を洗うのみでなく、体を洗うのも含まれ、延いては禊が含まれることになり、その禊は清め、再生の役割のみでもない。洗濯する女は水辺の禊とかかわり、水の呪力は禊をとおして水辺の女に作用し、また、「洗濯場」となる川辺、井辺などの特定の文化的空間のため、本論の中心になる洗濯する女と水辺の呪力による子授け、縁結びなどができたのである。

総じて、東アジアにおいて、洗濯する女は水の出産、誕生を助ける力を現していると同時に、引いては水の豊饒をもたらす力を現している。そして、それは、水脈のように日本、朝鮮半島、中国などの神話、伝説の中で潜み、水辺の女の系譜の一環として、洗濯する女として伝承されていることが分かる。

今後の課題として、本研究に詳しく取り上げられなかった東アジア全体にわたって伝承されている「羽衣伝説」伝説など洗濯する女の系譜研究を続け、また、近世読本類や、御伽草紙類に見られる水の女の伝承ないしツングース族の満洲族に流布する古神話についても探っていきたい。

附表一、

「瓜子姫」の地域分布表

注：主に『日本昔話通観』に載っている「瓜子姫」の梗概によって作成したので、原文資料を確認できなく、また、紹介も簡単なものは不確かなものがある。例えば、「典型話にほぼ同じ。」となっているのは、『日本昔話通観』の中の典型話に従って統計し、注の欄に「典型話にほぼ同じ(?)」と表記した。また、『日本昔話通観』に誕生モチーフについて説明がなく、且つ原文資料を確認できなかったのもあるが、それらは、注の欄に、(?)をつけておいた。原文資料で確認済みのものは出典に元出典を表記した。原文資料のもとの出典は『日本昔話通観』の中の記録をみるべきである。各地域の地名順番も基本的に『日本昔話通観』の中の記録に従った。この附表はただ「瓜子姫」の全般的な分布及び誕生モチーフについての大体な統計を見せるものである。

分布地域	瓜の採り場	瓜子姫の誕生	注	出典
青森県 17 南津軽郡藤崎町	ジさまが畑の大きい瓜をとってきた。	ジさまが庖丁で切ろうとすると割れて中から「ジさま、ジさま。一寸待ってけへじゃ」と言う。その瓜は割れて中から女子童が生まれた。「瓜姫子」と名づける。	原題：瓜姫子と天の邪鬼	『日本昔話通観』第2巻 青森 同朋舎 1982年 p117～119
西津軽郡稲垣村千年	爺は山へ行き、婆は河へ行き洗濯し	帰って食べようとする、中から生		同上 p118～119

	ていると瓜が流れてきたので、拾う。	まれる、瓜姫子と名づける。		
西津軽郡車力村豊富	爺が畑から大きい瓜を取ってくる。	割ろうとすると、中から女の子が生まれるので、瓜姫子と名づける。		同上 p119
弘前市	爺が畑になった瓜を持ち帰る。	切ろうとすると、割れて、瓜姫子と名づける。		同上 p119
弘前市田茂木町	爺が畑で瓜を取って帰る。	爺が包丁を当てかけると、瓜の中から声がし、ひとりでに割れ、中から女の子が生まれる。瓜子姫と名づける。	原題：瓜姫子と天邪鬼	斉藤正『全国昔話資料集成7津軽昔話集』岩崎美術社 1974年12月10日 p24～27
中津軽郡西目屋村砂子瀬	婆様が川に洗い物しに行、箱が流れてくる。	婆が蓋を開けてみると、瓜一本入っている。棚に置くとワラシ子になった。「ウルフルメンコ」と名づける。		『日本昔話通観』第2巻 青森 同朋舎 1982年 p120～121
三戸郡五戸町	爺は山へ薪取りに、婆は	拾って食べると甘いの		同上 p121

	川へ洗濯に行っている と、川上から 甜瓜（まう り）が流れて くる。	で、一つ拾っ て帰って糠 屋の中に入 れておく。糠 屋の甜瓜か ら生まれ、瓜 姫ことなづ ける。		
三戸郡五戸 町	爺が薪採り にいき、婆は 川へ洗濯に 行っている と、川上から 腰籠に入っ たまおりが 流れてくる。	一つ食べ、一 つは糠屋の 中に入れて おく。行って 見ると、二つ に割れ中か ら生まれる。 おりこ姫と 名づける。		同上 p121～ 122
三戸郡南郷 村（旧中沢 村）	畑	婆が瓜の蔓 になっている きれいな 姫をとって きて瓜姫と 名づける。		同上 p122
三戸郡田子 町関	婆が川へ洗 濯に行き、流 れてきた瓜 を拾って帰 る。	瓜が割れて 生まれる。瓜 姫子と名づ ける。	原題：瓜子織 姫	東洋大学民 俗研究会『上 郷の民俗一 青森県三戸 郡田子町旧 上郷村』自刊 1977年3月 P269～270
下北郡東通 村大利	なし		(?)	『日本昔話 通観』第2巻 青森 同朋

				舎 1982年 p194
三戸郡五戸町	なし		(?)	同上 p195
三戸郡五戸町	なし		(?)	同上 p195
三戸郡南郷村 (旧中沢村)	なし		(?)	同上 p195
三戸郡南郷村 (旧中沢村)	なし		(?)	同上 p195
下北郡東通村向野	なし		(?)	同上 p195
西津軽郡木造町土滝	なし		(?)	同上 p195
岩手県 53 紫波郡紫波町土館	柴刈と洗濯。 川から瓜が流れてくる。	瓜からわらしが生まれる。瓜こ姫こ と名づける。	原題：瓜こ姫 こ 典型話。	『日本昔話 通観』第3巻 岩手 同朋 舎 1985年 p69～p71
胆沢郡	なし	瓜を割ると生まれる。		同上 p71
岩手郡滝沢村	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。	爺が瓜を割ると、中から生まれる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p71
岩手郡滝沢村	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。	爺が瓜を割ると、中から生まれる。	上(岩手郡滝 沢村)の話に ほぼ同じ。 (?)	同上 p71
岩手郡雫石町 (旧雫石村)	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。	瓜から生まれる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p71
江刺市	柴刈と洗濯。	赤い大きな	典型話にほ	同上 p72

	桃が流れてくる。	瓜。瓜から生まれる。	ぼ同じ。(?)	
北上市(旧和賀郡更木村大竹)	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p72
北上市(旧和賀郡更木村西村)	柴刈と洗濯。 川から瓜が流れてくる。 甘い瓜を呼び寄せる。	瓜から生まれる。		同上 p72
紫波郡紫波町	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p72
紫波郡紫波町遠山	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。	瓜から生まれる。	上の話にほぼ同じ。(?)	同上 p72
紫波郡矢巾町(旧煙山村)	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p72
紫波郡矢巾町(旧徳田村)	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。	瓜から生まれる。	岩手郡滝沢村の話にほぼ同じ。(?)	同上 p72
下閉伊郡岩泉町	畑?	爺婆が子授けを神に願う。瓜田の中で女の子を拾う。		同上 p72
遠野市(旧上閉伊郡)	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。	瓜から瓜子姫が生まれる	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p72~73
西磐井郡平泉町	爺と婆が畑から瓜をとってきて割る。	瓜から生まれる。		同上 p73



二戸市（旧二戸郡爾薩体村堀野）	爺婆が子授けを神に願う。婆が畑で取った瓜を一つ食べ、	一つ切ろうとすると割れる。		同上 p73
二戸地方	柴刈と洗濯。桃が流れてくる。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p73
水沢市（旧胆沢郡水沢町）	柴刈と洗濯。桃が流れてくる。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p73
某地	なし	婆が瓜を拾い、戸棚にしまっておく。爺があけると、生まれる	(?)	同上 p73
岩手郡雫石町黒沢	婆が川へ水汲みに、瓜が流れてきたので拾う。	爺が山から帰ったので、食べさせようと、出すと割れ、女の子が出てくる。	原題：瓜子姫子	同上 p74
岩手郡葛巻町		爺が柴刈りの帰りに、山百合の根元で女の赤子を拾う。	ゆりこ姫	同上 p74
岩手郡雫石町（旧雫石村）	川から流れてくる。一つ目を食べ、もう一つ呼ぶ。	瓜から生まれる。		同上 p74～75
江刺市	洗濯。瓜が流れてくる。	二人で瓜を割ると、瓜から生まれる。		同上 p75

上閉伊郡	婆が畑に草取りにいき、大きな瓜を取って帰る。	瓜から生まれる。		同上 p75
北上市（旧和賀郡立花村）	川から瓜が流れてくる。一つ食べ、一つ持ち帰る。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。（?）	同上 p75
北上市（旧和賀郡黒沢尻町）	川から瓜が流れてくる。婆が拾ってくる。		典型話にほぼ同じ。（?）	同上 p75
北上市更木町	爺と婆が川に洗濯に行き、瓜を拾う。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。（?）	同上 p75
紫波郡都南村（旧飯岡村）	婆が川へ洗濯に行く。	瓜を戸棚にしまう。瓜から生まれる。		同上 p75
紫波郡矢巾町（旧不動村）	婆が川へ洗濯に行く。	瓜から生まれる。隣のうるこひめこと名づけてもらう。		同上 p75
下閉伊郡岩泉町岩泉	婆が胡瓜畑で胡瓜をとる。	切ろうとすると瓜の中から生まれる。		同上 p75～76
遠野市（旧上閉伊郡遠野町）	川から瓜が流れてくる。婆が拾ってくる。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。（?）	同上 p76
遠野市勇町	爺は山へ木を切りに、婆	瓜を切ろうとすると、割	瓜子姫	佐々木徳夫『遠野に生

	は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	れ、赤ん坊が出てくる。瓜子姫と名づける。		きつづけた昔』講談社 1976年8月 12日 p131~133
西磐井郡平泉町	川から瓜が流れてくる。婆が瓜を拾う。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	『日本昔話通観』第3巻 岩手1985年 P76
東磐井郡東山町(旧松山村)	川から瓜が流れてくる。婆が瓜を拾う。	戸棚で大きな音がして瓜が割れ、娘が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p76
水沢市	川から瓜が流れてくる。婆が瓜を拾う。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p76
和賀郡沢内村	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。川上から胡瓜が流れてくる。	戸棚を開けたら、赤ん坊が生まれている。		加藤ゆりいか『ゆりいか が聞いた岩手の昔ばなし』1982年3 月27日 p53~59
遠野市新殻町	婆が川で瓜を拾い、割ってみると、	中から女の子が生まれる。瓜子姫と名づける。	瓜子姫	『日本昔話通観』第3巻 岩手1985年 P77
二戸市(旧二戸郡福岡町)	子の無い爺婆が神様に念をかける。爺は山へ、婆は川へ行く。	瓜が流れて来たので、二人で切ってみると中から女の子が生まれる。瓜	原題：瓜子姫 子	菊地勇『二戸の昔話』自刊 1937年12月 20日 p5~6

		子姫と名づける。		
紫波郡紫波町長岡	なし			『日本昔話通観』第3巻 岩手 1985年 P77
気仙沼郡住田町世田米	爺が山へ柴刈りに、婆が川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	切って食べようとすると女の子が生まれる。瓜子姫と名づける。	瓜子姫ッ子	同上 p78
九戸郡	なし		原題：おりひめ子 「姫横死型」の典型話。	『日本昔話通観』第3巻 岩手 1985年 P186
大船渡市	なし		おりひめこ	大船渡市史編集委員会 『大船渡市史 第4巻』 熊谷印刷 昭和54年 p 450～452
久慈市（旧九戸郡久慈町）	なし		典型話にほとんど同じ。 (?)	『日本昔話通観』第3巻 岩手 1985年 P186
気仙郡	なし		典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p186
二戸郡安代町（旧荒沢村）	なし		典型話にほぼ同じ。(?) 原題：織子姫子	菊地勇『二戸の昔話』自刊 1937年12月20日

				p7～8
二戸市（旧二戸郡金田一村）	なし		典型話にほぼ同じ。（?）	『日本昔話通観』第3巻 岩手 1985年 P186
東磐井郡大東町菅ノ沢	畑から取った瓜。	瓜から生まれる。	瓜子織姫	東洋大学民俗研究会『旧中川村の民俗一岩手郡東磐井郡大東町旧中川村』自刊1973年6月 p263
宮古市	なし			『日本昔話通観』第3巻 岩手 同朋舎 1985年 P187
和賀郡東和町（旧十二鏑村）	なし			同上 P187
二戸郡一戸町（旧小鳥谷村）	なし		うれしめこ	菊地勇『二戸の昔話』自刊1937年12月20日 p8～9
遠野市	なし			柳田国男『遠野物語 定本柳田国男集第四巻』聚精堂1910年4月 p49
二戸市（旧二	なし			菊地勇『二戸

戸郡福岡町)				の昔話』自刊 1937年12月 20日 p9
二戸市(旧二戸郡爾薩体村)	なし			『日本昔話通観』第3巻 岩手 同朋舎 1985年 p188
宮城県 7 本吉郡志津川町十日町	子のいない夫婦、爺は山仕事に、婆さんが川で洗濯をしていたら、瓜が一つ流れて来た拾って、	切ろうとしたら、ひとりで割れ、中から生まれる。瓜子姫と名づける。	原題：瓜子姫	『日本昔話通観』第4巻 宮城 1982年 p117~118
仙台市北根	子の無い爺と婆が二十一日の願をかけて帰道、瓜の種を拾う。	たんすに入れておくと、次の日子供が生まれる。瓜姫と名づける。		佐々木徳夫 『昔話研究資料叢書15・陸前の昔話』三弥井書店 1979年10月30 p232
登米郡南方町青島	爺が畑からとってきた瓜。	爺と婆が切ろうとすると瓜から生まれる。瓜子姫と名づける。		佐々木徳夫 『日本の昔話11・永浦誠喜翁の昔話』日本放送出版協会 1975年 p195~197
桃生郡河南町(旧北村)	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行	爺と割ろうとすると、割れて女の子		宮城県教育会『宮城教育2』セイトウ

	く。婆が川で洗濯していると、瓜が流れてくる。瓜を呼ぶ。	が生まれる。瓜子姫と名づける。		社 1932 年 p123~124
栗原郡高清水町小山田	爺と婆が畑に栗をまくと、中に瓜が一本生えて実がなり、二人が喜んでいると、瓜は寒くなってひとりで落ちる。	瓜を神様にあげると、三、四日して赤ん坊がうまれた。うるすめんこと名づける。	原題：うるすめんこ	佐々木徳夫 『昔話研究資料叢書 15・陸前の昔話』三弥井書店 1979 年 10 月 30 日 p235
仙台市	婆が川へ洗濯に行くと、瓜が流れてくる。	帰って二つに割ると中から生まれる。瓜子姫と名づける。		『日本昔話通観』第 4 巻 宮城 1982 年 P121
多賀城市東田中	爺が栗拾いに、小さい柴栗が頭上に落ちてきた。	婆に見せると、ひとりで割れ、女の子が出てくる。栗子姫と名づける。	原題：ヤマンバと栗コ姫	同上 p122
秋田県 48 平鹿郡	婆が川に洗濯に行くと、箱が二つ流れてくる。実のある箱を呼ぶ。	二人で開けてみたら、瓜が出て、瓜の中から女の子が生まれる。瓜姫と名づける。	瓜姫子と天邪鬼	『日本昔話通観』第 5 巻 秋田 1982 年 P100~101
大曲市	婆が川で洗	爺と二人で		同上 p102

	濯をしていると、桃が流れてくる。	切ると中から女が生まれる。もものこと名づける。		
大曲市四ツ屋高関	爺が山へ柴切りに、婆が川へ洗濯に行くと、川上から白と赤の箱が流れてくる。赤い箱を呼び寄せ、	開けてみると、大きな桃が入っている。爺と食おうと、仏壇に置くと、泣き声がするので、見ると、桃から女の子が生まれている。モモネコと名づける。		同上 p102
雄勝郡稲川町屋敷内	爺が山へ柴刈りに、婆が川へ洗濯に行く。箱が流れてくる。箱の中に瓜の種が入っている。戸棚に置くと、泣き声がする。	開けてみると、女の子が生まれている。		同上 p102～103
雄勝郡稲川町大館	爺が山へ柴刈りに、婆が川へ洗濯に、箱が流れて来る。瓜の種が入ってい	戸棚におくと瓜になったところに、女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p103



	る。			
雄勝郡雄勝町	爺が山にたきぎを取りに、婆が川に洗濯にいくと、大きな瓜が流れてくる。	包丁で切ろうと、中から女の子が出てくる。瓜子姫と名づける。		同上 p103～104
雄勝郡東成瀬村田子内	爺が山へ木を切りに、婆は川へ洗濯に行く。小箱が流れてくる。	夜中に赤ん坊の泣き声がして、女の赤ん坊が生まれる。うるしめんこと名づける。		今村泰子『羽後の昔話』日本放送出版委員会 1977年 p256
鹿角市八幡平長嶺	子供のない爺婆がおぼしな様(産土神)に二十一日の子授けの願かけをすると、	満願の日に石段の下で赤子が泣いている。うりひめこと名づける。		『日本昔話通観』第5巻 秋田 同朋舎 1982年 p104～105
河辺郡河辺町	爺と婆が子供がほしいと神頼みすると、瓜畑で赤ん坊が見つかった。	うるしめんこと名づける。		同上 P105
北秋田郡阿仁町萱草	婆が川で洗い物をしてっていると箱が流れて来た。実のある箱を手招きす	爺と開けてみると、瓜が割れて女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 P105

	る。			
北秋田郡上 小阿仁村大 林	子のない爺 婆が瓜畑か ら瓜を取っ て埋めてお くと、	瓜の中から 女の子が生 まれる。うる しめんこと 名づける。		同上 p106
仙北郡角館 町	婆が川へ洗 い物にいく と、箱が二つ 流れて来る。 実のある箱 を呼び、	開けると瓜 が一つ入っ ている。爺と 食おうと仏 壇にあげて おく。爺が帰 ってくると、 赤子の泣く 声がする。見 ると、瓜の中 から女の子 がうまれて いる。瓜姫子 と名づける。		同上 p106
仙北郡大田 町	子供のない 爺婆がいて、 爺が山へ柴 刈りに、婆が 川へ洗濯に 行く。川上か ら大きい瓜 が流れてく る。	仏様に供え ておき、爺が 帰って割ろ うとしたら、 中から女の 子が生まれ る。瓜姫コと 名づける。		『日本昔話 通観』第5巻 秋田 同朋 舎 1982年 p106~107
仙北郡仙北 町	爺が山に行 く途中、きゅ うり畑を	通りかかる と、生まれた ての赤ん坊 の声がきこ える。瓜子と		同上 p107

		名づける。		
仙北郡田沢湖町生保内	婆が川で洗濯をしていると、川上から大きい箱と小さい箱が流れてくる。小さい箱を呼ぶ。	中に瓜の種が一粒入っている。いろいろの隅に埋めておく。瓜の種から女の子が生まれる。瓜姫子と名づける。		同上 p108
仙北郡西木村下檜木内	なし	瓜から生まれた瓜姫子という娘。		同上 p108～109
平鹿郡増田町在城	婆が川で瓜を拾う。	瓜の中から娘が生まれる。		同上 p 109
平鹿郡増田町亀田	婆が川で瓜を拾うと、	瓜の中から子供が生まれる。		同上 p109
平鹿郡増田町管生	婆が川で瓜を拾うと、	瓜の中から娘が生まれる。		同上 P109
平鹿郡山内村上南郷	婆が川へ洗濯にいくと、瓜の入った箱が流れてくる。煮焼きするところの隅に置いておく。	次の朝、瓜から女の子が生まれている。瓜罷免子と名づける。		同上 P109
平鹿郡山内村下松川	婆が川へ行くと、瓜が流れてくる。	瓜の中から生まれる。うるひめっこ		同上 P109～110

		と名づける。		
山本郡八竜町浜口	婆が川で拾瓜を拾う。	瓜から子供が生まれる。瓜しめんこと名づける。		同上 p110
平鹿郡山内村上南郷	爺は山へ行き、婆は川へ行く。瓜が流れてくる。	瓜の中からうりひめんこが生まれる。		同上 p111
鹿角市（旧鹿角郡毛馬内町）	婆が川へ洗濯に行き、箱が流れてくる。箱を拾うと中に瓜が入っている。	綿にくるんで戸棚にしまい、帰ってきた爺と包丁で切ると、中から女の子が生まれる。瓜子姫と名づける。		同上 p111
河辺郡河辺町	婆が川へ洗濯に行くと、瓜が一本流れてきた。	山から帰った爺に食べさせようと、瓜が割れて、女の子が生まれる。瓜姫っ子と名づける。		同上 p111～112
北秋田郡阿仁町幸屋	婆川へ洗濯に行くと、瓜が流れてくる。	もみがらに埋めておく。赤子がうまれる。瓜姫と名づける。		同上 p112
仙北郡中仙町	婆が川に洗濯にいったら、川上	神棚の箱の中に赤子がいる。うるし		同上 p112

	から箱が流れてくる。	めこと名づける。		
秋田市太平堀内	なし	爺婆が瓜をもらってきて大事にしていると、中から子供が生まれる。瓜姫と名づける。	ウル姫コ	田村八重子『太平の昔話・伝説ほか』『秋田の民俗 5』秋田県民俗学研究会 昭和52年 p20
秋田市外旭川	子供のない爺と婆。婆が洗濯に行った川で瓜を拾う。	瓜の中から女の子が生まれる。瓜生女子と名づける。		『日本昔話通観』第5巻 秋田 同朋舎 1982年 P113
仙北郡中仙町清水	なし		原題：うるしめっことあまのじゃく	同上 p121
鹿角市（旧鹿角郡宮川村長峰）	なし			同上 123
北秋田郡阿仁町打当内	なし			同上 123
北秋田郡阿仁町湯口内	なし			同上 p123～124
北秋田郡田代町早口	なし			同上 p124
仙北郡中仙町	なし			同上 p124
仙北郡中仙町	なし			同上 p124～125
仙北郡角館町	なし			同上 p125

平鹿郡増田町一本柳	なし			同上 p125
平鹿郡増田町熊ノ淵字大和沢	なし			同上 p125
平鹿郡増田町平鹿	なし			同上 p125
平鹿郡増田町真人	なし			同上 p125
河辺郡雄和町湯野目	なし		原題：昔話	同上 P126
北秋田郡阿仁町根子	なし			同上 p126～127
仙北郡角館地方	なし			同上 p127
平鹿郡増田町縫殿		爺婆に娘が生まれる。うるしめっこと名づける。		同上 P127
平鹿郡増田町半助村	爺婆が願をかける。	娘が生まれる。うりすめんこと名づける。		同上 P127
平鹿郡増田町平鹿	なし			同上 P127
平鹿郡増田町福島	なし			同上 P127
平鹿郡山内村武道	なし	きゅうりから女の子が生まれる。うりしめこと名づける。		同上 P127～128
山形県 50	爺は畑へ行くと、大きな	二人で食べようと、割っ	典型話。	『日本昔話通観』第6巻

西置賜郡飯 豊町高峰	瓜実っている。	てみたら、中からきれいな娘が生まれる。瓜姫子と名づける。		山形 同朋 舎 1986年 p99~100
上山市檜下	畑。 去年食べた まくわ瓜の 種をまくと 瓜になる。	瓜から生まれる。		同上 P100
新庄市萩野	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。赤い箱が流れてくる。きゅうりが入っている。	瓜から生まれる。		同上 P100
南陽市	畑に瓜を植えると大きな瓜がなっている。	瓜から生まれる。		同上 p100~101
南陽市沖田	仏様にあげる瓜を買ってくると、	夜中に音がして瓜が割れて赤ん坊が生まれる。		同上 p101
西置賜郡飯 豊町岩倉	柴刈と洗濯。婆が川で洗濯していると、赤と黒の箱が流れてくる。赤い小箱を呼ぶ。箱の中に瓜が	瓜を戸棚にあげて寝ると、夜中に赤子の泣き声がする。瓜姫子と名づける。		『昔話研究 資料叢書 10 飯豊山麓の 昔話』三弥井 書店 昭和 48年 p166~169

	入っている。			
西置賜郡飯 豊町遅谷	婆が川で洗 濯しいて、ま くわ瓜を拾 う。	瓜から生ま れる。瓜姫ご		『日本昔話 通観』第6巻 山形 同朋 舎 1986年 P101
西置賜郡飯 豊町須郷	なし	瓜から生ま れた瓜子姫。		『昔話研究 資料叢書 10 飯豊山麓の 昔話』三弥井 書店 昭和 48年 p 170～171
西置賜郡飯 豊町中津川	婆が川で瓜 を拾う。	爺と食べよ うとしまっ ておくと、子 供の泣き声 がする。瓜か ら生まれる。		『日本昔話 通観』第6巻 山形 同朋 舎 1986年 P101
西置賜郡飯 豊町中津川	畑。 瓜をまくと なる。	瓜から生ま れる。		同上 p101
西置賜郡新 沼	畑から瓜を とる。	瓜から生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p101
西置賜郡小 国町大石沢	川で瓜を拾 う。	瓜からうま れる。		同上 p101～ 102
西置賜郡白 鷹町	畑から瓜を とる。		典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p102
西置賜郡白 鷹町貝生	畑から瓜を 取る。	瓜から生ま れる。		『昔話研究 資料叢書 10 飯豊山麓の 昔話』三弥井 書店 1973年



				p169
西置賜郡白鷹町滝野	畑に瓜をもぎに行くと、女の子がいる。	瓜姫子		同上 p169
西村山郡西川町大井沢	婆が川に洗濯に行く。瓜が流れてくる。	瓜から生まれる。		『日本昔話通観』 第6巻 山形 同朋舎 1986年 p102
東置賜郡高畠町糠野目	畑から瓜をとる。	お盆に供えた瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p102
東田川郡朝日村大綱	婆が川で洗濯していると、香箱が流れてくる。瓜が二つ入っている。一つ食べ、一つは爺に取っておく。	瓜から生まれる。		同上 p102～103
東田川郡朝日村大綱	婆が川で二つの小箱を拾い、開けると瓜が入っている。	爺が帰り、蓋を開けると、赤ん坊がいる。瓜姫子。		同上 p103
東根市東根東方	爺が山の畑でのどが乾き、瓜を取ろうと、瓜はひとりでもあげてころげ	爺が帰ったので、婆が瓜を縦に割ると、女の子が生まれる。「瓜コ」と名		『日本昔話通観』第六巻 山形 同朋舎 1986年 p103

	落ちる。川でふんどしを洗っていた婆が瓜が流れて来たのを見て、拾って帰る。	づける。		
村山地方	爺が山へ木を切りに、婆は川へ洗濯に行く。大きな瓜が流れてくる。	瓜姫子		同上 p103
最上郡真室川町及位	婆川に洗濯に行ってきたゆうりを拾う。	小屋においておくと、赤子が生まれる。胡瓜姫。		同上 p103
最上郡真室川町及位	爺が木切りに、婆が川に洗濯に行く。胡瓜が流れてくる。	包丁で切ろうとすると、割れて女の子が生まれる。		同上 p 104
最上郡最上町本城表小路三ツ森	畑から取ってきた瓜。	瓜から生まれる。	下の山形市上町の話とほぼ同じ。	同上 p 104
山形市上町	畑から取ってきた瓜。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p 104
山形市上町	畑から取ってきた瓜。	取った瓜から生まれる。		同上 p 104
米沢市塩井町	なし	瓜から瓜姫子が生まれる。		同上 p 104
米沢市築沢	川上から瓜が流れてく	瓜の種から赤子が生ま		同上 p 104

	る。	れる。瓜姫子		
西置賜郡白鷹町折居	このない爺と婆が畑に瓜を取りに行くと、子供が走りまわっている。	見ると、瓜から生まれた子なので、瓜姫子と名づける。	二つ目の典型話。	同上 p 105
南陽市	畑の瓜から	生まれる。瓜姫子。		同上 p 105
南陽市小岩沢	このない夫婦が神に願を掛けて授かる。畑から。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p 106
南陽市櫛塚	畑から瓜を取る。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p 106
東田川郡朝日村荒沢	畑から瓜を取る。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p 106
米沢市窪田	川で大きい瓜と、小さい瓜が流れてくる。大きい瓜を拾う。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p 106
西置賜郡小国町大石沢	なし		三つめの典型話。	同上 p 170
置賜地方	無し			同上 p 170
酒田市飛島	なし		典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p 170
長井市五十川	なし		典型話にほぼ同じ。(?)	同上 P170~171
西置賜郡飯豊町大平	なし		典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p 171
東田川郡朝日村八久和	なし		(?)	同上 p 171

東田川郡朝 日村八久和	なし		(?)	同上 p 171
村山市(旧北 村山郡西郷 村)	なし		典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p 171
米沢市大和 和田	なし		典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p 171~172
米沢市築沢	なし		典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p 172
南陽市宮原	なし		四つ目の典 型話。	同上 p 172
南陽市赤湯 町	なし			同上 p 172
西田川郡温 海町越沢	なし			同上 p 172
西村山郡大 江町田ノ沢	なし			同上 p 173
東田川郡朝 日村荒沢	なし			同上 p 173
東置賜郡高 島町露藤	なし			同上 p 173
<b>福島県</b> 22 大沼郡金山 町西谷	爺は山の仕 事に行き、 婆は畑へ瓜 を取りに行 くと、	女の子が笑 っている。瓜 姫と名づけ る。	典型話。	『日本昔話 通観』第7巻 福島 同朋 舎 1985年 p164~165
南会津郡舘 岩村石湯原	畑。 婆がきゅう りを作り、割 ると中から	女の子が出 てくる。		同上 p 165
南会津郡舘 岩村塩ノ原	爺は山へ仕 事にいき、婆 は留守番を している。燕	瓜をもぐ。 爺が割ると、 中から女の 子がでる。		同上 p 165~ 166

	が瓜の種を落とす。婆は畑に瓜の種をまく。	瓜姫と名づける。		
南会津郡 舘岩村貝原	爺が魚釣りに行き、きれいな箱を見つけ、	箱から出てきた乙姫を育てる。		同上 p 166
南会津下郷町	爺は山へカノ焼きに行き、婆は留守番をしていると、燕が糞を落とす。其の中ら、白い瓜の種が出てきて、婆は種を畑にまく。	瓜を割ると、中から女の子が出てくる。瓜姫と名づける。		同上 p 166
耶摩郡 磐梯町（旧磐梯村）	川に赤と白の重箱がながれてくる。赤い箱を持ち帰る。	箱の中の瓜から女が生まれる。瓜姫御と名づける。		同上 p 166
耶摩郡 山都町上林	婆が川に洗濯にいき、大きな瓜を拾う。	爺と二人で切ると女の子が生まれる、瓜姫と名づける。		同上 p 166～167
原町（市旧石神村）	川で瓜を拾うと中から生まれる。			同上 p 167
大沼郡 昭和村	爺と婆が山の神様にお	包丁をあけると、ひとり	二つ目の典 型話。	『日本昔話通観』 第七

	参りに何年も行った。じいさんは山に、おばあさんは川に洗たくにいった。大きな瓜が流れてくる。	でに割れ、赤ん坊が生まれる。		巻 福島同朋舎 1985年 p 167～171
大沼郡金山町山人	爺と婆が畑から甘瓜を切ろうとすると、	甘瓜の中から娘が生まれる。瓜姫と名づける。		p 171
大沼郡昭和村	子の無い爺婆がいた。燕が瓜の種を落とす。畑に埋めて、育てる。婆が瓜をもぎにくると、	女の子がいる。瓜姫と名づける。		同上 p 171～172
大沼郡三島町西方	爺は山へ柴切りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から大きな瓜が流れてくる。	爺と食べようと切ると、中から女の子が出る。瓜姫と名づける。		同上 p 172
大沼郡三島町檜原	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から瓜の入った箱が流れ	切ろうとすると、中から女の子が出てくる。瓜姫と名づける。		同上 p 172

	てくる。			
福島市	子のない爺と婆が畑の瓜を氏神に供えにいき、神様の前で落とすと、	瓜の中から女の子が出る。瓜姫と名づける。		同上 p 172
耶麻郡猪苗代町	婆が川へ洗濯に行くと、川上から瓜が流れてくる。	爺と一緒に食べようと、戸棚を開けると、瓜の中から女の子が生まれている。瓜子姫と名づける。	原題：瓜子織姫 三つめの典型話。	同上 p 174
伊達郡月館町	無し		四つ目の典型話。	同上 p 282
会津若松市	なし			同上 p 282～283
石川郡平田村小平小平	なし			同上 p 283
大沼郡金山町小栗山	なし			同上 p 283
南会津郡南郷村水根沢	なし			同上 p 283
耶麻郡山都町	なし			同上 p 283
東蒲原郡上川村黒谷	柴刈と洗濯。川上から瓜が流れてくる。	割ろうとしたが、割れなかったのので、部屋に寝せておく。夜中に、泣く声がある。瓜から		『日本の昔話 8 越後の昔話』日本放送出版協会 昭和 49 年 p 184～187

		女の子が生まれている。 瓜姫ごと名づける。		
群馬県 21 吾妻郡六合 村引沼	爺さんは山へ柴刈りに、 婆さんは川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	爺の指示に従って一週間戸棚にしまっておいてから割ると、瓜姫が生まれる。	典型話。	『日本昔話通観』 第8巻 栃木・群馬 同朋舎 1986年 p135～136
吾妻郡六合 村根広	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。爺の話の通りに、	瓜を綿に包んで、いろりにおくと、夜中に瓜が割れ、赤ん坊が出てくる。瓜姫と名づける。		同上 p 137～138
吾妻郡六合 村根広	爺が山へたき木切りにいき、婆が川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	綿に包んで、棚に置くと、瓜から女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p 137
吾妻郡六合 村根広	爺が山へボヤ取りに、婆が川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	綿に包んで、棚に置くと、瓜の中から女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p 137
吾妻郡六合 村引沼	爺が山へ柴刈りに、婆が	綿にくるんで、戸棚にし		同上 p137～138



	川へ洗濯していると、川上から瓜が流れてくる。	まっておくと、瓜から女の子が生まれる。		
吾妻郡六合村引沼	爺が山へいき、婆は川へ洗濯していると、瓜が流れてくる。	瓜が割れ、女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p138
吾妻郡六合村引沼	爺が山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯にいとっていると、瓜が流れてくる。爺の指示に従って、一週間戸棚にしまっておくと、	瓜から女の子が生まれる。		同上 p138
吾妻郡六合村和光原	爺が山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	綿にくるんでおくと、女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p138～139
吾妻郡六合村引沼	婆が川へ洗濯にいとっていると、瓜が流れてくる。	爺が割ろうとすると、娘が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p 139
吾妻郡六合村引沼	爺は山へ柴刈りに、婆が川へ洗濯に行くのと、大き	食べようと思つて、綿にくるんで三日間おい		同上 p 139

	な瓜が流れてくる。	ておく。爺が瓜を割ると、女の子が生まれる。		
吾妻郡 嬬恋 村今井	爺が山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	爺の指示に従って、綿に包んで、いろいろのそばに置くと、瓜の中から女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p139～140
吾妻郡 嬬恋 村半出来	婆が川へ洗濯に、瓜を拾う。	爺にみせると、髪か綿に包んでかろうとに置いておけという。夜中に瓜の中から、女の子が生まれる。		同上 p 140
利根郡 水上 町藤原	婆が水汲みにいくと、瓜が流れて流れてくる。	爺が畑から帰って、二人で切ろうとすると、瓜から女の子が生まれる。瓜姫御前と名づける。	典型話。	同上 p 141
吾妻郡 吾妻 町岩下	爺婆が瓜が流れて来たので拾って	中からうまれる。瓜姫と名づける。		同上 p 141

	帰る。			
利根郡水上町藤原	婆が洗濯に いって、瓜を 拾う。	爺と二人で 切ると、女の 子が生まれ る。瓜姫と名 づける。		同上 p 141
吾妻郡嬭恋村門貝	畑 よい瓜がな ったので、綿 に包んでい ろりの隅に おいておく。	爺と食べよ うと割ると、 中から娘が 生まれる。瓜 姫と名づけ る。		同上 p 142
吾妻郡嬭恋村上の貝	婆が川を流 れて来た瓜 を拾う。爺が 「女の子が 生まれから 大事にしろ」 と言うので、 包んでしま っておく。	瓜の中から 夜中に女の 子が生まれ る。瓜姫と名 づける。		同上 p 142～ 143
吾妻郡中之条町五反田	なし	瓜の中から 生まれた。		同上 p143
吾妻郡六合村引沼	なし		原題：うりひ め	同上 p 278
吾妻郡六合村引沼	なし			同上 p 278
吾妻郡嬭恋村田代	なし			同上 p 279
栃木県 5 芳賀郡茂木町牧野西	婆が川へ洗 濯に行く。瓜 を拾う。	瓜の中から 女の子が生 まれる。瓜子 姫と名づけ る。		小堀修一『昔 話研究資料 叢書 12 那珂 川流域の昔 話』三弥井書

				店 1975年 p73
芳賀郡茂木町鳥生田	なし			同上 p71
芳賀郡茂木町（旧逆川村木幡）	なし			『日本昔話通観』第8巻 栃木・群馬 同朋舎 1986年 p 254
芳賀郡茂木町（旧逆川村木幡）	なし			同上 p 254
芳賀郡茂木町下菅又	なし			同上 p 254
<b>茨城 0</b>				
<b>埼玉 3</b> 川越地方	子供のいない爺と婆が子を授かるように、神に祈る。畑に瓜がなつたと聞いた爺婆は畑に行く。	畑に大きな瓜がなつたので、爺が見に行ってこるび、婆がいくと、大きな瓜の中から、小娘が出てくる。瓜娘と名づける。		『全国昔話飼料集成 20 武蔵川越昔話集』岩崎美術社 1975年 p 23~24
東松山市（旧比郡高坂村）	爺婆が神様に子授けを願っていた。婆が洗濯に行つて、川でまくわ瓜を拾う。	爺と二人で切ると、中から女の子が生まれる。瓜子姫と名づける。		『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・千葉・東京・神奈川 同朋舎 1988年 同上 p 227
川越地方	無し			同上 p228

千葉 1 長生郡長柄 町上野	なし		原題：瓜姫	川端豊彦・金 森美代子『昔 話研究資料 叢書 16 房総 の昔話』三弥 井書店 1980 年 p208
東京 0				
神奈川 0				
新潟県 27 五泉市町屋	子供ないじ さまばさが いた。じさ、 山へ仕事に いき、ばさ、 川へ洗濯に 行くと、香箱 が流れてく る。実のある 箱を呼ぶ。	いろりのは たにおく。 爺が帰り、箱 が音がして、 中から女の 子が出てく る。おひめと 名づける。	原題：うりひ め 典型話。	『日本昔話 通観』第 10 巻 新潟 同朋舎 p257～259
柏崎市清水 谷	柴刈と洗濯。 桃が流れて くる。	瓜から生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p 259
古志郡古志 村虫亀	柴刈と洗濯。 桃が流れて くる。	瓜から生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p 259
佐渡郡羽茂 町（旧羽茂 村）	柴刈と洗濯。 桃が流れて くる。	瓜から生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p 259
栃尾市比礼	柴刈と洗濯。 桃が流れて くる。	瓜から生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p 259
長岡市滝谷 町	柴刈と洗濯。 桃が流れて	瓜から生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p 259

	くる。			
長岡市西蔵王町	柴刈と洗濯。桃が流れてくる。	瓜から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p 259
長岡市水梨町	柴刈と洗濯。桃が流れてくる。	瓜からうまれる。「お姫上臈」と名づける。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p 259
東蒲原郡上川村黒谷	柴刈と洗濯。桃が流れてくる。	瓜からうまれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p 259
東蒲原郡上川村蟬	柴刈と洗濯。桃が流れてくる。	瓜からうまれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p 259
岩船郡山北村雷	婆が川へ洗濯にいくと、瓜が流れてきた。	爺と食べようと、持ち帰ると、中から女の子が生まれる。瓜姫と名づける。	典型話。	同上 p260
柏崎市(旧刈羽郡鷯川村)	畑。爺が栗刈りの帰りに拾う。	瓜からうまれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p260
佐渡郡赤泊村腰細	洗濯。瓜が流れてくる。	瓜から生まれる。		同上 p 260~261
長岡市越路町	婆が川で拾った香箱から、	機織姫が出る。		同上 p 261
中浦原郡村松町荒屋	なし			同上 p 261
長岡市麻生田町	婆が川で洗濯をしてい	実のある箱をよび、開け	原題：じょうろう	『日本昔話通観』第 10

	ると、香箱が流れてくる。	ると、女の子が入っている。	典型話。	巻 新潟 同朋舎 1984 年 p261
北浦原郡水原町天神堂	畑。(?) 婆が町で買った瓜の中から	女の子が出る。		同上 p 262
佐渡郡畑野町	婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	拾った瓜をわらくずの中に入れておくと、女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		『昔話研究資料叢書 3 佐渡国仲の昔話』三弥井書店 昭和47年 p 42~44
長岡市成願寺町	洗濯。 箱が流れてくる。	婆が拾った香箱に女の子が入っている。	典型話にほぼ同じ。(?)	『日本昔話通観』第10巻 新潟同朋舎 1984年 p262
北浦原郡豊浦町切海	爺が川へ顔を洗いに行くと、箱が流れてくる。箱を呼ぶ。	爺が箱を開けると、瓜が入っている。婆と食べようと、持って帰ると、割れ、女の子が生まれる。	原題：ウリ姫っ子	同上 p262
五泉市川瀬	畑。 子なしの婆が作った瓜からうまれる。			同上 p263

佐渡郡相川町石花	川で拾った瓜から娘が現れる。	瓜子姫と名づける。		同上 p263
柏崎市(旧刈羽郡田尻村下田尻)	爺婆の畑に大きな胡瓜が一つなり、	家へ運ぶと、途中、実が縦に割れ、中から女の子が出る。瓜姫と名づける。		同上 p263~264
南蒲原郡下田村遅場(旧森町村)	なし		原題：瓜姫 典型話。	同上 p497
佐渡文畑野町	なし		典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p497
新澁田市上赤谷	なし		典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p497
西蒲原郡巻町	なし		典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p497
富山 3 射水郡小杉町黒河	爺まは山へ、婆々な川へ洗いもんにいった。川上から瓜が流れてくる。	二人で食べようと、割ろうとしたら、女の子が出てくる。瓜子姫と名づける。		『日本昔話通観』第11巻 富山・石川・福井 同朋舎 1981年 p181
富山市(旧新川郡三郷村)	なし	まっか(甘瓜)から女の子が生まれる。		同上 p 182
下新川郡	なし		原題：瓜子姫	同上 p 311
石川 2 江沼郡山中	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に	婆は箱に入れておく。爺が帰って、	原題：瓜姫小女郎	山下久男『全国昔話資料集成 19 加



町（旧西谷村）	行く。川上から瓜が流れてくる。	二人で食べようと、蓋を取ると、中に女の子がおる。瓜姫小女郎と名づける。		『賀昔話集』岩崎美術社 1975年 p 42～43
江沼郡山中町（東谷奥村）	爺は山へ薪物しに、婆は川へ洗濯に行くとき、瓜が流れてきた。	爺が帰って割ると、娘が出てくる。瓜姫小女郎と名づける。		同上 p43～44
福井 4 南越地方	爺が山へ木を切りに行くとき、	木の中から赤ん坊の泣き声がある。その木を切ると、女の子が出てきたので、娘を「お姫さん」と呼ぶ。		『日本昔話通観』第11巻 富山・石川・福井 同朋舎 1981年 p 182
南越地方	子のない爺婆が毎日神に願っていると、ある日婆は川で洗濯していて、流れてきた瓜を拾う。	家へ帰って割ってみると女の子が出てきたので、瓜子姫と名づける。		同上 p183
福井県	爺は山へ、婆は川へ行く。婆が洗濯中、小さいたんすが流れて	下に置くと、みるみる大きくなる。引き出しの中から女の		同上 p 183

	来る。	子の声がするので、開けると、女の子とたくさんを着物が出てきて、抱くとみるみる大きくなる。婆が川で洗濯していると、長持が流れてきたの、持ち帰って開けると、男の子がでてきて、抱くとみるみる大きくなる。		
南越地方	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。婆が流れて来た水瓜（きゅうり）を拾って、	戸棚に入れておく。爺が帰ってから切ると、中から狸が出てくる。		同上 p332
山梨県 1	爺は山へ薪取りにいき、婆が川で洗濯していると、大きな瓜が流れてくる。	戸棚へしまう。爺が帰って包丁で切ろうとすると、瓜に後光がさして割れ、中から姫が生まれる。		『日本昔話通観』第12巻 山梨・長野 同朋舎 1981年 p104～105

		瓜姫と名づける。		
長野県 18 南佐久郡小海町	じんじ山へしば刈りに、ばんばが川へ洗たくに、上から大きな瓜がくる。	じんじが帰ったから、ばんばが割って食おうとしたら、割れ、中から女の子が生まれる。		『日本昔話通観』第12巻 山梨・長野 同朋舎 1981年 p97～98
長野県	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯にしていると、川上から流れてくる。	よい瓜をよび、切ろうとすると中から生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p98
上水内郡小川村稲丘東	川上から赤い櫃と黒い櫃が流れて、婆が赤い櫃を拾って帰る。	中の瓜を割ると姫が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p98～99
上水内郡小川村成就	畑？ 爺婆が瓜を拾って来て、割ると、中から	娘がでてきた。瓜姫と名づける。		同上 p99
下水内郡	媪が川で瓜が重箱に入って流れて来たのを、拾って帰る。	戸棚にしまっておくと、割れて女児が生まれる。		同上 p99
小県郡真田町（旧長村）	爺は山へ柴刈りに、婆は	瓜は二つに割れ、女の子		同上 p99～100

	川へ洗濯に行く。川上から瓜が流れてくる。	が生まれる。瓜姫と名づける。		
小  県  郡  真  田  町 (旧  傍  陽  村  曲  尾)	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から瓜がくる。	二人で割って食べようとすると、中から生まれ女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p100
小  県  郡  武  石  村	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に川上から瓜がくる。	よい瓜をよび、爺と食べようとすると、割れて、生まれる。		同上 p100
南  佐  久  郡  小  海  町 (旧  小  海  村)	爺は山へ木を取りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から瓜が流れてくる。	婆と一緒に食べようと、切ると、女の子が出てくる。瓜姫と名づける。		同上 p100
上  水  内  郡  小  川  村  法  地	爺が瓜畑へ行って、瓜をとって、婆と食べようと割ったら、	女の子が出てきた。瓜姫と名づける。		同上 p 101～102
上  水  内  郡  小  川  村  上  和	爺は山へ草刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から瓜が流れてくる。	爺と婆が食べようと切ると、中から赤ん坊が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p 102
上  水  内  郡  小	爺は山へ草	戸棚におく。		同上 p102～

川村上和	刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜を呼ぶ。	中から娘が生まれる。瓜姫と名づける。		103
上水内郡小川村久木	爺は山へ柴かりに、婆は川へ洗濯に行く。川上から瓜が流れてくる。	爺と食べようとすると中から女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p 103
下水内郡栄村	爺は山に行き、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	婆が持ち帰り割ると、娘が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p 103
伊那地方	婆が川へ洗濯にいくと、瓜が流れてくる。	戸棚にしまう。爺が帰り、二人で瓜を食べようとすると、中から娘が生まれる。瓜子姫と名づける。		同上 p104
上水内郡小川村法地	なし	瓜から女の子が生まれ、瓜姫と名づける。		同上 p104
上水内郡小川村上和	無し		原題：瓜姫	同上 p353
飯山市常盤柳新田	爺は山へ草刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れ	二人で包丁で割ろうとすると、瓜が二つに割れ、	瓜子姫子	『日本の昔話 29 信濃の昔話』日本放送出版協

	てくる。	女の子が出てくる。瓜姫と名づける。		会 昭和 55 年 p 22～27
岐阜 8 郡上郡白鳥 町東前谷	爺さんは柴切りに、婆さんは洗濯に行く。瓜が流れてくる。	棚へのせる。食べようと開けてみると、女の子がいる。瓜姫小女郎と名づける。		『日本昔話通観』第 13 卷 岐阜・静岡・愛知 同朋舎 1980 年 p198～199
大野郡丹生 川村	一人暮らしの婆が川で麻をさらしている、赤い瓜と白い瓜がくる。	赤い瓜を拾って、仏様に供えようとすると割れて、姫が現れる。		同上 p199
吉誠郡上宝 村	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く、瓜が流れてくる。	棚に入れておくと、中から男の子が生まれる。瓜姫小次郎と名づける。		同上 p199
吉城郡上宝 村	婆は川へ洗濯に、爺は山へ柴刈りに、洗濯していると、上のほうから、瓜が流れてくる。	棚におく。瓜は娘になっている。瓜姫こじろうと名づける。		同上 p200
吉城郡上宝 村	爺と婆が子供ないので、神様に頼むと、女の子が生まれる。	瓜姫こじろうと名づける。		同上 p200

吉城郡上宝村	婆が川で洗濯している と、上のほうから、瓜が流れてくる。一つ食べ、もう一つ呼ぶ。	棚にあげる。 婆が棚を開けようとするがあかないので、爺が戸を割ると、瓜しまこじろうが生まれる。		同上 p200～201
吉城郡上宝村	婆が川へ洗濯に行くと、瓜が流れてくる。	切ると、中から男の子が出てくる。瓜太郎と名づける。		同上 p 201
郡上郡	なし		原題：瓜姫小女郎	同上 p330～331
静岡 0				
愛知 0				
京都 1 与謝郡伊根町本庄上	子供のないお爺さんとお婆さん。 爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	二人で菜刀で切ろうとしたら、割れ、女の子が出てくる。瓜子姫と名づける。		『日本昔話通観』第14巻 京都同朋舎 1977年 p218～220
三重 0				
滋賀 1 東浅井郡湖北町（旧朝日村石川）	お爺さんが山へ柴刈りに、お婆さまが川へ洗濯に行く。胡瓜が流れてくる。	瓜の中から女の子が出てくる。胡瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』三重・滋賀・大阪・奈良・和歌山同朋舎 1977年 p121～123

大阪 1 大阪市北区 天神橋筋	婆が川で菜 っぱや大根 を洗ってい たら、瓜が流 れてくる。瓜 を呼ぶ。	爺と二人で 拾い上げ、切 りかけたら、 中から女の 子が出てく る。瓜子と名 づける。		笠井典子『日 本の昔話 17 浪速の昔話』 日本放送出 版協会 1977年 p132～135
奈良0				
和歌山0				
兵庫県 11 美方郡美方 町小代	お婆さんが、 洗濯に出た ら、瓜が流れ てくる。	臼の段に置 いておく。爺 が帰り、爺と 割ったら、女 の子が出て くる。瓜姫と 名づける。	原題：瓜姫	『日本昔話 通観』兵庫 県同朋舎 p105～106
美方郡美方 町秋岡	婆が川で洗 濯していると、 瓜が流れ てくる。	切ると姫が 出てくる。瓜 姫と名づける。		同上 p106
美方郡美方 町小代	爺は山へ行 き、婆が川で 洗濯してい ると、瓜が流 れてくる。	食べようと すると、割 れ、女の子が 出てくる。瓜 姫と名づける。		同上 p106～107
美方郡美方 町茅野	子供のない 爺婆がいる。 田へ行くと、	瓜から子供 が出てきて、 子がないの かと尋ね、な いと言うと、 「子になっ てやる」と言 うので、瓜姫		同上 p107



		と名づけて育てる。		
美方郡美方町実山	婆が川へ洗濯にいった、瓜を拾ってくる。	爺がもどったので、切ると、瓜から生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p107
美方郡美方町新屋	無し			同上 p107
美方郡美方町貫田	爺は柴刈りに行き、婆が川で洗濯していると、瓜が流れてくる。	爺と分けたべようとすると、女の子が出てくる。瓜姫と名づける。		同上 p107
美方郡村岡町村岡川上	爺は山へ柴刈りに行き、婆が洗濯に出ると瓜が流れてくる。	爺と割ると、娘がうまれた。瓜姫と名づける。		同上 p107～108
美方郡村岡町日影	爺は山へ柴刈りに行き、婆が川で洗濯していると、瓜が流れてくる。	爺を待って切ると、女の子が出てくる。瓜姫と名づける。		同上 p108
美方郡美方町茅野	無し			同上 p109
姫路城北平野	爺は山へ柴刈りに、婆が川へ洗濯に行くと、瓜が流れてくる。	家にもどってみると、中から女の子が生まれる。瓜子姫と名づける。		同上 p109

<p>鳥取県 18 東伯郡東伯 町古長</p>	<p>子供のない 爺と婆。 お爺さんは 山へ柴樵り に、お婆さん は川で、洗濯 していた。上 のほうから、 瓜が流れて くる。</p>	<p>お爺さん待 って、一緒に みると、瓜か ら女の子が 生まれてい る。瓜子女郎 と名づける。</p>	<p>原題：瓜子女 郎</p>	<p>稲田浩二・福 田晃『昔話研 究資料叢書 7 大山北麓の 昔話』三弥井 書店 昭和 40年 p185～186</p>
<p>西伯郡西伯 町赤谷</p>	<p>子供のない 爺と婆。 爺は木こり に、婆は川へ 洗濯に行く。 瓜が流れて くる。</p>	<p>包丁を当て かけると、ひ とりでに割 れて、女の子 が生まれる。 瓜姫と名づ ける。</p>		<p>『日本の昔 話 15 伯耆の 昔話』日本放 送出版協会 昭和 51 年 p143～151</p>
<p>東伯郡赤碕 町尾張</p>	<p>爺は山へ柴 刈りに行き、 婆が川へ洗 濯に行ってい ると、瓜が 流れてくる。</p>	<p>爺が戻り、切 ろうとした ら、二つに割 れて、女の子 が出てくる。 瓜姫と名づ ける。</p>		<p>稲田浩二・福 田晃『昔話研 究資料叢書 7 大山北麓の 昔話』三弥井 書店 昭和 40年 p188</p>
<p>東伯郡東伯 町岩本</p>	<p>柴刈と洗濯。 瓜が流れて くる。</p>	<p>婆さんが大 きな瓜を拾 って帰り、爺 さんが戻る のを待ち、櫃 の蓋を開け てみると、お 姫さんにな っている。</p>		<p>同上 p188</p>

東伯郡東伯町倉坂	爺は山へ木樵りに、婆は川へ洗濯に行く、川上から瓜が流れてくる。箆笥に入れる。	爺が帰ってたんすから出してみると、赤んちゃんができる。瓜姫と名づける。		同上 p188
東伯郡一ツ屋	婆が川から瓜を捨てる。	戸棚に入れておくと、瓜の中から姫がうまれてきて、機を織る。		同上 p188
東伯郡東伯町別宮	爺は山へ草刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から瓜が流れてくる。	爺が帰って、とぐちの蓋を開けたら開かない、やっとあけて瓜を半分に切ったら、お姫さんが出てくる。		同上 p187
東伯郡東伯町別宮	なし			同上 p187
東伯郡東伯町森藤	子のない爺と婆。 爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から大きな瓜が流れてくる。	とびつの中へ入れる。 爺が帰った後、開けてみたら、赤ちゃんが生まれている。		稲田浩二・福田晃『昔話研究資料叢書 7 大山北麓の昔話』三弥井書店 昭和40年 p 188
東伯郡東伯	なし			同上『昔話研

町山田				究資料叢書 7 大山北麓の 昔話』 p187
日野郡日南 町	爺は山へ柴 刈りに、婆が 川へ洗濯に 行っている と、川上から 瓜が流れて くる。	爺と食べよ うと、切った ら女の子が 生まれる。瓜 姫と名づけ る。		『日本昔話 通観』第 17 巻 鳥取 同朋舎 1978 年 p 101~102
日野郡日南 町茶屋	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に 行っていた ら、川上から 瓜が流れて くる。	二つに切っ たら、女の子 が出てくる。 瓜姫と名づ ける。		『日本昔話 通観』第 17 巻 鳥取 1978 年 p102
日野郡日南 町多里	お爺さんは 柴刈りに、お ばあさんは 川へ洗濯に いった。上か ら大きな瓜 が流れてく る。	瓜を出した ら、割れて中 から娘が出 てくる。「お おふめ」と名 づける。		『日本昔話 通観』第 17 巻 鳥取 1978 年 p103~104
東伯郡東伯 町下大江	なし			稲田浩二・福 田晃『昔話研 究資料叢書 7 大山北麓の 昔話』三弥井 書店 昭和 40 年 p 188

東伯郡東伯町古長	爺と婆が子をほしがって、流れて来た瓜を拾ったら、	女の子がでてくる。瓜姫と名づける。		p 187
東伯郡東伯町別宮	婆が川へ洗濯に行くと瓜が流れてくる。	戸棚に入れる。爺と瓜を出すと、中で二つに割れて赤ちゃんが生まれている。瓜姫と名づける。		同上 p187
日野郡日南町福栄	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	爺と一緒に切ると、娘が生まれる。		『日本昔話通観』第17巻 鳥取 1978年 p 105
東伯郡関金町	柴刈と洗濯。瓜が流れてくる。	押しこみにしまう。爺と食べようと、開けてみると、瓜が割れて娘が出ている。		同上 p105～106
島根 64 邑都郡大和村宮内	じいさんは木こりに、ばあさんは川へ洗濯に行き、着物をすいている。上の方から、瓜が流れてくる。	ひつの中に入れる。ばさん、包丁で割ろうとすると、ひとりでに割れ、お姫さんが出てくる。瓜姫と名づけ		島根女子短期大学昔話研究会『大和昔話集稿巻一』1975年自刊 p 41

		る。		
飯石郡掛合町波多田上	婆が川へ洗濯に行くと、瓜が流れてくる。	割ろうとすると、中から姫が生まれる。瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』第18巻 島根同朋舎 1978年 p125
飯石郡掛合町波多成	婆が川へ洗濯に、川上から瓜が流れてくる。	切ろうとすると、二つに割れて、女の子が誕生する。瓜姫と名づける。		同上 p125
飯石郡頓原町佐見	婆が川で洗濯していると、瓜が流れてくる。	切ると、姫が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p125
飯石郡頓原町都加賀	婆が川へ洗濯に行くと、瓜が流れてくる。	食べようと切ると、われ、娘が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p125~126
飯石郡頓原町花栗	婆が川へ洗濯に行くと、瓜が流れてくる。	割ると子供が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p126
飯石郡頓原町花栗	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行くと、川上から瓜が流れてくる。	割って食べようとすると、中から女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p126
大田市静間町弓辺	爺は山へ草刈りに、婆は川へ洗濯に	籠の中に入れ、爺が帰ったので、婆が	瓜子織姫	島根大学教育学部国語研究室昔話

	行く。川上から瓜が流れてくる。	切ろうとすると、中から女の子が生まれる。		研究会『石見大田昔話集』自刊 昭和49年 p46
邑智郡石見町（旧井原村）	爺は山へ木こりに、婆は川へ洗濯に、川上から瓜が流れてくる。	櫃の中に入れる。爺が帰ったので、婆切ろうとすると割れ、姫が出る。		『日本昔話通観』第18巻 島根同朋舎1978年 p126～127
邑智郡桜江町長谷八戸	爺は山へ、婆は川へ洗濯に行くと、瓜が流れて来る。	神棚に供える。切ると、女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p127
邑智郡桜江町	爺は山へ、婆は川へ洗濯に行くと、胡瓜が流れてくる。	爺と食べようと出すと、胡瓜の中から姫が生まれる。		同上 p127
邑智郡桜江町	爺は山へ木こりに、婆は川へ洗濯に、川上から、瓜が流れてくる。	たんすを開けると、姫が生まれ、声をかけてくる。機を織っている。		同上 p127～128
邑智郡桜江町	婆が川で洗濯をしていると、瓜が流れてくる。	戸棚に入れておく。（途中欠）		同上 p128
邑智郡大和村都賀行	なし	瓜の中から生まれた瓜姫。	(?)	同上 p128

邑智郡大和 村都賀行	柴刈と洗濯。 瓜が流れて くる。	爺に見せよ うと出すと、 瓜の中から 姫が生まれ ている。瓜姫 と名づける。		同上 p128
邑智郡大和 村都賀西	なし	婆が瓜を持 ってもどる と、中から瓜 姫が生まれ る。	(?)	同上 p128
邑智郡大和 村比敷	なし	瓜から娘が うまれる。		島根女子短 期大学昔話 研究会『大和 村昔話集稿 卷一』1975年 自刊 p40～41
邑智郡大和 村宮内	爺は山へ、婆 は川へ洗濯 に行き、川上 から瓜が流 れてくる。	割ろうとす ると自然に 割れ、姫が生 まれる。瓜姫 と名づける。		同上 p 46
邑智郡大和 村宮内	爺は山へ木 こりに、婆は 川へ洗濯に いく。	戸棚におく。 爺が帰った ので、切ろう とすると、中 から女の子 が生まれる。 瓜姫と名づ ける。		同上 p49
邑智郡大和 村宮内	婆が川に洗 濯に行き、瓜 を拾って、	櫃に入れて おくと姫に なっている		同上 p54



大原郡木次町東日登	婆が川に洗濯に行くと、瓜が流れてくる。	切ると、女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』第18巻 島根 同朋舎 p129～130
隠岐郡西郷町中村（旧周吉郡中村）	婆が川で洗濯していると、桃が流れてくる。もう一つ呼ぶ。	戸棚にしまい、爺が帰って出すと、二つに割れて中から娘が生まれる。		同上 p130
隠岐郡知夫村薄毛	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行くと、川上から柿が流れてくる。	爺のためもう一つよび、引き出しの中に入れておく。爺が帰ってきたので、引き出しをまさかりで割ると、中から娘が出て、姫君と名づける。		同上 p130
仁多郡仁多町亀嵩梅木原	爺や山へ木こりに、婆は川へ洗濯に行くと、瓜が流れてくる。食べるとうまいので、爺のためもう一個よぶ。	櫃に入れる。爺が帰り、櫃の蓋を取ると、姫が生まれており、瓜姫と名づける。		『日本の昔話14 出雲の昔話』日本放送出版協会 昭和51年 p104～107
仁多郡横田町大谷杭木	婆が川へ洗濯に行くと、	中から女の子が生まれ		『日本昔話通観』第18

	瓜が拾い、切ると、	る。瓜姫と名づける。		巻島根 同朋舎 1978年 p130～131
仁多郡横田町大谷杭木	爺は山へ柴刈りに、婆が川へ洗濯に行き、瓜を拾う。	割ると、瓜から女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p131
仁多郡横田町大谷杭木	婆が川へ洗濯に、瓜が流れてくる。	切ると、女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p131
仁多郡横田町大馬木大峠	婆が川へ洗濯にいき、瓜が流れてくる。	戸棚に入れておくと、女の子が生まれ、瓜姫と名づける。		同上 p131
仁多郡横田町大馬木野伏	婆が川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	置いておくと、女の子が生まれ、瓜姫と名づける。		同上 p131
仁多郡横田町大宮	婆が川へ洗濯に行くと、瓜が流れてくる。	米櫃に入れる。爺帰って、食べようと蓋を開けると、瓜の中から子供が生まれており、瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』第18巻 巻島根 同朋舎 1978年 p131～132
仁多郡横田町大呂	婆が川へ洗濯にしていると、瓜が流れてくる。	爺と切ろうとすると、中から女の子が生まれる。		同上 p132

		瓜姫と名づける。		
仁多郡横田町小馬木板敷	婆が川へ洗濯にしていると、瓜が流れてくる。	割ると中から女の子が生まれ、瓜姫と名づける。		同上 p132
仁多郡横田町小馬木川東	婆が川で洗濯をしていると、瓜が流れてくる。	戸棚に入れておき、開けてみると割れて、娘の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p132
仁多郡横田町竹崎	婆が川で洗濯していると、瓜が流れてくる。	戸棚に入れ、爺と切ろうとすると、中から生まれる。瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』第18巻島根 1978年 p132～133
邇摩郡温泉津町井田	婆が川で洗濯していると、瓜が流れてくる。	割ろうとすると生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p133
松江市	婆が川で拾った瓜を割ると、	中から姫が出る。		同上 p133
飯石郡吉田村大吉田	爺さんは山へ木樵りに、婆さん川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	米櫃に入れる。爺さんが戻ったら、あけると、瓜が二つに割れて、姫が生まれている。瓜姫と名づ		同上 p134～136

		ける。		
飯石郡 頓原町 奥畑	婆が川へ洗濯に行くと、瓜が流れてくる。	爺と切ろうとすると、割れて、中から姫が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p136
仁田郡 横田町 小馬木 本谷	婆が川で洗濯していると、瓜が流れてくる。	戸棚にしまっていて割ると、瓜姫が出る。		同上 p136
仁多郡	婆が川で洗濯に行くと、瓜が流れてくる。	たんすの中に入れ、爺帰ったので、あけると、姫が生まれる。瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』第18巻 島根 P136
熊義郡 広瀬町 比田茅原	爺は山へ木こりに、婆が川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。うまいので、爺のためもう一つよび、	米櫃に入れておく。爺帰ったので、出すと、子供が生まれて、中で機を織っている。		立石憲利・山根芙佐恵『日本の昔話 14 出雲の昔話』日本放送出版協会 昭和51年 p239～241
飯石郡 掛合町 波多栄町	婆が川で洗濯していると、瓜が流れてくる。	切ろうとすると、女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』 島根同朋舎 p137
隠岐郡 海士町 菱蒲	無し			『日本昔話通観』 島根同朋舎

				p168～169
飯石郡頓原町佐見	なし			同上 p169
飯石郡頓原町八神	なし（不明）			同上 p169～170
飯石郡吉田村下町	爺と婆が一人の子供を授かって育てている。			同上 p170
大田市（旧邇摩郡大森町）	なし			同上 p170
邑智郡桜江町	なし			同上 p170
邑智郡大和村都賀本郷	なし			同上 p170～171
隠岐郡西ノ島町波止	なし			同上 p171
隠岐郡西ノ島町（旧知夫郡浦郷村）	なし			同上 p171
隠岐郡布施村飯美	なし			同上 p171
鹿足郡日原町（旧日原村）	無し			同上 p171
仁多郡横田町大馬木亀ヶ市	なし			同上 p171～172
熊義郡広瀬町	無し			『日本昔話通観』第18巻 島根同朋舎 p172
邑智郡大和	無し			島根女子短

村宮内				期大学昔話研究会『大和村昔話集稿卷一』1975年自刊 p55
飯石郡掛合町波多宮内	無し			『日本昔話通観』第18巻 島根同朋舎 p173
江津市渡津町（旧江津町長田）	無し			同上 p173
隠岐郡西ノ島町赤之江	無し			同上 p173～174
隠岐郡西ノ島町（旧知夫郡蒲郷町）	無し			同上 p174
邑智郡桜江町	無し			同上 p174
仁多郡横田町大馬木日向原	無し			同上 p174
仁多郡横田町小馬木小森	無し			同上 p104
邑智郡大和村都賀行郷下	婆が川できゅうりを拾う。	戸棚に入れる。開けてみると、娘がいる。瓜姫と名づける。		『日本の昔話 27 石見の昔話』日本放送出版協会昭和54年 p69～72
岡山	おじいさん	櫃があかな	原題：瓜姫御	『日本昔話

44 阿哲郡神郷 町三室	は山へ木樵りに、おばあさんは川へ洗濯に行く。川の上から瓜が流れてくる。	いので、まさかりで蓋を割ってみたら、瓜がもう二つに割れ、生まれている。瓜姫御寮と名づける。	寮	通観』第19巻 岡山 同朋舎 1979年 p19～21
阿哲郡神郷 町三室	爺は山へ木樵りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から瓜が流れてくる。	爺が帰って戸棚をあけてみると、娘の子がいた。瓜姫御寮を名づける。		同上 p21
阿哲郡神郷 町三室	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	二人で割ってみると、中から姫が生まれ、瓜姫と名づける。		同上 p21～22
阿哲郡哲西 町東	爺婆が、神仏に子を受かるように、願をかける。山へ仕事に、婆は川へ洗濯に行く。	戸棚に入れる。爺が戸棚を開けると、娘がいる。瓜姫と名づける。		同上 p22
阿哲郡哲西 町青谷	爺は山へ木樵りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から瓜が流れてくる。	爺と割ろうとすると、ひとりだけで割れ、姫が話す。		同上 p22
阿哲郡哲西 町川南	婆が川で洗濯をしてい	瓜が音がする		同上 p22～23

	ると、瓜が流れてくる。	てみると、娘の子がいる。瓜姫と名づける。		
小田郡美星町東水砂古尾	婆が川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	爺が帰って、戸を開けてみたら、子供ができて布を織っている。		同上 p23
小田郡矢掛町下高末高階	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	戸棚にしまっておくと、大きな女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p23
川上郡備中町金野	爺は木を拾いに、婆は川へ洗濯に行く。	瓜の中から生まれる。		同上 p23
後月郡芳井町	爺婆が川へ洗濯に行くと、大きな瓜が流れてくる。	割ると中から姫が生まれる。		同上 p23～24
苫田郡上斎原村赤和瀬	爺は山へいき、婆は川へ洗濯に行く。川上から瓜が流れてくる。	爺が瓜を割ろうとすると、われて、女の子がお生まれる。瓜子姫と名づける。		同上 p24
苫田郡上斎原村遠藤	爺は山へ柴刈りに、婆は	爺が出そうとすると、開		同上 p24



	川へ洗濯に行く。戸棚に入れておく。	かず、中から瓜姫の声が聞こえる。		
真庭郡川上村黒岩	爺は山へ木樵りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	爺と割ろうとすると、ひとりでに割れ、娘が出る。瓜姫御寮と名づける。		同上 p24～25
真庭郡川上村栗住	爺は山へ木こりに、婆は川へ洗濯に行く。川上から瓜が流れてくる。	婆が切ると、中から女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p25
真庭郡川上村黒岩	爺は山へ柴刈りにいき、婆は川へ洗濯に、川上から大瓜が流れてくる。	爺がかえったので、たんすを開けると、瓜の中から娘が出る。		同上 p25
真庭郡川上村上福田	婆が川で洗濯をしていると、大きな瓜が流れてくる。	爺が帰ってから戸棚を開けてみると、女の子ができています。瓜姫御寮と名づける。		同上 p25～26
真庭郡川上村正富	爺は山へ木こりに、婆が川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	戸棚 爺が帰ったので、あけると、割れて、娘が出る。瓜姫御寮と名		同上 p26

		づける。		
真庭郡中和村	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。大きな瓜が流れてくる。	たんすの引きだしを爺がみると、瓜はお姉さんになっている。	瓜姫御寮と名づける。	同上 p26
真庭郡中和村	爺は山へ木を切りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	爺が割ってみると、女の子が出る。瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』第19巻 岡山同朋舎 1979年 p26～27
真庭郡美甘村鉄山	婆が洗濯をしていると、瓜が流れてくる。	爺が帰って戸棚を開けるが開かない。無理にあけると、瓜から女の子が生まれている。瓜姫と名づける。		同上 p27
真庭郡美甘村河田	爺は山へ木樵りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から大きな瓜が流れてくる。	爺が帰って戸棚をあけると、娘の子が話かける。瓜姫と名づける。		同上 p27
真庭郡八束村上在所	爺は山へ柴刈りに、婆は川で洗濯に行く。瓜が流れてくる。	戸棚を開けてみると、女の子になっている。		稲田浩二・福田晃『昔話研究資料叢書1「蒜山盆地の昔話」』

				1968 年三弥井書店 p115
真庭郡八束村下長田	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	戸棚を爺があけ、瓜を割ると、女の子が出る。瓜姫御寮と名づける。		『日本昔話通観』第19巻 岡山同朋舎 1979年 P28
真庭郡八束村道目木	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	爺が帰ったので、食べようと割ると、女の子が生まれる。瓜姫御寮と名づける。		同上 p28
真庭郡八束村花園	爺は山へ柴刈りに、婆が川で洗濯に行く。瓜が流れてくる。	戸棚に入れる。爺が戻ったので、出して割ろうとすると、女の子が生まれ、瓜姫御寮と名づける。		稲田浩二・福田晃『昔話研究資料叢書1「蒜山盆地の昔話」』1968年三弥井書店 p115
真庭郡八束村花園	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。	爺が切ろうとしたら、女の子が出る。瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』第19巻 岡山同朋舎 1979年 P29
真庭郡八束村花園	婆が川で洗濯していると、瓜が流れてくる。	爺が切ってみると、女の子が出てきて、瓜姫御寮		同上 p29

		と名づける。		
真庭郡八束村原林	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。	瓜を戸棚にしまっておく。爺が帰ったのであけると、割れ、女の子が生まれる。瓜姫御寮と名づける。		同上 p29～30
真庭郡八束村前掛田	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。	爺が帰って戸棚をあけてみると、瓜から娘が生まれている。瓜姫御寮と名づける。		『日本昔話通観』第19巻 岡山同朋舎 1979年 P30
阿哲郡神郷町三室	無し	婆が瓜を持ち帰り、たんす爺があけても開かないが、壊してみると、中で娘が機を織っている。	(?)	同上 p30
岡山市(旧御津郡)	川。瓜が流れてきたので、櫃に入れる。	爺が櫃を開けようと、開かない、壊してみると、姫がいる。		同上 p30
苫田郡上斎原村赤和瀬	なし	婆が瓜を持ち帰る。瓜が割れ、瓜女房になる。	(?)	同上 p30

川上郡備中町見尾	爺は山へ行き、婆は川で洗濯をする。大きな瓜	戸棚に入れておく。爺が開けると、娘がいる。		同上 p31
真庭郡川上村白髪	婆が洗濯していると、瓜が流れてくる。	戸棚に入れる。爺が山から帰ったので、出すと割れて、娘が生まれる。瓜姫御寮と名づける。		『日本昔話通観』第19巻 岡山同朋舎 1979年 p31～32
阿哲郡神郷町門前	爺は山へ木を樵りに、婆は川へ洗濯に行く。	戸棚 爺が帰ったので、出してみると、女の子が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p32
久米郡久米町北上	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。	戸棚 爺帰ったので、開けてみると、割れて、女の子が生まれる。		同上 p32～33
真庭郡川上村黒岩	なし	瓜を割ると中から子供が出る。		同上 p33
邑久郡	なし			同上 p276
阿哲郡神郷町三信	無し			同上 p276
真庭郡八束村道目木	なし			同上 p276～277

真庭郡八束 村山城	なし			同上 p277
川上郡備中 町布瀬	なし			同上 p277
阿哲郡哲西 町三室	無し			同上 p277
川上郡備中 町奈良熊	なし			同上 p278
<b>広島</b> 76 山県郡芸北 町（旧中野村 大利原）	爺さんは山 へ木を樵り に、婆さんは 川へ洗濯に 行く。	戸棚 開けようと するが、あか ない。壊す と、中から姫 が出る。		『全国昔話 資料集成5安 芸国昔話集』 岩崎美術社 1974年 P43～45
甲奴郡総領 町	爺が山へ柴 刈りに、婆が 川で洗濯に 行く。	爺が帰って 割ろうとす ると、瓜から 姫が出てく る。		『日本昔話 通観』第20 巻 広島・山 口 1988年 p70
佐伯郡大柿 町	爺が山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に 行く。	婆が瓜に刃 をあてるが、 音を立てて 割れ、出てく る。瓜姫と名 づける。		同上 p70
庄原市本町	爺が山へい き、婆が川へ 洗たくに行 く。	爺と食べよ うとすると、 女の子が出 てくる。		同上 p70～71
神石郡神石 町	婆が川で洗 濯をしてい ると、瓜が流 れてくる。	爺と半分に 切ると、瓜か ら姫が生ま れる。瓜姫と 名づける。		同上 p71

神石郡神石町	爺は山へ柴刈りに、婆が川で洗たくに行く。	爺が櫃のところにいくと、中に娘がいる。瓜姫と名づける。		同上 p71～72
神石郡豊松村	婆が川で洗たく。瓜が流れてくる。	爺が帰って、ひつから出そうとするが、出ない、まさかりで割ると、女の子が生まれ、瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』第20巻 広島・山口 1988年 P72
豊田郡豊町 (旧久友村)	爺が山へ柴刈りに、婆川へ行く、大きな柿が流れてくる。	婆がひつを空けると、あかない。爺がひつを壊すと、娘が生まれ、織姫と名づける。		『全国昔話資料集成5安芸国昔話集』岩崎美術社 1974年 p38～40
比婆郡	婆が川で瓜を拾う。	瓜から生まれる。		『日本昔話通観』第20巻 広島・山口 1988年 p72～73
比婆郡口和町永田	爺が山へ木をきりに、婆は川へ洗濯に行く。	瓜をよび、婆が切ろうとすると、二つに割れ、女の子の生まれ、瓜姫と名づける。		同上 p73
比婆郡口和	爺が山へ柴	爺が切ると、		同上 p73

町宮内	刈りに、婆は川で洗たくしていると、瓜が流れてくる。	瓜姫が生まれる。		
比婆郡高野町上里原上組	爺が柴刈りに、婆は川で洗たくしていると、瓜が流れてくる。	ひつ爺が櫃の蓋をとると、瓜が姫になっている。		『日本昔話通観』第20巻 広島・山口 1988年 p73～74
比婆郡高野町下門田	爺山柴刈りに、婆川で洗たくしている。	瓜の中から生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p74
比婆郡高野町南	爺が山へ木を切りに、婆川で洗たくしている。	婆が瓜に包丁を入れると、瓜が割れ、女の子が出る。		同上 p74
比婆郡高野町南	爺が山へ草刈りに、婆が川へ洗濯に行く。	爺と食べようとすると、二つに割れ、生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p74～75
比婆郡高野町和南原	爺が山へ柴刈りに、婆が川へ洗濯に行く。	婆が瓜を割り、姫が出る。瓜姫と名づける。		同上 p75
比婆郡高野町和南原	爺は毎日山へ木を切りに、婆は川へ洗たくに行く。	爺にたべさせようと割ると、中から出てくる。瓜姫と名づけ		同上 p75



		る。		
比婆郡比和町永原	爺が山へ木を切りに、婆は川へ洗濯に行く。	戸棚婆があけると、割れて、姫が出る。		同上 p75～76
双三郡作木村大畠	爺は山へ木を樵りに、婆は川へ洗濯に行く。	切ろうとすると、割れて、生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p76
双三郡作木村上作木	爺が山へ柴刈りに、婆は川で洗たくしていると、瓜が流れてくる。	二人で割ると、姫が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p76～77
双三郡作木村上作木	爺が山へ柴刈りに、婆は川で洗たくしていると、瓜が流れてくる。	二人で割ると、姫が出てくる。		同上 p77
山県郡大朝町岩戸	爺が山へ木を切りに、婆は川で洗たくしていると、瓜が流れてくる。	婆がたんすを開けると、姫が話す。		同上 p77～78
山県郡大朝町九門明	爺が山へ木を切りに、婆は川へ洗たくに行く。	櫃に入れる。爺とあけてみると、瓜が姫になっている。		同上 p78
山県郡大朝	爺が山へ柴	婆が割った		同上 p78～79

町宮迫	刈りに、婆は川へ洗濯に行く。	ら、出てくる。		
山県郡千代田町川迫	爺が山へ柴刈りに、婆は川で洗たくしていると、瓜が流れてくる。	瓜から生まれる。		同上 p79
甲奴郡上下町有福	洗濯。瓜が流れてくる。	櫃に入れる。櫃が開かないので、まさかりで割ると、姫になっている。		同上 p80～82
安芸郡江田島町（旧江田島村）	爺が山へ柴刈りに、婆が川へ洗たくに行く。	爺が手斧でこじあけると、姫になって織っている。		磯貝勇『全国昔話資集成 5 安芸国昔話集』1974年 岩崎美術社 p209～210
甲奴郡上下町	婆が川で洗たくしていると、瓜が流れてくる。	櫃に入れる。瓜を割ったら、瓜姫が出る。		『日本昔話通観』第20巻 広島山口同朋舎 1988年 P82
甲奴郡上下町明田	爺は山へ、婆は川へ洗たくに行く。瓜が流れてくる。	入れ物を割って、瓜を出したら、姫がいる。瓜姫と名づける。		同上 p 83～84
比婆郡高野町岡大内大	爺は山へ木を切りに、婆	爺と割ると、娘の子が出		同上 p83

内	が川へ洗たくに行く。	てくる。瓜姫と名づける。		
比婆郡高野町岡大内岡	婆が川で瓜を拾い、割ってみると、	姫が生まれる。瓜姫と名づける。		同上 p83
比婆郡高野町上市	婆が川から瓜を拾う。	箆笥に入れる。二人で開けると、中に瓜から生まれた姫がいる。		同上 p83
比婆郡高野町下門田上	爺が山へ行き、婆が川で洗たくをしていると、桃が流れてくる。	爺がひつを開けると、桃が姫になっている。		同上 p83～84
比婆郡高野町新市	爺は山へ木を切りに、婆が川へ洗たくに行く。瓜が流れてくる。	爺がたんすの引き出しを開けると、姫がいる。		同上 p84
比婆郡高野町深石	爺は山へ木樵りに、婆は川へ洗たくに行く。	翌朝、みると、瓜は娘になっている。		同上 p84
比婆郡高野町南	婆が川で洗たくをしていると、瓜が流れてくる。	箆笥を開けると、姫が出てくる。		同上 p84
比婆郡高野町和南原	爺は山へ木を切りに、婆は川で洗たく	爺が瓜をたんすに入れておけと言		同上 p84～85

	くをしてい ると、瓜が流 れてくる。	うので、そう すると、たん すの中で声 が出る。		
比婆郡高野 町和南原	柴刈と洗濯。 桃が流れて くる。	割って食べ ようとする と、生まれ る。瓜姫と名 づける。		同上 p85
比婆郡比和 町永原	柴刈と洗濯。 瓜が流れて くる。	瓜を割ると、 女の子が出 る。		同上 p85
神石郡豊松 村	無し	婆が拾った 瓜が引き出 しの中にあ る。爺があ けると、開 かない。斧 でひきだし を叩き割 ると、瓜姫 が生まれて いる。	(?)	同上 p86
甲奴郡上下 町	爺は山へ木 を切りに、婆 は川へ洗濯 に行く。瓜 が流れてくる。	割ると、生ま れる。瓜姫と 名づける。		同上 p87
甲奴郡総領 町	爺は山へ柴 刈りに、婆が 川で洗濯し ていると、桃 が流れてく る。	戸棚が開か ないので、ま さかりで開 けると、瓜姫 がいる。		同上 p87
比婆郡口和	爺は山へ木	割ろうと、包		同上 p87～88

町大月	を切りに行き、婆が川で洗濯していると、瓜が流れてくる。	丁を持ってくると、中から姫が出てくる。		
比婆郡高野町上里原下組	柴刈と洗濯。瓜が流れてくる。	たんすの中で話が出る。瓜姫と名づける。		同上 p88
比婆郡高野町下門田中組	柴刈と洗濯。瓜が流れてくる。	たんすを開けると、女の子がいる。		同上 p88
広島市	爺は山へ木を切りに、婆は川へ洗濯に行く。	婆が割ってみると、姫が出る。瓜姫と名づける。		磯貝勇『全国昔話資集成 5 安芸国昔話集』1974年 岩崎美術社 p42
東広島市板城	爺が川から櫃を拾い、手斧で開けると、中から	機を織る姫が出てくる。		『日本昔話通観』第20巻 広島山口 同朋舎 1988年 P88
比婆郡高野町中門田中組	婆が川で瓜を拾う。	割ると、子が生まれる。		同上 p88～89
山県郡豊平町吉坂	無し			『日本昔話通観』第20巻 広島山口 同朋舎 1988年 p140
賀茂郡西条町	爺婆が神に子を頼んで、			磯貝勇『全国昔話資集成

	女の子が授かった。			5 安芸国昔話集』1974年 岩崎美術社 p41
甲奴郡上下町	なし			『日本昔話通観』第20巻 広島山口 同朋舎 1988年 P141
庄原市	なし			同上 p141
神石郡神石町	なし			同上 p141
高田郡吉田町（旧可愛村）	無し			磯貝勇『全国昔話資集成5 安芸国昔話集』1974年 岩崎美術社 p42
比婆郡口和町大月	なし			『日本昔話通観』第20巻 広島山口 同朋舎 1988年 P142
比婆郡高野町岡大内	なし	爺と婆が養女をもらって、瓜姫とよぶ。		同上 P142
比婆郡高野町岡大内	なし			同上 P142
比婆郡高野町高暮	なし			同上 P142

比婆郡高野町高暮	爺と婆が神から授かる。			同上 P142～143
比婆郡高野町下門田	無し			同上 p143
山県郡大朝町田原	無し			同上 p143
山県郡大朝町大朝	なし			同上 p143
山県郡大朝町大朝	無し			同上 p143
山県郡大朝町宮迫	無し			同上 p143～ 144
山県郡大朝町松崎	無し			同上 p144
山県郡千代田町中川戸	無し			同上 p144
山県郡千代田町南方	無し			同上 p144
山県郡千代田町壬生	無し			同上 p144～ 145
比婆郡比和町比和谷		子なしの爺婆が姫を貰い子する。		同上 p145
甲奴郡上下町	無し			同上 p145
神石郡豊松村	無し			同上 p145
比婆郡高野町高暮松原	無し			同上 p145
比婆郡高野町下湯川	無し			同上 p145
比婆郡高野町南		爺婆がもらい子をして瓜姫と名づ		同上 p145

		ける。		
比婆郡東城町帝釈（旧帝釈村）	なし			同上 p145～146
比婆郡高野町中門田中組	なし			同上 p419
山口 3 山口市銭銭司（旧吉敷郡銭銭司村）	柴刈と洗濯。	爺が帰ってから、瓜を割ると、中から生まれる。瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』第20巻 広島山口 同朋舎 p79
大津郡日置村原小路	柴刈と洗濯。	瓜を割りかけると、姫が出てくる。瓜姫と名づける。		同上 p85～86
大島郡東和町長崎	柴刈と洗濯。	戸棚を開けると、瓜は姫になっている。		同上 p86～87
徳島 3 美馬郡一宇村赤松	柴刈と洗濯。 瓜が流れてくる。	切ると女の子が出る。瓜子姫と名づける。		『日本昔話通観』第21巻 徳島・香川 同朋舎 1978年 p228
三好郡池田町	なし			同上 p229
三好郡西祖谷山村田の内	爺は山へこな打つに、婆は川へ洗濯に行く。箱が	中に瓜が入っている。瓜を切ると、女の子が出て		同上 p229～230



	流れてくる。	くる。瓜子姫と名づける。		
香川 2 坂出市櫃石島	お爺は山へ柴刈りに、お婆は川へ洗濯に行く。瓜が流れてくる。	切ろうとすると、姫が出て切る。瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』徳島・香川 同朋舎 p230～231
丸亀市	無し			『全国昔話資料集成9西讃岐地方昔話集』岩崎美術社 1975年 p16～17
愛媛 4 北宇和郡宇和海村(旧下波村)	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜	戸棚を開けると、瓜が割れ、姫が出る。	原題：瓜から生まれたお姫様	『日本昔話通観』第22巻愛媛高知同朋舎 1979年 p223
北宇和郡吉田町古浦	なし	婆が拾った瓜を戸棚に入れ、まさかりで割ってあけると、姫がいた。		同上 p223
愛媛県	なし			同上 p225
八幡浜市土町今出	なし			同上 p246
高知 2 高岡郡佐川町東町	なし	婆が瓜を拾って帰る。割ると、女の子が出てくる。うり姫と名		『日本昔話通観』第22巻愛媛高知同朋舎 1979年 p224～225

		づける。		
幡多郡大正町田野々	無し			同上 p247
福岡 1 宗像郡	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に。	戸棚爺があけると、姫が機を織る。		『日本昔話通観』第23巻福岡佐賀大分同朋舎 p209
佐賀 0				
大分 6 臼杵市（旧北海郡臼杵町）	爺は山に柴刈りに、婆は川に洗濯に行く。瓜が流れてくる。	箆笥の引き出しを開けると、姫がいる。		『全国昔話資料集成 17 大分昔話集』岩崎美術社 1975年 p155～157
宇佐郡院内町（旧南院内村）	婆が川へ行くと、瓜が流れてくる。	箱の中にしまい、開かないので、手斧で開けると子供になっている。瓜姫と名づける。		『全国昔話資料集成 17 大分昔話集』岩崎美術社 1975年 p26～28
大野郡朝地町（旧上井田村）	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。大きな瓜。	長持ちに入れておくが、開かないので、鉞で蓋を打ち割ると、姫がでる。瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』第23巻福岡佐賀大分同朋舎 p206
竹田市（旧直入郡竹田町竹田下原）	柴刈と洗濯。瓜が流れてくる。	たんすの中。よなかに機織りの音が、		同上 p207

		箆笥で姫が機織りしている。		
東国東郡姫島村稻積	婆が川で洗濯。瓜	戸棚の中。開けると姫がいる。	瓜姫舌切鳥	『昔話研究資料叢書2国東半島の昔話』昭和49年三弥井書店 p185~188
杵築市(旧速見杵築町南台)	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜。	箆笥に入ると、白金でいっぱいになっている。	瓜が流れてきた話	鈴木清美・後藤貞夫・阿部通良『全国昔話資料集成17大分昔話集』岩崎美術社 1975年 p140
長崎 6 対馬地方	柴刈と洗濯。瓜。	桶の中に入れる。蓋が開かないので、よきゅう借りて、割ったら、瓜が割れ、生まれる。瓜姫と名づける。		『日本昔話通観』第24巻 長崎熊本宮崎同朋舎 1980年 p209~211
上県郡上県町犬ヶ浦	爺と婆とが川を流れて来た瓜から瓜姫を拾う。			同上 p211
上県郡上県町仁田檜滝	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。瓜。	桶の中に入れて、開かないので、壊すと姫が現れる。		同上 p211

		瓜姫と名づける。		
壱岐郡郷ノ浦町（旧沼津村黒崎）	無し			同上 p211
上県郡峰町櫛	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から、瓜が流れてくる。	桶の中に入れる。爺が蓋を開けてみると、姫になっている。		同上 p212～213
五島地方	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗たくに行く、川上から大きな栗が流れてくる。	爺が割ると、生まれる。栗と名づける。	栗姫	『日本昔話通観』長崎同朋舎 p323
熊本 2 上益城郡矢部町長谷	婆が川へ洗濯にいくと、大きな瓜が流れてくる。	切ろうとすると、中から女の子が出てくる。瓜姫と名づける。		浜名志松・三原幸久・三宅忠朋『日本の昔話 19 肥後の昔話』1977年日本放送出版協会 p132～133
山鹿市	無し		お姫さんと鬼	『全国昔話資料集成 6 肥後昔話集』岩崎美術社 1974年 p70～71
宮崎 0				
鹿児島 8	洗濯。	瓜を食った		稲田浩二，

薩摩郡下甑 村手打	嬬（かかあ） が川へ何か 洗れえにい ったら、瓜が 流れてくる。	ら、妊娠にな って、女の子 が生まれる。 瓜姫と名づ ける。		小澤俊夫責 任編集『日本 昔話通観』第 25 卷鹿児島 同朋舎 1980 年 p292
薩摩郡下甑 村手打	婆が川へ洗 濯に行き、瓜 を拾う。	爺が帰った ので、切ろう とすると、女 の子が出て くる。瓜姫と 名づける。		荒木博之『昔 話研究資料 叢書 5「甑島 の昔話」』 1970 年三弥 井書店 p131～134
鹿児島郡三 島村黒島大 里	爺は山へ竹 きりに、婆は 川に洗濯に 行く。瓜。	長持の中に 入れておく。 ある晩、音が するのであ けると、瓜が 割れて、子供 が生まれる。 瓜姫と名づ ける。		『日本昔話 通観』第 25 卷 鹿児島 同朋舎 1980 年 p293
鹿児島郡三 島村硫黄島	なし			同上 p293
薩摩郡下甑 村手打	爺は山へベ えら（小枝） 取りに、婆は 川へ洗濯に 行く。瓜。	爺が行って みたら、割れ て、女の子が 出てくる。		荒木博之『昔 話研究資料 叢書 5「甑島 の昔話」』 1970 年三弥 井書店 p135～136
薩摩郡下甑 村青瀬	爺は山へ薪 取りに、婆は 川へ洗濯に	包丁で割ろ うとすると、 中から女の		『日本昔話 通観』第 25 卷 鹿児島

	行く。柿。	子が生まれ、 瓜姫と名づける。		同朋舎 p295
鹿児島郡三 島村黒島大 里	爺は山に柴刈りに、婆が川で洗濯をしていると、川上から瓜が流れてくる。	切ろうとすると、子供が生まれる。瓜姫御と名づける。		『日本昔話通観』第25巻 鹿児島同朋舎 p295
薩摩郡下甑 村瀬々野浦	婆が川で洗濯。大きな瓜が流れてくる。	二つに割れ、女の子が生まれる。瓜姫と名づける。	原題：瓜姫	同上 p296

附表二、

「桃太郎」の地域分布表

注：主に『日本昔話通観』に載っている「桃太郎」の梗概によって作成したので、原文資料を確認できなく、また、紹介も簡単なものは不確かなものがある。例えば、「典型話にほぼ同じ。」となっているのは、各項目を典型話に従って書いたもので、数値は正しくないところもある。それらは、注の欄に、(?)をつけておいた。原文資料で確認済みのものは出典に元出典を表記した。原文資料のものの出典は『日本昔話通観』の中の記録をみるべきである。附表はただ「桃太郎」の全般的な分布及び誕生モチーフについての大体な統計を見せるものである。

分布地域	桃の採り場	桃太郎の誕生	注	出典
青森 6話 下北郡東通 村鹿橋	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に、桃が流れてきた。	その桃拾う、爺が帰ってきたので、それを爺に食べさせようと割ったら、二つに割れてきれいな男の子が生まれる		『日本昔話通観』第二巻 青森同朋舎 1982. 2. 15 p218
三戸郡五戸町	爺は山へ薪取りに、婆は川へ洗濯に、川上から桃が流れてくる。うまいので、「うまエ桃こァこっちゃこい、にがい桃こァ	拾って戸棚に置く。爺が帰ったので、出して切ろうとすると桃が割れ、男の子が生まれる、桃太郎と名づける。		同上 p218～ 219

	あっちゃ行け」と言う と、また流れてくる。			
下北郡風間 浦村下風呂	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。川から桃が流れてくる。	拾ってきて食べようとしたら、割れて中から男の子が生まれる。		同上 p219
下北郡東通 村野牛	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。川で桃を拾って帰る。	爺食べさせようとする と、桃から桃太郎が生まれる。		同上 p219
西津軽郡鰯ヶ沢町七ッ石	婆が川へ洗い物に行く と川上からきれいな箱が流れてくる。中には桃が一つ入っている。	爺に見せた後、たんすの中にしまっておくと、中から幼児の泣き声がする。開けてみると、男の子が生まれている。桃太郎と名づける。		同上 p219
西津軽郡稲垣村千年	爺は山へ木を取りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から桃が流れてきたので、「大きい桃こっちゃ	桃を拾い、帰る。中から、男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p219



	来い、小っちゃい桃あっちゃ行げ」と言うと、大きい桃が寄ってくる。			
岩手県 10話 花巻市（旧稗貫郡湯本村湯本）	爺は山へ焚きものとり、婆は川へ洗濯に行く、流れてくる。桃を一つ食べ、もう一つ捨てる。	もう一つ流れてくる桃を爺にやろうと、戸棚にしまう。爺が開けると、割れて生まれていた。桃太郎と名づける	原題：桃の子太郎	『日本昔話通観』第三巻 岩手 同朋舎 1985年10月10日 p248～249
岩手郡玉山村	婆が川へ洗濯に行く。	桃から生まれる。	典型話に同じ。桃は一つ。(?)	同上 p249
紫波郡矢巾町（旧煙山村）	婆が川へ洗濯に行く。	桃から生まれる。	岩手郡玉山村の話にほぼ同じ。(?)	同上 p249
東磐井郡大東町菅ノ沢	婆が川へ洗濯に行く。桃一つ。	刃物を立てると生まれる。	典型話に同じ。桃は一つ。(?)	同上 p249
紫波郡紫波町赤沢	婆が川で洗濯をしている。桃が流れてきて一つ食べ、もう一つ流れてくるので、布に包んで戸棚に入れてお	山から帰った爺が戸棚を開けると桃から生まれる。桃太郎となづける。		同上 p250

	く。			
紫波郡紫波町遠山	婆の川での洗濯。	桃から生まれる。	典型話に同じ。(?)	同上 p250
下閉伊郡岩泉町日蔭	婆が川で桃を拾って戸棚に入れておく。 夜、泣き声をする。	桃を見ると、桃から生まれた。 桃太郎と名づける。	桃太郎の岩泉がたり	同上 p250～251
江刺市	婆が川で桃を拾って、戸棚に入れておく。 戸棚を開けると、	生まれている。桃太郎となづける。		同上 p251
東磐井郡大東町伍和田	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。 赤い重箱と黒い重箱がながれてくる。 赤い重箱を拾って帰ると、桃が入っている。	帰った爺と食べようとすると、桃が割れて中から生まれる。 桃太郎と名づける。		同上 p251～252
紫波郡矢巾町(旧煙山村)	父と母が山に花見に行く。休んでいると、母の腰もとに桃が	翌朝、見ると、桃が赤ん坊になっているので、桃太郎となづ	原題：桃ノ子太郎	同上 p252

	ころがってきたので、拾って帰る。	ける。		
宮城県 3話 名取郡秋保町境野	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。婆が川で洗濯をする。桃が流れてくる。戸棚にしまっておく。	爺と二人で割ろうとすると、なかから生まれる。桃太郎となづける。		佐々木徳夫 『昔話研究資料叢書15・陸前の昔話』1979年三弥井書店 p229～231
古川市柏崎	誕生のモチーフなし		桃太郎の後日譚	同上 p231～232
栗原郡	爺は柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。青い桃と赤い桃が流れてくる。	赤い桃を拾い、戸棚にしまっておく。爺と割ろうとすると、桃が裂け、赤ん坊が出てくる。		関圭吾『日本昔話大成』三角川書店 昭和53年 P83
秋田 9話 平鹿郡増田町平鹿	爺は山へ柴刈に、婆は川に洗濯に行くと、川上から桃が流れてくる。	婆が桃をまないたの上で割ろうとすると、男の子が生まれて、桃太郎と名づける。		稲田浩二・小澤俊夫編集 『日本昔話通観第五巻秋田』1982. 10.5 同朋舎 p245
北秋田郡阿仁町打当	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくるので、	婆が割ろうとするたびに、「危ない、危ない」と声がして、割れ		同上 p245～246

	桃を呼び、拾う。	目から男の子が出てくる。桃太郎と名づける。		
北秋田郡阿仁町小淵	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。箱が二つ流れてくる。婆が「実イ箱アこっちや来い、からア箱アそっちや行け」と言う、実の入った箱が寄ってくる。	開けてみると、桃太郎が入っている。		同上 p246
平鹿郡増田町平鹿	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。川上から桃が流れてくる。	桃から男の子が生まれたので、桃太郎と名づける。		同上 p246
平鹿郡増田町湯野沢	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。川上から大きな桃が流れてくる。	桃から子供が生まれたので、爺婆は桃太郎と名づける、		同上 p246
平鹿郡山内村上南郷	爺は山へ木樵りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	拾って帰り、もみがらの中にしまっておく。次の朝、桃が割		同上 p246

		れ、中から男の子が出る。		
平鹿郡山内村武道	なし？	夜、赤ん坊の泣き声がして、瓜から男の子が生まれる。		同上 p246
仙北郡角館地方	発端なし	なし		同上 p246
仙北郡角館町（旧南檜岡村）	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。川上から白と赤の箱が流れてくる。赤い箱を持ち帰る。	桃の中から大きな赤子が生まれている。桃内小太郎となづける。	原題：桃内小太郎	同上 p247
山形県 20話 上山市檜下	爺は山へ柴刈に、婆は川で洗濯する。桃を拾って帰る。	爺と桃を切ろうと桃が割れて生まれる。桃太郎となづける。		『日本昔話通観』第六卷 山形 同朋舎 1986 P131
酒田市上藤家	爺は山へ柴刈に、婆は川で洗濯する。桃を拾って帰る。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 P131
新田市蛇塚	爺は山へ柴刈に、婆は川で洗濯する。桃を拾って	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 P131

	帰る。			
長井市五十川	柴刈りと洗濯。桃拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 P131
南陽市赤湯町	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 P131
南陽市漆山	柴刈りと洗濯。桃が二つ流れてくる。	赤い桃を拾って帰る。 桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 P131
南陽市沖田	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 P131
南陽市柵塚佐貝	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 P131
西置賜郡飯豊町高畑	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 P131
西置賜郡飯豊町中津川	柴刈りと洗濯。赤い桃と青い桃。赤い桃を呼ぶ。赤い桃は来る。青い桃は泣きながら行く。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 P131
西置賜郡飯豊町中津川	柴刈りと洗濯。赤と青の桃がながれてくる。	赤い桃を拾って仏様に供えておく。 桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 P131~132

西置賜郡小 国町大石沢	柴刈りと洗 濯。赤と黒の 箱、赤い箱を 呼ぶ。	箱の中に桃 がある。 夜中に泣き 声がし、蓋を 取ると男の 子がうまれ ている。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 P132
西置賜郡白 鷹町折居	柴刈りと洗 濯。桃を拾 う。	桃が割れて 生まれる。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 P132
西置賜郡白 鷹町中山	柴刈りと洗 濯。桃を拾 う。	桃が割れて 生まれる。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 P132
西村山郡大 江町田ノ沢	柴刈りと洗 濯。桃を拾 う。	桃が割れて 生まれる。桃 太郎と名づ ける。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 P132
東置賜郡高 畠町和田	柴刈りと洗 濯。赤と白の 桃が流れて 来る。赤い桃 を拾う。	桃が割れて 生まれる。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 P132
最上郡真室 川町及位	柴刈りと洗 濯。桃を拾 う。	桃が割れて 生まれる。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 P132
最上郡真室 川町及位	爺婆に子供 がなく、神に 願をかける。 爺が山で薪 切りをして いると、桃の ような実が なっており、 背負って帰	二つに割れ て中からう まれる。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 P132

	って切ろう とすると、			
山形市上町	爺は柴刈に、 婆は洗濯に いく。桃を拾 う。	桃が割れて 生まれる。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 P132
米沢市塩井 町	爺は柴刈に、 婆は洗濯に いく。桃を拾 う。赤い桃と 白い桃が流 れて来る。	赤い桃を呼 ぶ。 桃が割れて 生まれる。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 P132
<b>福島</b> 19話 大沼郡金山 町横田	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に。 赤い大きな 桃をよぶ。	爺と食べよ うと思って 包丁を当て ると、桃が割 れて生まれ る。 桃太郎とな づける。		『日本昔話 通観』第7巻 福島 同朋 舎 1985年 P132
いわき市(旧 石城郡草野 村)	柴刈りと洗 濯。桃を拾 う。	桃が割れて 生まれる。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 p132
石川郡平田 村西川真弓	柴と洗濯。 赤い桃と青 い桃。 赤い桃をよ ぶ。	桃が割れて 生まれる。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 p133
大沼金山町 小栗山	柴刈りと洗 濯。桃を拾 う。	桃が割れて 生まれる。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 p133
大沼金山町 沼沢	柴と洗濯。 香箱呼ぶ。 中に桃があ	桃が割れて 生まれる。	典型話にはほ ぼ同じ。 (?)	同上 p133



	る。			
大沼郡三島町桑原	柴刈りと洗濯。 桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 p133
郡山市湖南町三代	柴と洗濯。 赤い桃と白い桃。 赤い桃を呼ぶ。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 p133
郡山市湖南町三代	柴と洗濯。 二つの桃。 赤い桃をよぶ。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 p133
郡山市湖南町三代	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 p133
郡山市三穂田町富岡	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。桃太郎となづける。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 p133
須賀川市狸森	柴刈りと洗濯。桃を拾う。白と赤の桃。	赤い桃は笑いながら来る。 白い桃は泣きながら川下へ流れて行く。桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 p133
東白川郡塙町川上	柴刈りと洗濯。桃を拾う。赤と白の桃。	赤い桃をよぶ。 割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。 (?)	同上 p133

双葉郡川内村	柴刈りと洗濯。赤い箱と黒い箱。	婆が赤い箱をよび、爺とあけると箱の中に子供が入っている。	典型話にはほぼ同じ。 (?)	同上 p133
双葉郡川内村沢	柴刈りと洗濯。爺と婆が桃を切ろうとすると	桃の中から話がでる。桃太郎が出てくる。	典型話にはほぼ同じ。 (?)	同上 p133
南会津郡舘岩村貝原	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にはほぼ同じ。 (?)	同上 p133
南会津郡南郷村界	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にはほぼ同じ。 (?)	同上 p133～134
南会津郡南郷村片貝	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にはほぼ同じ。 (?)	同上 p134
耶麻郡西会津町奥川	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にはほぼ同じ。 (?)	同上 p134
耶麻郡山都町川吉	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にはほぼ同じ。 (?)	同上 p134
栃木 6話 上都賀郡栗野町加戸	柴刈りと洗濯。赤と白の桃。赤い桃を呼ぶ。	桃が割れて生まれる。	群馬県の典型話にほとんど同じ。 (?)	『日本昔話通観』第8巻 栃木・群馬 1986年 P127
塩谷郡栗山村黒部	柴刈りと洗濯。赤と白の桃。赤い桃を呼ぶ。	桃が割れて生まれる。	群馬県の典型話にほとんど同じ。 (?)	同上 P127

塩谷郡栗山村土呂部	柴刈りと洗濯。	桃が割れて生まれる。	群馬県の典型話にほとんど同じ。 (?)	同上 P127
塩谷郡栗山村野門	柴刈りと洗濯。	桃が割れて生まれる。	群馬県の典型話にほとんど同じ。 (?)	同上 P127
塩谷郡栗山村日向	柴刈りと洗濯。	桃が割れて生まれる。	群馬県の典型話にほとんど同じ。 (?)	同上 P127
塩谷郡藤原町中三依	柴刈りと洗濯。赤い桃こっちへ、白い桃はあっちへという。	赤い桃を持ち帰る。二人で食べようとすると、桃は子供になる。桃太郎となづける。		小堀修一・谷本尚史『日本の昔話 22 下野の昔話』1978年日本放送出版協会 p 32~35
群馬 15話 伊勢崎市三和町間之原	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。大きな桃が流れてくる。	包丁をかけたようしたら、二つに割れて、中から生まれ出た。桃太郎となづける。	典型話にほとんど同じ。 (?)	『日本昔話通観』第8巻 栃木・群馬 1986年 P125~126
群馬県吾妻郡六合村日影	爺は柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	拾って爺にみせると、「いろりの隅に綿にくるんで置けば、赤ん坊に		同上 p126

		なる」と言うので、その通りにする。生まれたので、桃太郎となづける。		
吾妻郡 嬬恋村 今井	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	桃から赤ん坊は生まれる。	群馬県吾妻郡六合村日影の類話にほぼ同じ。(?)	同上 p126
吾妻郡 中之条町 蟻川	柴刈りと洗濯。「いい桃はこっちこう、悪い桃はあっち行け」という。	爺が帰っていろりに当たっていると、割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p126
吾妻郡 中之条町 沢田	柴刈りと洗濯。	桃が割れて生まれる。	典型話にほとんど同じ。(?)	同上 p126
桐生市 広沢町 四丁目	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。赤と白の桃がながれてくる。 赤い桃を呼ぶ。	赤い桃を拾い、爺と二人で割ってみると、中から生まれる。		同上 p126
利根郡 片品村 甲閑町	柴刈りと洗濯。赤い桃と白い桃。赤い桃を呼ぶ。赤い桃は笑いながら、白い	いろり端において割ると、生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p126

	桃は泣きながらいく。			
利根郡片品 村菅沼	柴刈りと洗濯。赤と白い桃。赤い桃を呼ぶ。	赤い桃をいろり端におくと、割れ、生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p126
利根郡片品 村古仲	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	割れて生まれる。	典型話にほとんど同じ。(?)	同上 p126
利根郡片品 村古仲	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	割れて生まれる。	典型話にほとんど同じ。(?)	同上 p126
利根郡新治 村須川	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にほとんど同じ。(?)	同上 p126
利根郡水上 町藤原	柴刈りと洗濯。実のある桃をよび、実のない桃は行けという。	桃が割れて生まれる。	典型話にほとんど同じ。(?)	同上 p126～ 127
利根郡水上 町藤原	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃が割れて生まれる。	典型話にほとんど同じ。(?)	同上 p127
前橋市鳥取 町	柴刈りと洗濯。桃を拾う。青い桃は行け、赤い桃こいという。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p127
山田郡大 間ノ町上神 梅	柴刈りと洗濯。青い桃は行け、赤い桃こいという。	桃が割れて生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p127
千葉県 24話	爺は山へ柴刈りに、婆は川	桃を拾い、爺を待つて、夜		市川民話の会『市川の伝

市川市北国分	へ洗濯に行く。大きな桃が流れてくる。	割ると、中から大きな男の子が出てくる。桃太郎と名づける。		承民話』第一集 1980. 3. 31 市川市教育委員会 p55～56
安房郡三芳村上滝田	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	割ると、中から生まれる。	市川市北国分の例話にほぼ同じ。	川端豊彦・金森美代子『昔話研究資料叢書 16 房総の昔話』 1980. 11. 25 三弥井書店 p275
安房郡三芳村下滝田	爺は草刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	二人で割ってみると、赤ん坊が跳びだす。		同上 p275
安房郡三芳村千代	爺は山へ木切りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	二人で切つて食べようとすると、中から子供が出てくる。桃太郎と名づける。		同上 p273～274
市川市北国分	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	二人で食べようと、まないたに載せて、割ったら、赤ん坊が生まれた。桃太郎と名づける。		市川民話の会 『市川の伝承民話第一集』 1980. 3. 31 市川市教育委員会 p56～57

市原市（旧市原郡富山村）	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃の中から生まれる。	典型話にほぼ同じ。（？）	『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・千葉・神奈川 1988年 P12
長生郡長柄町榎本	爺と婆が子供をほしがっている。 婆が川へ洗濯にいくと、大きな桃がながれてくる。 一つ拾う。	二人で割ると、中に子がいる。	授かった子であると育てる。	川端豊彦・金森美代子『昔話研究資料叢書 16 房総の昔話』 1980. 11.25 p208
長生郡長柄町榎本	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	爺が帰ったので、桃に包丁を入れたら、桃が割れ、男の子が生まれる。		川端豊彦・金森美代子『昔話研究資料叢書 16 房総の昔話』 1980. 11.25 p207
長生郡長生柄町針ヶ谷西部	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃の中から生まれる。	上の話にほぼ同じ。動物は登場しない。	同上 p208
流山市野々下	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃の中から生まれる。		同上 P45
流山市野々下	爺は柴刈に、婆は川へ洗	二人で食べようと割っ		同上 P43～44

	濯に行く。	たら、男の子 がでてくる。 桃太郎と名 づける。		
流山市野々 下	爺とばばは 山で生活し ている。婆は 川で洗濯を していると、 色づいた桃 が流れてく る。	まないたに のせて食べ ようとす ると、割れて男 の子がうま れる。桃太郎 となづける。		同上 P45
成田市新妻	爺は山へ柴 刈に、婆は川 へ洗濯に行 く。桃が流れ てくる。	桃の中から 生まれる。	典型話にほ とんど同じ。 (?)	『日本昔話 通観』第9巻 茨城・埼玉・ 千葉・神奈川 1988年 P13
富津市大堀	爺は山へ柴 刈に、婆は川 へ洗濯に行 く。桃が流れ てくる。	桃の中から 生まれる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p13
富津市川名	爺は山へ柴 刈に、婆は川 へ洗濯に行 く。桃が流れ てくる。	桃の中から 生まれる。		川端豊彦・金 森美代子『昔 話研究資料 叢書 16 房 総の昔話』 1980. 11. 25 P107
富津市川名	爺は山へ柴 刈に、婆は川 へ洗濯に行 く。桃が流れ	桃の中から 生まれる。		同上 P107



	てくる。			
富津市川名	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃の中から生まれる。		同上 P107
富津市川名	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃の中から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・千葉・神奈川 1988年 P13
富津市篠部	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	割って見たら、中から桃太郎が生まれる。		川端豊彦・金森美代子『昔話研究資料叢書 16 房総の昔話』 1980. 11.25 P104~106
富津市本郷	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃の中から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・千葉・神奈川 1988年 P13
安房郡三芳村三坂	川に洗濯に行く。上のほうから桃が流れて来る。	桃はひ自然にわれ、子供が出てくる。	それを見ていた悪い爺と婆が桃を拾いに行くが、桃は来ない。	川端豊彦・金森美代子『昔話研究資料叢書 16 房総の昔話』 1980. 11.25 P275

富津市上飯野	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	割ると、中から生まれる。桃太郎と名づける。	桃太郎と名づけるまで。 (?)	『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・千葉・神奈川 1988年 P15
富津市上飯野	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	爺婆が見ていると、二つに桃が割れて生まれる。		川端豊彦・金森美代子『昔話研究資料叢書 16 房総の昔話』 1980. 11.25 P107
富津市西川	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃の中から生まれる。桃太郎と名づけるまで。	桃太郎と名づけるまで。 (?)	『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・千葉・神奈川 1988年 P15
茨城県 12話 勝田市稲田	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	桃の端を切り、桃の種を手で割ると、桃太郎がいる。	千葉県の典型話にほぼ同じ。(?)	『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・千葉・神奈川 1988年 P10～11
勝田市高野	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	桃が割れて生まれる。	千葉県の典型話にほぼ同じ。(?)	『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・千葉・神奈川 1988年 P11
勝田市東中根	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	桃が割れて生まれる。	千葉県の典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p11

勝田市三反田	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	桃が割れて生まれる。	千葉県の特型話にほぼ同じ。(?)	同上 p11
久慈郡大子町浅川	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	桃が割れて生まれる。	千葉県の特型話にほとんど同じ。(?)	同上 p11
久慈郡大子町浅川	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	桃が割れて生まれる。	千葉県の特型話にほぼ同じ。(?)	同上 p11
久慈郡大子町下野宮	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	割ると中から生まれる。	千葉県の特型話にほぼ同じ。(?)	同上 p11
久慈郡大子町楨野地大野平	柴刈りと洗濯。白い箱は行けといい、赤い箱を呼ぶ。	二人で割ったら、子供が出てくる。桃太郎と名づける。		谷本尚史・梶谷明・丸山久子『日本の民話』4 関東 1979. 6. 20 ぎょうせい p47～49
高萩市大能	婆が川へ洗濯に行った。白い箱は行けといい、赤い箱を呼ぶ。	爺と食べようとする、桃から桃太郎が生まれる。		高萩市教育委員会『高萩の昔話と伝説』高萩市役所 1980 年 P53～54
高萩市下君田	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	桃が割れて生まれる。桃太郎と名づける。		同上 P51～53
勝田市堀口	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	箱の中ニ桃がある。桃から生まれる。	(?) 桃太郎となづけたとまで。	『日本昔話通観』第 9 卷 茨城・埼玉・千葉・東京・

				神奈川 p14
那珂郡東海 村松宿	柴刈りと洗濯。赤い箱を呼ぶ。	箱の中に桃があるが、桃から生まれる。	(?) 桃太郎が力持ちでよくやってくれた、とまで。	同上『日本昔話通観』 p14
神奈川 1 藤沢市藤沢	柴刈りと洗濯。婆が洗濯をしていると、大きな桃と小さな桃が流れてくる。大きな桃を呼ぶ。	割ると中から生まれる。桃太郎と名づける。		小島瓊礼『全国昔話資料集成 35』武相昔話集 1981. 10.28 岩崎美術社 P87～89
埼玉県 22 地名なし(川越の某地)	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	割ろうとおすると、中から男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		鈴木棠三編『武蔵川越昔話集 全国昔話資料集成 20』岩崎美術社 1975年 p17～18
川越地方	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	割ろうとすると中から生まれた。桃太郎と名づける。		同上 p18～19
川越地方	柴刈りと洗濯。爺は山へくずはきに、ばばが拾った桃を一つ平らげ、もう一	翌日、婆が男の子を生む。	千葉県の典 型話にほぼ 同じ。(?)	『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・ 千葉・東京・ 神奈川 1988年

	つ流れてきたのを爺に食わせると、			p11～12
川越地方	柴刈りと洗濯。 大きな桃がながれてくる。	割ると中から生まれる。	千葉県の典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p12
川越地方	柴刈りと洗濯。 桃を拾う。	桃から生まれる。	千葉県の典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p12
川越市(旧入間郡山田村府川)	柴刈りと洗濯。 桃を拾う。婆が拾った桃を食べるとうまい。もう一つ手に入れ、引き出しに入れておく。	爺が帰ったので開けると桃の代わりに赤子がいる。	千葉県の典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p12
川越市郭町	柴刈りと洗濯。 桃を拾う。	桃から生まれる。		同上 p12
秩父郡両神村薄薬師堂	柴刈りと洗濯。 婆が洗濯をしていると、川上から桃が流れてくる。	割ろうとすると、中から男の子が生まれてくる。桃太郎と名づける。		池上真理子 『武蔵の昔話』日本放送出版協会 1979年 p24～26
所沢市(旧入間郡所沢町日吉町)	爺婆は子授けを願っている。爺が	桃の木に実がなっているので、とっ		『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・

	柴刈につか れて川べり で眠ってい ると、「川上 に行け」と神 様のお告げ がある。	て食べよう と杖で落と すと川に落 ちて流れ、そ れを婆が拾 う。割ると中 から生まれ る。		千葉・東京・ 神 奈 川 1988年 p12
戸田市惣右 衛門	柴刈りと 洗濯。 桃を拾う。	桃から生ま れる。	千葉県の典 型話にほと んど同じ。 (?)	同上 p12
戸田市惣右 衛門	柴刈りと 洗濯。 桃を拾う。	桃から生ま れる。	千葉県の典 型話にほぼ 同じ。(?)	同上 p12
戸田市美女 木	柴刈りと 洗濯。 桃を拾う。	桃から生ま れる。	千葉県の典 型話にほぼ 同じ。(?)	同上 p12
埼玉県	爺は柴刈に、 婆は川へ洗 濯に行く。桃 が流れてく る。桃を呼 ぶ。	二人で割ろ うとすると、 割れて、男の 子が生まれ た。桃太郎と 名づける。		鈴木棠三『全 国昔話資料 集成 20 武 蔵川越昔話 集』1975. 11. 15 岩崎美 術社 p20
埼玉県（旧南 埼玉郡綾瀬 村）	柴刈と洗濯。 婆が「あっち の水は苦い よ、こっちの 水は甘いよ」 と言うと、桃 が流れ寄る。	桃から生ま れる。	(?)	『日本昔話 通観』第9巻 茨城・埼玉・ 千葉・東京・ 神 奈 川 1988年 P14

入間郡坂戸町（旧勝呂村）	なし		(?)	同上 p14
川越市（旧入間部高階村砂）	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。	桃から生まれる。	千葉県の特型話に従った。(?)	同上 p14
熊谷市（旧大里郡熊谷町）	柴刈と洗濯。 大きい桃と小さい桃が流れてきたので、婆は大きい桃はこっちへ、小さい桃はあっちへ行けと言い、大きい桃を拾う。	桃から生まれる。	千葉県の特型話に従った。(?)	同上 p14
狭山市（旧入間郡入間川町）		爺婆が（川で拾った）桃を食べて急に若くなり、婆が男の子を生む。それが桃太郎。		同上 p14
戸田市惣右衛門	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。	桃から生まれたのがも桃太郎。	千葉県の特型話に従った。(?)	同上 p14
比企郡川島町（旧伊草村上伊草）	柴刈と洗濯。 桃が流れてくる。いい桃を呼ぶ。	爺と食べようと割った時に、生まれたのが桃太郎。		鈴木棠三『全国昔話資料集成 20 武蔵川越昔話集』1975 . 11. 15 岩崎美術社

				p15～16
南埼玉郡白岡町（旧日勝村）	柴刈と洗濯。婆が川で桃を二つ拾い、一つは食べ、一つは帰って重箱の中へ入れておく。	後であけると、中から桃太郎が生まれる。	千葉県の特産品話に従った。（?）	『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・千葉・東京・神奈川 1988年 P14
南埼玉郡宮代町（旧須賀村）	柴刈と洗濯。婆が「よい桃はこっちへ来い、悪い桃があっちへ行け」と言うと、大きい桃が流れ寄る。	桃から生まれる。	千葉県の特産品話に従った。（?）	同上 p14
東京 11 東京都	柴刈りと洗濯。棒でいい桃こっちへ、悪い桃あっちへとよぶ。	包丁で切ろうとすると、待ってくださいという声がして割れる。	特産品話にほぼ同じ。（?）	『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・千葉・東京・神奈川 1988年 P13
大田区久ヶ原	柴刈りと洗濯。大きな桃が流れてくる。	桃の種が割れ、生まれる。桃太郎と名づける。		東京都大田区教育委員会社会教育部社会教育課編『大田区の文化財第二十二集 口承文芸（昔話・世間話・



				伝説)』大田 区教育委員 会 1986. 3. 31 p12～13
大田区雑色	爺は山掃除。 婆は川へ洗 濯に行く。	割ったら、男 の子が生ま れる。桃太郎 と名づける。		同上 p13
大田区雑色	柴刈りと洗 濯。桃を拾 う。	割ると男の 子が生まれ る。桃太郎と 名づける。		同上 p13
大田区八幡 塚	柴刈りと洗 濯。桃を拾 う。	二人で食べ ようと割っ たら、赤ん坊 が生まれる。 桃太郎と名 づける。		同上 p11～12
大田区八幡 塚	柴刈りと洗 濯。桃を拾 う。	割ると桃太 郎が出てき た。		東京都大田 区教育委員 会社会教育 部社会教育 課 編『大田 区の文化財 第二十二集 口承文芸(昔 話・世間話・ 伝説)』大田 区教育委員 会 1986. 3. 31 p12

大田区八幡塚	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	割ると桃太郎が生まれた。		同上 p13～14
東村山市（旧北多摩郡東村山村野口）	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	切ろうとすると、割れ、男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		鈴木棠三『全国昔話資料集成 20 武蔵川越昔話集』1975 . 11. 15 岩崎美術社 p16～17
大田区高畑	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	二人で食べようと、切ったら、男の子が生まれた。桃太郎と名づける。		東京都大田区教育委員会社会教育部社会教育課編『大田区の文化財第二十二集 口承文芸（昔話・世間話・伝説）』大田区教育委員会 1986. 3. 31 P14
小金井市（旧北多摩郡小金井村）	爺は山へ草刈に、婆は川へ洗濯に行く。流れてきた桃を呼ぶ。	拾って棚にしまい、かえってきた爺と割ると、小僧っ子が出てきたので、桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第9巻 茨城・埼玉・千葉・東京・神奈川 1988年 p15～16

小金井市（旧北多摩郡小金井村）	柴刈りと洗濯。桃を拾う。	桃を戸棚におく。割ると中から生まれる。	小金井市の典型話（上の話）にほぼ同じ。（?）	同上 p16
新潟 10 栃尾市木山沢	爺。婆が川で洗濯。桃が流れてくる。炉の横座に置いておく。	爺が帰ってきて食おうと包丁で切ろうとしたら、中から桃の種を割って桃太郎が出てくる。		『日本昔話通観』第10巻 新潟 同朋社 1984年 p387~388
柏崎市折居餅粮	婆の洗濯。婆が実のある香箱を呼ぶ。箱が笑って流れ寄る。	桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。（?）	同上 p388
北浦原郡安田町	婆の洗濯。こっちの水はうまいぞと呼ぶ。	桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。（?）	同上 p388
佐渡郡相川町	洗濯。二つの香箱。うっつい香箱こっちへとよふ。	香箱の中に桃がある。桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。（?）	同上 p388
佐渡郡赤泊村	洗濯。桃を拾う。	桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。（?）	同上 p388
中頸城郡	洗濯。香箱が流れてくる。実のある箱を呼ぶ。	持ち帰って蓋を開けると、桃太郎が出てくる。		同上 p388

南浦原郡栄 村山庄（旧大 面村）	洗濯。 桃を拾う。	仏様にあげ ておくと桃 が割れる。生 まれる。	典型話にほ ぼ同じ。（?）	同上 p388
東浦原郡上 川村土井	洗濯。	桃から生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。（?）	同上 p389
東頸城郡松 代町福島	洗濯。	桃から生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。（?）	同上 p389
南浦原郡下 田村	爺は山へ木 を切りに、 婆は川へ洗 濯に行く。大 きな桃がく る。	爺と婆が桃 を切ろうと すると、桃か ら生まれる。 桃太郎と名 づける。	原題：桃の子 太郎	同上 p389
富山 5 下新川郡舟 見地方	柴刈りと洗 濯。桃が流れ てくる。	風呂棚の中 へ入れて置 く。割ろうと したら、なか から出てく る。桃太郎と 名づける。		『日本話通 観』第11巻 富山・石川・ 福井 同朋 舎 1981年 p151～152
射水郡小杉 町黒河	爺は山へ柴 刈りに、婆は川 へ洗濯にい く。川上から 桃がながれ てくる。	爺が桃を割 ろうとする と、ひとり で割れて、中 から子供が 出てくる。 桃太郎と名 づける。		同上 p152
射水郡小杉 町黒河	柴刈りと洗 濯。	桃が割れて、 生まれる。		同上 p152
射水郡小杉 町黒河下条	婆が川で洗 濯をしている と桃がく	中から男の 子が生まれ る。		同上 p152

	る。割ろうとすると、			
小矢部市垣生	川へ洗濯。桃が流れてくるので食べる。もう一つ呼ぶ。	飯櫃の中に入れておく。爺が山から帰って、蓋を採ると、子がいる。桃太郎と名づける。	原題：桃にもどった桃太郎	同上 153～154
石川 5 鹿島郡能登島町	婆が川へ洗濯に行く。大きな桃が流れてくる。	爺と二人で割ると、出てくる。桃太郎と名づける。		『日本話通観』第11巻 富山・石川・福井 同朋舎 1981年 P41
珠洲市蛸島町東貝蔵	爺は山へ柴刈に、婆は洗濯に行く。大きな桃が流れてくる。	二人で切ろうとすると、飛び出してきた。桃太郎と名づける。		同上 p152
羽咋郡志賀町徳田	桃が流れてきたので、割ると桃太郎がいる。			同上 p152
羽咋郡志賀町徳田	爺は柴刈に、婆が洗濯に行く。桃が流れてくる。	爺と食べようとして、桃太郎が生まれる。		同上 p152
江沼郡山中町	婆が川へ洗濯にいき、	拾った桃から生まれる。		同上 154
福井 3 武生市北町	柴刈りと洗濯。	婆が桃を切ると、中から生まれる。桃太郎と名づ		『日本話通観』第11巻 富山・石川・福井 同朋

		ける。		舎 1981年 P153
武生市村国 町	柴刈りと洗 濯。	爺と包丁で 切ると、桃太 郎が出てく る。		同上 p153
福井市（旧坂 井郡鶉村）	柴刈りと 洗濯。	桃を拾って 臼の上にお くと、中から 「この桃割 ってくれ」と 言うので、爺 婆が割ると、 小さな子が 生まれた。	富山県小矢 部市垣生の 典型話に従 った。（?）	同上 p154
長野県 7 下水内郡栄 村上ノ原	爺は山へ柴 刈に、婆は川 へ洗濯に行 く。向こうか ら大きい桃 が流れてく る。婆は「あ あ実のある 桃ならこっ ちへこい。実 のねえ桃は そっちへ行 け」と言う。 桃が寄って くる。	爺に食べさ せようと、持 ち帰る。爺と 婆は食べよ うと割った ら、中から大 きな男の子 が出てくる。 桃から出た ので、桃と呼 ぶ。		『日本昔話 通観』第12 巻 山梨・長 野 同朋舎 1981 年 p86～87
上水内郡小 川村北尾	爺は柴刈に、 婆は川へ洗 濯に行く。青 い桃と赤い	赤い桃を拾 い、戸棚にし まう。爺が 帰って切る		同上 p87

	桃が流れてきたので、婆は「青い桃そっちいけ、赤い桃こっちこ」と言い、	と、中から、男の子が生まれ、桃太郎と名づける。		
上水内郡中条村田ノ入	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。川上から大きな桃が流れてくる。婆は桃を拾って帰る。	爺がまさかりで割ると、中から男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p87
下伊那郡阿南町新野	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。実のある重箱を呼ぶ。中に桃が入っている。	婆と爺が桃を割ると、男の子が出てきた。桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第12巻 山梨・長野 同朋舎 1981年 p87～88
下伊那郡大鹿村北入小塩	爺は木切りに、婆が川に洗濯に行く。大きな桃が流れてくる。	爺が帰ってきたので、切ろうとすると、桃が二つに割れて、子供が産まれる。		同上 p88
下水内郡栄村箕作	爺は山へ、婆は洗濯に行く。実のある箱を呼ぶ	爺が帰ったので、中の桃を割って食おうとすると、中から赤子が出てく		同上 p88

		る。桃太郎と名づける。		
小  県  郡  武  石 村	爺は柴刈に、 婆が洗濯に いく。川上か ら流れてく る。よい桃を 呼ぶ。	食べようと すると、桃が われ、男の子 が生まれた。 桃太郎と名 づける。		同上 p88
山  梨  14 北  巨  摩  郡  白 洲  町	爺は柴刈に、 婆は洗濯に 行く。	かえってき た爺に見せ て、割ってみ ると、中から 生まれる。		『日本昔話 通観』第 12 巻 山梨・長 野 同朋舎 1981 年 p 88
北  巨  摩  郡  白 洲  町  台  ケ  原	爺は柴刈に、 婆は洗濯に 行く。	二人で割る と、赤ん坊が 中から、生ま れる。桃太郎 と名づける。		同上 p88～89
北  巨  摩  郡  白 州  町  松  原	婆が川で洗 濯ものをゆ すいでいる と、桃が流れ てくる。	包丁で割ろ うとすると 子供が生ま れる。婆は桃 太郎と名づ ける。		同上 p89
西  八  代  郡  市 川  大  門  町	爺は柴刈に、 婆は洗濯に 行く。	神棚に供え、 爺が帰って きたので、半 分に割ると、 子供が出て くる。桃太郎 と名づける。		同上 p89
西  八  代  郡  市 川  大  門  町	爺は山へ行 き、婆が川へ	爺が帰って 桃を割ると、		同上 p89



	洗濯に行く。 実のある手箱を呼ぶ。	生まれる。桃太郎と名づける。		
西八代郡市川大門町	爺は柴刈に、婆は洗濯に行く。	桃の中から男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p89～90
西八代郡市川大門町	爺は柴刈に、婆は洗濯に行く。	爺とともに割ると、男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p90
西八代郡市川大門町	爺は柴刈に、婆は洗濯に行く。	割ると中から桃太郎が生まれる。		同上 p90
西八代郡市川大門町黒沢	爺は柴刈に、婆は洗濯に行く。	爺がかえたので、戸棚を開けると、桃が大きくなっており、切ると中から男の子が生まれる。		同上 p90
西八代郡市川大門町堀切	爺は草刈に、婆は洗濯に行く。	爺に桃を見せると割れ、男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p90
西八代郡市川大門町山家	爺は柴刈に、婆は洗濯に行く。	爺とすると、桃太郎が生まれる。		同上 p90

西八代郡市 川大門町根 子	爺は柴刈に、 婆は洗濯に 行く。	桃を拾って 切ると、子供 が生まれる。		同上 p90
西八代郡市 川大門町市 川	爺は柴刈に、 婆は洗濯に いく。手箱が 流れてくる。	爺と箱を破 ると、ももが 二つに割れ て、桃太郎が 出てくる。		同上 p90～91
西八代郡上 九一色村	爺は柴刈に、 婆は洗濯に 行く。手箱が 流れてくる。	実のある手 箱はこっち へと呼ぶ。 中には大き い桃があっ たので、持ち 帰る。爺が帰 って包丁で 切ろうとす ると、桃太郎 が生まれた。		同上 p91
岐阜 17 揖斐郡谷汲 村	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に 行く。川上か ら桃が流れ てくる。	桃を割ると 子供が出た ので桃太郎 と名づける。		『日本昔話 通観』第13 巻 岐阜・静岡・ 愛知 同朋 舎1980年 P103
恵那郡明智 町馬木	爺は山へ柴 刈りに行き、 婆は川で洗 濯をする。川 上から桃が 流れてくる。	爺が帰り、桃 を食べよう と切り板の 上にのせ ると、ひとり で割れ、中か ら男の子が 生まれる。桃		同上 p103～ 104

		太郎と名づける。		
恵那郡明智町中切	婆が川で洗濯をしていると、桃が流れてくる。	爺が柴刈りから帰り、一緒に食べようとする、中から赤ん坊が出てくる。桃太郎と名づける。		同上 p104
恵那郡上矢作町漆原三作	爺は山へ木を切りに行き、婆は川へ洗濯に行くと、川上から赤と黒の重箱が流れてくる。赤いのを呼ぶ。	重箱には桃が入っており、爺と二人で桃を割ると中から男の子が出てくる。		同上 p104
恵那郡坂下町高部	爺は山へ柴刈りに行き、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてきた。いい桃とおぞい桃。いい桃を呼ぶ。	婆が桃をいろりのそばにおいて、火を焼いていると、桃が割れて、男の子が出てくる。		同上 p104
恵那郡付知町下付知	爺は山へ木を切りに行き、婆は川へ洗濯に行く。大きい桃と小さい桃が流れてきた	爺と二人で食べようと桃を割ろうとすると、男の子がとび出したので、桃太郎と名		同上 p104

	ので、大きい桃を呼ぶ。	づける。		
郡上郡和良村法師丸	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が川を流れてきた。	婆はどんぶりに入れて、戸棚にしまふ。爺が帰ってきたので、婆が桃を取り出すと、桃は二つに割れ、中から男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p104～105
郡上郡和良村法師丸	婆が川で洗濯していると、大きな桃が流れてきた。	棚にあげておく。爺が帰ったので婆と桃を見ていると、二つに割れ、大きな男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p105
中津川市阿木	爺は山へ木を切りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から赤と黒の重箱が流れてくる。赤いのを呼ぶ。	開いてみると中に桃が入っている。爺が桃を切ろうとすると桃が割れて男の子が生まれる。		同上 p105
山県郡高富町	爺は山へ柴刈りに行き、	爺が帰り、桃の種を切ろ		同上 p105

	婆は川へ洗濯に行く。川上から桃の種と柿の種が流れてきた。桃の種を呼ぶ。	うとすると、種が動き、角のところが開けると、子供が生まれる。		
吉城郡上宝村	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。流れてきた桃を拾う。	戸棚に入れておくと、ひとりでに割れ、桃太郎が生まれる。		同上 p105
恵那郡山岡町馬場山田	爺は山へ木を切りにいく。おばあさんは川へ洗濯に行く。赤い重箱が流れてくる。箱を呼ぶ。	中には桃がいっぱい入っていた。桃を持って家で切ったら桃太郎が出た。		同上 p107
揖斐郡谷汲村	爺は山へ柴刈りに行き、婆は川へ洗濯に行って、桃の実を拾う。	二人が割ると男の子が生まれた。		同上 p107
恵那市大井町岡瀬沢	爺は山へ木を切りに行き、婆は川で洗濯をしていると、桃が流れてきた。桃を呼ぶ。	爺の帰りを待って桃を食べようとまな板の上で割ると、男の子が生まれた。		同上 p107

恵那郡山岡町田沢	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。赤と黒の重箱。赤い重箱を呼ぶ。	赤い重箱が流れついた。 桃から生まれる。	典型話に従った。(?)	同上 p107
高山市	婆が川へ洗濯に行くと、上のほうから大きな桃が流れてくる。もう一つ爺にやろうと呼ぶと、又もう一つ流れてくる。	桃から生まれる。	典型話に従った。(?)	同上 p108
恵那市大井	誕生のモチーフなし			同上 p456
静岡 5 磐田郡水窪町西浦	爺は山へ柴刈りに行き、婆が川で洗濯していると、大きな桃が流れて来た。	爺が帰り、切ると子供がとんでたので、桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第13巻 岐阜・静岡・愛知 同朋舎 1980年 p105～106
賀茂郡松崎町	爺は山に柴刈りに行き、婆は川へ洗濯に行くと、青と赤の重箱が流れてくる。赤いのを呼ぶ。	蓋を取ってみると、大きな桃が入っている。 爺を待って割ると、こんぼが出てくる。		同上 p106

御殿場市上 小林	爺は柴刈りに、婆が川で洗濯をしていると、赤と黒の重箱が流れてきた。赤いのを呼ぶ。	重箱には桃が入っており、桃から桃太郎が生まれる。		同上 p106
田方郡中伊 豆町	爺は山へ柴刈りに行き、婆が川へ洗濯に行くと、大きな桃と小さな桃が流れて来る。大きい桃を呼ぶ。	山から帰った爺と二人で桃を切ると、中から男の子が「待った、待った」と手を広げて出てくる。		同上 p106
清水市（旧庵原郡西河内村）	川上から流れてきた桃を拾って帰り、	臼の中に入れて箕を蓋にしておくと、桃が大きくなって赤子が生まれる。		同上 p106
愛知 8 北設楽郡設 楽町清崎	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行ったら、川上から重箱が流れて来る。赤と黒箱。赤い重箱を呼ぶ。	爺のところへ来て、開けたら、桃が入っている。二人で食べようと割ったら、男の子が出てきた。桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第 13 卷 岐阜・静岡・愛知 同朋舎 1980 年 p101～102

北設楽郡設 楽町小代	婆が川に洗濯にい行くと、川上から赤と黒の重箱が流れてくる。赤い重箱を呼ぶ。	家で爺と二人で食べようと割ると、桃太郎が生まれた。		同上 p102
北設楽郡東 栄町小林	爺は木切りに、婆は川へ洗濯に行く。重箱が流れてくる。	重箱の中に桃が入っている。割ると、桃太郎が生まれる。		同上 p102～ 103
北設楽郡東 栄町小林	爺は山へ木切りに、婆は川へ洗濯に行く。川の上流から重箱に桃が入って流れてくる。	爺を待って、割ると、赤ちゃんが生まれた。		同上 p103
北設楽郡設 楽町小松	爺は山へ木を切りに、婆は川で洗濯していると、赤と黒の重箱が流れてくる。赤い重箱を呼ぶ。	箱には桃がはいっている。まな板の上で切ろうと桃から赤ちゃんがでてくる。爺が桃太郎と名づける。		同上 p103
北設楽郡設 楽町西納庫	川上から赤い重箱が流れてきたので、婆が呼ぶ。	拾って帰ると、桃があり、桃の中に赤ん坊がいる。		同上 p103



北設楽郡東 栄町月	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行くとき、白と赤の重箱が流れて来る。赤いのを呼ぶ。	開けて見ると桃があるので、爺の帰りを待ち、割ると、桃の中から赤ちゃんが生まれた。桃太郎と名づける。		同上 p103
北設楽郡設 楽町大平	婆が洗濯に行くとき桃が流れてくる。	爺が帰ってきて、桃を割ると、桃太郎さんが生まれてきた。		同上 p107
京都 3 船井郡和知 町大簾	子がなかったおじいさんとおばあさん。おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行った。川上から大きな桃が流れてくる。	二つに割ると、赤子が生まれた。桃太郎と名づけた。		『日本昔話通観』第14巻 京都同朋舎 1977年 p162～163
北桑田郡京 北町	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行った。洗濯をしているとき桃が流れてきた。	山から帰った爺と桃を切ろうとすると、赤子が出てくる。桃太郎と名づける。		同上 p163

北桑田郡美山町静原	婆が川から桃を拾ってくる。	割ると赤子が出てくる。桃太郎と名づける。		同上 p163
三重県 1 志摩郡志摩町（旧片田村大野）	爺は山へ木切りに、婆は川へ洗濯に行った。大きな夏桃が流れてくるので、棒で寄せ、もう一つ呼ぶ。	爺が帰る。桃に包丁目をつけたら、桃太郎が生まれてくる。		『日本昔話通観』第15巻 三重・滋賀・大阪・奈良・和歌山同朋舎 1977年 p203～204
兵庫県 21 美方郡美方町貫田	爺は山へ柴刈りに、婆は川へせんだくに行くと、上のほうから大きな桃が流れてきた。食べてみたら、うまいので、もう一つ呼ぶ。	爺がかえり、切ろうとしたら、二つに割れ、男の子が出てきた。桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第16巻 兵庫同朋舎 1978年 p67～68
相生市（旧赤穂郡矢野村）	爺は山へ柴刈りに、婆が川へ洗濯にいくと、桃が流れてくる。爺にやろうともう一つ呼ぶ。	爺が帰ったので開けると、桃が割れ、男の子が出てくる。桃太郎と名づける。		同上 p68
美方郡温泉町石橋	爺は山へ柴刈りに、婆が	爺がもどったので、爺と		同上 p68

	川で洗濯をしていると、川上から大きな桃が流れてきた。	一緒に見ると、桃が開いて、元気そうな、かわいい人形みたいなのが生まれた。桃太郎と名づける。		
美方郡温泉町今岡	爺は山へ木こりに行き、婆が川で洗濯していると、大きな桃が流れてくる。	爺がもどったので、まな板へのせて割ったら、赤ん坊が生まれたので、神様の授けものと喜び、桃太郎と名づける。		同上 p68～69
美方郡温泉町海上	爺は山へ柴刈りに行き、婆が川で洗濯していると、桃が流れてくる。	半分に切ろうとすると、きれいな男の子が出てきた。桃太郎と名付ける。		同上 p69
美方郡温泉町鐘尾	爺は山へ行き、婆が川で洗濯していると、大きな桃が流れて来た。	爺がもどったので、まな板へのせて切ろうとすると、大きな赤ん坊が生まれた。桃太郎と名づける。		同上 p69

美方郡温泉 町桐岡	爺は山へ柴刈りに、婆が川で洗濯していると、奥から桃が流れてきたので、誰にやるともう一つ呼ぶ。	包丁を入れたら、桃の中から桃太郎が生まれた。		同上 p69
美方郡温泉 町丹土	婆が川で洗濯していると、桃が流れてきた。	爺がもどったので、包丁で切ろうとしたら桃が割れて大きな男の子、桃太郎が生まれる。		同上 p69
美方郡温泉 町丹土	爺は山へ木こりに行き、婆が川で洗濯していると、桃が流れてきた。爺にあげようと臼の中におく。	爺がもどったので、見ると、かわいい子が生まれていた。桃太郎と名付ける。		同上 p69～70
美方郡温泉 町千谷	婆が川で洗濯していると、川上から桃が流れてきた。	包丁で切ると、かわいい男の子が生まれた。		同上 p70
美方郡温泉 町千原	爺は山へ柴刈りに行き、婆が川で洗	爺がもどったので、包丁を入れよう		同上 p70

	濯している と、川上から 大きな桃が 流れてくる。	としたら、桃 が割れて肥 えた男の子 が出てきた。 桃太郎と名 づける。		
美方郡温泉 町春来	爺は山へ柴 刈りに行き、 婆が川で洗 濯している と、奥から美 しい大きな 桃が流れて くる。	爺がもどっ たので、切ろ うとすると、 桃が割れて 大きな男の 子が生まれ た。桃太郎と 名付ける。		同上 p70
美方郡温泉 町春来	爺は山へ柴 刈りに行き、 婆が川で洗 濯している と、大きな桃 が流れてき た。	割ると大き な男の子が 生まれので、 桃太郎と名 づける。		同上 p70
美方郡温泉 町田中	爺は山へ木 こりに行き、 婆が川で洗 濯している と、大きな桃 が流れてく る。	臼の中に入 れる。 爺がもどっ たので、蓋を めくると、桃 が割れて大 きな元気な 子が生まれ ている。		同上 p70～71
美方郡温泉 町前村	なし			同上 p71

美方郡温泉町前村	婆が川で洗濯していると、桃が流れてきた。	爺に報告して割りかけると、大きな男の子が出てくる。		同上 p71
美方郡美方町秋岡	爺は山へ木こりに行き、婆が川で洗濯していると、大きな桃が流れてきた。	爺がもどったので切ると、大きな男の子が出てきた。桃太郎と名づける。		同上 p71
美方郡美方町新屋	爺は山へ木こりに行き、婆が川で洗濯していると、川上から大きな桃が流れてくる。	まな板の上で切ろうとすると、中から大きな男の子が生まれた。桃太郎と名づける。		同上 p71
美方郡美方町貫田	爺は薪をきりに行き、婆が川で洗濯していると、大きな桃が流れてきた。うまかったので、爺にやろうともう一つ呼ぶ。	爺に報告し、包丁で切ろうとすると割れて、中から大きなきれいな男の子が出てきたので、桃太郎と名づける。		同上 p71
美方郡美方町森脇	爺は山へ柴刈りに行き、婆が川で洗濯していると、大きな桃	爺がもどったので報告し、切ると、割れて、中から大きな男		同上 p71

	が流れてきた。	の子が出てきた。		
美方郡美方町森脇	爺は山へ木こりに行き、婆が川で洗濯している、川上から大きな桃が流れてきた。臼の中に入れる。	爺がもどったので報告して、出して、包丁で切ると、中から男の子が生まれた。		同上 p72
鳥取県 7 八頭郡若桜町寺前	おばあさんが川に洗濯に行き、大きな桃が流れて来た。	おじいさんに二人で食べようと言って、まな板の上において切ろうとすると、中から桃太郎が出てきた。桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第17巻 鳥取県同朋舎 1978年 p226
八頭郡若桜町栃原	婆が川で洗濯していると桃が流れてくる。	木樵に行つて帰った爺と食べようと、割ったら、桃の中から男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p226～227
八頭郡若桜町茗荷谷	婆が川で洗濯して流れてきた	柴刈りに行つた爺の帰りを待ち、二		同上 p227

	大きな桃を拾う。	人で切ると、中から大きな男の子が出る。桃太郎と名づける。		
八頭郡若桜町諸鹿	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川を流れてきた桃を拾う。	割ると中から大きな赤ちゃんが出てくる。桃太郎と名づける。		同上 p227
東伯郡関金町松河原	子がない爺と婆。爺は山へ行き、婆は洗濯に行く。洗濯していると、上のほうから大きな桃が流れてくる。	爺と食べようと、押し込みを開けてみたら、大きな子になっている。桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第17巻鳥取県同朋舎1978年 p227～229
西伯郡会見町	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。流れて来た桃が美味しいので、もう一つ拾う。	桃が割れて赤子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p229
日野郡日南町神戸上	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から桃が流れてきたので、	たんすの中に入れておく。帰った爺が箆筒があかないので、鉞で箆筒を		同上 p229



	一つ食べ、爺にやろうと、もう一つ呼ぶ。	割ると中から子供が出てくる。桃太郎と名づける。		
島根 49 大田市富山 町土居	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。川上から桃が流れてくる。桃を呼ぶと寄ってくる。	戸棚にしまっていると、桃の中から大きな子が生まれる。桃太郎と名づける。		島根大学教育学部国語研究室昔話研究会『石見大田昔話集』 島根大学教育学部国語研究室昔話研究会 1974. 10. 15 P44～46
大田市三瓶 町多根	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	爺の前で桃を割ってみたら、桃が割れ、桃の中から生まれる。桃太郎名づける。		同上 P36～37
大田市三瓶 町中多根	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃を拾い、爺の前で割ったら、桃から子供が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 P37～38
大田市三瓶 町中津森	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	割ったら、桃の中から男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 P36～37

大田市三瓶町野城	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	二つに割れて、桃の中から生まれる。桃太郎と名づける。		同上 P42～43
大田市三瓶町山口	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	二人で食べようと割ったら、桃の中から子供が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 P41～42
大田市山口町山口	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	爺と食べようと、包丁を入れると、割れて、男の子が生まれる。		同上 P43～44
大田市山口町山口	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	包丁を持って切ろうと思ったら、桃から男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 P38～40
大田市山口町山口	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	切ろうとすると、桃がひとりでに割れ、中から男の子が生まれる。桃太郎となづける。		同上 p40～41
大田市山口町山口立石	婆が川で洗濯。桃が流れてくる。	桃から生まれたので、桃太郎と名づ		同上 p35～36

		けた。		
大田市三瓶町池田北	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	二人で食べようと割ったら、中から赤ちゃんが生まれる。桃太郎と名づける。		稲田浩二・酒井董美『日本の昔話 27 石見の昔話』日本放送出版協会昭和54年 p66～68
邑智郡大和村都賀行	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。食べてうまい、爺にやろうともう一つ呼ぶ。	切ろうとしたら、桃の中から生まれる。桃太郎と名づける。		島根大学教育学部国語研究室昔話研究会『大和村昔話集稿巻二』（島根県邑智郡大和村昔話集稿巻2（都賀・都賀行地区））島根大学教育学部国語研究室昔話研究会1975年 P51
邑智郡大和村都賀行	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。食べるとおいしいので、爺にやろうともう一つ呼	戸棚を開けると、赤ちゃんが生まれている。桃太郎と名づける。		同上 p46～49

	ぶ。			
邑智郡大和村都賀行	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	婆は桃をまな板にのせて、割ろうとしたら、二つに割れ、男の子が生まれる。		同上 p49～50
邑智郡大和村都賀本郷	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	婆が包丁で割ったら、桃から桃太郎が生まれる。		同上 P50～51
邑智郡大和村長藤響谷	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	二人で食べようと思ったら、桃から生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p51～52
邑智郡大和村比敷	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から桃太郎が生まれる。		島根女子短期大学昔話研究会『大和村昔話集稿巻一』1975年自刊〔34〕 P29
邑智郡大和村宮内	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃を割って見たら、男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p39～40
邑智郡大和村宮内	爺は山へ柴刈りに、婆は	桃を二つに割ると、男の		同上 p37～39

	川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	子が生まれる。		
邑智郡大和村宮内	爺は草刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	二人で食べようと割ったら、赤ちゃんが生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p36～37
邑智郡大和村宮内	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	一緒に食べようと思って包丁で割ろうとしたら、桃から生まれる。桃太郎と名づける。		同上 P33～36
邑智郡大和村宮内	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	包丁で切ろうとしたら、割れ、男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 P29～33
大原郡木次町東日登	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から桃太郎が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	『日本昔話通観』第18巻 島根 1978年 P110
隠岐郡海士町崎	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃を切ると中から男の子が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p110

隠岐郡海士町中里	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から桃太郎が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p110
隠岐郡海士町東	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から桃太郎が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p110
隠岐郡海士町菱浦	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から桃太郎が生まれる。神の授け子として育てる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p110
隠岐郡海士町菱浦	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から桃太郎が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p110
隠岐郡海士町保々見	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から桃太郎が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p110
隠岐郡知夫村郡	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から桃太郎が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p110
隠岐郡知夫村多沢	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流	桃から桃太郎が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p110

	れてくる。 爺にやろう ともう一つ 呼ぶ。			
隠岐郡知夫 村仁里	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に 行く。桃が流 れてくる。	桃から桃太 郎が生まれ る。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p110
隠岐郡西ノ 島町赤之江	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に 行く。桃が流 れてくる。 爺にやろう ともう一つ 呼ぶ。	桃から生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p110
隠岐郡布施 村飯美	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に 行く。川上か ら山瓜が流 れてくる。	山瓜から男 の子が生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p110
仁多郡横田 町大馬木大 原	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に 行く。桃が流 れてくる。	二つに切ろ うとしたら、 桃の中から 赤ちゃんが 出てくる。桃 太郎と名づ ける。		島根大学教 育学部国語 研究室昔話 研究会『島根 県仁多郡横 田町馬木昔 話集』島根大 学教育学部 国語研究室 1973年〔24・ 27〕

				p86～88
仁多郡横田町小馬木川東	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃が割れ大きな赤ちゃんが生まれる。		同上 P90～91
仁多郡横田町小馬木矢入	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃を米櫃に入れて置く。爺が帰り、割ったみたら、中から赤ちゃんが生まれている。桃太郎と名づける。		同上 p89～90
美濃郡匹見町芋原	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる	桃から桃太郎が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	『日本昔話通観』第18巻 島根1978年 P111
美濃郡匹見町植地	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	「縦に割ろうか横に割ろうか」と言っ て縦に割ると息子が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	『日本昔話通観』第18巻 島根1978年 P111
美濃郡匹見町澄川	爺は山へ柴刈りに、婆は川で洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から男の子が生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	『日本昔話通観』第18巻 島根1978年 P111
美濃郡匹見町野入西	爺は山へ柴刈りに、婆は	桃から男の子が生まれ	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p111



	川で洗濯に行く。桃が流れてくる。	る。		
美濃郡匹見町広瀬	爺は山へ柴刈りに、婆は川で洗濯に行く。桃が流れてくる。	豎に切るか、横に切るか相談して、豎に切ると、桃太郎が誕生する。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p111
美濃郡匹見町道川元祖	爺は山へ柴刈りに、婆は川で洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p111
美濃郡匹見町元祖	爺は山へ柴刈りに、婆は川で洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p111
江津市渡津町	爺と婆が子供がなかったので、神様に祈っていると、「大きな川の岸に、大きな桃の木の下に一つ大きな桃。川に落とさないように、割ろうとすれば子供が出る。」という声が聞こ	二人そこへ行き、爺が木に登って取ろうとすると、木が折れて、桃の実は水の上に落ち、川下に流れ、がっかりして家に帰る。婆は川で洗濯している所に、桃が流れてきた。		同上 p111

	える。			
江津市渡津町	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から桃から流れてくる。	桃から生まれる。	誕生部分まで典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p111
仁多郡横田町馬木	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から桃から流れてくる。	包丁で切ったら、中から桃太郎が生まれる。		島根大学教育学部国語研究室昔話研究会『島根県仁多郡横田町馬木昔話集』島根大学教育学部国語研究室 1973年〔24・27〕 p92
美濃郡匹見町	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から桃から流れてくる。	桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	『日本昔話通観』第18巻 島根 1978年 p111
八束郡八束町二子	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から大きな桃が流れてきた。おいしいので、爺にや	戸棚に入れておく。爺が帰ってきたので、桃を出して割ると、男の子が生まれる。桃太郎と名		『日本昔話通観』第18巻 島根 1978年 P112

	ろうともう一つ呼ぶ。			
岡山 20 川上郡成羽 町小泉	爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。洗濯しようとしたら、川上のほうから大きな桃が流れてきた。櫃の中に入れておく。	爺が帰ったので、一緒に食べようと、蓋を開けると、男の子が機織りをしている。		『日本昔話通観』岡山同朋舎 1979年 p109～111
阿哲郡神郷 町誌下神代	なし？			同上 p111
阿哲郡神郷 町三室	なし？			同上 p111
阿哲郡神郷 町三室	無し？			同上 p111
阿哲郡神郷 町	婆が川を流れて来た桃を食べる。爺にやろうともう一つ呼ぶ。ひきだしに入れる	爺が聞かなくなっただしをまさかりで割ると、中から桃太郎が生まれる。		同上 p111～112
阿哲郡哲西 町川南	爺は山へ木樵りに、婆は川へ洗濯に行く。川上から桃が流れてきた。食べるとおいしいので、爺に	爺が帰ったので、開けようとしたが、開かないので、鉞で櫃を割ると男の子が出てくる。桃太郎と		同上 p112

	やろうとも う一つ呼ぶ。 櫃に入れて 置く。	名づける。		
阿哲郡哲西 町川南	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に いく。洗濯し ていると、上 から大きな 桃が流れて くる。おいし いので、爺に やろうとも う一つ呼ぶ。	爺が帰って 割ろうとし たら、できな いので、鉞で 割ると、中か ら男の子が 生まれる。桃 太郎と名づ ける。		同上 p112
新見市井倉	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に 行く。上から 桃が流れて きた。たんす にしまっておく。	爺が帰った ので、開けよ うとするが、 開かない。 爺に手伝っ てもらって あける。桃を 割ると桃太 郎が出る。	爺と山へ行 き、大きな束 を負って帰 るが、あまり 大きなたば だったので、 爺はじいっ くり、婆はば あっくりし て死んだ。	同上 p112～ 113
新見市下熊 谷	なし			同上 p113
真庭郡美甘 村河田	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に いく。大きな 桃が流れて くる。おいし いので、爺に	戸棚の中へ 入れておく。 爺が帰って きたので、切 ろうとする と、われ、大 きな男の子		同上 p113

	やろうとも う一つ呼ぶ。	が出る。 桃太郎と名 づける。		
阿哲郡神郷 町三室	爺は木樵り に、婆は川へ 洗濯に行く。 桃が流れて 来る。美味し いので爺に やろうとも う一つ呼ぶ。	爺が帰った ので、まな板 の上へのせ、 切ろうとし たら、割れ、 男の子が出 てきた。桃太 郎と名づけ る。	典型話。	同上 p114～ 116
阿哲郡神郷 町三室	子なしの爺 婆。柴刈りと 洗濯。桃を長 持に入れて おく。	爺が帰った ので取り出 そうとする が、できない ので、蓋を壊 してだすと、 桃がまっ二 つに割れ、生 まれる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p116
阿哲郡神郷 町三室	子なしの爺 婆。柴刈りと 洗濯。桃が流 れてくる。	爺がまさか りて桃を割 ると、中から 生まれる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p116
阿哲郡哲 西町川南	子なしの爺 と婆が、子授 けの観音に 願をかけ、二 十一日の参 りをする。男 と女の木人 形を六つず つ作って、	婆が満願費 に参った帰 り、うちのそ ばに赤子が 捨ててある。 着物を見ると、全部に桃 の縫い紋が ある。桃太郎		同上 p116

		と名づける。		
阿 哲 郡 哲 西町川南	婆が川で洗濯している と、侍がぼろ に包んだ子 を捨てて逃 げる。	婆は拾って 帰り、桃太郎 と名づける。		同上 p116
小田郡美星 町東水砂古 尾	柴刈りと洗濯。婆は桃を 戸棚に入れて 置く。	開けると桃 が二つに割 れ、大きな子 が立っている。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p116～ 117
小田郡矢掛 町美川寺原	柴刈りと洗濯。	桃をしまっ た長持が開 かないので、 まさかりで 蓋を壊すと 男の子が出 てくる。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p117
小田郡美星 町明治黒荻	子なしの爺 婆。 柴刈りと洗濯。	婆が桃をし まった戸棚 を開け様と するが、でき ないので、爺 と二人であ ける。桃は二 つにわれて 男の子が生 まれている。	典型話にほ ぼ同じ。(?)	同上 p117
倉敷市大島	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に 行く。桃が流	切ろうとす ると、中から 子供が生ま れる。桃太郎		同上 p117

	れてきた。	と名づける。		
岡山市（旧西大寺市）	なし			同上 p117
広島 18 庄原市	爺は山に草刈りに、婆は川に洗濯に行く。大きな桃が流れてきた。	爺がかえったので、爺が包丁で切ろうと、二つに割れて、赤ちゃんが生まれた。桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第20巻 広島同朋舎 1988年 p158～161
甲奴郡甲奴町	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。大きな桃を呼ぶ。	桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p161
甲奴郡上下町階見	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p161
甲奴郡上下町小塚	柴刈りと洗濯。	桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p161
甲奴郡上下町矢多田	柴刈りと洗濯。	桃から生まれる。	典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p161
甲奴郡上下町	柴刈りと洗濯。桃が流れてきたので、桃を呼ぶ。ひっに入れておく。	切ろうとするが、切れず、鉞で、割ると、男の子が生まれる。		同上 p161
甲奴郡上下町	柴刈りと洗濯。婆は桃をたんすの中にしまう。	山から戻った爺と食べようと、きりばの上に包丁をのせて		同上 p162

		桃を出すと 桃が割れる。		
佐伯郡佐伯 町浅原（旧浅 原村）	川へ洗濯に 行った婆が 流れて来た 桃に、「桃太 郎」と呼ぶ。	桃から生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。（?）	同上 p162
庄原市	柴刈と洗濯。 桃がながれ てくる。	桃から生ま れる。	典型話にほ ぼ同じ。（?）	同上 p162
庄原市	柴刈りと洗 濯。桃が流れ てくる。	桃から生ま れる	典型話にほ ぼ同じ。（?）	同上 p162
神石郡神石 町	柴刈りと洗 濯。桃が流れ てくる。	桃から生ま れる。	典型話にほ とんど同じ。 （?）	同上 p162
神石郡神石 町	柴刈りと洗 濯。 桃が流れて くる。	桃から生ま れる。	典型話にほ とんど同じ。 （?）	同上 p162
比婆郡高野 町上里原	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に。 桃を櫃に入 れて置く。	爺に見せよ うと、櫃の蓋 を開けてみ ると、桃は二 つに割れ、赤 ん坊ができ ている。	前半は典型 話にほぼ同 じ。婆は神の 授けだとす る。（?）	同上 p162
比婆郡高野 町高暮	爺は山へ柴 刈りに、婆は 川へ洗濯に いく。桃が流 れてくる。	桃から生ま れる。	前半は典型 話にほぼ同 じ。（?）	同上 p162
御調郡向島 町（旧向島東	爺は柴刈り に、婆は洗濯	帰ってきた 爺と食べよ	前半は典型 話にほぼ同	同上 p162



村)	に。桃が流れてくる。 爺にやろうともう一つ呼ぶ。	うと、切りにかかると割れて、男の子が飛び出す。	じ。(?)	
安芸郡矢野町	なし			同上 p164
尾道市向島東	なし	爺と婆とが桃から生まれた桃太郎を大切に育てている。		村岡浅夫『全国昔話資料集成 14 芸備昔話集』1975年岩崎美術社〔3〕 p25
甲奴郡甲奴町宇賀	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。川の奥のほうから、桃が流れてくる。大きい桃を呼ぶ。	二人で食べようと、婆が包丁を当てたら、割れて、赤ん坊が生まれた。桃太郎と名づける。		『日本の昔話 16 備後の昔話』日本放送出版協会 昭和 52 年 p32～35
山口 4 大津郡油谷町	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	桃から生まれる。	広島県庄原市の典型話にほとんど同じ。(?)	『日本昔話通観』第 20 巻 広島・山口同朋舎 1988 年 p163
大津郡油谷町	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	桃から生まれる。	広島県庄原市の典型話にほとんど同じ。(?)	同上 p163

大津郡油谷町立石	洗濯に行く。桃が流れてくる。孫、爺にやろうと もう一つ呼ぶ。	桃から生まれる。	広島県庄原市の典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p163
大津郡油谷町渡場	柴刈りと洗濯。桃が流れてくる。	婆が拾って帰る途中、桃は二つに割れ、赤ちゃんが生まれ、	広島県庄原市の典型話にほぼ同じ。(?)	同上 p163
徳島 4 美馬郡	爺は柴刈りに、婆は川へ洗濯に行く。大きな桃が流れてくる。	爺に報告。まな板の上で桃がひとりで割れ、子が生まれた。		『日本昔話通観』第 21 巻 徳島・香川 同朋舎 1978 年 p152
美馬郡一宇村一宇	爺は柴刈に、婆は洗濯に行く。きれいな性のよい桃が流れて来た。	婆が桃を呼ぶ。晩に爺と分けようと、板に割ろうとすると、赤ちゃんが出てくる。桃太郎と名づける。		同上 153 ~ 154
三好郡井川町井内谷中津	爺と婆が山へ柴刈りに、行く。川上から桃が流れてくる。	大きな桃が流れてくる。二人で食べると婆は一年後赤ん坊を生んだ。		同上 p154

三好郡東祖 谷山村名頃	なし		婆は川に洗濯に行くのが仕事だった。	同上 p516
香川 5 香川郡香川 町（旧浅野村 道端）	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。川上から大きな桃が流れてくる。	割ると男の子ができたので、桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第21巻徳島・香川 1978年 P153
香川郡香川 町（旧浅野村 道端）	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。川上から大きな桃が流れてくる。	爺の帰りを待って桃を切ると子供が出てきたので桃太郎と名づける。		同上 P153
仲多度郡多 度津町佐柳 島	爺は山へ木を取りに婆が川で洗濯をしていると、大きな桃が流れてくる。食べたら、うまかったなので、もう一つ呼び、爺の口へ飛び込めという。	桃は山で働いている爺の口へ入った。二人は若返り、婆が子を生んだ。桃太郎と名づける。		同上 p153
仲多度郡多 度津町佐柳 島長崎	爺は山へ木を取りに、婆は川へ洗濯に行く。川から桃が二つ流れてくる。	爺と食べたら若返って子ができ、桃太郎と名づける。		同上 p155

三豊郡高瀬町（旧麻村）	無し			同上 p155～156
愛媛 4 越智郡大三島町野々江	爺は柴刈りに、婆は洗濯に行く。桃が流れてきて、桃を拾う。	板の上のせて、切ったら、桃太郎が出た。桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第22巻 愛媛・高知同朋舎 1979年 p158
上浮穴郡柳谷村永野	婆が川で洗濯をする。大きな桃が流れてくる。	爺と食べようとすると、中から男の子が出てくる。桃太郎と名づける。		同上 p159
北宇和郡三間町戸雁	川。	婆が川から拾ってきた桃から生まれた男の子。		同上 p159
宇和島市（旧北宇和郡下波村）	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	桃から子供が生まれていた。桃太郎と名		同上
高知 3 高知市（旧長岡郡三里村）	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。もう一つ呼ぶ。	爺に食べさせようと、割ると男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第22巻 愛媛・高知同朋舎 1979年 p159
長岡郡本山町古田	なし	桃から生まれた桃栗小太郎。	原題：桃栗小太郎	同上 p160～161

高知市布師田	爺は山へ草刈に、婆は川へ洗濯に行く。	桃を切つて割ると、男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		p 125～126
福岡 1 北九州市（旧企救郡）	爺婆に子供がなく、神に祈る。	婆が川で桃を拾う。爺と食べようとすると、中から男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第23巻 福岡・佐賀・大分 1980年 P181
佐賀 6 鳥栖市田代外町	爺は柴刈りに、婆は洗濯に行く。川上から桃が流れ来る。	包丁を入れたら、中から生まれたのが桃太郎。桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第23巻 福岡・佐賀・大分 1980年 p179～180
神埼郡神埼町横武東	爺は柴刈りに、婆は洗濯に行く。桃が流れてくる。	一緒に割ると、桃太郎が生まれる。		同上 p 180
杵島郡白石町嘉瀬川	爺は山へ焚きもの取りに、婆は川へ洗濯に行く。大きな桃が流れてくる。	爺と割ると中から子供が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p180
佐賀郡福町北草	爺は山へ行き、婆は川へ行く。桃を拾う。	爺と割ると、子供が出てくる。桃太郎と名づける。		同上 p180

鳥栖市本町 三丁目	爺は柴刈りに、婆は洗濯にいく。	川上から桃が流れ来る。爺と割って食べようとすると、中から子供が出てくる。桃太郎と名づける。		同上 p180～181
鳥栖市本町	婆が川上から流れ来る桃を	水をかいて抱きあげ、かえる。爺が喜ぶ。婆が桃を割ると、中から大きな赤ん坊が生まれる。		同上 p181
大分 2 東国東郡国 東町来蒲	爺は柴刈りに、婆は洗濯にいく。	川上から桃が流れ来る。割ってみると、桃太郎が生まれる。		『日本昔話通観』第23巻 福岡・佐賀・大分 1980年 p180
東国東郡安 岐町諸田	爺は柴刈りに、婆は洗濯にいく。	川上から桃が流れ来る。包丁で切ろうとすると桃太郎が生まれる。		同上 p181～182
長崎 10 対馬地方	爺は柴刈りに、婆は洗濯にいく。桃が流れて来る。	箆笥の中に入れて。二人で引き出しを開けてみると、桃から子供が生ま		『日本昔話通観』第24巻 長崎・熊本・宮崎 同朋舎 1980年

		れる。		p144～145
上 県 郡 上 県 町 佐 須 奈	婆が川で桃を拾う。	箆笥に入れて、開けようとするが、あかない。開けると子供が生まれ、桃太郎と名づける。		同上 p145
上 県 郡 上 県 町 鹿 見	婆が川で洗濯をしていると、桃が流れてくる。	桃を割ると、桃太郎が出てくる。		同上 p145
上 県 郡 上 対 馬 町 玖 須	爺は山に柴刈に、婆が川で洗濯をしていると桃が流れてくる。	切ろうとすると、桃太郎が生まれる。		同上 p145
上 県 郡 上 対 馬 町 舟 志	婆が川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	きれいな桃なので、おいとくと、二つに割れ中から男の子が出る。		同上 p145
上 県 郡 峰 町 佐 賀	川上から桃が流れてくる。	爺が帰って切ろうとすると、中から男の子が生まれる。		同上 p145
下 県 郡 豊 玉 町 小 綱	爺は柴刈に、婆は洗濯に。大きな桃が	爺に報告し、切ろうとすると、子供が		同上 p145～146

	流れてくる。	生まれる。桃太郎と名づける。		
下県郡美津島町久須保	山に柴刈に、川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	切ると、中から子供が出てくる。		同上 p146
下県郡豊玉町廻	柴刈りに、婆は洗濯に行く。桃が二つ流れてくる。	二人で食べようと戸棚を開けると桃が割れて桃太郎が出てくる。		同上 p146
下県郡美津町緒方	爺は山へ柴刈に、婆は川へ洗濯に行く。桃が流れてくる。	爺と二人で食べようとすると桃から男の子が生まれる。桃太郎と名づける。		同上 p146
鹿児島 1 大島郡和泊町（旧和泊村内城）	妻が川で洗濯する。桃が流れてくる。	夫と二人で割ると、中から子供が出てくる。桃太郎と名づける。		『日本昔話通観』第25巻 鹿児島 同朋舎 1980年 p606



## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、丁寧かつ熱心なご指導を頂いた博士論文指導教授一大東文化大学の寺村政男教授及び蔵中しのぶ教授、丁鋒教授、群馬県立女子大学文学部国文学科の安保博史教授に心より感謝申し上げます。また、多くの知識や示唆を頂いた大東文化大学東洋研究所の福田俊昭教授、大正大学の米山孝子先生、弘前大学の吉田比呂子先生にここに深くお礼申し上げます。そして、本論文を作成するにあたり、たくさんの勇気を頂いた家族及び研究室、ゼミの皆様、心より感謝しております。ことに、どのような状況においても応援してくれた夫に心から感謝します。